日本言語学会第 169 回大会
要旨集

会　長　　定延　利之
大会運営委員長　小町　将之
大会実行委員長　奥　聡

期　日：2024 年 11 月 9 日（土）・10 日（日）
会　場：北海道大学札幌キャンパス 高等教育推進機構・医学部百年記念館（北海道札幌市）

目次

＊各タイトルをクリックすると移動し、要旨頁右下▲をクリックすると目次に戻ります。発表時間等詳細はプログラムをご参照ください。

はしがき

公開シンポジウム （11 月 9 日（土） 13:00-16:00）

「役割語研究の現在地－役割語から見た言語と文化」 ＜基調講演＞ 金水 敏「日本語の役割語はなぜこんなに豊かなのか－文化史的観点から考える」 ＜登壇者＞ 山木戸 浩子「英語における役割語－社会的マイノリティと結びつく言葉づかいをケーススタディとして」, 鄭 惠先「韓国語における役割語–話者の「社会的役割」に注目して」, 河崎 みゆき「中国語における役割語－役割語と中国文化運動」, 細川 裕史「ドイツ語における役割語－「言語意識史」の観点から」

ワークショップ （11 月 10 日（日） 9:30-11:30）

[W-1] 「演算メカニズムの経済性の由来と帰結」　＜企画者・司会＞宗像 孝，＜発表者＞豊島 孝之，後藤 亘，石井 透，宗像 孝
[W-2] 「全体・部分・動詞の三角関係標示のストラテジー」　＜企画者・司会＞小林 剛士，＜コメンテーター＞風間 伸次郎，＜発表者＞小林 剛士，宮川 寛人，小林 颯，石橋 雄大
[W-3] 「阻止はどこで，どのように起こっているのか？」　＜企画者・司会＞乙黒 亮，＜発表者＞田川 拓海，柚原 一郎，乙黒 亮
[W-4] 「日本語から見た世界の言語の主題と焦点」　＜企画者・司会＞野田 尚史，＜発表者＞岸本 秀樹，桐生 和幸，米田 信子，原 真由子
[W-5] 「マレー語世界の社会言語学－さまざまな変種の特質と使用実態」　＜企画者・司会＞内海 敦子，＜コメンテーター＞塩原 朝子，＜発表者＞内海 敦子，稲垣 和也，スリ・ブディ・レスタリ，塩原 朝子，三宅 良美
[W-6] 「論争する言語学の過去・現在・未来：議論を深め、実りあるものとするために」　＜企画者＞山泉 実，＜司会＞田中 太一，＜コメンテーター＞窪田 悠介, ＜発表者＞田中 太一，山泉 実，西畑 宏紀

口頭発表 （11 月 10 日（日） 13:30-16:30）

A 会場	B 会場
[A-1] 竹内 士瑛伊「疑問文断片からみる極性疑問文の選言構造について」	[B-2] Edson T. MIYAMOTO，Juan Pablo RODRIGUEZ GOMEZ, Teeranoot SIRIWITTAYAKORN，Chia-lin LEE「Sensitivity to number agreement in English as a foreign language by native speakers of Chinese, Japanese and Thai」
[A-2] 齋藤 諒弥「日本語における場所格交替の統語構造と主題階層」	[B-3] 有賀 照道「音声単語認知における音素とアクセントの不一致の解釈：反復プライミングによる検討」
[A-3] 木村 一馬，橋本 龍弥「コピュラ命題補部からの数量詞上昇－「節境界性」の再考－」	[B-5] 野田 晏伎，山田 絵美，太田 真理「四字漢語の階層構造の構築に関わる脳活動：定常状態誘発磁場による検討」
[A-4] Ting-Chi WEI「Ellipsis mismatches in Mandarin Chinese: A base-generated approach」	[B-1] Shaohan WU「An electroglottographic examination on the voicing contrast of Japanese stops」
[A-5] Yosuke SATO「Non-initial dependent grafted speech in Japanese and modal complement ellipsis」	[B-4] 宮﨑 順大「「が」・「の」主語嗜好性：穴埋め式テストによる実験」
C 会場	**D 会場**
[C-1] 尹 熙洙「琉球祖語の狭母音及び中段母音の 15 世紀沖縄語における反映について」	[D-1] 古川 智康「トク・ピシンにおける「V-*im* 目的語」構文と「V *long* 目的語」構文の交替の要因」
[C-2] 髙城 隆一「鹿児島県大隅半島内之浦方言における与格と方向格」	[D-2] 水野 庄吾「通言語的視点から見た相対的場所表現の文法化」
[C-3] 白田 理人「北琉球奄美喜界島方言における指示詞由来形式を含む一人称除外形の通時的発達について－双数形を中心に－」	
[C-4] 松山 芳瑛「チェコ語における外部的所有構造－所有の与格／対格に着目して－」	[D-3] 陳 奕廷，葉 秉杰「NV 型複合名詞の述語化に対する計量的分析：フレーム意味論からみた機能的動機づけ」
[C-5] 谷川 みずき「ノルウェー語の「逆パンケーキ構文」の機能と分布」	[D-4] 野村 優衣，井原 駿「「*さえは」と「までは」:意外性を表す焦点助詞と対照主題の共起性」

E 会場	
[E-1] 中川 裕「クリック流入音における噪音性の音源：グイ語の事例によるハグマンの仮説の検証」	[E-2] 吉田 遊野「オノマトペ表現と類像的ジェスチャーの分析を通した事態把握の日中対照研究」
[E-3] Shinobu MIZUGUCHI，Koichi TATEISHI「How are prosodic boundaries perceived in Japanese?」	

ポスター発表 （11 月 9 日（土） 16:15-17:45）

P 会場	[P-6] 塩原 佳世乃「等位接続詞の音声的具現化の類型論的説明に向けて」	[P-28] Zian HUANG「A pragmatic analysis of the discourse marker “geme” in the Shanghai Dialect」
	[P-7] 市原 沙弥，井原 駿「終助詞による応答解釈のマニピュレーション」	[P-29] Laurene BARBIER「The expression of deictic riverine motion events in Upper Negidal」
	[P-8] 蒲地 賢一郎「モダリティ文：命題表現とモダリティ表現との関係」	[P-30] 阪口 慧「スポーツ実況における「痛んでいる」－語彙選択の動機づけと使用の制約に関してー」
	[P-9] 嘉藤 優太「日本語関係節の派生と島の制約」	[P-35] 汪 洋「日本語と中国語における一次元的な助数詞／量詞の認知意味論的対照研究」
	[P-10] 泉 大輔，細谷 諒太「日本語の「文の包摂」と英語の “phrasal compounding” の共通点と相違点」	[P-36] 松岡 幹就，梅村 航平，金澤 拓海，嵯峨井 萌「日英語の前・後置詞の叙述性と統語的分布の違いについて」
	[P-16] 佐々木 冠「日本語人魚構文の統語的多様性」	[P-37] 譚 坤明「中国語における文末助詞「ba（吧）」の韻律的特徴」
	[P-17] 今西 一太「アミ語談話における態の頻度分析の問題点」	[P-38] 小林 剛士「とりたて表現の語順類型論」
	[P-18] 團迫 雅彦，木戸 康人，一瀬 陽子「日本語を母語とする英語学習者における枝分かれ構造の種類による複合名詞の容認度の違いについて」	[P-39] 王 鈺「状態変化と位置変化を統合した分離事象の語彙カテゴリー化に関する実験的研究－類型論的視点からー」
	[P-19] 中谷 健太郎「Presupposition accommodation の観点から見たテオクとテシマウの非対称性」	[P-40] 村山 友里枝「北海道方言「ラサル」の非意図用法における生産性の制約について」
	[P-20] 張 栩「「VP+補助動詞」型複合動詞の意味と語形成－「VP+きる」を手掛かりにー」	[P-41] Kunihiko KUROKI，Seunghun LEE「Phonological phrasing in Miyakonojo and Miyazaki-shi Japanese」
	[P-26] 野元 裕樹「分析的受動文の類型に関する試論：東南アジアの言語を中心に」	[P-43] Taika NAGANO「Deriving Japanese causative morphemes from a single phonological form」
	[P-27] 山部 順治「オリヤ語における数と助数詞の相互作用」	[P-44] 韓 旼池「母音延伸のコミュニケーション的特徴の把握を目指して：話者の属性および語類と母音の延伸率に関する統計的分析」

ポスター発表 （11 月 10 日（日） 11:45-13:15）

PA 会場	[P-1] Tomoya TANABE，Ryoichiro KOBAYASHI，Yosuke SATO「The Obligatory wide scope phenomena in Japanese: A myth?」	[P-5] 井川 詩織「聞き手を主語としない日本語命令文についての記述・理論的研究」
	[P-2] 杜乃岩, 平田歩, 张士毅「遊戯王のネーミングにおける音象徴のパターンーモンスターの名前とレベルの相関関係についてー」	[P-11] 渡部 直也「ウクライナ語における「軟らかい」唇子音」
	[P-3] 杉崎 鉱司，佐藤 未菜，高嶋 結帆「日本語における「～たち」の獲得と構造依存性」	[P-12] 長谷部 郁子「肯定極性項目としての日本語のイディオム表現」
	[P-4] 森竹 希望，前田 雅子「分裂文における属格主語の生起に関して」	
PB 会場	[P-13] 酒井 啓史「英語の NP V V-*ing* における動名詞補文の意味上の主語はどのようにして決定されるのかー心理動詞を中心にー」	[P-22] 吉本 啓，中村 裕昭「とりたて詞の指示対象分割機能について」
	[P-14] 武藤 佑輔「「X を Y に」構文における格付与とコントロール」	[P-23] 時崎 久夫，稲葉 治朗，桑名 保智「括弧付けパラドックスの構造と意味：プラン B で行こう」
	[P-15] 濱岡 佑帆「日本語母語話者および中国語母語話者における日本語発話時の鼻音化率」	[P-24] 幸 一尋「英語における形容詞＋動詞-*en* 型複合形容詞の形成条件－結果構文との関連からー」
	[P-21] 風間 伸次郎「「孤立型言語」の内的関連特徴 －Grambank を活用してー」	[P-42] 首藤 佐智子，小西 隆之「誠実性の伝達における音声エンコーディングと聞き手の知覚の間に生じる不均衡」
PC 会場	[P-25] 山田 彬尭「日本語丁寧語構文の交替における L1/2 学習者の相違点について」	[P-33] 日高 俊夫「属性構文とされる「～をしている」について」
	[P-31] 山口 航輝，山田 絵美，太田 真理「日本語のコントロール文における空主語の処理: 脳磁図による検討」	[P-34] 許 文傑「広東語における副詞的後置成分のアスペクトへの文法化についてー北京語・日本語との対照的アプローチー」
	[P-32] 臼井 悠香「日本語の(非)定形節における長距離 A 移動に関する考察」	

次回大会のお知らせ …… 奥付

はしがき

日本言語学会第169回大会を2024年11月9日（土）と10日（日）の両日、北海道大学で開催いたします。周到な準備をして下さった大会運営委員会の小町将之委員長ならびに委員の方々、そして大会実行委員長の奥聡先生をはじめ、共催をお引き受けくださった北海道大学の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

今大会は、1日目に公開シンポジウムとポスター発表、2日目にワークショップ、ポスター発表と口頭発表が配置されており、つまりポスター発表が両日にわたって配置されています。これは応募が大変多く、かつ、一定の評価を得た応募をできるだけ採択していただいたためと伺っています。発表の応募は108件あり、その内訳は、第１希望を口頭発表とする応募が87件、第１志望をポスター発表とする応募が21件でした。採択されたのは66件で、内訳は、口頭発表が22件，ポスター発表が44件です。口頭発表・ポスター発表の採択率は61.1%でした。口頭発表は５つの会場に分かれておこなわれますが、いずれも広い教室で多くの聴衆を前にするわけですから、発表者の方は聴衆の興味を惹くよう、発表の仕方を工夫していただきますようお願いします。ポスター発表の方は、口頭発表ではできない深く突っ込んだ議論ができるよう、90分という時間をどう使うか、お知恵を絞っていただければと思います。

ポスター発表の終了後は「参加者交流会」が開催されます。これは従来の「懇親会」をリニューアルしたもので、今大会で４回目になります。よろしければこちらもご参加下さい。

２日目午後には会長挨拶、学会賞授賞式も予定されていますので、終日お楽しみいただければと思います。なお、ワークショップは応募が７件で、うち６件が採択されています。

ポスター発表が大幅に増えて、「懇親会」から「参加者交流会」へ、そして「予稿集」からこの「要旨集」へと、大会のあり方は変わっていきます。大会での学術交流がさらに盛り上がり、さらに有意義な集いになるよう、今後も検討を続けたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

次回の第169回大会は、2025年６月28日（土）と29日（日）、明海大学で開催されます。こちらも奮ってご応募・ご参加下さい。

2024年11月

日本言語学会会長　定延利之

日本言語学会第 169 回大会公開シンポジウム

「役割語研究の現在地ー役割語から見た言語と文化」

11 月 9 日　（北海道大学）

＜趣旨説明・登壇者紹介＞

金水敏（放送大学，大阪大学名誉教授）

＜基調講演＞

金水敏（放送大学，大阪大学名誉教授）

日本語の役割語はなぜこんなに豊かなのかー文化史的観点から考える

要旨：

日本語は役割語の多様性と詳細性という点で、世界の言語のなかでも役割語が発達した言語であるということができる。このことの言語学的な基盤として、むろん、「主語―述語の一致(concordance)がない」「SOV かつ膠着性の高い言語である」といった特徴を挙げることができるが、それだけでは説明が充分ではない。この点を議論するためには、前近代から近代にかけて（さらにポスト近代まで含めて)、日本語をめぐる文化史的な視点が不可欠である。その要点は以下のようにまとめられる。

1）江戸時代の身分制社会の上に、町人文化が栄え、身分ごとの話し方の多様性がエンターテインメントに活用された。

2）近代化によって標準語が確立していく中、標準語に対置されるかたちで前近代からの役割語のヴァリエーションが再配置された。

3) 70 年代以降、現代的メディアの発達を基盤として、ポピュラーカルチャーが発展し、役割語を含めた言語文化のダイナミックな組み替えが進行した。

本講演では、以上のような諸点について、実例を挙げながら説明していきたい。

S-1

＜講演 1＞

山木戸浩子（藤女子大学）

英語における役割語ー社会的マイノリティと結びつく言葉づかいをケーススタディとして

要旨：

本発表では、英語にはなぜ役割語が少ないのかという問題について、英語の構造の観点から考えるとともに、アメリカで製作された映画やテレビドラマから例を考察することによって議論する。具体的には、特徴的な英語の言葉づかいで話す人物が登場する作品を選び、その人物の社会的属性と、台詞に観察される特徴を分析する。その結果、以下の三点が明らかになった。

1）登場人物の社会的属性が何であれ、台詞に観察される特徴の多くは共通しており、パターン化されている。

2）特徴的な言葉づかいは、文法的要素の消失や置き換えなど、英語の規範から外れた項目が中心である。

3）登場人物の多くは社会的マイノリティであり（e.g., アフリカ系アメリカ人、アメリカ先住民、貧困層の白人）、ストーリーの中でネガティブな行動を取る傾向にある。

また、こういった作品の存在が、社会的マイノリティの人たちは規範から外れた英語を話し、ネガティブな行動を取るという誤ったステレオタイプを強化し、彼らに対する偏見や差別を助長する恐れがあるという点についても議論したい。

S-2

＜講演 2＞

鄭惠先（北海道大学）

韓国語における役割語―話者の「社会的役割」に注目して

要旨：

鄭（2007）では、対訳作品を用いた日韓役割語の対照分析から、「日本語の役割語では性別的な特徴、韓国語の役割語では年齢的な特徴が表われやすい」と主張した。本発表では、韓国語の対者敬語法に注目し、文末形式が話者の属性、さらに対者との社会的関係とどのように関わって、時代とともにどう変化してきたかを概観する。日本語と韓国語はともに敬語が発達した言語としてよく知られているが、両者には、相対敬語で親疎重視の日本語と、絶対敬語で上下重視の韓国語という違いが存在する。また、韓国語では、対者敬語法にかかわる非言語的な要素として「性別」「年齢」「夫婦」「親族」の４つがよく取り上げられており、属性のほかに、夫婦、親子、婚姻による親族関係といった「社会的役割」が言葉づかいと強く結びついていることがわかる。本発表では、このような敬語の特徴が、韓国語の役割語と関連してどのように表出されるのか、韓国における関連研究を参照しつつ言語・文化的な観点から考察する。

鄭惠先（2007）「日韓対照役割語研究―その可能性を探る―」金水敏編『役割語研究の地平』くろしお出版、pp.71-93

S-3

＜講演 3＞

河崎みゆき（國學院大學）

中国語における役割語―役割語と中国文化運動

要旨：

中国語には役割語は存在するのか。河崎は（2017、2024）において

１．中国語の方言と人物像、

２．中国伝統の「役割語」（官僚ことば、オネエことば、学生ことば）、

３．非言語行動と人物像、

４．非言語成語（体態成語）と人物像、

５．命名と人物像、

６．ネット上のキャラ現象とことば、

７．「役割語」のリソースとしての中国の小学校語文（国語）教科書

といった観点から中国語の役割語にアプローチし、そのありようを確認した。しかしながら、日本語に比べて現代中国語は目立ったことばの性差や、敬語も多くないため中国語の役割語の存在は一般には気づかれにくい。

本発表は、本書に基づき中国語の役割語を概観すると同時に、そうした中国語の役割語の在り方と、白話文運動や国語運動などの中国の文化運動や言語政策とどのように連動し、関連しているかを探るものである。

河崎深雪（2017）《汉语“角色语言”研究》商務印書館

河崎みゆき（2024）『中国語の役割語研究』ひつじ書房刊行予定

S-4

＜講演 4＞

細川裕史（阪南大学）

ドイツ語における役割語―「言語意識史」の観点から

要旨：

英語と同様にドイツ語でも、その文法的な制約から日本語ほど自由には役割語を新たに作りだすことはできない。その一方で、言語使用者が言語・言語変種にたいして抱いている意識の変遷を扱う「言語意識史」の観点からみれば、ドイツ語圏では、地域方言や社会方言など実在の言語変種がさまざまな役割語として用いられてきたことが分かる。とりわけ、1990 年代末のマンガ・ブーム以降、日本語の役割語を翻訳するためにこのような言語変種が利用されている。より古い時代に目を向けると、ドイツでは 19 世紀後半になってようやく統一的な国家および「標準語」とされる変種が成立したという経緯がある。そのため、19 世紀後半から 20 世紀前半の文学作品においては、「標準語」が有標なものとして扱われ、（地域方言との使い分けにおいて）役割語として機能し、物語の展開において重要な役割を演じている例がみられる。本発表では、役割語として機能するこれらの言語変種について、具体例を挙げながら紹介する。

以上

W-1　　演算メカニズムの経済性の由来と帰結

企画者・司会 - 宗像 孝（横浜国立大学/tora1tm7@carrrot.ocn.ne.jp）

発表 1 - 豊島 孝之（東北学院大学）

生成文法における経済性指針

発表 2 - 後藤 亘（東洋大学), 石井 透（明治大学）

Merge の経済性条件について

発表 3 - 宗像 孝（横浜国立大学）

コピー形成における演算処理: コントロール構文の派生を基に

1. 趣旨

生成文法理論に 1990 年代から経済性の概念が導入され、昨今の Chomsky（2021, GK）及び（2024, MC）では、最小出力（Minimal Yield）やマルコフ演算（Markovian Computation）など経済性の役割が大きくなっている。言語の構造構築が演算メカニズムである以上、演算メカニズムの原理・原則に従うのは当然であり、人間が生物である以上、容量や演算処理に一定の縛りがあり、経済性を課すことで合理的な構造構築や演算メカニズムに条件を想定するのは一定の根拠になる。しかし、経済性の概念が言語の構造構築に課される具体的根拠については、脳の処理に由来する最小出力以外、構造構築を行う演算メカニズムの対象である言語に基づいて、本質をつく議論がなされていない。又、GK や MC のように、言語の構造構築や演算メカニズムに厳格な経済性が条件として課されることで、今まで説明してきた言語事象を切り捨てているという批判も出ている（cf. Landau 2024)。

本ワークショップでは、語彙項目と統語体（Syntactic Object）を組みたて、構造を作り出す演算メカニズムを再点検し、構造構築の側面に力点を置き、経済性を解明することを試みる。それぞれの発表者が「数学的演算性」「演算操作/併合」「演算の特徴/コピー形成」を取り扱い、GK や MC を始めとした経済性を軸にする研究指針に沿って、普遍文法（UG）及び言語の特徴を一定の範囲で同定する。その上で、この研究指針を基に、余剰な道具立てなしで、言語事象に対して広範な示唆を与える可能性を追求する。

2. 背景

生成文法理論が発展する上で、言語事象に最小性というものが観察されることは良く知られている。例えば、（1b）が非文になるのは、*wh* 疑問文などにおいて、同類の移動候補が複数ある場合、移動先から一番近いものが移動するように定めた相対最小性（Relativized Minimality）に違反するからと考えられている (Rizzi 1990)。尚、(1b）は移動距離が最短になるように要求する最小連結条件（Minimal Link Condition, cf. Chomsky 1995）の違反にもなる。

(1)　a.　Who$_i$ do you tell t_i that John bought what?
　　b.　* What do you tell who that John bought t?

以上のことを背景に、Chomsky (1995）は普遍文法に経済性の概念を明確に取り入れた。そして、Chomsky (2000）では一致操作を提案し、(1）で見られる最小性を構造関係（closest c-command）として定義に組み込んでいる。又、移動や一致操作で対象を探す探索領域や演算量を制限するために位相（phase）を導入し、構造構築を担う演算メカニズムにも経済性の概念を導入している。以上のことを踏まえ、言語機能（Language Faculty）が生命体である人間に備わっていることを基に、Chomsky (2004）は、第三要因（Third Factor）を導入し、言語機能の諸概念や演算体系をすべての生命体が従う自然界を律する一般的原理・法則に帰着させる研究指針を打ち出した。例えば、単純な演算メカニズムは新たに演算式を加えるだけで、演算項目の内部に何も追加しないことに基づいて、改変禁止条件（No Tampering Condition/NTC）を導入し、構造構築の際に新たに構造を加えることはあっても、構造内部に一切の変更を行わないとし、複雑な統語操作を排除した。その帰結の一つとして、統語体が移動する際に移動元に挿入される痕跡（trace）を排除し、演算体系を簡素化している。但し、指摘したように、最小性及び NTC などが構造構築に携わる演算メカニズムに課される論拠は真摯に追及されていないのが現状である。

GK や MC になると、Chomsky は演算メカニズムに更に強い影響を及ぼす経済性を導入し、脳の処理容量

を加味した最小出力と、演算メカニズムが演算派生を記録せず現段階の派生のみを参照するというマルコフ演算性を導入した。最小出力は脳の処理容量の増加を最小限にとどめるために、併合（Merge）の適用によって追加することができる統語体は 1 つのみという条件を課しており、側方移動（Sideward Movement）などの「拡大併合」を排除している。例えば、側方移動を用いての寄生空所（2a）の分析（Nunes 2004）は、(2c, d）に見られるように、 統語体 *what* を（2b）の構造構築の際に 1 度用いて、同じ統語体 *what* を別の構造構築に再度用いて *buy* と併合する分析である。(2）では *without* を核とする構造 β にある $what_1$ と主節構造 α に存在する *buy* の内項として新たに併合された $what_2$ の間には演算メカニズムが単一の演算領域から探知できる直接的な関係がないので別個の統語体と見做され、(3）に示すように統語体を 2 つ増やして 8 つにする「拡大併合」になるため、最小出力により排除される。

(2)　a.　[$_\alpha$ **What**$_i$ did John buy t_i] [$_\beta$ without seeing e_i]?
　　b.　[{$_\beta$ without seeing **what**$_1$}, buy …]
　　c. →　併合（buy, what), {$_\beta$ without seeing **what**$_1$}
　　d.　{$_\alpha$ buy, **what**$_2$}, {$_\beta$ without seeing **what**$_1$ [再利用]}　側方移動

(3)　i.　6: buy, without, seeing, $what_1$, {seeing, $what_1$}, {without seeing $what_1$}
　　ii.　8: buy, $what_2$, {buy, what}, without, seeing, $what_1$, {seeing, $what_1$}, {without seeing $what_1$}

最小出力は上記のように同時に 2 つの演算領域を参照し、2 つの構造から構築する複雑な「拡大併合」を排除しているが、GK や MC では最小出力のような経済性が必要な根拠を演算面から示していない。

3. 構成・発表

構成は企画者・司会が 1 の趣旨と 2 の概要を 10 分説明してから発表に移る。発表 1 が 30 分の予定で休憩 5 分をはさむ。その後に発表 2 と発表 3 に各 25 分割り当て、最後の 25 分間、全体討論の時間を設ける。各発表にて、2 節で取り上げた経済性の由来を探り、経済性に基づく研究指針の妥当性を検討する。**発表 1 [生成文法における経済性指針]** は数学及び理論計算機科学と密接に関わっている最適性と演算複雑性を中心に概観する。演算複雑性の評価に用いられるオートマトンについて、オートマトン・形式言語・形式文法の弱生成能力に関する対応関係を示すチョムスキー階層の拡張を検討すると共に、生成文法にとって真に意義のある強生成能力を対象とした木オートマトンによるモデル化の可能性を追求する。**発表 2 [Merge の経済性条件について]**は併合に焦点をあて、第三要因の中から併合の経済性に関係するものとして「二項性」(Binarity)・「最小探索」(Minimal Search)・「最小出力」・「位相不可侵条件」(Phase Impenetrability Condition) を論じる。その上で、併合の入出力を決定する際に課せられる経済性の条件としては二項性と位相不可侵条件だけで十分であり、最小探索と最小出力は不要であると主張し、最小出力の違反として説明されていた拡大併合は二項性の観点から導出されることを示す。**発表 3 [コピー形成における演算処理: コントロール構文の派生を基に]** は Chomsky (2024)のコピー形成に基づくコントロール分析に対する Landau (2024) の反論を詳細に検討し、その正当性を考慮しながら、Chomsky が提示するコピー形成分析の妥当性を論じる。とりわけ、日英語のコントロール構文を扱い、コピー形成分析でコントロール構文に見られる de se 解釈が同一のコピー（コントロールする主節の統語体とコントロール節にてコントロールを受ける統語体）を結び付けることで導出されることを示し、主節とコントロール節が表す事象が結合（cf. Sugimoto 2022）される解釈も主節とコントロール節に同一のコピーがいることと概念事象構造から予測できると論じる。最後に演算メカニズムを基にした方法論的優位性に加え、経験的事実を追う研究手法として価値があると結論付ける。

参考文献

Chomsky. 1995. *The Minimalist Program.* MIT Press. --2004. “Beyond Explanatory Adequacy,” in *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3.* OUP. --2021. “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* 160. --2024. “Miracle Creed and SMT” in *A Cartesian dream: A geometrical account of syntax. In honor of Andrea Moro.* Lingbuzz Press. **Landau**. 2024. “Empirical challenges to the Form-Copy Theory of Control,” *Glossa* 9. **Nunes**. 2004. *Linearization of Chains and Sideward Movement.* MIT Press. **Rizzi**. 1990. *Relativized Minimality.* MIT Press. **Sugimoto**. 2022. *Underspecification and (Im)possible Derivations: Toward a Restrictive Theory of Grammar.* Ph.D Diss. University of Michigan.

W-2　全体・部分・動詞の三角関係標示のストラテジー

（小林剛士・宮川寛人・小林颯・石橋雄大・風間伸次郎）

趣旨

類型論的な言語研究において、全体と部分の関係 (part and whole relation) に動詞述語を加えた、いわば三角関係 (全体-部分-動詞) の分析は高橋 (1975) にその端緒をみることができる。こうした三角関係は外部所有 (external possession)、二重主語構造 (double subject constructions)、名詞抱合 (noun incorporation) のように形態統語的に多様な振る舞いを見せる (Rose and Van linden 2023)。風間 (1994) では所属関係に限られない 2 つの名詞項の間の関係に動詞述語を加えた三角関係をより広く扱う枠組みとして一括支配型と分割支配型の別を提案した。本研究では三角関係の表現構造と意味領域におけるストラテジーのバリエーションを類型論的に調査・分析する。

本研究では 3 つの研究課題を設定する。[課題 1] 三角関係を表す統語的ストラテジーにはどのようなバリエーションがあるか。[課題 2] 「水を{全部／一部}飲む」のような、均質な集合のうちの全体に作用するか部分に作用するかを標示するストラテジーにはどのようなバリエーションがあるか。[課題 3] 各発表者の専門とする諸地域／諸言語系統／諸類型においてそのバリエーションは内的関連や言語接触からどのように説明されるか。

構成

[1] 企画者・司会者（小林剛士）による趣旨説明（5 分）
[2] 研究発表（各 25 分）
　発表 1：小林剛士「三角関係標示の広域類型論」
　発表 2：宮川寛人「アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史」
　発表 3：小林颯「南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向」
　発表 4：石橋雄大「ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因」
[3] コメンテーター（風間伸次郎）からのコメント（5 分）
[4] 全体討論（参加者との質疑応答・総括）（10 分）

各発表の要旨

1. 三角関係標示の広域類型論

東京外国語大学『語学研究所論集』特集データ（以下「論集データ」）収録の 51 言語 8 例文およびコンサルタント調査をもとに、三角関係を標示するストラテジーを通言語的に調査した。課題 1 に関して、統語的には①一括型: [[全体 部分] [動詞]]、②分割型: [[全体] [部分] [動詞]]、③共立型: [[全体] [全体 部分] [動詞]]、の 3 類型が観察された。全体・部分の名詞句がそれぞれいかなる文法関係（主語、目的語、斜格語、非項=抱合）で現れるかについてもバリエーションが見られた。さらに分割型には題述文 [[全体]TOP [部分]NOM [動詞]]（日本語など）や無生物主語他動詞文 [[全体]ACC [部分]NOM [動詞]] を使用する言語（アラビア語など）も存在する。文法関係を項と述部で二重標示する言語においては、項と述部で全体・部分の名詞句が異なる文法関係で現れる分裂も観察された（ブルシャスキー語など）。課題 2 に関して、「全部」「一部」のような語彙を用いるもののほかに、アスペクト（ウルドゥー語など）、冠詞（フランス語など）、DOM（トルコ語など）を用いる言語が観察された。課題 3 に関して、上記の 3 類型と他の類型論的なパラメータ（基本語順および無標示／従属部標示／主要部標示）の間には一定の内的関連のあることが指摘できる。3 類型の分布に関しては地域的もしくは系統的な偏りも存在する。

2. アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史

本発表では、アラビア諸語を対象に三角関係の類型を考える。アラビア諸語は西アジア・北アフリカとその周辺に広がっており、文語体と口語体の差異のみならず、口語体の間においてもそれぞれの地域で多様な変異を示す。アラビア諸語のうち、本発表が調査対象とするのは、現代標準アラビア語、エジプト方言、シリア方言、マルタ語である。「論集データ」に加え新たにデータを収集し、分析を行った。アラビア諸語には目的語なしで前置詞句のみをとる従属部標示型の表現があり、多用されている。その一方で、アラビア諸語内の三角関係標示の方法にはかなりのバリエーションが観察される。これらの一部は言語接触をはじめとする要因から説明することが可能である。本発表では保守的な標示による構文と後からの接触による変遷を峻別し、アラビア諸語における三角関係の表現の歴史的な変遷過程の解明を試みる。

3. 南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向

本発表は南アジアにみられる言語のうち 5 つの言語系統（印欧語族、ドラヴィダ語族、シナ・チベット語族、オーストロアジア語族、系統的孤立語）にまたがる 9 つの言語（ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、マラーティー語、シンハラ語、タミル語、マルマ語、ムンダ語、ブルシャスキー語フンザ方言）を対象として、三角関係標示にみられる地域的特徴を考察するものである。まず「論集データ」によって上記 9 言語の三角関係標示を統語的な観点から分類する。ヒンディー語とタミル語については追加データを用いてさらなる分析を行う。この地域の言語には系統的な違いを超えて、「全体－部分」の語順で一括型の三角関係標示をとるという通言語的傾向がある。この傾向はこの地域の言語がもっぱら OV・AN の基本語順をもつことから説明される。Masica (1976) で指摘されているような与格構文の使用も特徴的である。

4. ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因

本発表は「論集データ」およびコンサルタント調査のデータをもとに、ヨーロッパ諸言語の三角関係標示を考察する。印欧語族の諸言語およびフィンランド語、コミ・ペルミャク語、バスク語、ジョージア語を検討した結果、「A が B の肩をたたいた」のような文では B を与格で表現する分割型が優勢であった。これは Haspelmath (2001) が挙げている Standard Average European の特徴である。一方で、ヨーロッパ諸言語内部でバリエーションを示す表現も存在する。「A は水を {一部／全部} 飲んだ」のような文では、{一部／全部} を①冠詞や部分属格を用いて目的語の側で処理するタイプと②アスペクトや再帰を用いて動詞の側で処理するタイプが見られた。①②を二重標示する言語もあった（チェコ語、リトアニア語）。先行研究にはさらにゲルマン語派の内部で譲渡可能性や受影性が三角関係標示に影響を与えているとするものがある。本発表ではこれらの諸説についても検討する。

参考文献

Rose, Françoise and An Van linden (2023) Introduction: the limits of the explanatory potential of the alienability contrast. *Linguistics*. 61(6): 1341–1363. / Haspelmath, Martin (2001) The European linguistic area: Standard Average European. In: Martin Haspelmath, Ekkehard König and Wulf Österreicher (eds.) *Language Typology and Language Universals* 2, 1492–1510. Berlin: De Gruyter. / 風間伸次郎 (1994) 『ナーナイ語の「一致」について』 北大言語学研究報告 5. / Masica, Colin P. (1976) *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago/London: The University of Chicago Press. / 高橋太郎 (1975) 「文中における所属関係の種々相」『国語学』103: 1–17.

W-3

阻止はどこで，どのように起こっているのか？

企画者・司会者：乙黒亮（早稲田大学）

阻止（blocking）という概念は，Aronoff (1976)によって最初に提案されたものである。Aronoff は英語の形容詞で curious や various などは curiosity や variety のように-ity 接辞による名詞化が可能なのに対し, glorious や furious などは*gloriosity や*furiosity とはならないことに着目し, その理由を glory や fury という名詞がすでに存在していることにより， -ity 接辞による名詞化が阻まれると考え，この現象を阻止と名付けた。また Clark and Clark (1979)は，英語において名詞を動詞へ転用する際に，類義語や同音異義語がすでに存在する場合に転用が不可能になることを指摘した。例えば，bicycle や taxi などは「自転車で行く」「タクシーで行く」という動詞に転用できるが，car や airplane は drive や fly という動詞があるために，同様の転用ができない。また summer や autumn は「夏を過ごす」「秋を過ごす」という動詞に転用できるが，spring や fall は同音異義の「跳ねる」「落ちる，倒れる」という動詞により転用が阻まれる。これらの現象は阻止が語形成のより広範な領域で働いていることを示唆している。さらに Poser (1992)は句の形成が単一の語によって阻まれる現象を示し，阻止は句のレベルでも起こると主張した。一方で，早くから van Marle (1985)，Rainer (1988)などが指摘し，Aronoff and Lindsay (2014)にもまとめられているように，特定の語の存在が必ず阻止を引き起こすわけではなく，その語の使用頻度や派生接辞の生産性によって阻止が起こるか否かが左右されることも分かっており，阻止というのは離散的（discrete）ではなく量的（scalar）な現象であるという見方もある。

以上のように，阻止という現象を引き起こす要因は何なのか，どの領域で阻止は起こりうるのか，どのようなメカニズムによって阻止が機能しているのかなど，阻止をめぐる経験的，理論的な論点は多数存在する。本ワークショップでは，これまで阻止として扱われてきた具体的な現象について，分散形態論 (Halle and Marantz 1993), 自律モジュール文法 (Sadock 2012), 一般化パラダイム関数形態論 (Spencer 2013)という 3 つの異なった理論的な枠組みによる分析を提示し，阻止という現象の多面性を示すとともに，各言語理論および近接するその他の理論における争点・対立点を浮かび上がらせることを目的とする。とりわけ語と句が関係し合う阻止の例として，上述した Poser (1992)で扱われている日本語の軽動詞構文に関しては， 3 つの異なった理論による分析を示し，比較・対照を試みる。

分散形態論における阻止

田川拓海（筑波大学）

本発表では, 分散形態論によって種々の阻止に関わる現象がどのように分析できるかを整理する。まず英語の名詞化接辞に対する Embick and Marantz (2008)の研究を紹介し，このタイプの阻止については競合の結果として特定の形態が現れなくなっているだけで特別な分析は必要なく，一般的な異形態として取り扱うことができるという分散形態論の基本的な方針を確認する。さらに，英語の比較級・最上級に関する研究を例に，語の形成と句の形成を連続的に取り扱える分散形態論では句による単一の語の阻止も問題なく取り扱えることを見る。一方で，分散形態論では様々な阻止に関する現象を同じように取り扱えるわけではない。たとえば Clark and Clark (1979)で示されている類義語や同音異義語による阻止のような複数の語根 (Root) にまたがる現象は競合によって取り扱うことは難しく，百科事典的知識を取り扱う領域 (Encyclopedia) において間接的な関係を想定する必要があると考えられる。また，英語の名詞化接辞や句による単一の語の阻止の分析でも問題は残されている。英語の名詞化接辞の問題については頻度の問題を取り上げ, 競合の仕組みに頻度・確率の考え方を組み込む可能性について検討する。句による阻止については日本語の軽動詞構文に関する研究の成果を概観し，特定の統語環境

において動詞に関わる素性が「する (suru)」として具現するという分析によって軽動詞構文の振る舞いがどこまで捉えられているか問題を整理する。

自律モジュール文法における阻止

柚原一郎（東京都立大学）

本発表では，語が句を阻止していると考えられる現象に対し，自律モジュール文法がどのような説明を与えるかを紹介する。日本語では taberu という語が存在するために*tabe suru という句表現が，あるいは oisii という語が存在するために*oisiku aru という句表現が阻止されている。その一方，こうした句表現は tabe dake suru や oisiku sae aru のように，適切に用いることも可能であるため，句形成に制約をかけ tabe suru や oisiku aru を阻止することは出来ない。むしろ，こうした句表現は可能表現なのだが，Ueno (2014)が主張する「言語使用の経済性（意味が同一であればより単純な構造が選択される）」によって一時的に不適格となっていると分析する。つまり文法は異なる形式の同意表現を冗長に（語や句として）作り出せるのであるが，どちらの表現が選ばれるのかに関しては競争が働いているという分析を提示する。こうした説明は kobasiri suru とか yoasobi suru のような 2 語表現よりも*kobasiru とか*yoasobu ような 1 語表現を選択する可能性があることを（誤って?）示唆したり，同意表現でも maneru は mane suru を（予測するように）阻止していなかったりと，検討すべき課題もあるのだが，現時点でどのように考えられているかについても言及する。

一般化パラダイム関数形態論における阻止

乙黒亮（早稲田大学）

パラダイム基盤の形態理論では，屈折形態における語同士のパラディグマティックな関係を基に語形を規定するアプローチが取られるが，派生形態を含む様々な語形成により産出されるより広範な語同士の関係性を捉える枠組みとして，Spencer (2013) は一般化パラダイム関数形態論というモデルを提案した。このモデルでは，語彙項目に記載されている FORM（語形），SYN（統語），SEM（意味），LI（語彙素インデックス）という情報が，関数の適用によって変化することで，語形成が行われる。阻止というのは，これらの関数適用による変化が何らかの理由で阻まれるため，語形成が行われない現象であると考えることができる。本発表では，限定的なパラディグマティックな関係性では捉えることの難しい現象に焦点を当て，分析を提示する。具体的には，Bolinger (1975)にある thief「泥棒」という名詞が動詞 steal から*stealer への名詞化を阻止する例や，Clark and Clark (1979)にある類義語や同音異義語による名詞から動詞への転用の阻止は，ともに SEM への関数適用が既存の語によって阻まれることにより説明可能なことを示す。また Poser (1992)で議論されている日本語の軽動詞構文に関しては，語が句を阻止しているのではなく，軽動詞構文に現れる無活用動詞の形態的機能欠如により，迂言形が表出していることを Bonami (2015)の逆行指定というメカニズムを用いた分析により示す。

主要参考文献

Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press.
Clark, E. V. and Clark, H. H. (1979) When Nouns Surface as Verbs. *Language* 55, 767–811.
Embick, D. and Marantz, A. (2008) Architecture and Blocking. *Linguistic Inquiry* 39: 1–53.
Halle, M. and Marantz, A. (1993) Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. In Hale, K. and Keyser, S. J. eds. *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, 111–176. Cambridge, MA: The MIT Press.
Poser, W. J. (1992) Blocking of Phrasal Constructions by Lexical Items. In Sag, I. A. and Szabolcsi, A. eds. *Lexical Matters*, 111–130. Stanford, CA: CSLI Publications.
Sadock, J. M. (2012) *The Modular Architecture of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
Spencer, A. (2013) *Lexical Relatedness: A Paradigm-based Model*. Oxford: Oxford University Press.
Ueno, Y. (2014) *An Automodular View of English Grammar*. Tokyo: Waseda University Press.

W-4　　日本語から見た世界の言語の主題と焦点

野田 尚史（日本大学）
岸本 秀樹（神戸大学）
桐生 和幸（美作大学）
米田 信子（大阪大学）
原 真由子（大阪大学）

ワークショップの趣旨

「主題」は文の中で「それについて述べる」ということを表す部分であり，「焦点」は文の中で「それをいちばん述べたい」ということを表す部分である。主題と焦点は相反するものであり，互いに表裏の関係になっている。

日本語では主題表示機能が焦点表示機能より発達しているが，焦点表示機能が主題表示機能より発達している言語もある。また，日本語では主題を表す形態によって主題を表すが，語順によって主題を表す言語もある。

このパネルで取り上げるのは，それぞれタイプが違う 4 つの言語である。シンハラ語は，主題を積極的に表さず，焦点を表す形態によって焦点を積極的に表す言語である。ネワール語は，文頭に置くという語順によってさまざまな成分を主題として表す言語である。マテンゴ語は，文頭に置くという語順によって主題を表し，動詞の直後に置くという語順によって焦点を表す言語である。インドネシア語は，文頭に置くという語順によって主題を表したり焦点を表したりする言語である。それぞれの言語の主題と焦点の位置づけや特徴を，日本語と対照することによって明らかにする。

ワークショップの構成

このワークショップでは，企画者（野田尚史）による趣旨説明（約 10 分）の後，次の 4 つの発表（各約 20 分）を行い，最後にフロアとのディスカッションの時間（約 30 分）を設ける。

シンハラ語の主題と焦点（岸本秀樹）

日本語は「は」で文中の主題を助詞で指定することが多いが，シンハラ語においては主題のマーカーは発達しておらず，代わりに主題と対立する概念である焦点を文中で指定することが多い。本発表では，このような違いからシンハラ語と日本語が主題と焦点の指定の仕方に違いが観察されることを論じる。

具体的には，日本語では「は」が対比のある主題や対比のない主題の意味を表すのに使用されるという主題優位の特徴を持つ。これに対して，シンハラ語では焦点のマーカー（助詞または接辞）を用いて対比のある焦点と対比のない焦点を表すことができる。一方で，シンハラ語主題のマーカーは対比のある主題のみを表すことができ，対比のない主題を表すことができないという日本語とは対極にある焦点優位の特徴を持つことを論じる。

さらに，シンハラ語には否定の焦点の助詞など，日本語では存在しないタイプの焦点助詞があることも示す。

ネワール語の主題と焦点（桐生和幸）

ネワール語は日本語と同じく基本語順が［主語－目的語－動詞］であるが，日本語と違って，主題は「は」のような形態ではなく，文頭に置くという語順によって表される。主語は基本語順で文頭にあるため，主語が主題になっても語順は変わらない。そのため，主語が主題になっているのかどうかは語順では区別がつかず，文脈で判断するしかない。しかし，主語以外の必須成分が主題になった場合は，その成分が文頭に置かれるため，その成分が主題になっていない文と明確に区別される。ネワール語ではさまざまな成分が主題になる。日本語の「象は馬より鼻が長い」は「象の」という所有格が主題になった文であるが，ネワール語ではこれに対応する文は「象の馬のより鼻が長い」のような形になる。「象の」と「鼻」の間に「馬のより」のような成分を入れることができるため，この「象の」は単なる所有格ではなく，主題になっていると考えられる。

ネワール語では，焦点は基本的に音韻的プロミネンスによって表される。焦点を強調する場合は，he という助詞を焦点要素に付けることもできる。焦点のうち疑問詞疑問文の答えとなる成分は主題より前の文頭に置かれることがあるが，それ以外の焦点要素は主題より後に置かれる。

マテンゴ語の主題と焦点（米田信子）

マテンゴ語では，主題は文頭，焦点は動詞の直後に置かれる。同時に，マテンゴ語の基本語順は［主語－動詞－目的語］であり，文頭は主語の位置でもあり，動詞の直後は目的語の位置でもある。したがって，情報構造による語順と基本語順との「折り合い」が必要となる。本発表ではその「折り合い」の付け方について論ずる。

文頭に主語がある場合には，それが主題なのかそうでないのかはあいまいであり，ネワール語と同じく文脈から判断することになる。同様に，動詞の直後に目的語がある場合は，それが焦点なのかそうでないのかの判断も文脈に頼ることになる。

一方，主語以外の要素は主題化されているかどうかが明白である。主題化された要素は主語の代わりに文頭に置かれ，主語は動詞の後ろに置かれる。同様に，目的語以外の要素の焦点化も明白である。その要素が目的語に代わって動詞の直後に置かれる。その際の目的語の現れ方は，主題化されていれば文頭に現れる。主題化されていなければ，焦点化された要素の後ろに現れることもできるが，文中に現れないほうが好まれる。

インドネシア語の主題と焦点（原真由子）

インドネシア語においては，主題と焦点を表す手段は主に語順によるものであり，いずれも文頭に近い位置に置くことによって表される。

主題に関しては，インドネシア語の基本的な文構造である［主語－述語］における主語が主題として機能することが多い。日本語の主題標識「は」のような明確な形態的手段はないため，主語が必ずしも主題であると判断できない。ただし，二重主語文や，被害・迷惑を表す ke-an 動詞を述語とする一部の構文の主語は主題性が高いと言える。また，一部の自動詞（存在を表す ada など）は主語を後置することによって主題を持たないことを示す。

一方，焦点の場合は，基本的な語順である［主語－述語］とは逆の［述語－主語］とすることによって，述語が焦点化されることが多い。さらに，焦点化された要素には，焦点であることを明示する標識である -lah（平叙文の場合）あるいは -kah（疑問文の場合）が付加されうる。

W-5　「マレー語世界の社会言語学－さまざまな変種の特質と使用実態」

企画：内海敦子　コメンテーター：塩原朝子

発表者：内海敦子（明星大学）　稲垣和也（南山大学）　塩原朝子（東京外国語大学）

スリ・ブディ・レスタリ（立命館アジア太平洋大学）　三宅良美（秋田大学）

１．趣旨

本ワークショップの目的は、マレー諸語を題材に、広い地域で国家語あるいは最も活力の強い地域語として使用されている言語の実態を論じることである。特に焦点を当てて考察するのは、第一に地域的な変種がどのように誕生するのか、第二に社会言語学的な特性に応じてどのような言語の使い分けやコードスイッチングが生じるのか、の二点である。マレー諸語と似たような変種の多さや社会言語学的な特徴を持つ多くの地域に分布する言語にはスワヒリ語やスペイン語などが挙げられる。マレー諸語の状況の報告が、他の類似の言語との比較に用いられることを期待したい。

２．各発表の概要

発表１：趣旨説明およびマレー諸語とその社会言語学的状況の概観　内海敦子

マレー語は Macrolanguage と呼ぶのにふさわしい言語で、多数の変種が存在するが、その中には国家語の「インドネシア語」、「マレーシア語」という名で標準変種として確立している変種もある。本ワークショップではそれらを総称してマレー諸語と呼ぶ。

マレー諸語は、インドネシア語とマレーシア語とそれぞれ呼ばれる標準変種に限っても３億人に近い話者人口を擁する。その他口語変種はインドネシア・マレーシア両国全域および、ブルネイ、タイ南部、スリランカ、ミャンマーなどの諸国に分布し、様々な特徴を示している（発表２）。これらすべての地域は複数の言語が使用されている複数言語併用社会であるが、マレー諸語とその他の諸語との活力の違いや使用範囲はそれぞれの地域の特徴ごとに大きな違いを見せる。ここではその違いを類型として示す。

マレー諸語が使用されている地域の社会言語学的な様相は大きく次のように分けられる。第一にスマトラ島やマレー半島の多くの地域のように、民族語としてのマレー諸語がＬ変種として、国家語としての標準変種であるＨ変種と共に使用され、二言語あるいは多言語併用社会（多種のマレー系民族語が存在する場合）となっている地域。民族語としてアイデンティティのよりどころとなる民族語のマレー諸語が標準変種とどう折り合いをつけていくかという事例を報告する（発表６）。第二に、マレー諸語ではない勢力の強い単一の民族語が、国家語としての標準変種と共に使用されている地域。この場合、民族語にもマレー諸語にも、それぞれＬ変種とＨ変種が存在することがあり、コードミキシングとコードスイッチングの興味深いデータを提供する（発表３）。この第二のパターンのサブタイプとして強い勢力の民族語が複数存在する場合もあり、複雑なコードミキシングの様相を見せる（発表４）。第三にマレー諸語ではない民族語が多数存在し、そのうちの一つが特に強い勢力を持つ地域。このパターンにおけるＬ変種は、勢力の最も強い民族語か、マレー諸語の地域方言となり、Ｈ変種は標準変種である。そして勢力の弱い民族語は減衰の一途をたどる（発表５）。

以下、社会言語学的状況によってマレー諸語の使用実態と勢力の強さがどのように異なるかを考察する。

発表２：マレー語世界の全容と歴史：カリマンタン変種を手がかりに　稲垣和也

各地のマレー語は、「マナド・マレー語」や「バンジャル・マレー語」といった地名を冠した「～・マレー語」という名称（以下、～M語と略す）で知られているものもあれば、「ミナンカバウ語」や「イバン語」といった個別言語名で知られているものもある。いずれも、オーストロネシア祖語から下る一連の音韻変化を共有しているが、同系統内であっても、系統的に遠いもの、近いもの、言語接触等により構造的にかけ離れているもの、方言相当であっても政治的な理由等から単独の言語として認識されているもの、と様々である。本発表ではまずマレー諸語の系統関係と祖地について述べたあと、標準変種、土着の変種、リンガフランカ的な変種（主に異民族間の意思伝達ツールとしての変種）の区分について述べる。

土着の変種とリンガフランカ的な変種については、音韻・語彙・統語論の特徴において大きな差がみられるが、その特徴の差についても報告する(Adelaar 2005)。

発表３：活力のある民族語とマレー語の使い分け：ジャワ語との二言語併用地域のコードミキシングとコードスイッチング　スリ・ブディ・レスタリ

インドネシアの民族語の一つであるジャワ語は、主にジャワ島の中央ジャワ州、東ジャワ州、ジョグジャカルタ特別州で話されており、話者数は約 8400 万人と推定され、インドネシア最大の民族であり活力の大きな言語である。敬語の体系を持ち、伝統的な文化行事や儀式において用いられるＨ変種としての機能を持つだけでなく、大衆芸能においてもジャワ語は重要な役割を持ち、日常言語として用いられるなどＬ変種の機能も持つ（Quinn: 2012）。他方、ジャワ語地域において、マレー諸語の標準変種の一つであるインドネシア語は教育、メディアや公式の場で用いられる。

ジャワ語は敬語体系が複雑なため、目上の人と話すときに無礼にならないよう、インドネシア語に切り替える話者も多く、中部ジャワやジョグジャカルタ特別州の都市部を中心に、若い世代の間ではインドネシア語の使用が増え、ジャワ語の使用頻度が減少しているとの指摘がある。本発表では、2024 年 2 月に実施したアンケートと収集したナラティブにおけるコードスイッチングの分析に基づき、若年層におけるジャワ語とインドネシア語の使い分けについて、詳細に報告する。

発表４：複数のアイデンティティを映す戦略としてのコード・ミキシング：マカッサル・インドネシア語の事例から　塩原朝子

インドネシア東部の最大都市マカッサルでは異民族間の共通語としてマカッサル・インドネシア語と呼ばれる口語変種が発達している。この変種の核となる特徴は地域の二つの優勢民族の言語であるマカッサル語とブギス語に共通する（そして標準インドネシア語には存在しない）能格型の人称クリティックの使用である。話者はそれに加えて発話の状況や聞き手の民族的属性に応じてマカッサル語あるいはブギス語特有の語彙や接辞を巧みに発話中に織り交ぜることによりその場にふさわしいと話者が考える形で自身のアイデンティティを標示する。本発表ではイラストによる刺激を用いて収集したテキストを基にこの点を例示する。

発表５：多民族地域におけるマレー語の浸透力：北スラウェシ州の事例から　内海敦子

北スラウェシ州は数十人から数万人の話者を持つ少数民族言語が 11 も存在してきた地域である。地域共通語のＬ変種として用いられているのはマレー諸語の地域方言であるマナド・マレーで、少数民族言語は活力を失い消滅の危機にある。その代わりにマナド・マレーが地域の人々のアイデンティティを示す言語として若い世代に愛されるようになった。標準変種であるインドネシア語はＨ変種としての地位を確立し、儀式においても民族語ではなくインドネシア語が使用されるようになっている。本発表ではこの事例を基に、多民族社会におけるマレー諸語の活力と使用実態を考察する。

発表６：トランスミグラシ（近年の国内移民）と共通語としてのマレー語の姿　三宅良美

ブリトゥン島はスマトラ島南部とカリマンタン島の間に位置し、土着のマレー語であるブリトゥン・マレーが話されている地域である。この島は錫鉱山の開発で発展し、近年はオイルパームのプランテーション事業が盛んであるため、土着のマレー人の他、インドネシア各地からの移民が多数居住する。ブギス人や炭鉱で働く中国人に加え、スハルト時代の移住プロジェクトによってジャワ人、マドゥラ人、スンダ人、バリ人などが移住している。このような近年形成された多民族社会において、どのようなマレー諸語の変種が誕生するのか、またそれらの変種と土着のブリトゥン・マレーとのダイナミズムを、アンケート調査および、子供たちの作文や SNS で用いられているマレー語変種の分析から考察する。

参考文献

Adelaar, Alexander.　2005.　Structural diversity in the Malayic subgroup.　In *Austronesian languages of Asia and Madagascar.*　eds. by Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann.　London-New York: Routledge.

Quinn, George. 2012. Post-New Order Developments in Javanese Language and Literature. Words In Motions.

W-6　論争する言語学の過去・現在・未来：議論を深め、実りあるものとするために

司会・発表 1：田中太一（東京農工大学）企画・発表 2：山泉実（大阪大学）、発表 3：西畑宏紀（大阪大学[院]）
コメンテーター：窪田悠介（国立国語研究所）

趣旨　古くは総主論争、陳述論争、そして近年の西垣内・西山論争など、言語研究は古くから論争に彩られてきた。人間の理性が孤独な思考ではなく対話に最適化して進化している（Mercier and Sperber 2017）ことを考えると、論争は、我々が言語学、ひいては学問一般を進化させるのに極めて有効な手段であると言える。しかし、近年は、言語学の理論的深化や専門分化に伴って、限られた紙幅においての論争で議論を深めることが難しくなっているきらいがある。本ワークショップでは、日本の言語学の過去・現在・あり得る未来における 3 つの論争を各発表が 1 つずつ取り上げ、それが果たして実り有るものなのかを検討していく。これらは、論争を生産的でなくする以下の要因が絡んでいるという点で、それぞれ注目に値する：分析概念の理解に関する混乱（発表１）、理論的前提の違いに起因する誤解（発表２）、分析対象の同定に関する混乱（発表３）。これらの論争の検討を通して、言語学における論争、特にその論点やすれ違いの構造を分析し、類型を見出すことを試みる。

いずれの発表も論争にどちらかの陣営として、あるいは第三の陣営として参入するわけではない。一歩引いた立場から、それらの学術的・学史的意義を検討しつつ、論争は何をめぐって起こり、議論の過程にはどのような落とし穴があり得るのか、そして、いかにしてそれらを避けつつ論争を生産的なものにできるのかを、コメンテーター及びフロアの皆様とともに考えていきたい。

構成　[1]**趣旨説明**: 司会者による趣旨説明　[2]**研究発表**: 発表者による研究発表 1-3
[3]**パネルディスカッション**：登壇者相互の議論　[4]**全体討論**: 会場からの質疑応答・総括

各発表の題目と要旨　**■第 1 発表：「誤解の効用とその限界：黒田久野論争をめぐって」田中太一（東京農工大学）**

生成文法論者である黒田重幸と久野暲は、Kuroda (1979) に始まり、久野 (1986) に至る、日本語受身文を対象とした論争を展開している（以下：黒田久野論争）。黒田久野論争は、黒田自身がニ受身の特徴付けとして提示した概念である “affectivity” を、誤って再解釈してしまったことが主な要因となり、議論が噛み合わないまま途絶えてしまった（田中 2017）。この論争は様々な難点を含みながらも、「理論的」受身文研究の嚆矢として位置づけられ、現在までに様々な評価が提出されている。このことは、当事者間の誤解が必ずしも学問上の意義を失わせないことを示している。

黒田久野論争を検討した代表的研究の 1 つである金水 (1993) は、ニ受身は必ず affectivity を持ち、「インヴォルヴメント」を含むこともあるのに対し、ニヨッテ受身は必ずインヴォルヴメントを持つが、affectivity を含むことはないと述べている。この特徴付けはどこまで妥当だろうか。金水 (1993: 497) には「「働きかけ」すなわち affectivity」という記述が見られる。さらに、「働きかけ」について寺村 (1982: 91) の「動作主体が客体（Y）に働きかけ、客体がそれによって物理的、心理的に直接影響を受ける」という記述を挙げている。しかしながら、ニヨッテ受身がこの意味での「働きかけ」すなわち affectivity を表すことがないとすると、たとえば「机の上の花瓶が太郎によって割られた」において、太郎が花瓶に働きかけていないことになってしまう。この点で、金水 (1993) は黒田久野論争に明解な整理を与えたものとは言い難い。一方で、現代において最も包括的な受身文研究史を提供する川村 (2012) は、金水 (1993) を高く評価し、被害性に注目する立場と、〈被影響〉に注目する立場の対立という整理の起点（の 1 つ）として位置づけている。つまり、論争の解釈に誤解が含まれていたとしても、研究の発展を阻害するとは限らないということである。

しかしながら誤解はやはり誤解であり、見過ごされることによる弊害は少なくない。たとえば、行為者の被動者に対する「働きかけ」と、それによって被動者に生じる「影響」には（強く叩けば、それだけ強い痛みが生じるというように）明らかな相関があるにも関わらず、用語法上の混乱がそのことを覆い隠してしまっていると考えられる。

■第 2 発表：「西垣内西山論争における齟齬：非飽和名詞の定義と“翻訳”を中心に」山泉実（大阪大学）

現在『言語研究』『日本語文法』等の媒体で、西垣内泰介氏と西山佑司氏が、指定文や潜伏疑問文、及びそれらを分析する概念について論争（以下、「西西論争」）を続けている。しかし、相手方の説の誤解や、双方の前提の違いに由来する齟齬などが散見され、論争が不毛な結果に終わることが憂慮される。両者とも生成文法家であるものの意外にも立場の違いが大きく、それがすれ違いの原因になっていることを指摘する。西山・西川（2018）や西山（2023）に対しては、西垣内氏本人が論争において数多くコメントしているため、本発表は西垣内氏の見解、特に以下の点

を中心に検討する。

最近出版された西垣内（2024）は、西垣内（2020）の批判を目的とした西山（2023）への応答であり、その中で西山（2003）の「非飽和名詞」という概念の自らの理解を、西山（2003）の定義の“翻訳”として、そこに至るまでに抱いた疑問や紆余曲折とともに明示している。その翻訳は体系的な誤解に基づく誤訳と発表者は判断しているが、西垣内氏の前提・視座が反映されたものであり、両者の見解の相違の根源が見て取れる。これは、統語論中心主義の生成文法の研究手法と、その他のアプローチとの間での議論のすれ違いという、おそらく世界中で繰り返されてきた問題が、現在、極めて見えやすい形で起こっているということであり、論争への理解を深める格好の材料を提供する。

本発表では、西山（2003 他）の非飽和名詞とそのパラメータの値という概念を紹介した後に、西垣内（2024）の議論を検討し、発表者の読解を裏付ける。両陣営の齟齬を明らかにし、その過程で、言語学、ひいては学問一般において、立場を異にする者同士のコミュニケーションが失敗する要因をも、論争の実例の分析を通して探っていきたい。

■第 3 発表：「互いの研究対象を見極めることの重要性：『日本語文法』における終助詞ヤをめぐる議論の検討」

西畑宏紀（大阪大学[院]）

本発表では、未来にあり得る論争の種として、終助詞ヤの記述的一般化をめぐる蓮沼（2022）の白川（2021）への批判を取り上げる。この批判は、争点が理論的なものではなく、主にデータに関するものである点が、第一・第二発表の論争とは異なる。本発表は蓮沼の白川批判は【1】データの扱いに関して正当化されていない前提を抱えていること、【2】蓮沼の研究対象自体が白川のそれとは異なっていること、の 2 点に自覚的でないために不当な批判となっていることを指摘する。

蓮沼の批判の対象となった白川はヤの機能を認識即応性の標示と特徴づけた。従来、動詞ル/タにヤは接続しないとされていたが、白川は「あれ、あいつもう来てるや。」のように認識即応性を持つ文においてはヤの接続が許容される場合があると指摘している。これに対し蓮沼は動詞ル/タへのヤの接続は自身には容認できないとした上で白川の依拠するデータの問題点として①使用頻度が低い書記言語の例や作例、②容認度に異論が生じそうな例、③音声言語の「や」の例への目配りの欠如、を挙げ、白川が動詞ル/タ＋ヤをデータに含めることそれ自体を問題視する。これらが難点として提示された背景にはコーパス上の調査や上の世代の東京方言話者の内省にとっての例外的な現象は、分析から取り除かれるべきだという暗黙の前提があるように思われる。しかし、このような前提は十分に正当化されているとは言い難い。また、最終的に蓮沼はヤは認識即応性ではなく見定め的評定の遂行を標示すると結論しているが、白川にとっての反例は挙げられておらず、白川の一般化を修正することの必要性が明らかでない。

本発表の整理によると、白川と蓮沼は動詞ル/タ＋ヤを容認する話者の言語知識も分析に含めるか否かが異なっており、本来、論争の足場であるはずの研究対象がずれてしまっていると考えられる。この整理が正しければ、蓮沼は研究対象の相違に起因するすれ違いを依拠するデータの妥当性の問題だと考え、白川を批判してしまったということになる。研究対象自体が異なる以上、両者の議論を踏まえた今後の展開は、論争という形よりも、現代日本語の共通語内部の位相差を詳らかにするような研究に発展していくことが望ましいと診断できる。

参照文献 Kuroda, S.-Y. (1979) On Japanese passives. George Bedell, Eichi Kobayashi and Masataka Muraki (eds.), *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*, 305–347. Kenkyusha.■Mercier, H. and Sperber, D. (2017) *The enigma of reason: A new theory of human understanding*. Penguin Books.■川村大 (2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版. ■金水敏 (1993)「受動文の固有・非固有性について」近代語学会 (編)『近代語研究 第九集』pp.473–508. 武蔵野書院.■久野暲 (1986)「受身文の意味：黒田説の再批判」『日本語学』5: 70-87.■黒田成幸 (1985)「受身についての久野説を改釈する：一つの反批判」『日本語学』4: 69–76.■白川陵 (2021)「終助詞「や」の機能と独り言性に関する検討：認識即応性の観点から」『日本語文法』21(1): 72–87.■田中太一 (2017)「日本語受身文をめぐる黒田久野論争について」『東京大学言語学論集』38: 271–285.■寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.■西垣内泰介 (2020)「「潜伏疑問」の構造と派生」『言語研究』157: 37–69.■西垣内泰介 (2024)「「非飽和性」の不合理」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』27: 17–30.■西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.■西山佑司 (2023)「潜伏疑問と指定文：「関数名詞」説の批判的検討」『日本語文法』23(2): 3–18.■西山佑司・西川賢哉 (2018)「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か」『言語研究』154: 177–204.■蓮沼昭子 (2022)「終助詞「や」の機能再考：「わ」との比較を通して」『日本語文法』22(1): 70–86.

A-1

疑問文断片からみる極性疑問文の選言構造について

竹内士瑛伊（東海大学大学院　4CLBM001@tokai.ac.jp）

1. はじめに　日本語には疑問文断片（Fragmentary Question、FQ）と呼ばれる省略構文（1C）が存在する。提題助詞「は」を伴う「ハナコは」は、先行文のユキと対比される主題として解釈され、疑問のマーカーが発話されなくとも、ハナコを主題とする疑問文として解釈される（Maeda 2018; 永次 2021）。

(1)　A: ハナコはピザを食べましたか?　B：はい（、(ハナコは)(ピザを）食べました）。
　　C: ユキは？　D_1：食べました。　D_2: はい、食べました。　D_3: *はい/*いいえ。

(1C)の FQ は、($1D_{1\text{-}2}$）のような応答を許容する極性疑問文（Yes/No 疑問文）に相当する解釈を持ち得る。本稿が着目したいのは、この極性疑問に相当する解釈に対して、「はい/いいえ」のみの応答（$1D_3$）は許容されないという、永次（2021）等によって見落とされてきた事実である。本稿の目的は、($1D_3$）の応答における座りの悪さに着目しながら、極性疑問文の統辞構造、および極性疑問文の性質とそれに対する「はい/いいえ」の応答が許容されるための条件を検討することである。

2. 主張　本稿では、以下に見る 4 つの主張(I)-(IV)を提案する。

(I): 極性疑問文に対する「はい/いいえ」の応答（2B）は、極性疑問文専用のマーカーであり、示された 1 つの命題に対する真偽を表明する応答である。よって選択疑問文には使用できない。(3B）の応答は、(3A）で命題が 2 つ以上提示されていることから不適格となる。

(2)　A: ユキはピザを食べましたか?　(極性疑問文)　B: はい/いいえ。
(3)　A: ユキはピザを食べましたか、それともカレーを食べましたか?（選択疑問文）　B: *はい/*いいえ。

(II): FQ は、基底構造に肯定文・否定文の選言等位接続（disjunction）を持つ。(3B）が示すとおり、選択疑問文に対する「はい/いいえ」の応答の容認度は低いが、同様のことが肯否選択疑問文（4A）でも成り立つ。本稿では、FQ (1C）への応答（$1D_3$）の悪さは、選択疑問文（4A）への応答（4B）の悪さと同根だと主張する。

(4)　A: ユキ$_i$はピザ$_j$を食べましたか、(それとも) e_i e_j 食べませんでしたか? (選択疑問文)　B: *はい/*いいえ。

本稿の主張によれば、(1C）のような FQ は（5）のように分析される。グレースケールの部分は省略されていることを示す。極性疑問文の基底構造については、本稿では Kuroda (1965:88-90）の古典的変換生成文法に基づく分析を展開する。Kuroda によれば、(2A）のような極性疑問文は、(4A)のような肯否の選言を基底構造にもち、一方の選言肢が削除を受けることで派生される。本稿は Kuroda のこの洞察を復活させることを提案するが、Kuroda の attachment-transformations を排し、単一の削除操作による分析（III）を展開する。

(III): FQ (1C）を形成するための削除は、先行する（1A）のような極性疑問文（6a）との構造的同一性（Structural Identity）のもとで認可される。すなわち、(1C）は（6b）のように分析される（（5）が図示）。

(6)　a ハナコ$_i$は[$_{Disjunction}$ [e_i ピザを食べました(か)] ~~or [e_i ピザを食べませんでした(か)]~~]？　(= (1A))
　　b ユキ$_i$は　~~[$_{Disjunction}$ [e_i ピザを食べました(か)] or [e_i ピザを食べませんでした(か)]]~~？　(= (1C))

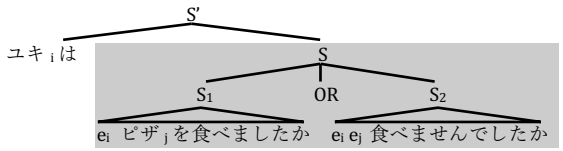
(IV): Yes/No 疑問文は、(II)で主張したような肯否選言構造のもとで、後続する等位項 S_2 が S_1 との構造的同一性をもとにした削除操作（7）によって派生される。本稿ではこのような削除操作を対極削除（antipolar deletion; AD）と呼ぶが、同時に AD は独立に証拠付けられている削除操作および削除の同一性制約から自然とその存在を導出できるものであると主張する。例えば Watanabe (2004）は、(8B)のような短縮応答の例を示し、言語の節削除（clausal ellipsis）は否定素性の不一致を乗り越えて適用されることを示している。

(8)　A: タロウは何を食べ$_{[-Neg]_{[+F]}}$たの？　B: 何も。（= ~~[タロウは~~[何も]~~食べなか$_{[+Neg]_{[+F]}}$ った]~~）

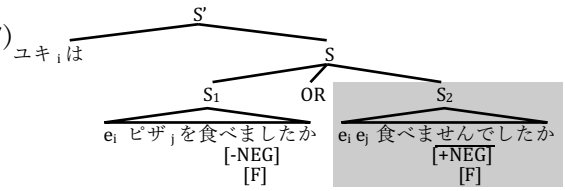
また、Merchant (2001）は、先行表現と省略部が、焦点化された要素の違いを除いて意味的に相同であれば削除が適用可能だとする仮説（focus-assisted mutual entailment、FAME）を提案しているが、(8B）のような削除もその一例と考えることができる。とすれば、(7）では、否定素性[±NEG]が焦点[F]となることで先行表現との同一性を担保していると考えられる。本稿は、すでに十分に証拠付け広く受け入れられている FAME が、極性疑問文に対する Kuroda の古典的分析を復活させることで、AD を認可する同一性制約としても援用できることを主張するものである。

3. 結語　本稿では、FQ に対する「はい/いいえ」のみの応答（$1D_3$）が許容されない現象に着目し、極性疑問文及び FQ の基底構造には、かつて Kuroda が初期変換生成文法の枠組みにおいて主張したような肯定文・否定文の選言等位構造が存在することを提案した。本稿で提案した AD は、極性疑問文の分析において必須の操作でありながら、今まであまり議論されてこなかったものである。本稿では特に、Kuroda による古典的統辞分析を復活させることで、すでに広く受け入れられている Merchant の FAME のもとで AD を自然な削除操作として導出することが可能になることを示した。

(5)



(7)



References

Holmberg, Anders. (2016) *The syntax of yes and no.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kuroda, Shige-Yuki. (1965) "Generative Grammatical Studies in The Japanese language," PhD dissertation. Massachusetts Institute of Technology.

Maeda, Masako. (2018) "Fragmentary Questions in Japanese," *JELS36*, 65-71.

Merchant, Jason. (2001) *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.

Sato, Yosuke and Masako Maeda. (2021) "Syntactic Head Movement in Japanese: Evidence from Verb-Echo Answers and Negative Scope Reversal," *Linguistic Inquiry* 52, 359-376.

国広哲弥. (2002) 「類義語・対義語の構造」『現代日本語講座第 4 巻 語彙』飛田良文・佐藤武義（編）152—171 明治書院, 東京.

永次健人. (2021)『日本語における疑問文断片の非明示的 WH 疑問解釈—削除分析への反論—』. 日本言語学会第 162 回大会. オンラインにて 2021 年 6 月 26 日開催.

益岡隆志, 田窪行則. (1992) 『基礎日本語文法』. くろしお出版. 東京.

村木新次郎. (2002) 「意味の体系」『朝倉日本語講座 4: 語彙・意味』. 齋藤倫明（編） 54—78 朝倉書店, 東京.

A-2

日本語における場所格交替の統語構造と主題階層

齋藤諒弥（神戸大学大学院）

1. はじめに 本論で扱う言語現象は、以下のような日本語の場所格交替である。

(1) a. ジョンはペンキを壁に塗った。 [material variant] b. ジョンは壁をペンキで塗った。 [locational variant]

(1a)を material variant(以下 MV)と呼び、(1b)を locational variant(以下 LV)と呼ぶ。

本論の目的は、場所格交替に関する先行研究である Kishimoto(2001)の問題点を指摘する一方で、岸本(2019)の分析を一部援用し、Kishimoto(2001)の問題点を克服した場所格交替の統語構造の提案を行うことである。さらに、この提案が Baker(1997)や Marantz(1993)の主題階層の分析に理論的貢献が可能であることを示す。

2. 先行研究 Kishimoto(2001)によると、MV に現れる動詞は、項構造に<(agent), locative, theme >を持つ。この項構造によると、場所名詞(「壁」)に付与される locative が材料名詞(「ペンキ」)に付与される theme よりも主題階層、つまり統語構造において高い。その証拠として、MV に現れる「塗り付ける」の名詞化の例(2)が提示されている。

(2) a. 壁のペンキの塗り付け b. *ペンキの壁の塗り付け (Kishimoto 2001: 72)

動詞の項構造と名詞化した際の項構造が一致していることを前提とすると(Kishimoto 2001: 74)、(2a)から場所名詞と材料名詞の両方が名詞化に現れるので、両者ともに項構造に含むことができる。また、(2b)から場所名詞が材料名詞の外側に現れなければならないため、主題階層において場所名詞の担う locative が材料名詞の担う theme よりも高い。

一方で、LV に現れる動詞は、項構造に<(agent), locative>を持ち、材料名詞(「ペンキ」)は付加詞であるとされている。そのため、材料名詞が locative を担う場所名詞(「壁」)よりも構造上、高いことが示されている。その証拠として、Kishimoto(2001)は LV に現れる「塗り潰す」が名詞化した(3)のデータを提示している。

(3) a. *ペンキの塗り潰し b. 壁の塗り潰し (Kishimoto 2001: 71-72)

(3)のように場所名詞のみが名詞化に現れるため、locative を担う場所名詞が LV の動詞の項構造に含まれる。また、(4)が示すように材料名詞と場所名詞の順序に拘らず、名詞化に材料名詞が現れないため、材料名詞は付加詞である。

(4) a. *壁のペンキの塗り潰し b. *ペンキの壁の塗り潰し (Kishimoto 2001: 72)

3. 先行研究の問題点 しかしながら、Kishimoto(2001)の分析には問題点が 4 つ挙げられる。1 つ目は、LV において材料名詞が付加詞として扱われているが、「材料名詞＋で」が項であることを示すデータがある。(5-6)が示しているように LV において「材料名詞＋で」が義務的に現れなければならない場所格交替を引き起こす動詞がある。

(5) a. ジョンはおかずをお皿に盛り付けた。 [MV] b. ジョンはお皿を*(おかずで)盛り付けた。 [LV]

(6) a. ジョンはきな粉を餅にまぶした。 [MV] b. ジョンは餅を*(きな粉で) まぶした。 [LV]

2 つ目は、LV で場所名詞が locative の意味役割を担うと主張されているが、affected theme(以下 AT)の意味役割を担うことを示すデータが挙げられる。岸本(2019)によると「たくさん」が修飾するものは、theme であり(学生が公園で花瓶をたくさん壊した)、(7)のように、場所名詞である「壁」と「お皿」は「たくさん」によって修飾可能である。

(7) a. ジョンは壁をペンキでたくさん塗った。[LV] b. ジョンはお皿をおかずでたくさん盛り付けた。[LV]

それゆえ、(7)の場所名詞は locative ではなく、theme である。また、Tenny(1987)によると「てある」構文の主語には、AT が現れる(花瓶が壊れてある/*花瓶が叩いてある)。このテストを LV に適用すると、以下の(8)において「壁」と「お皿」が「てある」構文の主語位置に現れるため、LV の場所名詞は、AT である。

(8) a. 壁がペンキで塗ってある。 b. お皿がおかずで盛り付けてある。

3 つ目は、Kishimoto(2001)では、LV において、「材料名詞＋で」が場所名詞よりも構造上高いとされているが、場所名詞の方が構造上高いことが以下からわかる。数量副詞「たくさん」が動詞句に付加し、構造的に「たくさん」の下位に位置する最初の項の数量を指定できるという岸本(2019)の分析を援用すると、 (7)で「たくさん」が「壁」と「お皿」の数量を指定できることから AT を担う場所名詞の方が材料名詞よりも構造上高いことがわかる。

4 つ目は、MV において locative が theme よりも主題階層、つまり統語構造において高いと主張されているが、先ほどの岸本(2019)の「たくさん」の分析と MV の「ペンキを壁にたくさん塗る」という文で「たくさん」が「ペンキ」の量を指定することから locative よりも theme の方が主題階層、つまり統語構造上、高いことがわかる。

4. 提案 以上から、Kishimoto(2001)の 4 つの問題点を克服した(9)のような提案ができる。

(9) a. MV: [$_{VP}$ 材料名詞 (AT) [$_{V'}$ [$_{PP}$ 場所名詞] $_{V}$]] b. LV: [$_{VP}$ 場所名詞 (AT) [$_{V'}$ [$_{PP}$ 材料名詞＋で] $_{V}$]]

(9a)では、AT を担う材料名詞が場所名詞よりも構造上高く、(9b)では、「材料名詞＋で」が動詞の補部位置に現れる項として扱われており、AT を担う場所名詞が材料名詞よりも高い。また、(9a, b)の両方で AT が spec-V に現れている。

さらに、Kishimoto(2001)の(4)のデータは、(10)のように instrument を導入するデ句が現れると適格になる。

(10) a. 壁のペンキでの塗りつぶし b. ペンキでの壁の塗りつぶし (Kishimoto 2001: 73-74)

(4)の非文法性は、instrument の意味役割を付与する要素がないことに求めることができる。そのため、「材料名詞＋で」が項であるとする提案は維持可能である。

5. 理論的貢献 Marantz(1993)や Baker(1997)は、英語やバンツー語の分析に基づき「spec-V に AT の意味役割が付与され、instrument と locative は AT よりも低い」という主題階層の分析を提案した。本研究の分析はこの提案に一致し、この仮説の妥当性を担保する一助になると言える。

参考文献

Baker, Mark. 1997. Thematic Roles and Syntactic Structures. In Haegeman, Liliane (ed.), *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 73-127. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Kishimoto, Hideki. 2001. Locative Alternation in Japanese: A case study in the Interaction Between Syntax and Lexical Semantics. *Journal of Japanese Linguistics* 17, 59-81.

岸本秀樹. 2019.「非対格仮説と数量副詞」.『日语偏误与日语教学研究』4, 3-27. 日语偏误与日语教学会.

Marantz, Alec. 1993. Implications of asymmetries in double object constructions. In S. Mchombo (ed.), *Theoretical aspects of Bantu grammar,* 113-150. Stanford: CSLI Publications.

Tenny, Carol. 1987. *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Ph.D. dissertation, MIT.

A-3

コピュラ命題補部からの数量詞上昇 ー「節境界性」の再考ー

木村 一馬　　橋本　龍弥

(筑波大学大学院 人文社会科学研究群)

1. はじめに: 本研究は, 自然言語に広く観察される数量詞上昇 (Quantifier Raising; 以下, QR) のうち, (1b) のような埋め込み節の全数量詞が節境界を越えて主節の量化詞よりも広いスコープを取る現象に焦点を当てる (Kennedy (1997), Fox (2000), Johnson (2000), Anderson (2004), Cecchetto (2004))。

(1) a. Someone said that {every man is married to Sue / Sue is married to every man}. (*every > some)

b. A different chef {tries to prepare every dish / decided to prepare every dish}. (every > some)

Anderson (2004) によれば, このタイプの QR は局所条件などの統語的な制約や数量詞のスコープに関する制約ではなく, 統語構造上の複雑性と処理負荷の関係によって説明される。これを踏まえ Wurmbrand (2018) は, (2) に示すような補部の統語構造とその埋め込み節からの QR の容認度の関係性は含意尺度的であると主張している。このように, QR の可否は「節境界性」の条件に従うものとして一般化されている。

(2) attitude / speech complement (CP) >> future complement (TP) >> tenseless complement >> simple predicate (vP)

(least acceptable) ← → (most acceptable)

CP を含む埋め込み節からの QR が最も容認されづらく, vP や埋め込みを持たない構造からの QR は許容されやすい。つまり, 複雑な節タイプになればなるほど主節に移動するまでのステップ数が増え, 処理的負荷がかかり, QR の容認度が低下する。

2. 経験的な問題点: Wurmbrand (2018) は, コピュラ命題補部の節境界を越える QR が及ぼす処理的負荷については不明であるとしている。実際, このタイプの QR が他の節タイプと比較してどの程度処理負荷がかかるのかについて検証した心理言語学的な研究は存在しない。(2)の一般化が正しいのであれば, コピュラ命題を持つ埋め込み節は, tenseless complement に分類されるはずである。ここで, den Dikken (2006)の提示する以下のデータを観察されたい。

(3) a. Someone considers every congressman a fool. (some > every / * every > some)

b. Someone considers every congressman to be a fool. (some > every / every > some)

den Dikken (2006) は, consider の埋め込み節に対して, それぞれ (3a)と(3b) に対応する (4a)と (4b)のような派生を仮定しており, 後者の方が, 埋め込み節からの移動操作が関与している点において, より複雑である (SC は, 小節を指す)。

(4) a. [*consider* [$_{SC}$ [every congressman] [a fool]]　　b. [*consider* [$_{SC}$ [every congressman]$_i$ [*to be* [a fool] t_i]]]

もし Wurmbrand の予測が正しいのであれば, (3a)と(3b)における全称数量詞 every の QR の可否は逆の結果となるだろう。なぜなら, (3a)は当該数量詞が節境界を越えるまでに踏まなければならない移動のステップ数が(3b)よりも少ないからである。この事実は, QR の可否が数量詞を含む節タイプ以外の要因に影響を受けることを示唆している。そこで本研究では, 2 つのリサーチクエスチョンを掲げる: (i) (3a) (3b) における QR の振る舞いの違いは文処理に反映されるのか, (ii) (3a), (3b)の違いは何に起因するか。これらの問いに答えるため, QR を伴う文の処理負荷を検証する心理言語学実験を, 英語母語話者 21 人を対象に実施し, その結果に基づき, QR における「節境界」に関して, 理論的な説明を与える。

3.実験: 実験は,自己読みペース課題を行った (実験の詳細は発表時に述べる)。実験に用いた刺激文は, consider, believe のようなコピュラ命題を補部に取る動詞を含む文である。本研究では, Orth and Yoshida (2022) に従い, QR を誘発すると考えられている動詞句削除文を用いる。着目するのは, それぞれの等位項における QR 領域の読み時間である。要因として QR が節境界を越えるかどうか ([+QR], [-QR]), 補部のタイプ ([+Inverse], [-Inverse], (3a) vs (3b)), 第 2 等位項に量化詞を含むかどうか ([+SC These], [-SC These]) に設定した。線形混合モデルによる解析の結果, 第一等位項では, (3b)のタイプが節境界を越える QR をした場合に QR 領域の読み時間が優位に伸びることが分かった (Inverse*QR: 推定値 [ms] = 8.63, t 値 = 0.626, $p < 0.045$)。また, 第二等位項では, (3a), (3b)の両方で, QR を伴った場合と(3b)が節境界を越える QR を伴い, かつ主語が量化詞を含まない場合に QR 領域の読み時間が優位に伸びることが分かった (QR: 推定値 [ms] = 7.575, t 値 = 2.147, $p < 0.032$; Inverse*QR*SC These: 推定値 [ms] = 6.103, t 値 = 1.73, $p < 0.084$)。いずれも, (3b)のタイプのみ補部節からの QR を許し, 処理負荷がかかることを示唆しており, (3)の観察と合致する。

4. 考察と結語: 上の実験結果を踏まえ, 本研究は(3a), (3b) タイプに対してそれぞれ以下のように (4)の統語構造を修正し, QR の適用範囲は (6)に従い, QR における「節境界」はこの制約が規定する θP に該当することを提案する。

(5) a. [*consider* [$_{TP=SC}$ [$_{QP}$ every congressman] [a fool]]　b. [*consider* [$_{FocP=SC}$ [$_{QP}$ every congressman]$_i$ [$_{TP}$ *to be* [a fool] t_i]]]

(6) Local Domain for Quantifier Raising (LD-QR): **局所的に主述関係を認可する統語位置[θP]からの QR はその範疇を超えて適用できない。**

(5a)は, SC の主語が主述関係を認可する TP(=θP) 節内に生起している一方で, (5b)では SC の主語は述部と非局所的な統語位置（FocP）に生起している。(6)に従えば, 前者の QP の QR は θP を超えるため適用できないが, θP 領域より外側に生起する後者の QP に QR を適用することは問題にならない。

この研究では, コピュラ命題を補部にとる文の節境界を越える QR に焦点を当て, 文処理実験を行った。その結果, 複雑な構造をもつ補部節からの QR のみが認められるということが明らかになった。これは, (6)のように QR における「節境界性」の新たな定義が必要であることを示唆するものである。また, 第二等位項に数量詞が含まれない場合の QR では読み時間が伸びないことは, 文処理の困難さと統語的操作の複雑性は必ずしも対応するわけではないことも示唆している。発表時にはここで扱った動詞以外の補部節からの QR に関する経験的証拠の提示, またはそれを踏まえた「節境界性」のより詳細な検証, 理論的考察 (e.g., (6)における「主述関係」および[θP]の理論的精緻化) を提示する。

参考文献

Anderson, Catharine (2004) *The structure and real-time comprehension of quantifier scope ambiguity*, Evanston, IL: Northwestern University dissertation.

Cecchetto, Carlo (2004) “Explaining the locality conditions of QR: Consequences for the theory of phases,” *Natural Language Semantics* 12(4): 345-397, DOI: https://doi.org/10.1007/ s11050-004-1189-x.

den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers*, Cambridge, MA, MIT Press.

Fox, Danny (2000) *Economy and semantic interpretation*, Cambridge, MA, MIT Press.

Hornstein, Nobert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Oxford/Cambridge, MA, Blackwell.

Johnson, Kyle (2000) “How far will quantifiers go?” in *Step by Step*, In Michaels, David, Roger Martin and Juan Uriagereka (eds), Cambridge, MIT Press, 187-210.

Kennedy, Cristopher (1997) “Antecedent-contained deletion and the syntax of quantification,” *Linguistic Inquiry* 28(4): 662-688.

May, Robert (1977) “The Grammar of Quantification,” Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, Massachusetts.

May, Robert (1985) *Logical Form*, Cambridge, MA, MIT Press.

Orth, Wesley and Yoshida, Masaya (2022) “Processing profile for quantifiers in verb phrase ellipsis: Evidence for grammatical economy,” *Proceedings of Linguistic Society of America* 7 (1): 5210, DOI: https://doi.org/10.3765/plsa.v7i1.5210.

R Core Team (2018) R: A language and environment for statistical computing, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, URL: https://www.R-project.org/.

Tanaka, Misako (2015a) “Asymmetries in long distance QR,” In Anna E. Jurgensen, Hannah Sande, Spencer Lamoureux, Kenny Baclawski, and Alison Zerbe (eds.), *Proceedings of the 41st Annual Meeting of the Barkley Linguistics Society*, Berkley Linguistics Society, University of California, Berkley, CA, 493-501.

Tanaka, Misako (2015b) “Scoping out of adjunct: Evidence for the parallelism between QR and wh-movement,” Doctoral dissertation, University College London, London.

Wurmbrand, Susanne (2018) “The cost of raising quantifiers,” *Glossa: A Journal of General Linguistics* 3 (1): 19. 1-40, DOI: https://doi.org/10.5334/gjgl.329.

Zehr, Jeremy and Schwarz, Florian (2018) PennController for Interet Based Experiments (IBEX), DOI: https://doi.org/10.17605/OSF.IO/MD832.

A-4

Ellipsis mismatches in Mandarin Chinese: A base-generated approach

Ting-Chi Wei
National Kaohsiung Normal University

Abundant ellipsis mismatches from morphological, syntactic, semantic, and pragmatic perspectives have been identified from databases based on natural languages recently (Anand, Hardt, and McCloskey 2021, etc.). Some measures have been taken to make sure that the size of deletion could be wider than that of identity by means of newly-defined identity domains such as objective content (Langacker 1974), eventive core (*v*P in the sense of Chomsky's (2001) phase theory) (Rudin 2019), and argument domain (Anand, Hardt, and McCloskey 2023). This paper argues that certain mismatches cannot be uniformly resolved by minimizing the size of identity to accommodate morphological and syntactic mismatches in terms of movement and deletion analysis in Mandarin Chinese. We propose that these mismatches are, in fact, a manifestation of base-generated simple clause analysis with respect to sluicing. The issues of ellipsis mismatch in Chinese have not been well-documented in the literature. This paper focuses on mismatches in sluicing, fragment and VPE, with special concerns about unique syntactic characteristics, such as passive-active mismatch, structural mismatches between NP and clause and between causative and inchoative, and mismatch involving copula BE and small clause (SC).

The "passive-active" mismatch in (1) shows that unlike English (2a), the long passive with passive verb *bei* (Huang 1999) taking an agent NP *ren* 'person' allows active sluice in (1a). In contrast, the short passive does not tolerate active sluice in (1b). The "active-passive" mismatch in (3a, b) prohibits *bei-wh*, similar to English (2b). Given Merchant's (2008, 2013) VoiceP mismatch and Rudin's (2019) structural non-identity within *v*P domain, (1b) and (3a, b) containing non-identical *v*Ps are excluded, but other things being equal, (1a) becomes a counterexample due to its exceptional acceptability.

(1) a. Lisi bei ren da-le, dan wo bu zhidao shi shei <~~_ da-le Lisi~~>.
Lisi PASS person beat-ASP but I not know be who beat-ASP Lisi
'(lit.) Lisi was beaten by someone, but I don't know who (beat Lisi).'

b. Lisi bei da-le, *dan wo bu zhidao shi shei <~~_ da-le Lisi~~>.
Lisi PASS beat-ASP but I not know be who beat-ASP Lisi
'(lit.) Lisi was beaten (by someone), but I don't know who (beat Lisi).'

(2) a. *Joe was murdered, but we don't know who <~~[$_{vP}$ murdered Joe]~~>.

b. *Someone murdered Joe, but we don't know by who <~~Joe [$_{vP}$ was murdered]~~>. (Merchant 2013)

(3) a. you ren sha-le Lisi, dan *wo bu zhidao (shi) bei shei ~~<Lsi _ sha-le>~~.
EX person kill-ASP Lisi but I not know be PASS who Lisi kill-ASP
'(lit.) Someone killed Lisi, but I don't know by whom.'

b. A: shei zhui-guo Mali? B: *bei Lisi <~~Mali __ zhui-guo~~>.
who chase-ASP Mary PASS Lisi Mary chase-ASP
'Who chased Mary?' '*By Lisi <~~Mary was chased~~>.

The structural mismatch between antecedent NP and sluice clause is acceptable in (4). Since there is only one NP, *che* 'car overlapping between the antecedent and the core domain of the elided part, the structure is predicted to be out, contrary to fact. Even so, another structural mismatch between causative and inchoative is excluded in (5), which elided clause contains the agent of an extra verb *da* 'hit', which lacks counterpart in the antecedent clause.

(4) you che sheng! Shi shei <~~kai che~~>? Zheme wan-le.
EX car sound be who drive car so late-ASP
'There is sound of car! Who (drives the car)? It's so late.'

(5) zhe-ge pingzi puo-le, *dan wo bu zhidao shi shei <~~__ da-puo-le zhe-ge pingzi~~>.
this-CL jug break-ASP but I not know be who hit-break-ASP this-CL jug
'*This jug broke, and I don't know who <~~broke the jug~~>.

The above discussions reveal that mismatches in Mandarin Chinese cannot be uniformly resolved by minimizing the size of identity. Meanwhile, this inference also applies to the category mismatch between N and V (Sato 2024). In (6), the N *drinker* is derived from the V *drink*, respecting identity condition between the zero-related N and V at the morphological level. Such identity of ellipsis has been identified in Chinese N-V mismatch, but the sentence is ineligible in (7).

(6) People say that Harry is an excessive drinker at social gatherings. Which is strange, because he never does [$_{VP}$ . . .] at my parties.

(7) you ren shuo Lisi shi yi-ge huajia; qiguai, *ta shuo ta conglai meiyou < ~~[$_{VP}$ hua-guo]~~>.
EX person say Lisi be one-CL painter strange he said he ever has.not paint-ASP
'(lit.) Someone said that Lisi is a painter. Which is strange. He said he never had.'

We propose that the simple clause analysis of sluicing, [*pro* +(copula) +*wh*-element], can capture the grammaticality of (1a) by *pro* construing with its NP antecedent in the case of long passive and the impossibility of (1b) and (5) due to the lack of overt NP antecedent in the short passive and in the inchoative, respectively. As to (3a, b), the event *pro* fails to reach an antecedent event or proposition involving passive components. The antecedent of the event *pro* in (4), driving car, is successfully yielded via background knowledge of the world. Finally, we take Anand, Hardt, and McCloskey's (2023) analysis of small antecedent in (8a) as a significant compromise of the movement and deletion analysis with the base-generated analysis in dealing with sprouting in sluicing. The *wh*-word *when* is predicated of the antecedent subject *recovery* in SC in (8b) and is raised out of the argument domain, SC, prior to TP ellipsis, respecting identity in (8c). We consider the BE and SC analysis to be close to the base-generated simple clause analysis, except for the costly moving and deleting in the computational process.

(8) a. The doctors anticipate [a full recovery] for me, but they really don't know when [~~that recovery MODAL BE~~].

b. [$_{TP}$ T be [$_{SC}$ that recovery [when]]]. c. [$_{PP}$ when] C [~~$_{TP}$ T be [$_{SC}$ that recovery *t*]~~].

References

Anand, P., D. Hardt, and J. McCloskey. 2021. *The Santa Cruz sluicing dataset. Language* 97: e68-e88.

Anand, P., D. Hardt, and J. McCloskey. 2023. The domain of formal matching in sluicing. *Linguistic Inquiry* 1-21.

Chomsky. N. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Huang, C.-T. James. 1999. Chinese passives in comparative perspective. *Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 29.4:423-509.

Langacker, R. 1974. Movement rules in functional perspective. *Language* 50: 630-664.

Merchant, J. 2008. Variable island repair under ellipsis. In *Topics in Ellipsis*, ed. by Kyle Johnson, 132-153. Cambridge: Cambridge University Press.

Merchant, J. 2013. Voice and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 44: 77-108.

Rudin, Deniz. 2023. Head-based syntactic identity in sluicing. *Linguistic Inquiry* 50.2: 253-283.

Sato, Yosuke. 2024. On the Directionality of Conversion: A New Perspective from Category Mismatch under VP-Ellipsis. Languages 9: 206.

A-5 Non-Initial Dependent Grafted Speech in Japanese and Modal Complement Ellipsis

Yosuke Sato (Tsuda University)

Sadanobu (2021:152–153) defines *Dependent Grafted Speech* (DGS) in Japanese as "utterances that lack independence at their starting points and thus involve a conspicuous dependence on the preceding context." DGS is illustrated in B's responses to A's question in (B1) and (B2).

(1) A: Asita ame-ka-na? B1: =to omou-kedo-na. B2: =da-naa.
tomorrow rain-Q-SFP QUO think-CONJP-SFP COP-SFP
'I wonder if it'll rain tomorrow.' 'I think so that it will rain tomorrow.' 'It is probable (that it'll rain tomorrow).'

This paper reports a previously undocumented type of DGS in colloquial Japanese, i.e., non-utterance-initial cases of DGSs, and argues that this pattern is best analyzed as an example of modal complement ellipsis. In (2B), the goal argument of *iku* 'to go' is interpreted as elided between the subject and modal/copular expressions. Although space limitations preclude inclusion of other relevant data, this type of DGS is found in all other argument and adjunct positions. Note that the subject of the DGS clause is not required to be marked with *mo*, as shown in (3B), where the subject is marked instead with the contrastive *ga*. The type of DGS at issue here exhibits major hallmarks of ellipsis – sloppy/quantificational/disjunctive interpretations (Oku 1998; Takahashi 2008; Sakamoto 2015) – as shown in (4–6), respectively. Furthermore, (7) allows the null adjunct reading (Oku 1998; Funakoshi 2016) that Taro should have been writing his term paper all the time. This is evidenced by the fact that the first clause of (7b) cannot be followed by the *but*-clause with the manner adverb *sokkoode* 'swiftly' included, which contradicts the manner adverb *zuutto* 'all the time' in the antecedent clause. The above results, then, collectively indicate that the derivation of DGS involves not argument ellipsis but ellipsis of a bigger constituent.

(2) A: Hanako-wa raisyuu Kyoto-ni iku-yo. B: Zyaa kitto Taroo-mo Δ {daroo-ne/kamo-ne/da-ne}
Hanako-TOP next.week Kyoto-to go-SFP then certainly Taro-also will-SFP/may-SFP/COP-SFP
'Hanako will go to Kyoto next week.' 'intended: Then, Taroo {will/may/should} go to Kyoto next week.'

(3) A: Hanako-wa eigo-ga nigate-mitai-da-yo. B: Iya, Taro-ga Δ da-tte.
Hanako-TOP English-NOM bad-seem-COP-SFP no Taroo-NOM COP-SFP
'It seems like Hanako is bad at English.' 'intended: No, Taro IS (bad at English).'

(4) A: Hanako-wa zibun-no dannasan-o yuusyokukai-ni tureteiku-mitai-da-yo. B: Zyaa, Megumi-mo Δ daroo-ne.
Hanako-TOP self-GEN husband-ACC dinner.party-to take-seem-COP-SFP then Megumi-also will-SFP
'Hanako will take her husband to the dinner party.' 'intended: Then, Megumi will, too.'

(5) [Context: Hanako and Taroo each supervise five MA students in syntax at their universities in Tokyo. A formal linguistic conference will be held nearby.]
A: Hanako-wa taiteino sidoogakusei-o issyoni tureteiku-soo-da-yo. B: Tabun-da-kedo, Taroo-mo Δ daroo-ne.
Hanako-TOP most supervisee-ACC together take-hear-COP-SFP maybe-COP-but Taro-also will-SFP
'I heard that Hanako will take most of her supervisees together with her.' 'intended: Maybe, Taro will, too.'

(6) [Context: Hanako and Taroo, both graduate students of semantics, just got accepted for the PhD program in linguistics at UMass, MIT and UConn. A and B are wondering which graduate school they would choose.]
A: Osoraku Hanako-wa Umass-ka MIT-o erabu-daroo-ne. B: Tabun, Taroo-mo Δ daroo-na.
probably Hanako-TOP Umass-or MIT-ACC choose-will-SFP maybe Taro-also will-SFP
'Probably, Hanako will choose UMass or MIT.' 'intended: Maybe, Taroo will, too.'

(7) [Context: Hanako and Taroo, both graduate students, have been working madly on their term papers due tomorrow]
A: Hanako-wa kinoo zuutto ronbun-o kaiteita-mitai-da-yo. 'I hear that Hanako has been writing her
Hanako-TOP yesterday all.the.time paper-ACC write-seem-COP-SFP term paper all the time without any break.'
B: Zyaa, Taroo-mo Δ daroo-ne. ?? Kare-wa sokkoode owaraseta-daroo-kedo-ne.
then Taro-also will-SFP he-TOP swiftly have.finished-will-though-SFP
'Then, Taro must have been writing his term paper all the time, though he will have finished it swiftly.'

I will propose that non-initial DGSs exemplify modal complement ellipsis, i.e., the ellipsis of the syntactic complement of a modal head, as found in languages such as French and Dutch (Aelbrecht 2010; Dagnac 2010), and are derived as depicted in (8). I assume that modal items such as *daroo* 'will' and *kamo* 'may' constitute an independent functional head Mod (Koizumi 1993; Kishimoto 2011a, b) and that *mo*-/*ga*-marked subjects move to [Spec, Foc] (Rizzi 1997).

(8) [$_{FocP}$ Taroo-mo$_i$ [$_{ModP}$ [$_{TP}$ t_i Kyoto-ni iku] Mod (daroo/kamo)]]

One may argue that the construction in question involves auxiliary-stranding VP-ellipsis (Goldberg 2005). This analysis is dismissed by the observation that the tense information from the antecedent clause is obligatorily included in the following DGS, as shown in (9). This observation, thus, shows that the ellipsis site is bigger than VP and at least as big as TP, with remnant expressions overtly moving out of it, as already indicated in (9).

(9) [Context: Hanako and Taroo are a couple, both young linguists, often working together on joint research projects]
A: Hanako-wa sensyuu gengogakkai-de Hokudai-ni itta-yo.
Hanako-TOP last.week linguistic.conference-for Hokkaido.University-to went-SFP
'Hanako went to Hokkaido University for a linguistic conference last week.'
B: Zyaa, Taroo-mo Δ daroo-ne. ?? Kare-wa raisyuu iku-rasii-kedo-ne.
then Taro-also will-SFP he-TOP next.week go-seem-though-SFP
'intended: Then, Taro will, too. It seems that he will go there next week.'

References [1] Aelbrecht, L. 2010. *The syntactic licensing of ellipsis*. Amsterdam: John Benjamins. [2] Dagnac, A. 2010. Modal ellipsis in French, Spanish and Italian: Evidence for a TP-deletion analysis. *Romance Linguistics 2008: Interactions in Romance*, 157-170, Amsterdam: John Benjamins. [3] Funakoshi, K. 2016. Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25: 113–142. [4] Goldberg, L. 2005. *Verb-stranding VP ellipsis: A cross-linguistic study*. Doctoral dissertation, McGill University. [5] Kishimoto, H. 2011a. Topicalization and coordination in Japanese. *Proceedings of the 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, 171–186. [6] Kishimoto, H. 2011b. Setu no syuuhen yooso – modaritii to daimoku. *Hatuwa to bun no modaritii: Taisyookenkyuu no siten kara*, 115–137. Tokyo: Hituzi. [7] Koizumi, M. 1993. Modal phrases and adjuncts. *Japanese Korean Linguistics, vol.2*, 409–428. [8] Oku, S. 1998. *A theory of selection and reconstruction in the minimalist perspective*. Doctoral dissertation, Uconn. [9] Rizzi, L. 1997. The fine structure of the left periphery. *Elements of Grammar: Handbook in generative syntax*, 281-337, Dordrecht: Kluwer. [10] Sadanobu, T. 2021. Is discourse made up of sentences? Focusing on dependent grafted speech in modern Standard Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 37:151–180. [11] Sakamoto, Y. 2015. Disjunction as a new diagnostic for (argument) ellipsis. *Proceedings of the 45th Annual Meeting of the North East Linguistic Society (NELS 45), vol. 3*, 15–28. [12] Takahashi, D. 2008. Quantificational null objects and argument ellipsis. *Linguistic Inquiry* 39:307–326.

B-1 An electroglottographic examination on the voicing contrast of Japanese stops

Wu Shaohan
Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University

Japanese is typically described as exhibiting a voicing contrast between homorganic stops (e.g., Nasukawa 2005). However, acoustic studies (e.g., Homma 1980, Kong et al. 2012) frequently measured positive VOT values for Japanese voiced stops. Meanwhile, Japanese voiceless stops often lack post-release aspiration, unlike aspirated stops in languages having an aspiration contrast such as Mandarin. This leads to significant overlap in VOT distributions between the voiced and voiceless stops, suggesting that VOT is probably not a reliable cue for distinguishing these two segmental categories.

Given the potential that the voiced/voiceless stop onsets may have different laryngeal coarticulatory effects on adjacent segments as they are distinguishable by native speakers, recent studies have focused on finding post-stop correlates (e.g., f_0: Takada 2011, Takada et al. 2016, Gao & Arai 2019, Byun 2021; voice quality such as H1-H2: Takada et al. 2016). However, consensus has not yet been reached. Although several studies have consistently measured lower f_0 values for vowels following the voiced stop onsets, this f_0 difference is unlikely to serve as an underlying contrast in Japanese. This is because Japanese, as a pitch-accent language, uses differences in pitch height as a crucial way to signal lexical contrasts. To date, little is known about how native Japanese speakers primarily articulate this distinction between the voiced and voiceless stops in terms of laryngeal control, particular in devoiced contexts.

Building on this background, the present study investigated the laryngeal coarticulatory effects of Japanese voiced and voiceless stops on subsequent vowels, using electroglottographic (EGG) data from 10 native speakers (5F and 5M) from the Tohoku region, where the highest devoicing rates of voiced stops had been reported (Takada 2011, Byun 2021). EGG signals provide direct measurements of glottal vibratory activity with high temporal resolution, making them more reliable than acoustic measures such as amplitude difference. Contact quotient (CQ), speed quotient (SQ), and f_0 values were measured for each participant. The results show that the voiced/voiceless distinction induces subtle but significant differences in the phonation of subsequent vowels, while the participants appearing to have varying strategies for realizing this distinction. Some speakers exhibit stiffer vocal folds and a more constricted glottis when articulating syllables with a voiced stop onset, while others demonstrate slacker, more separated vocal folds.

In conclusion, this study documented laryngeal articulatory differences between Japanese voiced and voiceless stops, even in frequent devoiced contexts. However, the lack of consistent articulatory strategies among native speakers suggests that further investigation is needed to reveal which cues are perceptually critical.

Reference

Byun, H. (2021). Acoustic characteristics for Japanese stops in word-initial position: VOT and post-stop fo. *Journal of the Phonetic Society of Japan*, 25: 41-63.

Gao, J., & T. Arai (2019). Plosive (de-)voicing and *f*0 perturbations in Tokyo Japanese: Positional variation, cue enhancement, and contrast recovery. *Journal of Phonetics*, 77: 100932.

Homma, Y. (1980). Voice onset time in Japanese stops. *Onsei Gakkai Kaiho*, 163: 7-9.

Kong, E., M. Beckman, & J. Edwards (2012). Voice onset time is necessary but not always sufficient to describe acquisition of voiced stops: The cases of Greek and Japanese. *Journal of Phonetics*, 40(6): 725-744.

Nasukawa, K. (2005). The representation of laryngeal-source contrasts in Japanese. In J. van de Weijer, K. Nanjo, & T. Nishihara (eds.), *Voicing in Japanese*, 71-87. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

Takada, M. (2011). *Nihongo no Goto Hesaon no Kenkyu: VOT no Kyojiteki Bunpu to Tsujiteki Henka* [*A Study of Word-initial Stops in Japanese: Synchronic Distribution and Diachronic Change*]. Tokyo: Kuroshio Publishers.

Takada, M., E. Kong, K. Yoneyama, & M. Beckman (2016). Do pitch and voice quality cue word-initial "voicing" in Tohoku Japanese? *The 24th Japanese and Korean Linguistics Conference*, NINJAL, Tokyo, Japan.

B-2

Sensitivity to number agreement in English as a foreign language by native speakers of Chinese, Japanese and Thai

Edson T. MIYAMOTO (Future University Hakodate) miyamoto@alum.mit .edu
Juan Pablo RODRIGUEZ GOMEZ (University of Tsukuba)
Teeranoot SIRIWITTAYAKORN (Chiang Mai University)
Chia-lin LEE (National Taiwan University)

The extent to which non-native speakers can achieve fluency in a second language (L2) remains a topic of contention. One view is that non-native speakers cannot process L2 features that are missing in their native language (L1; Hawkins and Chan, 1997; *inter alia*). A second view is that learners use their L1 as a starting point, modify their L1 knowledge toward L2, and although not guaranteed they may eventually achieve native-like fluency in L2 (Schwartz and Sprouse, 1996).

In number agreement in English, native speakers are sensitive to violations and slow down when reading them (e.g., * *The key to the cabinet were rusty*; Wagers et al., 2009). For learners of English as L2, early results suggested that sensitivity depends on the learners' L1: learners whose L1 has number agreement (e.g., Russian) are sensitive to number-agreement violations in L2, but learners whose L1 does not have number agreement (e.g., Chinese, Korean, Japanese) are not sensitive to violations in L2 (Jiang et al., 2011; *inter alia*). The results support the first view as long as speakers of languages such as Japanese never become sensitive to agreement violations. The results are compatible with the second view if Japanese speakers can attain sensitivity to violations even if they take longer to achieve it than speakers of languages such as Russian.

Some reports of sensitivity support the second view (e.g., in Korean natives; Lim & Christianson, 2015). The contradictory results are unlikely to be due to different methods across laboratories (e.g., measurement, number/ type of sentences) given that some researchers fail to replicate their own results (e.g., Experiments 1 and 2 in Minemi et al., 2024). One plausible factor in the variability is L2 proficiency: high proficiency readers display sensitivity, but low proficiency ones do not (as reported for Chinese natives; Wen et al., 2010).

We conducted self-paced reading experiments in person at college campuses in Japan, Taiwan and Thailand to test if L2 readers' sensitivity to violations is indeed modulated by proficiency. Data were collected from 154 English learners with L1 that lacks number agreement (64 Japanese, 50 Chinese, 40 Thai). We also replicated previous reports of a slowdown to violations in the items we used (e.g., * ***The chicken in the oven were completely burned*** vs ***The chickens***...) with 23 native English speakers. We report results that highlight the importance of proficiency measures and in support of the view that some learners can show sensitivity to number agreement violations in L2 English even if they have never been exposed to English for extended periods of time (e.g., none of the learners had spent more than a few weeks in an English-speaking country).

In the self-paced reading experiments, each participant read eight grammatical sentences and eight ungrammatical sentences distributed according to a Latin Square design, interspersed with 80 grammatical sentences to minimize the salience of the ungrammatical items (no learner reported noticing them). After the experiment, proficiency was measured using a c-test (Babaii & Shahri, 2010) comprised of five texts in which 100 words were missing the letters in their second half, which participants had 15 minutes to complete.

Log-transformed reading-time (see Nicklin & Plonsky, 2020) results for the best mixed-effect model for each region are reported. There was a 3-way interaction of agreement (grammatical, ungrammatical), proficiency and group (Japan/Thailand at the subject head *chicken*: p= .012; Japan/Taiwan at the verb *were*: p=.026), as sensitivity depended not only on proficiency level but also on whether learners were from Japan or from Taiwan/Thailand. In other words, even though all three languages lack number, they may set different starting points (e.g., SOV for Japanese, SVO for Chinese and Thai) that may affect how their native speakers attain proficiency in English, especially for number and number agreement.

At the verb (*were*), there was an agreement-by-proficiency interaction in the Japanese group as the violation-related slowdown increased along with the c-test score (β=.071, t=2.71, p=.007). In other words, Japanese readers' sensitivity to the grammaticality violation increased with proficiency. One word after the verb, an agreement by group interaction (Taiwan/Thailand; β=.09, t=2.21, p=.027) suggests that the Thais were more sensitive to the violation than the Taiwanese. Two words after the verb, the ungrammatical condition was marginally slower than the grammatical condition for the Chinese and Thai (p=.094), but *faster* for the Japanese (p=.031) as the slowdown at the plural noun(*chickens*) in the grammatical condition persisted.

The results support the view that L2 learners are not permanently bound to the grammatical knowledge of their L1, and can learn to process features absent in their L1. But characteristics of the L1 (or perhaps of the societies, the educational systems) may aid or hinder progression in the mastery of the L2.

References

- Babaii, E., & Shahri, S. (2010). Psychometric rivalry: The C-test and the close test interacting with test takers' characteristics. In R. Grotjahn (Ed.), *The C-Test: Contributions*.
- Hawkins, R., & Chan, C. Y.-h. (1997). The partial availability of Universal Grammar in second language acquisition: The "failed functional features hypothesis". *Second Language Research, 13*, 187-226.
- Jiang, N., Novokshanova, E., Masuda, K., & Wang, X. (2011). Morphological Congruency and the acquisition of L2 morphemes. *Language Learning, 61*(3), 940-967.
- Lim, J. H., & Christianson, K. (2015). Second language sensitivity to agreement errors: Evidence from eye movements during comprehension and translation. *Applied Psycholinguistics*, *36*, 1283–1315.
- Minemi, I., Kimura, T., Hirokawa, T., Tamura, Y., & Fukuta, J. (2024). *Immunity to agreement attraction in native and non-native language comprehension*. IEICE Technical Report, TL2024-15(2024-08). The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.
- Nicklin, C., & Plonsky, L. (2020). Outliers in L2 research in applied linguistics: a synthesis and data re-analysis. Annual Review of Applied Linguistics, *40*, 26 - 55.
- Schwartz, B. D., & Sprouse, R. A. (1996). L2 cognitive states and the Full Transfer / Full Access model. *Second Language Research, 12*, 40-72.
- Wagers, M. W., Lau, E. F., & Phillips, C. (2009). Agreement attraction in comprehension: Represetation and processes. *Journal of memory and language, 61*, 206-237.
- Wen, Z., Miyao, M., Takeda, A., Chu, W., & Schwartz, B. D. (2010). *Proficienc effects and distance effects in nonnative processing of English number agreement*. Paper presented at the Boston University Conference on Language Development, Boston, USA.

B-3　音声単語認知における音素とアクセントの不一致の解釈：反復プライミングによる検討

有賀照道（東京大学総合文化研究科）

人間は提示された音声から得られるさまざまな言語情報をもとに語を認知する。音声単語認知では，音素情報のみならずピッチアクセントのようなプロソディ情報も語アクセスに重要な役割を果たしている（e.g.，McQueen & Dilley, 2021）。一方，音素とアクセントは音声中に相互に独立して表れるものであり，片方の情報がもう片方の情報を補う（Culter & Otake, 1999）だけでなく，片方の情報がもう片方の情報に対して語彙的に食い違うことが可能である。単語音声のアクセント情報を入れ替えてアクセントが誤った発話を提示した場合，正しく語が認知される割合は低下する（Minematsu & Hirose, 1995）。しかし，アクセントの誤りと音素の誤りが交絡する場合にどのように語が認知されるかはあまり検討されていない。「たんす HLL」のようにアクセントの誤り（「たんす LHH」（箪笥）の誤り）と音素の誤り（「ダンス HLL」の誤り）の 2 通りの解釈が可能な語を提示した際，音素情報が音響的に曖昧である場合にはアクセント情報に従って語が解釈される（Ariga & Matsubara, 2023）。音素情報とアクセント情報双方に音響的曖昧性がない場合でも，アクセントの誤りと見た場合の意味的関連語（「家具」）よりも音素の誤りと見た場合の意味的関連語（「音楽」）に対して語彙性判断が速くなる効果が見られる（Ariga, 2024）。しかし，「たんす HLL」のように音素とアクセントに明らかな不一致が存在する語を無文脈下で提示した場合，それがアクセントの誤りである可能性と音素の誤りである可能性は本来等しく存在するはずである。本研究では，アクセントと音素の不一致を持つ音声に対する音声単語認知の時間軸上の処理過程を，異なる刺激間間隔（ISI）を用いた反復プライミング実験によって検討した。

実験には日本語東京方言母語話者 66 名（実験 1：32 名，実験 2：34 名）が参加した。「たんす LHH」「ダンス HLL」のようにアクセントと語頭子音の音素が対立する 3 モーラ語のペア 12 アイテムを用意し，表 1 のような実験条件を設定した。congruent 条件ではプライムの語が適切な音声で提示され，それに一致する語がターゲットとして提示された。prosodic 条件ではプライムの語のアクセント型を入れ替え，ターゲットの語に対してアクセントが誤った音声（「たんす HLL」）が提示された。segmental 条件ではアクセント型をそのままにして語頭の音素の有声性を入れ替え，音素が誤った音声（「だんす LHH」）が提示された。baseline 条件では統制群として，ターゲットに対して無関係な音声（「さばく」（砂漠））がプライムとして提示された。実験手法は感覚交差プライミングであり，注視点の提示の後にプライムを音声で提示し，プライムの音声の後でターゲットを画面に文字で提示し，ターゲットの提示語に対して語彙性判断を課した。このとき，プライムとターゲットの刺激間間隔（ISI）を，実験 1 では 0 ms，実験 2 では 750 ms に設定した。

実験 1，2 の条件ごとの語彙性判断課題の平均反応時間を図 1 に示した。線形混合効果モデル（LME）による分析の結果，実験 1 では，congruent 条件の反応時間が baseline 条件に比べて有意に短く（$p = .002$），反復プライミング効果が見られた。しかしながら，prosodic 条件は baseline 条件に比べて有意に反応時間が長く（$p = .033$），segmental 条件と baseline 条件の間に有意差は見られなかった（$p = .179$）。ISI = 0 ms での結果（実験 1）は，意味プライミングを用いた先行実験（Ariga, 2024）と一致し，音声の提示直後においてアクセントの誤りが音素の誤りに比べて語の認知を大きく阻害する要因であることを示唆する。一方，実験 2 では，congruent 条件と baseline 条件の間，prosodic 条件と baseline 条件の間に反応時間の有意差が見られなかった（それぞれ $p = .399$；$p = .241$）のに対し，segmental 条件が baseline 条件に比べて有意に反応時間が長くなった（$p < .001$）。このことから，提示から 750 ms が経過した場合，「たんす HLL」のような語はアクセントの誤りとみなす方が処理が容易であり，むしろ音素の誤りとして処理する方が認知に大きな阻害をもたらすことが示唆される。

実験の結果から，「たんす HLL」のようにアクセントの誤りと音素の誤りの 2 通りの解釈が存在する音声に対して，時間軸上の異なる点で 2 通りの解釈それぞれに基づいた単語認知を行っていることが考えられる。実験では音声が語単体で提示されたため，音素とアクセントの不一致を解消する文脈的な要因は存在しない。このとき，音声提示の直後（ISI = 0 ms）では音素情報よりもアクセント情報に基づいて語の解釈を行い，「たんす HLL」は「ダンス HLL」の誤りとみなされる。しかし，一定の時間が経過した時点（ISI = 750 ms）ではアクセント情報よりも音素情報に基づいた語の解釈を行い，「たんす HLL」は「たんす LHH」（箪笥）の誤りと見なされる。この結果は，音声単語認知において音素とアクセントという 2 つの音声情報に不一致が存在した場合に，それぞれに基づいた 2 通りの解釈の両方が試みられるが，どちらの情報をより信頼性の高い情報として優先的に処理に用いるかは時間軸上で異なる可能性を示唆するものである。

表 1　実験刺激の例

Prime Pattern	Prime	Target
congruent	たんす LHH	箪笥
prosodic	たんす HLL	
segmental	だんす LHH	
baseline	さばく LHH	

Prime は音声，Target は文字で提示された

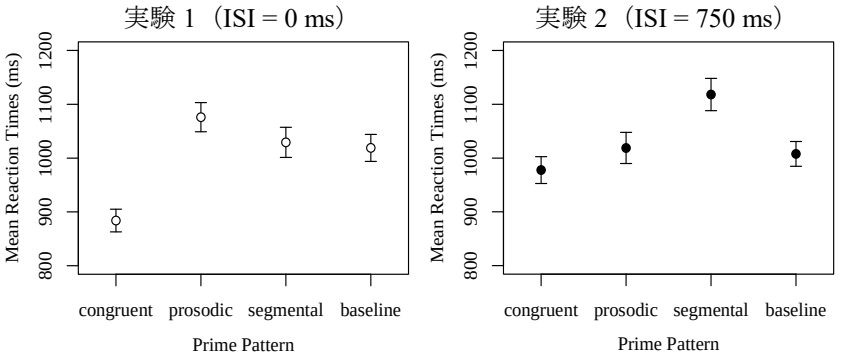


図 1　条件ごとの平均反応時間（ms）

参照文献

Ariga, T., & Matsubara, R. (2023). Top-down effects of lexical pitch accent on phonetic categorization in Japanese. In: R. Skarnitzl, & Jan Volín (Eds.), *Proceedings of the 20th International Congress of Phonetic Sciences* (pp. 210–214). Guarant International.

Ariga, T. (2024). Role of mispronunciation of pitch accent in lexical access in Japanese. In: Y. Chen, A. Chen, & A. Arvaniti (Eds.), *Proceedings of Speech Prosody 2024* (pp. 1145–1149).

Cutler, A., & Otake, T. (1999). Pitch accent in spoken-word recognition in Japanese. *The Journal of the Acoustical Society of America*, *105*(3), 1877–1888.

McQueen, J. M., & Dilley, L. C. (2021). Prosody and spoken-word recognition. In C. Gussenhoven & A. Chen (Eds.), *The Oxford handbook of language prosody* (pp. 509–521). Oxford University Press.

Minematsu, N., & Hirose, K. (1995). Role of prosodic features in the human process of perceiving spoken words and sentences in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of Japan (E)*, *16*(5), 311–320.

B-4

「が」・「の」主語嗜好性：穴埋め式テストによる実験

宮﨑 順大（岐阜大学/miyazaki.jundai.d4@s.gifu-u.ac.jp）

1.はじめに: Miyazaki and Maki (2024)（以下、「初期研究」）では、関係節内における「が」主語および「の」主語の選択の偏り（以下、「が」・「の」嗜好性）が存在しないことが示唆された。しかし、これらの予測が、初期研究のため、調査に用いた問題数が少なかったことに起因する可能性があり、その検証が必要である。そこで、本研究では、(1)の二つの研究課題を設定し、それに取り組む。

(1) 研究課題:

a. 「が」「の」嗜好者は本当に存在しないか。　　b. 述語の品詞ごとに傾向の差は認められるか。

2.背景:

南部 (2008) 国会議事録 (MJD)を用いた研究で、現在に近づくにつれ、「の」の生起率が低下してきたことを示した。また、参院衆院または委員会と本会議など、その発話時の状況が「が」および「の」の生起率に影響を与えないことを示した。

南部 (2014) MJD および日本語話し言葉コーパス (CSJ)を用いた定量観察を行い、「が」・「の」交替には言語変化が存在し、一方今日「が」と「の」の使用は、すでに安定に向かっているとした。その中で「改まり度」が「の」生起率に影響を与えないことも示した。

Maki and Morishima (2004) 2003 年に、その時点で学部学生であった日本語母語話者を対象に、主格・属格交替の統計的分析を行い、その年齢層において、「の」の生起率が、低い状態であったことを示した。

Miyazaki and Maki (2024) 愛知大学にて行った嗜好性の調査にて、「が」・「の」嗜好性を持つ話者は統計的有意に少なく、今日でも「が」・「の」の交替が自由に行われることを許容する母語話者が多数であることが示唆された。（初期研究）

3.データ: 初期研究より示唆されたことを再確認するために、問題数を初期研究の 10 問から 88 問へと拡充し、更なる調査を行った。調査方法はターゲットとする格助詞部分を空欄とした上で、「が」「の」「を」のいずれかを穴埋めさせる方式を採用した。調査対象は、岐阜大学に在学する、10 代から 20 代にかけての若年層日本語母語話者の学部学生 38 名である。平均年齢は、18.18 歳である。なお、作問に当たって述語の品詞による嗜好性の変化を検証するため、述語が他動詞、非対格動詞、自動詞、い形容詞、な形容詞である 5 種類の文を作成した。

(2) 問題文（部分）　　※内訳は単文 40 問、関係節 40 問（各品詞 8 問ずつ）、ダミー文 8 問である。

a. 太郎(　)飲んだお茶は、このお茶だ。（他動詞・関係節）
b. 良男(　)パンを食べた（他動詞・単文）
c. 授業(　)終わった時間は、この時間だ。（非対格動詞・関係節）
d. 規則(　)変わった。（非対格動詞・単文）
e. 春子(　)泣いた日は、その日だ。（自動詞・関係節）
f. 花子(　)走った。（自動詞・単文）
g. サッカー(　)強い高校は、この高校だ。（い形容詞・関係節）
h. この国は、物価(　)高い。（い形容詞・単文）
i. 農学部(　)有名な大学は、あの大学だ。（な形容詞・関係節）
j. この映画は、音楽(　)すてきだ。（な形容詞・単文）
k. 夏子が牛乳(　)飲んだ。（を・ダミー文）
l. 夏子が小屋(　)買った。（を・ダミー文）

この調査では、関係節 40 問のうち、いずれかを 27 問以上選択した場合に選択した方への統計的有意に嗜好性が認められる。（27 問の場合 $z \fallingdotseq 2.21 > 1.96$、以下すべて有意水準 $\alpha = .05$ である）調査の結果、回答が有効と認められた 33 人のうち嗜好性のない者はわずか 4 名であり、嗜好性を有する者と有さない者を 1:1 とした場合の母比率検定から、統計的有意に嗜好性を持つものが多数であった。（$z \fallingdotseq 4.35 > 1.96$）また、嗜好性のある者 29 名のうち、「が」嗜好者は 27 名で、「が」嗜好者と「の」嗜好者を 1:1 とした場合の母比率検定から、統計的有意に「が」嗜好者が多数であった。（$z \fallingdotseq 4.64 > 1.96$）なお、全体に対する割合としても、「が」嗜好性を持つ者は持たない者（「の」嗜好者を含む）を 1:1 とした場合の母比率検定から、統計的有意に多数であることがわかった。（$z \fallingdotseq 3.66 > 1.96$）

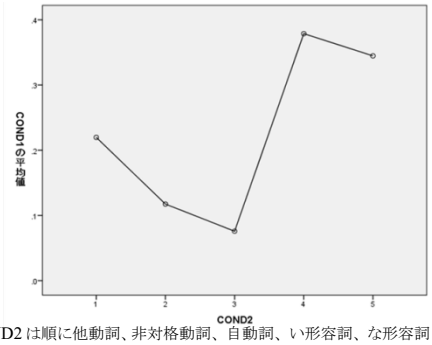
次に、述語の品詞別の分析を行った。以下では先述の 5 つの品詞別の「の」主語の生起率に着目した。まず、一元配置分散分析により、品詞が「の」主語生起率に有意な影響を与えることが示された。（$F(4, 1315) = 29.208$, $p < .01$）次に、いずれの品詞間での差があるかの検証を行った。(3)a.はその記述統計の表であり、(3)b.は各品詞別の「の」生起率の分布を示したものである。

(3) a.

記述統計

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区 下限	上限	最小値	最大値
1	他動詞	264	0.22	0.415	0.026	0.17	0.27	0	1
2	非対格	264	0.12	0.323	0.020	0.08	0.16	0	1
3	自動詞	264	0.08	0.265	0.016	0.04	0.11	0	1
4	「い」形容詞	264	0.38	0.486	0.030	0.32	0.44	0	1
5	「な」形容詞	264	0.34	0.476	0.029	0.29	0.40	0	1
合計		1320	0.23	0.419	0.012	0.20	0.25	0	1

b.



※COND2 は順に他動詞、非対格動詞、自動詞、い形容詞、な形容詞

多重分散分析の結果、他動詞とそのほかの品詞、また形容詞（「い」「な」両方)と動詞（3 種類）の間に有意な差が認められた。他動詞と形容詞について、統計的有意に自動詞、非対格動詞との「の」生起率に関する差が認められた。

4.議論:

「が」・「の」嗜好性の存在　初期研究では、「が」・「の」嗜好性は観察されなかった。しかし、問題数を拡充した結果、2024 年 5 月現在で、10 代から 20 代にかけての若年層日本語母語話者は、その多数が「が」嗜好性を持つ者であることが統計的に明らかとなった。また。これは、先行研究および初期研究で行った文学作品の調査で見られた明治時代から現代にかけての、「が」・「の」交替における言語変化が、個人の嗜好性の変化によるものであるという可能性を示唆している。

品詞による傾向差の存在　品詞別の分析の結果、非対格動詞・自動詞に対して、他動詞および形容詞では統計的有意に「の」主語生起率が上昇することがわかった。このことは、(4)に示される Miyagawa (2011)によって議論された Kim (2009)による調査の結果

(4) 述語が形容詞の場合には、「の」主語は、「が」主語より高い割合で用いられる。

形容詞：91%＞非対格動詞：56%＞他動詞／能格動詞：17% (Miyagawa (2011: 1277))

に対し、次の示唆を与える。

(5) a. 本調査結果は、述語が形容詞の場合に関して、Kim (2009)の調査結果を支持する。

b. 本調査結果は、述語が他動詞の場合に関して、Kim (2009)の調査結果と異なる。

このことは、今後、(4)と(5b)の対照的な結果に対して、さらなる調査が必要であることを示している。

▲

参考文献:

金銀珠 (2009)「現代語の連体修飾節における助詞「の」」,『日本語科学』巻 25, 23-42, 国書刊行会,東京.

Maki, Hideki and Tamami Morishima (2004) "A Statistical Analysis of the Nominative/Genitive Alternation in Japanese: A Preliminary Study," *Bulletin of the Faculty of Regional Studies, Gifu University* 14, 87–119.

Miyagawa, Shigeru (2011) "Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase," *Lingua* 121, 1265–1282.

宮﨑順大・牧秀樹 (2024)「個人および生成 AI の「が」「の」主語嗜好性」, 第 168 回日本言語学会大会要旨集 298-304.

南部智史 (2014)『コーパス言語学および実験言語学に基づく格助詞交替の分析』, 博士論文, 大阪大学.

南部智史 (2008)「「が/の」交換における個人内変化の研究」, 松田謙次郎（編)『国会会議録を使った日本語研究』, 135–157, ひつじ書房, 東京.

B-5　四字漢語の階層構造の構築に関わる脳活動：定常状態誘発磁場による検討

野田晏伎[1]・山田絵美[2]・太田真理 (ohta@lit.kyushu-u.ac.jp)[2]
[1]九州大学・大学院人文科学府・言語学講座　[2]九州大学・大学院人文科学研究院・言語学講座

日本語には、4 つの漢字で構成される語（四字漢語）があり、それらは多様な内部構造を持つが（野村 1975）、四字漢語の階層構造の違いがどのような脳活動の違いを生じさせるのかは明らかでなかった。近年、一定の間隔で刺激を提示した際に生じる周期的な脳活動である定常状態誘発磁場（steady-state evoked field, SSEF）を用いることで、文や句の内部構造を反映した脳活動が検出できることが報告されている（Sheng et al. 2019）。本研究の目的は、SSEF を用いて、四字漢語の階層構造の構築に関わる脳活動を解明することである。

実験には、26 名の右利き日本語母語話者（男性 13 名、21.8±1.6 歳）が参加した。刺激には以下の 3 条件の四字漢語と、ランダムな漢字列を使用した（各 57 個）。①2 つの二字漢語を複合させた二股枝分かれ構造（例：音楽鑑賞）、②二字漢語に接頭辞と接尾辞が付いた埋め込み構造（例：未回答者）、③二字漢語に 2 つの接尾辞が付いた左枝分かれ構造（例：大学院生）、④漢語を構成しないランダムな漢字列（例：路料有道）。これらに加え、平仮名 4 文字からなる逸脱刺激も使用した。実験では凝視点を約 1000 ms 提示した後に、12 個の四字漢語（各漢字 250 ms 間提示、四字漢語あたり 1000 ms、1 試行 12000 ms）を連続して提示し、最後に質問（逸脱刺激が含まれていたか）と選択肢を参加者が回答するまで提示した。1 秒間に 4 文字の漢字を視覚提示したため、漢字の提示を反映した SSEF は 4.0 Hz、二字漢語を反映した SSEF は 2.0 Hz、四字漢語を反映した SSEF は 1.0 Hz となることが予想される。脳磁図は、306-channel whole-head MEG system (Neuromag, Elekta Ltd., Helsinki, Finland) で計測した（サンプリング周波数：1000 Hz、オンラインフィルター：0.03-330 Hz）。データ解析には解析ソフトウェア MNE-Python を使用した (Gramfort et al. 2013)。正答率は全参加者で 9 割を超えたため、全員を解析対象とした。筋電や瞬き、外部ノイズを独立成分分析で除き、高速フーリエ変換を用いた周波数解析を行った。空間的並べ替え検定で左半球部に位置するマグネトメーターのデータを対象に、四字漢語条件とランダム条件を比較した。有意差が見られたクラスターに含まれたセンサーの信号対ノイズ比（SNR）を参加者ごとに平均し、Tukey 検定による条件間比較を行った。

並び替え検定の結果、1.0 Hz や 4.0 Hz では条件間で有意差が見られず、2.0 Hz でのみ有意なクラスターが見られた（補正済み $p = .013$）（図 1A）。有意なクラスターに含まれたセンサーは、左側頭後頭（トポマップの黒点）に位置しており、これは、文字処理に関わる左紡錘状回に近接したセンサーであった。Tukey 検定の結果、二股枝分かれ構造とランダムのそれぞれが埋め込み構造、左枝分かれ構造に比べて有意に高い SNR を示した（補正済み $p \leq .041$）（図 1B）。

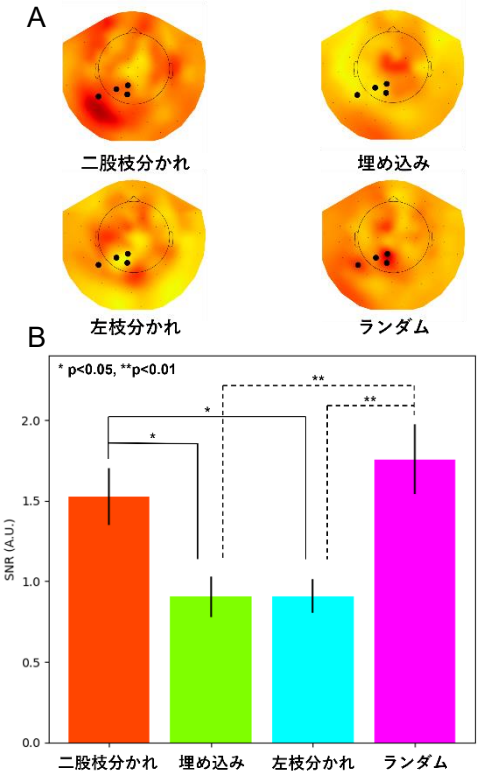


図 1 トポマップ（2.0Hz、SNR）（A）
2.0Hz の SNR（エラーバーは標準誤差）（B）

二股枝分かれ構造では、一貫して二字漢語を構成し続ける必要があるため、そうでない埋め込み構造や左枝分かれ構造に比べて顕著な 2.0 Hz の SSEF が生じたことを反映していると考えられる。また、ランダム条件が埋め込み構造や左枝分かれ構造より大きな SNR を示したことから、ランダムな漢字列に対して、四字漢語の内部構造で最も頻度が高い二股枝分かれ構造を無意識に作ろうとした可能性も示唆される。また、本研究では全ての条件で 4.0 Hz で漢字を提示したため、漢字の提示を反映した 4.0 Hz の SSEF には条件間で差がなかったと考えられる。さらに、ランダム条件を除く条件では四字漢語を提示したため、四字漢語の構築を反映した 1.0Hz の SSEF にも条件間で有意差は生じなかったと考えられる。以上の結果は、SSEF によって四字漢語の階層構造の違いを反映した脳活動が検出できることを示しており、言語の階層構造を構築する脳のメカニズムの解明に貢献するものと言える。

参照文献

Gramfort, Alexandre, Martin Luessi, Eric Larson, Denis A. Engemann, Daniel Strohmeier, Christian Brodbeck, Roman Goj, Mainak Jas, Teon Brooks, Lauri Parkkonen, and Matti S. Hämäläinen (2013) MEG and EEG data analysis with MNE-Python. *Frontiers in Neuroscience*, 7(267): 1–13.

Sheng, Jingwei, Li Zheng, Bingjiang Lyu, Zhehang Cen, Lang Qin, Li Hai Tan, Ming -Xiong Huang, Nai Ding, and Jia-Hong Gao (2019) The cortical maps of hierarchical linguistic structures during speech perception. *Cerebral Cortex* 29: 3232–3240.

野村雅昭 (1975) 「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究』7: 36–80.

C-1 琉球祖語の狭母音及び中段母音の 15 世紀沖縄語における反映について

尹 熙洙（総合研究大学院大学 先端学術院 博士後期課程）

沖縄語の音韻史を研究するにあたって、15 世紀の沖縄語を記している『語音翻訳』（1501 年）『琉球館訳語』（1469～1470 年頃）といった朝鮮・中国資料は極めて重要であり、様々な先行研究が行われてきた [3][4][2]。しかし、これらの転写資料は、それぞれ中期朝鮮語・明代官話の音素目録や音素配列的な制約の影響下に成立しているため、朝鮮・中国資料だけで 15 世紀沖縄語の音韻論の全貌を把握することはできない。本研究では、琉球祖語の狭母音及び中段母音の 15 世紀沖縄語における反映に注目し、転写資料の限界を宮古語の言語資料で補うことによって、15 世紀沖縄語のより精密な再建を試みる。

1. 宮古語と 15 世紀沖縄語

宮古語は、南琉球語群に属し、同じ日琉語族琉球語派でも北琉球語群に属する沖縄語とは系統的に離れている言語である。しかし、[5] は、宮古語に沖縄語からの古い借用語が多数存在すること、そしてそれらの借用語に対して再建される祖形（宮古祖語）が『語音翻訳』の沖縄語に非常に近いことを指摘している。したがって、沖縄語から宮古語への古い借用語に対する宮古祖語の再建形を 15 世紀沖縄語の音声を表す資料として利用することができる。

2. 中段母音 *e, *o の上昇（狭母音化）

宮古語には、日琉語族に属するほかの諸言語との対応から琉球祖語の中段母音が予測される語末音（例えば琉球祖語 *ko, *me > 宮古語 /ku/, /mi/）が、琉球祖語の狭母音に対応する反映（例えば琉球祖語 *ku, *mi > 宮古語 /ɸ/, /ṃ/ のような、摩擦化・母音脱落など）を示す語が少数ながら存在する。例えば、「肛門」の宮古語 /tsibiruṃ/~/tsibinuṃ/ < *tse^{m}benomi は、語源（琉球祖語 *tsu^{m}be=no me ‘お尻=GEN 穴’）からして最後の音節が *me (> /mi/) であることが予測されるが、実際は *mi (> /ṃ/) が現れる。同様に、「いとこ」の宮古語 /itsuɸ/ < *itsoku は、*t ではなく *ts を持つことから現代沖縄語 /ʔitɕuku/ の古形の借用と思われるが、借用元の形は *ʔitɕoku でなければならない（*itoko > *ʔitɕoko の語末母音上昇形）。このような現象は、15 世紀沖縄語において語末の中段母音だけが上昇（狭母音化）していたという仮説を支持する。

朝鮮・中国資料における中段母音の表記は揺れが激しく、分析が難しいが、上記の仮説をもとに検討すると、その仮説を支持するような項目が観察される。例えば、「女」の宮古語 /miduṃ/ < *me^{n}domu は、『琉球館訳語』に記されている「妻」の沖縄語「眠多木 /mjen.tɔ.mu/」に対応する（*me-^{n}domo ‘女性-仲間’ の語末母音上昇形; 明代官話の発音は [1] による）。琉球祖語において二つ以上の中段母音を持つ名詞は、『語音翻訳』には語末の中段母音だけが上昇した形が載っている（*stwo.muy.ti* /sto.mij.ti/ = *sɯtometi < 琉球祖語 *sutomete ‘朝’; *mwo.si.lwu* /mo.si.ru/ = *mosiru < 琉球祖語 *mosiro ‘筵’）。

3. 琉球祖語 *tsu, *^{n}dzu, *su における *u の反映

先行研究では、琉球祖語 *tsu, *^{n}dzu, *su の *u が 15 世紀沖縄語では別の母音に変化していたとし、その母音を *ʉ [3], *ɯ [4], *ɨ [2] のように再建している。当該母音については、『語音翻訳』では *o* /ʌ/~*wo* /o/~*wu* /u/、『琉球館訳語』では /ɿ/~/ʅ/~/u/ のような表記の揺れが観察され、その発音の再建が難しい。

宮古語において、語頭に /tsV/ (V は中舌母音以外の短母音) を持つ語は、琉球祖語からの継承語としては説明できないため、散発的変化の結果、または借用語と考える必要がある。上述の「肛門」や、「作る」を意味する /tsukur-/ < *tsokur- がその類であるが、後者の場合は、琉球祖語 *tsukur- から予測されるように変化せず、円唇性が保たれている点においては現代沖縄語と共通している。これは、15 世紀沖縄語において円唇の異音 *[ʉ] (次の音節の母音が円唇の場合) と非円唇の異音 *[ɨ] (次の音節の母音が非円唇の場合) を想定し、前者は *o (> /u/)、後者は *e (> /i/) として宮古語に借用されたとすることで説明できる。また、名詞化の /-su/ の変則的な対応（沖縄語 /-si/ < 琉球祖語 *-su からは宮古語 /-ṣ/ が予測される）も同様に説明できるが、この場合、語末における実現が円唇の *[ʉ] になるため、*ɨ ではなく *ʉ を再建することになる。『語音翻訳』で二重母音を除いて *ʉ が円唇母音で書かれたのは 2 例のみであるが、その 2 例は語末の *ka.nan.zwu* /ka.nan.zu/ = *kara^{n}dzʉ ‘髪の毛’ と円唇母音の前の音節の *cwo.nwu* /tso.nu/ = *tsʉru ‘弦’ で、上述の環境と一致する。『語音翻訳』では、*Cur > *CC(^{w}) の *u においても同様の現象が見られ（「油」「濁り」）、今後更なる研究を要する。

4. 結論

以上の議論により、琉球祖語 *e, *o, *u / {ts, ^{n}dz, s}_ の 15 世紀沖縄語における反映は、それぞれ *e (語末以外)~*i (語末)、*o (語末以外)~*u (語末)、*ʉ となる。そのうち *ʉ は、宮古語データによって区別される二つの異音 [ʉ]~[ɨ] を持つ。

参照文献

[1] Coblin, W. South (2000) A diachronic study of Míng Guānhuà phonology. *Monumenta Serica* 48: 267–335.

[2] Lin, Chihkai (2015) *A reconstruction of Old Okinawan: A corpus-based approach*. University of Hawai‘i at Mānoa.

[3] 多和田 眞一郎（1997）『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』東京：武蔵野書院.

[4] 多和田 眞一郎（2010）『沖縄語音韻の歴史的研究』広島：渓水社.

[5] 尹 熙洙（2023）「宮古語諸方言における前舌的な母音対応とその通時的由来」『日本言語学会第 167 回大会 予稿集』60–66. 京都：日本言語学会.

C-2

鹿児島県大隅半島内之浦方言における与格と方向格

髙城隆一（九州大学）

本発表では、鹿児島県肝属郡肝付町内の旧内之浦町中心部の伝統方言（以下、内之浦方言）における与格 /=ni/ と方向格 /=see/, /=sae/ の交替現象（ただし方向格の /=see/ と /=sae/ は自由交替である）を記述し、これを、日琉諸語全般における与格と方向格の交替現象（Differential Goal Marking, Kittilä 2008）の方言変異の問題に位置付けて論じる。DGM は九州方言に限らずさまざまな方言で報告されているが（小林 1996、神部 1984、下地 2016、松岡 2024 など多数）、本研究では内之浦方言に関する記述をこの DGM の研究史に位置付け、その方言変異の類型化が可能であることを示す。

内之浦方言では、多くの日琉諸方言と同様、「着点」に類する意味役割の場合に DGM が見られる（1）。さらに、内之浦方言では（2）に示すように、他の九州方言にない広範な意味役割で DGM が見られる。（2）は受動文の動作主であり、他の方言（例えば福岡県柳川市方言について松岡 2024、宮古語伊良部島方言について下地 2016）では方向格が使いにくい意味役割の 1 つである。

（1） sattɕanna　gakko{ni/ see}　ittado
sattjan=na　gakkoo{=ni/ =see}　ik-ta=do
さっちゃん=TOP　学校{=DAT/ =ALL}　行く-PST=SFP
さっちゃんは学校に行ったよ。

（2） sattɕanna　sense:{ni/ kaj/ sae}　tatakareta
sattjan=na　sensee{=ni/ =kaj/ =sae}　tatak-are-ta
さっちゃん=TOP　先生{=DAT/ =ABL/ =ALL}　叩く-PASS-PST
さっちゃんは先生に叩かれた。

本発表では宮古語伊良部島方言における DGM の研究である下地（2016）の記述枠組み（表 1）と例文セットを使用し、内之浦方言の DGM の体系が表 1 に示す張り合い関係になっていることを明らかにする。D は与格が、A は方向格が使用可能であることを示す。表にあるように、同じ枠組みで調査している福岡県柳川市方言のデータ（松岡 2024）、宮古語伊良部島方言のデータ（下地 2016）と比較すると、内之浦方言の方向格の使用領域は最も広い。さらに、下地の枠組みを DGM における階層として捉え直すことで、「表の左から与格の領域が伸び、右から方向格の領域が伸びるが、その伸び具合は方言によって異なる」と一般化できる。

表 1. DGM と方言変異（下地 2016 の枠組みを使って筆者が階層化）

	場所	時間	所有者	主体	受け身動作手	被使役者	授与の対象	変化結果	方向
柳川	D	D	D	D	D	D	D	D	D/A
伊良部	D	D	D	D	D	D/A	D/A	D/A	A
内之浦	D	D	D	D	D/A	D/A	D/A	D/A	D/A

本発表の結論においては、同じ枠組みで現在調査が進行中の他の方言データ（宮崎県都城市方言など）に関しても概ねこの階層による一般化が成立すること、そして上記の要素の並び順については再検討の余地が残されていることも指摘する。

略号一覧　ABL: 奪格　ALL: 方向格　DAT: 与格　PASS: 受動　PST: 過去　SFP: 終助詞　TOP: 主題

参照文献

神部宏泰(1984) 「九州方言における方向表現法—「～さまに」の用法を中心に—」『方言研究年報』26: 61–80.

Kittilä, Seppo (2008) Animacy effects on differential Goal marking. *Linguistic Typology* 12(2): 245–268.

小林隆（1996）「九州方言における方向を表す「サ」の類の用法と歴史」言語学林 1995-1996 編集委員会（編）『言語学林 1995-1996』879–892.

下地理則（2016）「南琉球宮古伊良部長浜方言の方向格=nkai と与格=n」『琉球諸語記述文法』2: 61–85.

松岡葵（2024）『福岡県柳川市方言の記述研究』博士論文，九州大学.

C-3

北琉球奄美喜界島方言における指示詞由来形式を含む一人称除外形の通時的発達について
—双数形を中心に—

白田理人（広島大学）shiratarihito@gmail.com

喜界島方言は，1 人称代名詞複数形に除外／包括の区別を持つ方言として知られており，複数除外形は wannaa，複数包括形は waacja（方言によっては waakja）などの形をとる（cf. 岩倉 1941）。発表者のこれまでの調査・研究によれば，複数形に加え，双数形にも除外・包括の区別がある（白田 2014, 2016）。包括形は watta(r)i という形式であり，下地（2023）が「属格数詞構造体」と呼ぶ，一人称属格形+二人（すなわち「私の二人」）にあたる*waga putari に遡るものと考えられる。一方，除外形は，複数除外形 wannaa と「二人」を表す数詞 (t)ta(r)i の複合形である wannatta(r)i という形式を用いる方言（島内南部の上嘉鉄方言など，例(1)参照）と，遠称指示詞 ari と双数除外形 wattai の複合語に（一見）見える ariwattai という形式を用いる方言（島内北部の小野津方言など，cf. 例(2)）がある。

このうち，ariwattai には，形式と意味の対応において，以下のような不可解な点がある。

① ariwattai は，ari+wattai と考えると 3 名を指示しそうであるが，実際に指示するのは 2 名である。
② wattai が包括形であるのに対し，ariwattai は除外形である。
③ ariwattai には，人を指す名詞と複合する用法がある（cf. 例(3)）。その場合，全体で 3 名を指示しそうであるが，実際に指示するのは，当該の名詞が指す人物と話し手の 2 名である。

本発表では，このような不可解な点を持つ，指示詞由来形を含む一人称除外形の通時的な発達過程について，双数形 ariwattai を中心に，方言間の比較や，同方言内の別の現象との対照を通じて考察する。

主な主張は以下の通りである。

(i) 喜界島小野津方言の ariwattai は，奄美大島湯湾方言において報告されている，「X（人を指す名詞）と私の二人」に相当する構造（cf. Niinaga 2014, 例(4)）に遡る。このような構造から，共格助詞の脱落と，先行する名詞の遠称指示詞 ari への固定化を経たものと考えられる。

(ii) 喜界島方言のうち，遠称指示詞由来形式を含む除外双数形への固定化が進んでいない上嘉鉄方言では，人を指す名詞 X と wattari の複合形が見られ，「X と私」を表す除外双数形として用いられる（cf. 例(5)）。これは，奄美大島湯湾方言に見られるような構造から共格助詞が脱落したものであり，名詞 X の遠称指示詞 ari への固定化によって小野津方言に見られる ariwattai へと至る前の中間段階の形式と位置づけられる。なお，除外／包括の区別を持つ喜界島方言においては，「X（人を指す名詞）と私の二人」に相当する形式は除外形として発達したのに対し，X の部分を持たない「私の二人」に相当する形式は包括形として発達している。

(iii) 喜界島小野津方言においては，「あの二人」に相当する an tai が，人を表す名詞 X と複合し，「X たち二人」を表しうる（cf. 例(6)）。これは，人を表す名詞 X+ariwattai が，「X と私の二人」を表すのと並行的である。いずれも，遠称指示詞の指示対象を，名詞を前置することで限定するような構造が発達したものといえる。

(1) uree { wattari=nu / wanna+ttari=nu } kasi=doo. （喜界島上嘉鉄方言）
これ.TOP 1DU.INCL=GEN 1PL.EXCL+二人=GEN 菓子=ASSRT
「これは｛私たち二人（INCL）の／私たち二人（EXCL）の｝菓子だよ。」

(2) huree { wattai=nu / ariwattai=nu } kwasi=doo. （喜界島小野津方言）
これ.TOP 1DU.INCL=GEN 1DU.EXCL=GEN 菓子=ASSRT
「これは｛私たち二人（INCL）の／私たち二人（EXCL）の｝菓子だよ。」

(3) akira+ariwattai=ŋa ikjun=doo. （喜界島小野津方言）
アキラ+1DU.EXCL=NOM 行く.NPST=ASSRT
「アキラと私の二人が行くよ。」

(4) kʔajoobin ujuritu wattəə ikjun tukinnja, （Niinaga 2014:102-103，奄美大島湯湾方言）
kʔwajoobi=n ujuri=tu wattəə ik-jur-n tuki=n=ja
Tuesday=DAT1 Uyuri=COM 1DU go-UMRK-PTCP time=DAT1=TOP
‘On Tuesday, when Uyuri and me go (there), ...’

(5) akira+wattari=hen icin=doo. （喜界島上嘉鉄方言）
アキラ+1DU=INST 行く.NPST=ASSRT
「アキラと私の二人で行くよ。」

(6) an kwasjee tʰaroo+an+tai=ŋa kʰadasu=ka? （喜界島小野津方言）
あの菓子.TOP 太郎+あの+二人=NOM 食べる.PST.NMLZ=Q
「あの菓子は太郎たち二人が食べたのか？」

略号

1DU: first person dual, 1PL: first person plural, ASSRT: assertive, COM: comitative, DAT: dative, EXCL: exclusive, GEN: genitive, INCL: inclusive, INST: instrumental, NOM: nominative, NPST: non-past, NMLZ: nominalizer, PTCP: participle, Q: question, TOP: topic, UMRK: unmarked verbal affix

参照文献

岩倉市郎（1941）『喜界島方言集』東京：中央公論社.

Niinaga, Yuto. 2014. *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language.* Doctoral dissertation, The University of Tokyo.

下地理則（2023）「琉球諸語における双数形―類型と歴史―」ナロック ハイコ・青木博史（編）『日本語と近隣言語における文法化』211-244. 東京：ひつじ書房.

白田理人（2014）「奄美喜界島小野津方言の一人称代名詞の複数形」『日本言語学会第 148 回大会予稿集』350-355.

白田理人（2016）『琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法』博士論文, 京都大学.

C-4　チェコ語における外部的所有構造－所有の与格／対格に着目して－

松山芳瑛 (東京外国語大学大学院博士課程)
hana.ceskarepublika@gmail.com

チェコ語では、誰かの身体部位に影響が及ぶ場合、所有者と身体部位が別の項で表されるのが基本である (Macháčková 1992)。この形式は外部的所有構造 (external possession, Haspelmath 1999) の一種であり、チェコ語やその他のスラヴ諸語では所有者が与格で表される場合 (以下、所有の与格) に関して専ら記述がなされてきた (Fried 2009, 野町 2011, 松山 2022)。一方、チェコ語では所有者が対格で表される場合もある。そこで、本研究は、所有者が対格で表される場合 (以下、所有の対格) も外部的所有構造の一種として捉え、チェコ語における所有の与格／対格がどのように相補分布しているのか、及びどの程度互換可能であるのかを、チェコ語国立コーパスを用いて定量的に明らかにする。

チェコ語における所有の与格／対格は以下の文構造をとり得る。本研究は、①**b ～ e**、**c ～ e** の交替が見られる動詞及びその条件を指摘し、②交替の定量的分析ならびに交替の背景となる機能の分析を提示する。

【所有の与格の文構造タイプ】		
a. 動詞 (ex. 震える)	所有者.与格	身体部位.主格主語 (ex. 指が)
b. 動詞 (ex. 梳かす)	**所有者.与格**	**身体部位.対格目的語 (ex. 髪を)**
c. 動詞 (ex. 立つ)	**所有者.与格**	**身体部位.斜格句 (ex. 足の上に)**
【所有の対格の文構造タイプ】		
d. 動詞 (ex. 痛ませる)	所有者.対格目的語	身体部位.主格主語 (ex. 頭が)
e. 動詞 (ex.蹴る)	**所有者.対格目的語**	**身体部位.斜格句 (ex. 足へ)**

①まず、文構造タイプの交替が可能であるのは、chytit「つかまえる」(b ～ e)、líbat「キスをする」(b ～ e)、obejmout「抱擁する」(b ～ e)、poklepat「(軽く) 叩く」(c ～ e) といった、一部の**直接影響**を表す動詞の場合においてであることを示す。以下に示すのは (1) b ～ (2) e の交替の例である。

(1)　{když jsme se loučili,}　tak　jsem　*jí*　**líbal**　ruku (...)
　　それで　補助動詞　彼女.与格　キスした　手.対格
　「{別れの挨拶をする時、}私は彼女の手にキスした (…)」　(Zbabělci; フィクション)

(2)　když　**líbala**　*manžela*　na　tvář (...)
　～する時　キスした　夫.対格　へ　頬.対格
　「彼女が夫にキスした時 (…)」　(Harry Potter a ohnivý pohár; フィクション)

②さらに、b ～ e の交替が見られる動詞においては、コーパスのデータから、身体部位よりも所有者の方が対格で表される傾向があることを指摘する。その理由として、チェコ語では e の方がデフォルトであり、b の文構造タイプの表現は、身体部位を昇格、所有者を降格することで、身体部位の方に焦点を置く機能を担っているものと考える。

本研究は、チェコ語における外部的所有構造の記述を精密化することにより、スラヴ諸語さらには世界の言語における部分と全体の標示の類型論に貢献するものである。

＜参考文献＞

野町素己 (2011) 「スラヴ諸語における所有文: その構造と派生的構文に関する比較・類型論的研究」博士論文, 東京大学.

松山芳瑛 (2022) 「チェコ語における所有の与格の統語的性質―所有対象に焦点を当てて―」日本言語学会第 164 回大会口頭発表 A 会場-3. オンライン, 2022 年 6 月 18 日.

Fried, Mirjam (2009) Plain vs. situated possession in Czech: A constructional account. In: William B. McGregor (ed.) *The expression of possession*, The expression of cognitive categories 2, 213-248. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Haspelmath, Martin (1999) External possession in a European areal perspective. In: Doris L. Payne and Immanuel Barshi (eds.) *External possession*, Typological studies in language 39, 109-136. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Macháčková, Eva (1992) Je posesívní dativ volný, nebo vázaný? [所有の与格は自由なのか、あるいは義務的なのか？]. *Slovo a slovesnost* 53 (3): 185-192.

＜調査資料＞

Český národní korpus [チェコ語国立コーパス]. Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha. https://www.korpus.cz/ [2024 年 8 月 2 日アクセス].

C-5 ノルウェー語の「逆パンケーキ構文」の機能と分布

谷川みずき (東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1)

背景: ノルウェー語を含むスカンジナビア諸語では、通常の一致パターンでは義務的であるはずの主語と形容詞の性 (女性 / 男性 / 中性) と数 (単数 / 複数) の一致にゆれが観察される。例えば、先行研究で大いに注目されてきた「パンケーキ構文」と呼ばれる構文がある。この構文では、*Pannekaker er godt* 'Pancakes.F.PL be.PRS good.N.SG' のように主語が中性・単数形の名詞でない場合に述語形容詞が中性・単数形で表される。この不一致は主語の有限性 (boundedness) や有生性の度合いを表す意味的一致により生じると考えられている (Corbett 2006: 223–224; Haugen & Enger 2019 等)。本発表では、パンケーキ構文とは反対に、主語が中性・単数形の名詞であるにもかかわらず、述語形容詞が共性 (男性形と女性形の区別をしない場合の性)・単数形で表される現象 (以下「逆パンケーキ構文」と呼ぶ) に注目する。 (1) では、主語が中性・単数形の *postbudet*「その郵便配達員」であるが、述語形容詞 *syk*「病気である」は共性・単数形で表されている。

(1) *Postbudet* *er* *syk.*
post.officier:N:SG:DEF be:PRS sick:COMMON:SG
'The post officer is sick.'

この構文は、パンケーキ構文と同様の意味的一致として考えられているが (Åfarli & Vangsnes 2021)、具体的な機能と分布は未だに不明である。逆パンケーキ構文について調査することは、ノルウェー語母語話者が何を表すために一致を行うのかという大きな問題に答えることにつながる重要なケーススタディとなる。

問い: 逆パンケーキ構文はどのような機能を持ちどのような状況下でみられる現象なのだろうか。この構文に関しては、参照文法である Faarlund, Lie & Vannebo (1997: 765–766) が、主語が人間で特に大人を指し示す場合、形容詞が典型的に人間の特性や状況を表すものである場合、主語と形容詞の間の距離が長い場合にみられると記述している。本発表では、これらの先行研究の記述の妥当性を調査するだけでなく、より詳細に意味的要素にも注目することで、逆パンケーキ構文の機能と分布について包括的に記述することを目指す。

方法: 一致/不一致の容認度や意味の違いについてノルウェー語話者に詳細なエリシテーションを行った。

結果: 以下の 5 点の発見があった。第一に、逆パンケーキ構文は、主語の有生性階層における位置が高い場合に見られる。Faarlund, Lie & Vannebo (1997: 765–766) の記述の通り、人間の中でも特に大人が主語の場合に最も容認度が高く、子供の場合は若干容認度が下がり、動物や無生物の場合は滅多に容認されない。

第二に、主語の個別性が高い場合に逆パンケーキ構文は容認されやすい。所有冠詞 (*mitt*「私の」) が主語と共起する場合や、「そのお腹の空いた○○」のように主語の個別性を高める修飾形容詞が共起する場合には、主語が子供の場合でも容認度が高くなり、動物の場合でさえ不自然さはあるものの非文ではなくなる。

第三に、形容詞の意味が逆パンケーキ構文の容認度に影響を与える度合いは、主語の特性などによって異なる。Faarlund, Lie & Vannebo (1997: 765–766) は、典型的に人間の特性や状況を指し示す形容詞の場合に逆パンケーキ構文が見られやすいと記述している。今回の調査の結果では、形容詞の違いによる容認度の違いは、主語が大人の人間である場合などでは見られず、主語が子供の場合などに限られた。

第四に、主語と述語形容詞の距離が長ければ長いほど、逆パンケーキ構文の容認度が高まる場合がある。この結果は、Faarlund, Lie & Vannebo (1997: 765–766) の記述を支持するものである。

第五に、主語において中性・単数形の標示が複数回繰り返される場合、逆パンケーキ構文の容認度が下がる。ノルウェー語では、定冠詞に名詞が後続する場合、定冠詞にも名詞にも性と数の標示がされる (例 *dette postbudet* = this:N:SG post officer:N:SG:DEF「この郵便配達員」)。その場合、意味的な観点からは、個別性が高いため容認されることが予測されるものの、この構文の容認度は低い。第四と第五のポイントは、主語による中性・単数形のプライミング効果の強弱によりこの構文の容認度が変化するという可能性を示唆する。

議論: 調査の結果から逆パンケーキ構文の機能は主語の有生性と個別性の高さを強調することであると主張する。中性形は有生性や個別性の低い名詞と結びつきが強い (Haugen & Enger 2019 等)。そのため主語の有生性や個別性が高い場合に、中性形で形容詞を表すことを回避し、意味的な一致を示すと分析できる。構文の分布に関しては、調査結果からプライミング効果がもたらす影響について議論する。主語と形容詞の距離の長さや主語の性・数の標識の回数によって、中性・単数という情報が話者の意識の中で喚起される度合いが構文の容認度と関係する可能性を提示する。本発表は、意味論と形態論のインターフェイスとして重要な逆パンケーキ構文のデータを提示することで、スカンジナビア諸語の研究および一致の類型論に貢献する。

参考文献:

Åfarli, Tor A. & Øystein A. Vangsnes. 2021. Formell og semantisk adjektivkongruens i norsk [Formal and semantic adjectival agreement in Norwegian]. *Oslo Studies in Language* 11(2). 527–540.

Corbett, Greville G. 2006. *Agreement* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Faarlund, Jan Terje, Svein Lie & Kjell Ivar Vannebo. 1997. *Norsk Referansegrammatikk [Norwegian Reference Grammar]*. Oslo: Universitetsforlaget.

Haugen, Tor Arne & Hans-Olav Enger. 2019. The semantics of Scandinavian pancake constructions. *Linguistics* 57(3). 531–575.

D-1 トク・ピシンにおける「V-*im* 目的語」構文と「V *long* 目的語」構文の交替の要因

東京大学文学部 古川智康 tomoyasu.furukawa.tachikawa@gmail.com

【背景】トク・ピシン (ISO 639-3: tpi) はパプアニューギニアの公用語であり、英語に基づくクレオール言語である。トク・ピシンの一部の動詞構文は、「V-*im* 目的語」という構文 (例 (1)) と、「V *long* 目的語」という構文 (例 (2)) で交替する。-*im* は他動詞形成接辞であり、*long* は多様な意味を表す前置詞である (Verhaar 1995)。

(1) *Abram* *i* *bilipim* *tok* *bilong* *Bikpela*
Abram 述語標識 信じる-IM 言葉 of 神
「Abram は神の言葉を信じる。」(Verhaar 2001)

(2) *Akis* *i* *save* *bilip* *long* *Devit*
Akis 述語標識 習慣 信じる LONG Devit
「Akis は Devit を信じる。」(Verhaar 2001)

(1)では「V-*im* 目的語」構文が、(2)では「V *long* 目的語」構文が「信じる」という事態を表しており、交替現象と言える。この交替は、*long* を目的語標示とみると、ロマンス諸語などの DOM と近い現象と分析できる。

Snoek (2011) はこの交替に関連した先行研究である。Snoek (2011) は-*im* の出現する環境について、コーパスを用いた研究を行い、-*im* は有生の目的語と共起しやすいと主張している。

【問い】「V-*im* 目的語」構文と、「V *long* 目的語」構文の交替の要因とは何かという問いを扱う。

【方法】上記の問いを検証するために、コーパスを用いた定量的な研究を行った。使用するコーパスは、Verhaar (2001) であり、このコーパスは Snoek (2011) が用いているものとは異なるものである。「V-*im* 目的語」構文と「V *long* 目的語」構文の交替を起こす動詞のうち、コーパスに用例のある 13 の動詞について調査を行う。コーパスにおいて用例の数が多くあるものから調査を行い、現時点では、そのうち 3 つの動詞 (*bilip*「信じる」、*laik*「好む」、*kros*「怒る」) の調査が終わっている。DOM との類似性に着目し、各用例について、Witzlack-Makarevich & Seržant (2018) が挙げている DOM の要因に関連する変数 (目的語と他動詞主語の有生性、品詞、文法数、そして節の極性) をアノテートした。今後、調査する動詞の数を 3 から 13 に増やす予定である。

【結果】3 つの動詞でそれぞれ異なる交替要因を示す結果を得た。*bilip* は、「V *long* 目的語」構文 39 例中、人間の目的語が 27 例、無生物の目的語が 12 例であるのに対し、「V-*im* 目的語」構文 23 例中、人間の目的語が 3 例、無生物の目的語が 20 例であり、目的語が無生物の時に「V-*im* 目的語」構文が使われ、人間の目的語の時に「V *long* 目的語」構文が使われる傾向にあった。一方で、*laik* は、「V *long* 目的語」構文は動詞句を目的語に取る例のみが見つかり、「V-*im* 目的語」構文は名詞類を目的語に取る例のみが見つかった。*kros* は調べた変数のいずれについても有意な傾向が示されなかった。

【議論】調査結果は、当該の交替に共通する交替要因があるのではなく、各動詞が固有の交替要因を持っていることを示している。Snoek (2011) では有生の目的語と-*im* が共起しやすいと主張されていたが、*laik*、*kros* ではそのような傾向は見られず、*bilip* ではこの主張と反対の傾向が確認された。形式的には同じ交替現象であるにもかかわらず、各動詞がそれぞれ固有の交替要因を持っていることは興味深い。

参考文献

Snoek, Conor. (2011) Irregular -im suffixation in Tok Pisin: Exploratory methods in multivariate analysis. *Language and Computers* 73: 35-52.

Verhaar, John. W. M. (1995) *Toward a Reference Grammar of Tok Pisin An Experiment in Corpus Linguistics.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Verhaar, John. W. M. (2001) Item "*Tok Pisin Corpus*" in collection "Tok Pisin Corpus". The Language Archive. https://hdl.handle.net/1839/7f747abf-0fdd-45bf-8817-b90fea1fc32a.

Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant. (2018) Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant & Alena Witzlack-Makarevich, Alena (eds.), *Diachrony of differential argument marking* (Studies in Diversity Linguistics 19), 1–40. Berlin: Language Science Press.

D-2 通言語的視点から見た相対的場所表現の文法化

水野庄吾（ライプツィヒ大学 / 京都大学 博士学生; efforts.0213@gmail.com）

本発表の目的は，系統的，地理的に独立した様々な言語に着目することで，側置詞（格標示）の文法化の代表例として広く知られている相対的場所表現 (axial forms) の文法化の過程や進度について，どのような通言語的ヴァリエーションが見られるかを明らかにすることである。

相対的場所表現とは，「家の前に」や「机の上に」などのように，ある対象物（e.g. 家，机）に対する相対的な場所（e.g. 前，後，上，下，横）を示す表現である。このような相対的場所表現は，先行研究において，名詞から側置詞（さらに格標示）へ文法化した代表的な例として広く取り上げられている (e.g. Dryer 2019; Heine 2008; König 2011)。例えば，(1) のようにロシア語では，相対的場所表現である *vperedi* は名詞 *pered* から文法化したものである。

文法化は概略,「語彙的なものからより文法的なものへの段階的な変化」と定義され (e.g. Heine et al. 1991: 3; Bybee et al. 1994: 4)，Lehmann (2015: ch.4) は，文法化を判断する 6 つのパラメーター (integrity, structural scope, paradigmaticity, bondedness, paradigmatic variability, syntagmatic variability) を用意している。文法化は段階的ものであるというこの定義を採用したとき，通言語研究の文脈において当然問われるべき研究設問は，言語間において，文法化の過程や進度にどのような（どの程度の）ヴァリエーションが見られるかということである。

管見の知る限り，このような研究設問に実証的に取り組んだのは，Bisang et al. (2020) のみである。彼らは Lehmann (2015) を改良した 8 つのパラメーター (semantic integrity, phonetic reduction, paradigmaticity, bondedness, paradigmatic variability, syntagmatic variability, decategorization, allomorphy) をもとに，文法化の過程やシナリオについて考察しているが，文法化の出所概念 (source concept) を研究の出発点にしているため，文法化の目標概念 (target concept) である相対的場所表現の文法化の過程や進度を考察したわけではない。そこで本発表は，彼らの研究を雛形に調査し, 相対的場所表現の文法化は, 世界の多くの言語で, 意味的な変化 (e.g. semantic integrity) は確認されるが，形式的な変化 (e.g. bondedness, phonetic reduction, allomorphy) までは進行していないということを報告する。例えば，相対的場所表現は，(1a) や (2) のように多くの言語で自由形態素である(cf. Italian, kîîtharaka, Mongolian)。また，(3) のように多くの言語で 2 音節以上の長い形式をとる。さらに，(4), (5) のように多くの言語で名詞と同じ形態統語的構造を持つ。

(1) Russian
a. *v.peredi*
in.front.LOC
'in front'

b. *pered* *mašiny*
front car.GEN
'the front part of the car'

(2) Persian (Pantcheva 2006: 10)
tup *oftad* ***zir***
ball fell under
'The ball fell down.'

(3) Ulwa (Barlow 2023: 255)
apa ***imbam***
house under
'under the houses'

(4) Sheko (Hellenthal 2010: 357)
íntʃù-kɨ̀ ***sáántà***
wood-DAT front.LOC
'in front of the tree'

(5) Yuracaré (van Gijn 2006: 113)
ayma ***a-pasha=jsha***
fire 3SG.POSS-bank=ABL
'next to the fire'

このような結果は，まず，文法化現象では，意味変化が形式変化より先に起こるという仮説 (Narrog & Heine 2018) を実証するとともに，文法化の代表例として，先行研究で広く取り上げられる相対的場所表現の文法化は，通言語的にはかなり未発達であることを示唆するものである。

参照文献

Barlow, Russell. 2023. *A grammar of Ulwa (Papua New Guinea)*. Berlin: Language Science Press.

Bisang, Walter, Andrej Malchukov, Iris Rieder, Linlin Sun, Marvin Martiny & Svenja Luell. 2020. Position paper: Universal and areal patterns in grammaticalization. In Walter Bisang & Andrej Malchukov (eds.), *Volume 1 Grammaticalization Scenarios from Europe and Asia*, 1–88. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. https://doi.org/doi:10.1515/9783110563146-001.

Bybee, Joan L., Revere Perkins & William Pagliuca. 1994. *The evolution of grammar: Tense, aspect and modality in the languages of the world*. Chicago: The University of Chicago Press.

Dryer, Matthew. 2019. Grammaticalization accounts of word order correlations. In Karsten Schmidtke-Bode, Natalia Levshina, Susanne Maria Michaelis & Ilja Seržant (eds.), *Explanation in typology: Diachronic sources, functional motivations and the nature of the evidence*, 63–95. Berlin: Language Science Press.

Gijn, Erik van. 2006. *A Grammar of Yurakaré*. Nijmegen: Radboud Universiteit PhD Thesis. http://webdoc.ubn.ru.nl/mono/g/gijn_e_van/gramofyu.pdf.

Heine, Bernd. 2008. Grammaticalization of Cases. In Andrej Malchukov & Andrew Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of Case*. Oxford: Oxford University Press. https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199206476.013.0030.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi & Friederike Hünnemeyer. 1991. *Grammaticalization: A conceptual framework*. Chicago: University of Chicago Press.

Hellenthal, Anneke Christine. 2010. *A grammar of Sheko*. Utrecht: Leiden University PhD Thesis.

König, Christa. 2011. The grammaticalization of adpositions and case marking. In Bernd Heine & Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press. https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199586783.013.0041.

Lehmann, Christian. 2015. *Thoughts on grammaticalization*. 3rd edn. Berlin: Language Science Press. https://doi.org/10.17169/langsci.b88.99.

Narrog, Heiko & Bernd Heine. 2018. Introduction: Typology and grammaticalization. In Heiko Narrog & Bernd Heine (eds.), *Grammaticalization from a Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press. https://doi.org/10.1093/oso/9780198795841.003.0001.

Pantcheva, Marina. 2006. Persian Preposition Classes. *Nordlyd* 33(1). 1–25. https://doi.org/10.7557/12.75.

D-3　NV 型複合名詞の述語化に対する計量的分析：フレーム意味論からみた機能的動機づけ

陳　奕廷（東京農工大学）・葉　秉杰（国立政治大学）

日本語の NV 型複合名詞の「する」との結合形態には直接的な結合（例:「横付けする」）とヲ格を伴う形（例:「ゴミ拾いをする」）がある。本研究は、NV 型複合名詞がどのように複雑述語を形成するのかを計量的に分析し、その動機づけを「フレーム意味論」（Fillmore and Baker 2010; 陳・松本 2018）から検討することを目的とする。「対象の冗長性」が述語化の使い分けの機能的動機づけであると主張し、機械学習を用いて実証する。具体的には、意図性の高い事象において、意味的対象（Dowty 1991 における Proto-Patient）と N の共起による冗長性が生じない場合に「NV する」が形成できると考える。

伊藤・杉岡 (2002) と Sugioka (2002) は、N が結果以外の付加詞を表す場合に「NV する」が形成されると主張している。これに対し、Yumoto (2010) では付加詞以外にも、「NV する」になると結合価が減少するが、「NV する」全体として内項がある場合（例:「パック詰め」）、そして「NV する」全体の内項が身体部位以外の N と部分―全体の関係にある場合（例:「値下がり」）があると主張している。先行研究では内省に基づいて分析していたが、本研究は客観的なコーパスのデータに基づく網羅的な検証で、これらの主張は「する」と直接結合する多くの例を説明できないことを示す（例:「舌打ちする」、「歯磨きする」、「腕組みする」、「目隠しする」、「夜更かしする」、「巣作りする」、「子作りする」）。

本研究は、対象の冗長性が生じず「NV する」が用いられやすい条件として以下を提案する:

1. 再帰的行為などの自己完結する経路事象以外の自動詞的な事象（例:「舌打ち」、「歯磨き」、「腕組み」）
2. 主語と N 以外に重要な意味要素がある事象（例:「口付け」、「色付け」、「横付け」、「顔出し」、「皺寄せ」）
3. 対象と N がメトニミーの関係にある事象（例:「目隠し」、「名指し」、「足留め」、「値下げ」、「値上げ」、「水切り」）
4. イベントとして捉えられる事象（例:「ゴミ出し」、「衣替え」、「子作り」、「荷作り」、「巣作り」、「子育て」）
5. N が意味変化している事象（例:「旗揚げ」、「値踏み」、「鞍替え」、「肩入れ」、「たらい回し」、「裾分け」）

これらの条件は相互排他的なものではなく、複数の条件が適用される場合もある。どの条件にも当てはまらないものは、「山歩き」、「魚釣り」、「ゴミ拾い」、「人殺し」などのように、対象の冗長性により「NV する」が形成されにくいと予測する。

条件の判断はフレーム意味論を用いることで適切に説明できる。例えば、イベントとして捉えられる事象は「ゴミ出し」のように、それが喚起するフレームが単なる「排出」フレームではなく、「ゴミ出し」という特殊なフレームであり、そのフレーム要素の多くが特定のものに限定される（[朝]$_{\text{Time}}$[ゴミ]$_{\text{Theme}}$を[ゴミ置き場]$_{\text{Goal}}$に[指定の袋に入れて]$_{\text{Depictive}}$出す）。このような場合において、NV の事象を行ったかどうかが重要であり、またその事象が一つのまとまりとして認識されるため、「類像性」（Haiman 1983, 2008）によってより緊密な形態で表現され、対象をヲ格で明示しなくても問題ないと考えられる。一方、「ゴミ拾い」は単なる「収集」フレームを喚起し、Theme 以外のフレーム要素が制限されないため、イベントではないと考える。

本研究の主張を実証するために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) における頻度 50 以上の NV 型複合名詞を収集し、『中納言』の短単位検索で「NV する」と「NV をする」の頻度を調査した。動詞用法の頻度が 10 以下のものを除外した 205 語を研究対象とした。Sugioka (2002)、Yumoto (2010)、および本研究の予測モデルを Python の機械学習ライブラリ scikit-learn (Pedregosa et al. 2011) を用いて評価した。具体的には、「NV する」が占める割合（「NV する」のトークン数／「NV する」と「NV をする」の総トークン数）が 0.3 以上の場合は 1、0.3 未満の場合は 0 に分類し出力データとした。それぞれのモデルで「NV する」が形成されると予測する場合は 1、形成されないと予測する場合は 0 に分類し入力データとした。不均衡データを解消するため RandomOverSampler でオーバーサンプリングを行った。入力データから出力データを予測するために、データの 75%を学習セット、25%を検証セットに分割し、ランダムフォレスト法で学習を行い、モデルの性能を評価した。結果として、表 1 のように本研究のモデル（Patient Redundancy）が最も高い予測性能を示した。

Models	Accuracy	F1 Score	MCC
Sugioka_RF	0.652174	0.714286	0.337963
Yumoto_RF	0.695652	0.631579	0.417365
Patient_Redundancy_RF	0.804348	0.756757	0.661438

表 1. ランダムフォレストによる機械学習の結果

本研究は NV 型複合名詞の述語化の条件を明らかにし、機械学習による言語研究の可能性を示した。また、普遍的な制約より全体的な傾向を重視するという、「プロトタイプ理論」（Geeraerts 1989; Rosch 1973; Taylor 1989）に見られるような認知言語学の考え方を、実証的なデータから支持するものでもある（Chen 2024; Stefanowitsch 2020: 68–76 も参照）。

参照文献

Chen, Yiting (2024) A related-event approach to event integration in Japanese complex predicates: Iconicity, frequency, or efficiency? *Cognitive Linguistics* 35(3): 439–479.

陳奕廷・松本曜 (2018)『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』東京：ひつじ書房.

Dowty, David (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67(3): 547–619.

Fillmore, Charles J. and Colin Baker (2010) A frames approach to semantic analysis. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford handbook of linguistic analysis*, 313–340. Oxford: Oxford University Press.

Geeraerts, Dirk (1989) Prospects and problems of prototype theory. *Linguistics* 27(4): 587–612.

伊藤たかね・杉岡洋子 (2002)『語の仕組みと語形成』東京：研究社.

Haiman, John (1983) Iconic and economic motivation. *Language* 59(4): 781–819.

Haiman, John (2008) In defence of iconicity. *Cognitive Linguistics* 19(1): 35–48.

Pedregosa, Fabian, Gaël Varoquaux, Alexandre Gramfort, Vincent Michel, Bertrand Thirion, Olivier Grisel, Mathieu Blondel, Peter Prettenhofer, Ron Weiss, Vincent Dubourg, Jake Vanderplas, Alexandre Passos, David Cournapeau, Matthieu Brucher, Matthieu Perrot, and Édouard Duchesnay (2011) Scikit-learn: Machine learning in Python. *Journal of Machine Learning Research* 12: 2825–2830.

Rosch, Eleanor (1973) Natural categories. *Cognitive Psychology* 4(3): 328–350.

Stefanowitsch, Anatol (2020) *Corpus linguistics: A guide to the methodology.* Berlin: Language Science Press.

Sugioka, Yoko (2002) Incorporation vs. modification in deverbal compounds. In: Noriko Akatsuka and Susan Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 10, 496–509. Stanford: CSLI.

Taylor, John R. (1989) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*. Oxford: Clarendon Press.

Yumoto, Yoko (2010) Variation in N-V compound verbs in Japanese. *Lingua* 120(10): 2388–2404.

D-4 「*さえは」と「までは」：意外性を表す焦点助詞と対照主題の共起性

野村 優衣（津田塾大学大学院）　井原 駿（津田塾大学）

はじめに 近年、日本語の焦点助詞（focus particles, もしくは「とりたて詞」）に対照主題 の「は」(contrastive topic -*wa*, 以下「は $_{CT}$」) が付加した際の意味解釈が注目されつつある (e.g., Hara 2007, Oshima to appear, Ido & Kubota 2021, Mizutani 2023)。本研究では、意外性 (unlikelihood) を表す焦点助詞「さえ」については他の多くの焦点助詞と異なり「は $_{CT}$」と共起不可である事実に対して、「さえ」と同様に意外性を表出する「まで」との比較を通じて説明を試みる。本研究の分析は、「さえ」の持つ肯定極性 (positive polarity) の性質と振る舞いを正しく予測する。

言語事実 「だけ」「まで」「こそ」など多くの焦点助詞は「は $_{CT}$」を後続させることが可能である。一方で、「さえ」は「は $_{CT}$」の後続を許さない。

(1) 太郎さえ (*は) 来た。　　(2) a. 太郎までは来なかった。 b. 太郎にだけは相談した。 c. 今日こそは休む。

特に、「まで」は「さえ」と同様に話者の意外性を表出する助詞であることが知られているため（茂木 1999 など）、両者の「は $_{CT}$」との共起性の差には何らかの説明が求められる。しかしながら、管見の限り、従来の研究は容認可能な [焦点助詞＋は $_{CT}$] の組み合わせに主な焦点を当てており、「*さえは」のような容認不可能な組み合わせを論じたものは存在しない。

提案と分析 Sawada (2007, 2022) に従い、「は $_{CT}$」は命題間の尺度 (scale) を比較する前提 (presupposition) を持つと想定する。具体的には、「は $_{CT}$」は項となる命題 p が代替集合 C のうち最も起こりやすい (most likely) ことを前提とし、同時に、命題 p が真であることを主張 (assert) する。（より正確には、「は $_{CT}$」はこれに加えて「偽である可能性のあり、かつ、項である命題とは異なるような命題 q が C に存在する」という anti-additivity を持つが、議論の本筋に関わらないため割愛している。）

(3) $[\![wa]\!]^w = \lambda C.\lambda p.\, Assert(p) \wedge \partial\Big[\forall q \in C[q \neq p \Rightarrow q \prec_c p]\Big]$,

where C is an alternative set, $\prec_c$ 'less-likely' and ϕ in $\partial[\phi]$ a presupposition.

a. **Presupposition:** p is **most likely** among alternatives in C.　b. **Assertion:** p is true in w.

Mizutani (2023) は、「まで」は *even* と同様に「代替集合の命題のうち発話命題 p が最も起こりにくい (least likely) ことを前提とする純粋な前提的語彙 (purely presuppositional items) であるとみなしている。これに従うと、「まで」は命題をそのまま返し尺度前提を表出する語彙であると定義される。

(4) $[\![made]\!]^w = \lambda C.\lambda p.\, p(w) \wedge \partial\Big[\forall q \in C[q \neq p \Rightarrow p \prec_c q]\Big]$ **Presupposition:** The prejacent p is **least likely** among C.

本研究は、「さえ」と「まで」の振る舞いの違いを、「項となる命題が真である可能性 (possibility) を前提とするか否か」に起因すると提案する。以下のように、主張文において「さえ」は「まで」と同様の尺度前提を持つものの、「まで」とは異なり前提として命題が真であることを義務的に表出する語彙であると定義する。

(5) $[\![sae]\!]^w = \lambda C.\lambda p.\, p(w) \wedge \partial\Big[\forall q \in C[q \neq p \Rightarrow p \prec_c q \wedge \Diamond_w p]\Big]$

a. **Presupposition:** (i) The prejacent p is **least likely** among C and (ii) p **is possible in** w**.**

「は $_{CT}$」が「さえ／まで」に付加した際の解釈を以下に示す。ここでは、「は $_{CT}$」は義務的に発話全体をスコープにとると仮定する (Tomioka 2010)。(6b,c) より、肯定文において「さえ／まで」の前提と「は」の前提は矛盾するため容認されない。また、(7) のように、否定文において否定辞が「は $_{CT}$」と「さえ／まで」に介在しない場合も同様の理由で容認されない。

(6) [警察]$_F$ { *までは／*さえは } 来た。 LF: wa_{CT} [$_{S''}$ *made/sae* [$_{S'}$ [the police]$_F$ came]]　　$wa_{CT} > made/sae$

a. $[\![S']\!]^{alt} = [\![S'']\!]^{alt} =$ { police came, teachers came, friends came }, where $[\![\alpha]\!]^{alt}$ is an alternative value of α.

b. **Presup.** of wa_{CT}: 'police came' is **most likely**　d. **Presup.** of *made/sae*: 'police came' is **least likely**

(7) LF: wa_{CT} [$_{S''}$ *made/sae* [$_{S'}$ $\neg$[the police]$_F$ came]]　　$wa_{CT} > made/sae > \neg$

a. $[\![S']\!]^{alt} = [\![S'']\!]^{alt} =$ { $\neg$[police came], $\neg$[teachers came], $\neg$[friends came] }

b. **Presup.** of wa_{CT}: '$\neg$[police came]' is **most likely**　d. **Presup.** of *made/sae*: '$\neg$[police came]' is **least likely**

次に、(8) のように否定文において否定辞が「は $_{CT}$」と「さえ／まで」に介在した場合、「まで」と「は $_{CT}$」の前提 (i.e., (8b-i), (8c)) は矛盾しないため「までは」は容認される。一方で、「さえ＋は」については、「さえ」と「は $_{CT}$」の尺度前提 (i.e., (8b-i), (8d-i)) は矛盾しないものの、「は $_{CT}$」の主張 (= (8b-ii)) と「さえ」の持つ可能性の前提 (= (8d-ii)) が矛盾する。

(8) [警察]$_F$ {✓ までは／*さえは}来なかった。 LF: wa_{CT} [$_{S''}$ $\neg$ [*made/sae* [$_{S'}$ [the police]$_F$ came]]]　　$wa_{CT} > \neg > made/sae$

a. $[\![S'']\!]^{alt} =$ { $\neg$[police came], $\neg$[teachers came], $\neg$[friends came] } / $[\![S']\!]^{alt} =$ { police came, teachers came, friends came }

b. Meaning of wa_{CT}: (i) '$\neg$[police came]' is **most likely** (=**scalar presup.**) and (ii) '$\neg$[police came]' is true (= **assertion**)

c. Meaning of *made*: 'police came' is **least likely** (= **scalar presup.**)

d. Meaning of *sae*: (i) 'police came' is **least likely** (= **scalar presup.**) and (ii) 'police came' is possible. (= **possibility presup.**)

すなわち、*さえは」は「さえ」と「は $_{CT}$」に否定辞が介在しない場合は両者の尺度前提が矛盾し、否定が介在する場合は命題への真実性が矛盾することになるため、「までは」とは異なり否定の有無を問わず常に容認不可能な組み合わせとなる。

予測 上記の提案と分析は、「さえ」と「まで」それぞれが否定を伴う場合にとり得るスコープの差を正しく予測する。茂木 (1999) は、「まで」は否定より高いスコープと低いスコープの両方の解釈を持ち得るが、「さえ」は否定より高いスコープの解釈のみ許容されることを指摘している。この点において「さえ」は肯定極性を持つと言える。

(9) 警察まで来なかった。
⇝ { ✓*made* > $\neg$: '警察の他にも来なかった人物がいる' ／ ✓$\neg$ > *made*: '警察の他に来た人物がいたが、警察は来なかった'}

(10) 警察さえ来なかった。
⇝ { ✓*sae* > $\neg$: '警察の他にも来なかった人物がいる' ／ *$\neg$ > *sae*: '警察の他に来た人物がいたが、警察は来なかった'}

「さえ」が否定より低いスコープをとる場合、(5) より、$\neg$[*sae*[*p*]] において *sae*(p) は p が可能であることを義務的に表出する。同時に、否定 ($[\![\text{NEG}]\!]^w = \lambda p.\neg p(w)$) により $\neg p$ が含意されるため、矛盾を引き起こす。ここから、「さえ」は否定と共起した際は '*sae* > $\neg$' の解釈のみが可能となることが正しく予測される。（実際には、この導出の際に否定と「さえ」の構成性が問題となるが、この点に関する議論は紙幅の都合上割愛する。）

Selected References

Gutzmann, D. (2015) *Use-conditional meaning: Studies in multidimensional semantics (Oxford Studies in Semantics and Pragmatics 6)*.

Hara, Y. (2007) *Dake-wa*: Exhaustifying Assertions. *New frontiers in artificial intelligence (JSAI 2006)*.

Ido, M. and Y. Kubota. (2021) The hidden side of exclusive focus particles: An analysis of dake and sika in Japanese. *GENGO KENKYU (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 160.

Mizutani, K. (2023) On the Polarity Sensitivity Induced by the Contrastive Topic Marker *wa* in Japanese. *Japanese/Korean linguistics* 30.

茂木俊伸 (1999) とりたて詞「まで」「さえ」について—否定との関わりから—.『日本語と日本文学』28. 筑波大学国語国文学会.

Oshima, David Y. (to appear) Focus particle stacking: How a contrastive particle interacts with ONLY and EVEN. *Proceedings of WAFL 11*.

Sawada, O. (2007) The Japanese Contrastive Wa: A Mirror Image of Even. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society 33*.

Sawada, O. (2022) The Scalar Contrastive Wa in Japanese. *Empirical Issues in Syntax and Semantics 14*.

Tomioka, S. (2010) Contrastive Topics Operate on Speech Acts. *Information Structure: Theoretical, Typological and Experimental Perspectives*.

E-1

クリック流入音における噪音性の音源：グイ語の事例によるハグマンの仮説の検証

中川裕
Hirosi.nakagawa.tufs@gmail.com

コイサン諸語において高い語彙的頻度で現れるクリック子音（Nakagawa et al. 2023）は、調音的および音響的に独特な特徴を持つ複雑な言語音である。クリック子音産出の仕組みを解明しようとする研究は、Beach (1938) 以来、分節音の限界を理解する上で一般音声学に大きく貢献してきたが、依然としてクリック子音には不明点が多く、現在もさまざまなアプローチが進められている（例: Sands ed. 2020）。本研究はそのような音声学的探求の一環として、コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派グイ語（Glui, Glottocode: gwj）の事例を用い、クリック調音における流入音の産出メカニズムに関する未検証の仮説（Hagman 1977）を独自の手法で検証する試みである。

流入音とは、クリックの前方閉鎖が内向気流とともに開放される際に生じる舌打的破裂噪音 (noise burst) を指す。コイサン諸語には、舌頂クリック流入音として [ǀ, !, ǂ, ǁ] の 4 種類が観察され、音響的には摩擦的噪音の有無によって、有噪音類 [ǀ, ǁ] と無噪音類 [!, ǂ] に分類できる。

では、有噪音類 [ǀ, ǁ] が持つ摩擦噪音性は、どのような仕組みで産出されるのか。定説によれば、前方閉鎖の開放速度が遅いことが摩擦的噪音の発生機構であるとされている（例: Beach 1938, Kagaya 1978, Traill 1985, Stevens 1998）。これに加えて、閉鎖開放に関わる上顎の歯列表面が粗いこと（歯間溝のせいで歯列表面は一般的にデコボコであること）が摩擦的噪音の生成に重要な役割を果たすという仮説が Hagman (1977: 8–9) によって提案されている。この仮説は Ladefoged and Maddieson (1996: 258–259) によって肯定的に評価されている。この仮説を直接検証するには、同一話者の口を用いて有歯発音と無歯発音を比較することが最適であるが、それは極めて困難であるため、残念ながら、Hagman の仮説はこれまで直接の検証が行われていなかった。本研究は、この困難な検証を実施する機会を得たものである。

私は、1995 年に完全な上顎歯列を有するグイ語話者（ボツワナ共和国ハンシー県カデ村在住）からクリック子音の録音資料とパラトグラム資料を記録した。同話者は 2023 年までに上顎の歯をすべて失った。本研究では、2023 年に再びこの話者の協力を得てクリック子音の無歯発音の資料を記録し、これを 1995 年の有歯発音の資料と比較して、4 種類のクリック流入音 [ǀ, ǁ, !, ǂ] の有歯発音と無歯発音を音響音声学的に分析した。主に用いた音響的指標は、(i)流入音の波形の包絡線の形状と(ii)流入音と後続母音の振幅および強度の相対的な差違である。

分析結果は次のように要約できる。Hagman の仮説からは、

(1) 有歯発音の [ǀ, ǁ] の噪音性は無歯発音で減少する
(2) [!, ǂ] の非噪音性は、有歯発音と無歯発音の間で変化しない

の 2 点が予測される。ところが、実際の分析結果はいずれの予測にも合致しなかった。[ǀ, ǁ] の噪音性は有歯発音と無歯発音の間で差異が認められず、また [ǂ] では無歯発音において噪音性が生じた。これらの結果から、Hagman 仮説を支持する証拠は得られず、流入音における噪音性の生成にとって歯列の粗い表面が重要であるという見解は疑わしいと結論づけられる。

参考文献

Beach, (1938). *The Phonetics of the Hottentot Language*. W. Heffer & Sons.

Hagman, R. S. (1977). *Nama Hottentot Grammar*. Research Center for Language and Semiotic Studies, Indiana University.

Kagaya, R. (1978). Soundspectrographic analysis of Naron clicks: a preliminary report. *Annual Bulletin of Research Institute of Logopedics and Phoniatrics*, 12, 113–125, University of Tokyo.

Ladefoged, P. and I. Maddieson (1996). *The Sounds of the World's Languages*. Blackwell.

Nakagawa, H., A. Witzlack-Makarevich, D. Auer, A. Fehn, L. Ammann Gerlach, T. Güldemann, S. Job, F. Lionnet, C. Naumann, H. Ono, and L. Pratchett (2023). Towards a phonological typology of the Kalahari Basin Area languages. *Linguistic Typology*, 27(2), 509-535. https://doi.org/10.1515/lingty-2022-0047

Traill, A. (1985) *Phonetic and Phonological Studies of the !XóÕ Bushman*. Helmut Buske Verlag.

Sands, B. (2023). *Click Consonants*. Brill.

Stevens, K. N. (1998). *Acoustic Phonetics*. MIT Press.

E-2

オノマトペ表現と類像的ジェスチャーの分析を通した事態把握の日中対照研究

吉田 遊野（京都大学［院］）

1. 研究の背景　ある事象について語る際、日本語と中国語はともに、オノマトペ表現において類像的ジェスチャーを伴う割合が高く（Kita 1993）、両者には強い結びつきのあることが伺える。しかし本来、日本語はオノマトペを豊富に用いる一方で、中国語（普通話）は一般にそうではないと考えられる。また、オノマトペとジェスチャーの関係性については、これまで単一言語を対象とした分析が中心であった（cf. Dingemanse 2013, Dingemanse & Akita 2017）が、オノマトペ表現の語用論に関する言語差を捉えるためには、より対照言語学的な研究が求められる。

2. 研究の目的　本研究では、両言語のオノマトペ使用頻度に顕著な差があるという仮説のもと、オノマトペ表現とそれに伴う類像的ジェスチャーの関係性を、日本語と中国語の対照実験を通して分析することを目的とする。

3. 実験概要　日本語母語話者 10 名、中国語母語話者 10 名（18-28 歳）を対象とした。約 7 分のアニメーション作品 *Canary Row* (Warner Brothers 1950)を 29 のクリップに分割して被験者に提示し、各クリップに対して視聴した内容を自身の母語で説明するよう求めた。被験者の産出した言語表現とジェスチャーはすべて、ビデオカメラで録画・録音した。

4. 分析　全体の傾向として、被験者のオノマトペ産出頻度総計は、日本語母語話者において 202、中国語母語話者において 25 であり、両言語間で 8 倍程度の差が見られた。さらに、日本語母語話者においてオノマトペを産出する被験者の最も多かった以下の「徘徊シーン」について、より詳細なマルチモーダル分析を行った。

> 徘徊シーン：猫の Sylvester が、鳥の Tweety を捕まえる方法を考えながら、ビルの下を行き来している（以下、「徘徊行動」）シーン。作中では、同一のシーンが 3 回登場する。

中国語を母語とする被験者は、発話中で本シーンの徘徊行動に言及していた 30 表現の中で、オノマトペ表現は一切見られなかったが、日本語を母語とする被験者では、徘徊行動に言及していた 23 表現のうち、「うろうろ」等のオノマトペ表現が 11 例見られた。このように、オノマトペの使用頻度には明確な差があった一方で、ジェスチャーに注目すると、徘徊行動について言及する際、反復動作を伴う類像的ジェスチャーを示す例が相当数、両言語で共通して確認された（日本語：17 例、中国語：14 例）。実験データから得られた各言語の実例を以下の(1)と(2)に示す。

(1)　（以下の反復動作を2往復繰り返す）

(2)（以下の反復動作を2.5往復繰り返す）

5. 考察・結論　日本語を母語とする被験者が産出したオノマトペの頻度が、中国語を母語とする被験者のそれを大きく上回ることから、仮説の通り、両言語のオノマトペ使用頻度には顕著な差があることが認められた。しかし同時に、徘徊シーンのマルチモーダル分析から、徘徊行動に対応する類像的ジェスチャーは、両言語において同程度の頻度で現れることが分かった。オノマトペと類像的ジェスチャーは、共通の感覚・イメージ的次元から発生している（Kita 1997）との指摘があるように、両者はある事象に対する類像的感覚がそれぞれ言語表現、ジェスチャーに表れたものと見なせる。分析を通して、この類像的感覚が日本語では両モダリティで積極的に表れるが、中国語ではジェスチャーとしてのみ表れやすいという、日中両言語の言語差が示唆された。

6. 参照文献　Dingemanse, M. (2013). Ideophones and gesture in everyday speech. *Gesture*, 13(2): 143-165. / Dingemanse, D. & Akita, K. (2017). An inverse relation between expressiveness and grammatical integration: On the morphosyntactic typology of ideophones, with special reference to Japanese. *Journal of Linguistics*, 53: 501-532. / Kita, S. (1993). Language and thought interface: A study of spontaneous gestures and Japanese mimetics. PhD dissertation, University of Chicago. / Kita, S. (1997). Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics*, 35(2): 379-415.

E-3 How are prosodic boundaries perceived in Japanese?

Shinobu Mizuguchi (Kobe University, Emeritus) and Koichi Tateishi (Kobe College)

Despite their importance in speech recognition, prosodic boundaries in spontaneous speech are understudied, and the finding that syntactic and prosodic boundaries are not isomorphic complicates automatic speech recognition (cf. Biron et al., 2021). This paper considers how prosodic boundaries are linguistically perceived in spontaneous Japanese through perception experiments. We conclude that Japanese cues for boundary perception are different from languages like American English, on which extensive studies have been done about prosodic boundaries.

Japanese prosody is complex and is formed compositionally by the lexical pitch accents, phrasal tones and boundary tones (Féry 2017). Japanese assigns its lexical accents by bi-tonal HL, which induces downstep in the Accentual Phrase (AP). Venditti et al. 2008 assume L%, H%, HL%, and LH% as the four major boundary tones aligned at the AP, but XJ_ToBI (Koiso et al. 2020) claims that they are aligned both at the AP and Intonational Phrase (IP). We conducted perception experiments to examine prosodic boundaries and boundary tones in spontaneous Japanese and provide empirical data of prosodic chunking.

Our experiment method is Rapid Prosody Transcription (RPT) developed by Cole and her colleagues (Cole et al. 2010). Untrained transcribers mark boundaries and prominences on unpunctuated texts while listening to spontaneous speech, and b(oundary)-scores and p(rominence)-scores, the rates of the markings, are measured based on them. We recruited 150 untrained Japanese listeners online, and our materials were 12 recorded excerpts of the *Corpus of Spontaneous Japanese* (CSJ). We measured b-scores and p-scores and coded the highest syntactic category at the right boundary edge, like S, ConjP, or XP.

Our results were: (i) the overall inter-listener agreement on b-scores was above chance (κ0.638 on Fleiss kappa), (ii) the difference between the b-score at the IP edge (0.7) and that at the AP edge (0.507) was significant on One-Way ANOVA ($F(1, 1936)=3.864$, $p<0.001$), (iii) on the regression analysis between b-score and syntactic categories, the predictability of prosodic boundaries was higher with higher syntactic categories like S and ConjP (Adj.R^2 0.395) than lower syntactic categories of XPs (Adj.R^2 0.308), (iv) boundary tones of L% and HL% cover 80% of the boundary tones aligned while H% and LH% are less used, (v) the primary acoustic cue was post-boundary pause (Adj.R^2 0.64) and the secondary acoustic cue was the boundary tone L% (Adj.R^2 0.25) but duration was not a boundary cue (Adj.R^2 0.04), (vi) the multiple regression with post-boundary pause, higher syntactic categories, and boundary tone as explanatory variables (Adj.R^2 0.768) shows that post-pause was the first predictor (t=34.2***), higher syntactic categories were the second (t=16.1***), and the boundary tone of L% was the third (t=5.88***) (where *** is $p<0.001$).

Our study on spontaneous Japanese shows that boundary tones are aligned at the AP and the IP level in Japanese, but the post-boundary pause is the first predictor of prosodic boundaries in Japanese. Cole et al. 2010 claim that syntactic categories are the first predictor and vowel duration is the second predictor of boundary chunking in American English. Boundary cues seem to be language-dependent.

Selected References

Cole, Jennifer., Yun-S. Mo, & S.-D.Beak. 2010. The role of syntactic structure in guiding prosody perception with ordinary listeners and everyday Speech. *Language and Cognitive Processes* 25, 1141-1177.

Koiso, Hanae, Hideaki Kikuchi, and Takaaki Yamada. 2020. Intonation labeling for the Corpus of Everyday Japanese Conversation: The labeling scheme and prosodic features of everyday conversation [in Japanese]. *Special Interest Group on Discourse and Dialogue B903-06*. 34-39.

National Institute of the Japanese Language and Linguistics (ed.). 2004. *Corpus of Spontaneous Japanese*.

Venditti, Jennifer, Kikuo Maekawa & Mary Beckman. 2008. Prominence marking in the Japanese intonation system. In Miyagawa, Shigeru & Mamoru Saito (eds.). *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford: Oxford University Press. 456-512.

P-1 The Obligatory Wide Scope Phenomena in Japanese: A Myth?

Tomoya Tanabe, Ryoichiro Kobayashi, and Yosuke Sato
Hokkaido University, Tokyo University of Agriculture, and Tsuda University

The so-called obligatory wide scope phenomena in Japanese have been extensively discussed in the literature (Goro, 2007; Shibata, 2015). To illustrate, the wide scope reading of disjunction over negation is predominant, while the narrow scope reading is absent in (1).

(1) Ken-wa supeingo-**ka**-furansugo-o hanas-anai. (^{OK}OR>NEG, $^{??}$NEG>OR)
Ken-TOP Spanish-or-French-ACC speak-NEG lit. 'Ken doesn't speak Spanish or French.'

Goro (2007, 2024) and Shibata (2015) each propose an analysis which posits that objects accompanied by disjunction cannot be interpreted below negation due to obligatory movement of the objects out of VP, as in (2).

(2) [$_{TP}$ Subject [$_{TP}$ **Spanish-*ka*-French** [$_{TP}$ [$_{NegP}$ [$_{VP}$ $t_{Spanish\text{-}ka\text{-}French}$ V] **NEG**] T]]]

We argue that a careful study of the syntax-discourse-prosody interplay reveals that the wide scope reading is not obligatory, suggesting that the object can undergo reconstruction. It has been argued that the syntax of sentences must be studied by carefully controlling contexts and prosodies (Fodor, 2002; Kitagawa & Fodor, 2003, 2006, a.o). Applying this view, we show that the widely shared judgement on (1) is dependent on an implicit context such as (3), where the object is naturally read with emphatic stress.

(3) *Context: Ken speaks more than 30 languages. The speaker wonders what languages he does not speak.*
Q: Ken-wa nanigo-o hanas-anai-no? A: Ken-wa SUPEINGO-KA-FURANSUGO-O
Ken-TOP what.language-ACC speak-NEG-Q Ken-TOP Spanish-or-French-ACC
hanas-anai-yo. (^{OK}OR>NEG, ^{NOT}NEG>OR)
speak-NEG-SFP
lit. 'Which langauge(s) does Ken not speak? Ken doesn't speak Spanish or French.'

This judgement changes in a different context in (4), where what is under discussion is whether Ken speaks at least one language, either Spanish or French. In this context, emphatic stress is on the verb and the object is deaccented. The most likely interpretation of (4A) is the NEG>OR reading, which provides a negative answer to (4Q).

(4) *Context: Taro is looking for someone who speaks Spanish or French, and Ken is a candidate.*
Q: Ken-wa supeingo-ka-furansugo-o hanasu-no? A: Ken-wa supeingo-ka-furansugo-o
Ken-TOP Spanish-or-French-ACC speak-Q Ken-TOP Spanish-or-French-ACC
HANAS-anai-yo. ($^{??}$OR>NEG, ^{OK}NEG>OR)
speak-NEG-SFP
lit. 'Does Ken speak Spanish or French? Ken doesn't speak Spanish or French.'

The contrast between (3) and (4) is clear, which suggests that the availability of the NEG>OR reading depends on the context and prosody. Importantly, (4) shows that syntax in principle allows the NEG>OR reading.

The NEG>OR reading has been overlooked because contexts such as (4) rarely come to our mind due to their pragmatic unnaturalness. In (4), NEG>OR, which entails that he speaks neither languages, provides a negative answer in a rather indirect way in that cooperative language users would choose to answer (4Q) more directly by sentences in (5a) and (5b). In contrast, the OR>NEG reading is salient in (1) because the Q-A pair in (3) is pragmatically natural when the utterer of (3A) does not accurately remember which language Ken does not speak.

(5) a. Ken-wa **supeingo-mo furansugo-mo** hanas-anai-yo.
Ken-TOP Spanish-also French-also speak-NEG-SFP
'Ken speaks neither Spanish nor French.'
b. Ken-wa **dotti-mo** hanas-anai-yo.
Ken-TOP which-also speak-NEG-SFP
'Ken speaks neither language.'

The scope patterns of *-dake* 'only' and negation, another case of the obligatory wide scope phenomena, further support our analysis over the analyses based solely on syntax. In (6), an emphasis is on the object and ONLY>NEG reading is obtained. By contrast, in (7A), the stress extends to the V-NEG complex and it has NEG>ONLY reading.

(6) *Context: Ren heard that Eri didn't eat much in the dinner party, so he asks her*:
Q: Kinoo, anmari tabe-nakat-ta-no? A: Iya, YASAI-DAKE tabe-nakat-tan-da-yo.
yesterday much eat-NEG-PST-Q no vegetable-only eat-NEG-PST-COP-SFP
lit. 'Didn't you eat much yesterday? No, I didn't eat only vegetables.' (^{OK}ONLY>NEG, ^{NOT}NEG>ONLY)

(7) *Context*: *Ren saw Eri eating vegetables in a BBQ restaurant. He was surprised that she wasn't eating any meat, so the next day, he asks her*:
Q: Yakinikuya-de yasai-dake tabe-ta-no? A: YASAI-DAKE TABE-NAkat-ta-yo.
BBQ.restaurant-in vegetable-only eat-PST-Q vegetable-only eat-NEG-PST-SFP
lit. 'Did you eat only vegetables in the BBQ restaurant? I didn't eat only vegetables.' (^{OK}NEG>ONLY)

We showed that objects with disjunction/*-dake* may be interpreted both inside and outside the scope of negation. This observation shows that the objects can reconstruct. Although movement of disjunction and *dake*-marked objects itself may be obligatory, both the higher and lower copies are available at the semantic interface. The finding highlights the methodological moral: Syntax must be studied by carefully controlling contexts and prosodies.

References

Fodor, Janet D. 2002. Prosodic disambiguation in silent reading. In Masako Hirotani (ed.), *Proceedings of the Thirty-Second Annual Meeting of the North-Eastern Linguistic Society*, 113–137. University of Massachusetts, Amherst: GLSA.

Goro, Takuya. 2007. *Language specific constraints on scope interpretation in first language acquisition*. College Park: University of Maryland Doctoral dissertation.

Goro, Takuya. 2024. Cross-linguistic variation in the scope of disjunction: Positive polarity, or anti-reconstruction? In Hideki Kishimoto, Osamu Sawada & Ikumi Imani (eds.), *Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons Between Japanese and Other Languages*, 225–258. Berlin: De Gruyter Mouton.

Kitagawa, Yoshihisa & Janet D. Fodor. 2003. Default prosody explains neglected syntactic analyses in Japanese. In William McClure (ed.), *Japanese/Korean Linguistics 12*, 267–279. Stanford, CA: CSLI Publications.

Kitagawa, Yoshihisa & Janet D. Fodor. 2006. Prosodic influence on syntactic judgements. In Gisbert Fanselow, Caroline Féry, Matthias Schlesewsky & Ralf Vogel (eds.), *Gradience in Grammar: Generative Perspective*, 336–354. Oxford/New York: Oxford University Press.

Shibata, Yoshiyuki. 2015. Negative structure and object movement in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 24. 217–269.

P-2　遊戯王のネーミングにおける音象徴のパターン

―モンスターの名前とレベルの相関関係について―

杜　乃岩[1]　　平田　歩[1]　　張　士毅[2]

梅光学院大学[1]　　レスター大学[2]

本研究では「遊戯王☆５D’s」(以下、遊戯王５DS) のモンスターの名前にみられる音象徴のパターンについて調査を行い、モンスターの名前の音韻的特徴とレベルの相関関係について分析を行った。

現代言語学の確立以来、恣意性は人間の言語の中核をなす１部分と考えられている (Saussure, 1915)。しかし、Shih ら (2018) の指摘にあるように、恣意性は人間の言語に大きな表現力と柔軟性もたらしている反面、制約もあるため、言語の音のパターンが意味を持ったり特定の概念や感覚を想起させたりすることも少なくない。結果として多くの場合、対象物への名づけは任意ではなくなった (Blasi et al., 2016; Shinohara & Kawahara, 2010; 他)。そしてこのような言語の非恣意的な側面を表すために**音象徴**という用語が作られた (Ohala, 1994) 。

音象徴は、複数の語族の複数の言語からすでに証明されている(例 Aoki, 2006; Childs, 2006)。ただ、人類の社会・文化などの非言語的要因の影響を受ける可能性があり言語知識システムの一部として音象徴が存在するということは断言できない。この懸念を解決する試みとして先行研究では、ポップカルチャーに基づいたコーパスが用いられてきた。例えば、Kawahara ら (2018) では、ポケモンの 2016 年までに出た 700 を超える全てのキャラクターの名前を調査し、キャラクターの進化レベルはモーラ及び有声阻害音の数と相関があることを明らかにした。ポケモンを代表例にして日本アニメの制作過程を追跡することができれば、非言語的要因の影響の有無や方向性が明らかになる可能性がある。しかし、ポケモンアニメにおけるこのような発見は、統計分析を行う際の独立性 (independence) の仮定に反している。つまり同一の起源から進化するキャラクターの場合、本質的にキャラクター同士につながりがあるという点を考慮する必要がある。このようなことから本研究ではキャラクターの独立性に着眼点を置き、進化しないキャラクターが登場する「遊戯王 5DS」を用いることにした。「遊戯王 5DS」ではキャラクターとなるモンスターは意味(この場合では″強さ″)に基づき特定のレベルに割り当てられ進化しない。この点がポケモンとの大きな相違点となる。もう一つ「遊戯王☆５D’s」を使用する理由に、遊戯王シリーズの中で最も人気の作品だからということも加えたい (Reddit, 2022； アキバ総研, 2022； ねとらぼ, 2021； 知乎, 2018)。メディア研究の知見を応用すると、人気の高い作品はより多くのデータが収集でき、多くの人の感覚 (この場合は言語知識) が反映できる。(Seawright & Gerring, 2008)。本研究の調査結果でも、Kawahara ら (2018) で明らかになった体系的な相関関係を裏付けることができた。

背景 「遊戯王５DS」は複数のプレイヤーがモンスターを操作して戦う戦略的デュエルシステムを取り入れたアニメである。各モンスターには、攻撃力、防御力、およびいくつかの特殊効果が設定されており、戦力によってモンスターのレベル判定が設定されている。このレベルは、まさに″強さ″という意味の度合いを表す指標となっている。アニメは 4 つの章に分かれており各章の間でのレベル分けの矛盾を避けるために、今回の研究では第 1 章 (全 26 話) に登場するモンスターのみを調査の対象とした。分析したモンスターの総数は 214 種である。

分析　Kawahara ら (2018) の研究を参考にし、有声阻害音の数と韻律 (モーラ) の長さについて検証した。

結果　214 種のモンスターを分析した結果 を図 1 と図 2 に示す。 図 1 はモンスターのレベルが有声阻害音の数に与える影響を示している。線形回帰直線は相関が正であることを示しており、これは non-parametric Spearman correlation analysis ($\rho = 0.25$、$p < 0.02$) によって有意であることが証明された。図 2 は、レベルが韻律 (モーラ) 長さに与える影響を示している。ここでも、線形回帰直線は正の相関を示しており、これは Spearman analysis でも有意であることが証明されている ($\rho = 0.28$、$p < 0.01$)。

結論　本研究でも Kawahara ら (2018) と同様の結果が得られた。さらに本研究では、キャラクターの独立性 (independence) の問題を解決した上でアニメのキャラクター名のような比較的大規模なデータの中にも音象徴のパターンがあるということを裏付けることができた。

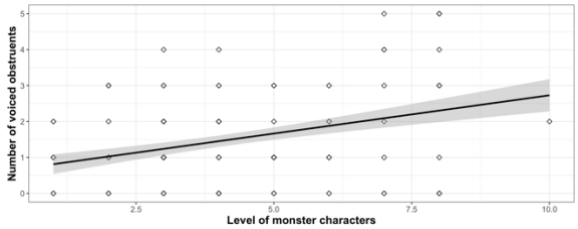


図 1： 線形回帰直線による「有声阻害音の数」と「レベル」の分布

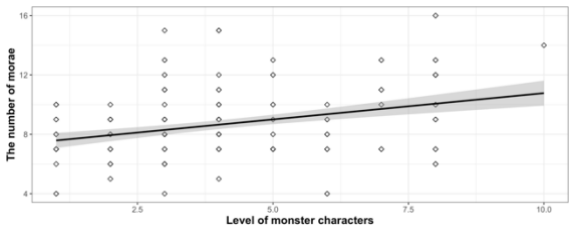


図２： 線形回帰直線による「モーラの数」と「レベル」の分布

References

Aoki, H. 2006. Symbolism in Nez Perce. In Leanne Hinton, Johanna Nichols & John J. Ohala (eds.) *Sound Symbolism*, 15–22. Cambridge University Press.

Blasi, D. E., Wichmann, S., Hammarström, H., Stadler, P. F., & Christiansen, M. H. (2016). Sound–meaning association biases evidenced across thousands of languages. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, *113*(39), 10818–10823.

Childs, G. T. 2006. African ideophones. In Leanne Hinton, Johanna Nichols & John J. Ohala (eds.) *Sound Symbolism*, 178–204. Cambridge University Press.

De Saussure, F. (1915). *Course in general linguistics*. New York: McGraw Hill.

Dingemanse, M., Blasi, D. E., Lupyan, G., Christiansen, M. H., & Monaghan, P. (2015). Arbitrariness, iconicity, and systematicity in language. *Trends in Cognitive Sciences*, *19*(10), 603–615.

Kawahara, S., Noto, A., & Kumagai, G. (2018). Sound symbolic patterns in Pokémon names. *Phonetica*, *75*(3), 219–244.

Ohala, J. J. (1994). The frequency code underlies the sound-symbolic use of voice pitch. *Sound Symbolism*, *2*, 325–347.

Reddit (2022) *Which Is Considered The Best Yu-Gi-Oh Anime?* URL: https://www.reddit.com/r/yugioh/comments/w88ic5/which_is_considered_the_best_yugioh_anime/（参照 2024-9-18）

Seawright, J., & Gerring, J. (2008). Case selection techniques in case study research: A menu of qualitative and quantitative options. *Political research quarterly*, *61*(2), 294-308.

Shih, S. S., Ackerman, J., Hermalin, N., Inkelas, S., & Kavitskaya, D. (2018). Pokémonikers: A study of sound symbolism and Pokémon names. *Proceedings of the Linguistic Society of America*, *3*, 42-1.

Shinohara, K., & Kawahara, S. (2010). A cross-linguistic study of sound symbolism: The images of size. *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, *36*(1), 396–410.

アキバ総研(2022) *遊戯王のアニメシリーズで好きな作品ランキング*
URL: https://akiba-souken.com/vote/v_5210/（参照 2024-9-18）

ねとらぼ(2022) *【遊☆戯☆王】アニメシリーズ人気ランキング TOP8！第 1 位は「遊☆戯☆王 5D’s」に決定！【2021 年最新投票結果】*
URL: https://nlab.itmedia.co.jp/research/articles/198837/（参照 2024-9-18）

知乎(2018) *游戏王系列动画中，哪一版最好看？请附带理由。*
URL: https://www.zhihu.com/question/30222448（参照 2024-9-18）

P-3

日本語における「～たち」の獲得と構造依存性

杉崎　鉱司 ・ 佐藤　未菜 ・ 髙嶋　結帆 （関西学院大学）
sugisaki@kwansei.ac.jp

本研究の目的は、日本語を母語とする幼児が「連合複数」を示す「～たち」が付加された名詞句に対して成人と同質の解釈を与えうることを実験により示し、それをもとに、幼児の母語知識が構造に依存するという主張（Crain & Nakayama 1987, Gualmini & Crain 2005 など）に対して日本語獲得からの新たな証拠を提示することである。

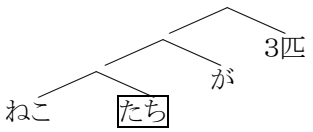
英語の複数標識である*-s* が付加された名詞句は同類の集合を示す「同質複数」(additive plural)として解釈されるのに対し、日本語の複数標識である「～たち」が付加された名詞句は、同質複数としての解釈に加え、同質ではない集合を示す「連合複数」(associative plural)としての解釈も可能である。 例えば、(1)の文は、「3匹のねこがお昼寝している」という解釈に加え、「ねこ1匹とその他の動物（例えば犬）2匹の計3匹がお昼寝している」という解釈も可能である。

(1)　ねこたちが3匹お昼寝している。　OK 同質複数　OK 連合複数

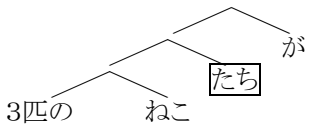
(2)　3匹のねこたちがお昼寝している。　OK 同質複数　* 連合複数

しかしながら、Ochi (2012) は、(2)のように数量詞が属格を伴って修飾対象である名詞句の直前に現れた場合、「～たち」に対して連合複数の解釈は許容されず、同質複数の解釈のみが可能という事実を観察している。Ueda & Haraguchi (2008)に基づくと、(1)と(2)の解釈の違いは「3匹」という数量詞と「～たち」が占める構造的位置の違いを反映したものと考えられる。(1)では、(3)に示されるように、数量詞「3匹」は「～たち」が付加された名詞句を修飾しているのに対し、(2)では、(4)に示されるように、「3匹」は名詞句「ねこ」と併合されて句を形成し、その名詞句全体に「～たち」が付加されている。そのため、(4)では、「3匹のねこ」という名詞句から生じる同質複数の解釈のみが可能となる。

(3)



(4)



もし日本語を母語とする幼児が(1)のような文に対しては連合複数の解釈を与える一方で(2)のような文に対してはその解釈を与えないことが判明すれば、幼児が(3)と(4)に示された「～たち」の構造的位置の違いに関してすでに成人と同質の知識を持つと主張することができる。そのため、本研究では、15名の日本語を母語とする幼児（5;04～6;04 平均年齢 5;09）を対象とした実験を実施し、これらの幼児が(1)と(2)のような文に対して連合複数の解釈を許容するか否かについて調査を実施した。実験で用いられた調査法は真偽値判断法(Crain & Thornton 1998)である。この調査法における幼児の課題は、パソコン上で一連の絵を見ながらお話を聞き、お話の後に人形によって提示されるテスト文の真偽をお話の内容に照らして判断することである。実験では、(4)から(6)に提示されたような3種類のテスト文が用意され、それらを5名ずつの幼児に4文ずつ提示することで、それぞれの種類の文に対して幼児が連合複数の解釈を許すかどうかについて調査を行った。結果は表1のとおりである。

(4)　ぶたさんたちが3匹かけっこしたよ。　成人の判断:　OK連合複数

(5)　3匹のぶたさんたちがかけっこしたよ。　成人の判断:　*連合複数

(6)　ぶたさんが3匹かけっこしたよ。　成人の判断:　*連合複数

	(4) ～達が3匹	(5) 3匹の～達	(6) ～が3匹
連合複数の解釈を許容した反応数	15/20	1/20	2/20
連合複数の解釈を許容した割合	75%	5%	10%

表1　幼児を対象とした実験の結果

表1が示す通り、幼児は、(4)に対しては連合複数の解釈を許容する傾向が強いのに対し、(5)に対してはその解釈をほとんど許容しなかった。もしこの違いが「～たち」の有無および構造的位置ではなく、数量詞「3匹」が修飾対象の名詞句の直前にあるか直後にあるかという左右関係に基づいて生じているのであれば、幼児は(4)と同様に数量詞が修飾対象の名詞句の直後に現れている(6)に対しても連合複数の解釈を与えるはずである。実際には、幼児は(6)に対しては連合複数の解釈をほとんど許容しなかった。したがって、日本語を母語とする幼児から得られた結果は、幼児が(3)および(4)に示された「～たち」の構造的位置の違いに関してすでに成人と同質の知識を持つことを示唆しており、この発見は幼児による「～たち」を含む文の解釈が構造に依存していることを明らかにするものと言える。

References

Crain, Stephen, and Mineharu Nakayama. 1987. Structure Dependence in Grammar Formation. *Language* 63: 522-43.

Crain, Stephen, and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics.* Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Gualmini, Andrea, and Stephen Crain. 2005. The Structure of Children's Linguistic Knowledge. *Linguistic Inquiry* 36: 463-474.

Ochi, Masao. 2012. Universal Numeric Quantifiers in Japanese. *Iberia: An International Journal of Theoretical Linguistics* 4.2: 40-77.

Ueda, Yasuki, and Tomoko Haraguchi. 2008. Plurality in Japanese and Chinese. *Nanzan Linguistics: Special Issue 3, Vol. 2*: 229–242

P-4

分裂文における属格主語の生起に関して

森竹 希望 (九州大学/日本学術振興会特別研究員 (PD))・前田 雅子 (九州大学)

【先行研究と問題】本発表では、日本語の分裂文における属格主語の生起可能性を議論する。三原・平岩 (2006) は日本語の分裂文 (=(1b)) は、いわゆる「のだ」文 (=(1a)) から派生すると分析したが (Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012 も参照)、そもそも基底となる「のだ」文において属格主語の生起が許されないため、それから派生した分裂文でも属格主語の具現化が許されないと主張した。

(1) a. 花子と一緒に太郎 {が/*の} 来たのだ。 b. [太郎 {が/*の} 来た の] は 花子と一緒に だ。 (三原・平岩 2006: 331)

Murasugi (1991) や Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) 等も属格主語を含む分裂文は容認度が非常に落ちるか非文法的と指摘している。

Hiraiwa & Ishihara (2012) は、(i) 多重焦点が許される、(ii) 焦点句となる要素が格もしくは後置詞を伴う、(iii) 前提節の「の」が代名詞等で置き換え不可能、そして (iv) 主格属格交替が許されないという特徴を分裂文が持つと分析した。

しかし Hiraiwa (2005) や Nambu (2012) は分裂文において属格主語が具現化可能な例も示している。(2) は焦点句「あの公園」が後置詞である「で」を含んでいることから、(ii) の特徴を満たし分裂文と考えられるが、属格主語が認可される。

(2) [この間 子供たち {が/の} 遊んだ の] は あの公園で だ。 (Nambu 2012: 223)

更に、(3) は (ii) と (iii)、(4) は (i)、(ii)、(iii) を満たしており、分裂文と見なし得るはずであるが、属格主語の生起が認められる。

(3) a. [あんたが 用 {が/の} ある の] は たかしの方に でしょ。
b. [あんたが 用 {が/の} ある の/*人/*やつ] は たかしの方に でしょ。

(4) a. 昨日は退勤後に 3 軒回ったが、[最初に 直哉 {が/の} 食べた の] は 馬刺しを 居酒屋で だ。
b. 昨日は退勤後に 3 軒回ったが、[最初に 直哉 {が/の} 食べた の/*もの/*場所] は 馬刺しを 居酒屋で だ。

(2)～(4) が示すように、Hiraiwa & Ishihara (2012) が提案した分裂文の特徴のうち (i)～(iii) を満たすため分裂文と考えられる文においても、属格主語が表出することは可能である。従って、依然として分裂文において属格主語が生起できるのか否かについては議論の余地がある。更にもし分裂文において属格主語が生起可能であるなら、何が属格の具現化を担っているか解明する必要がある。

【属格主語の分布とその問題】日本語における属格主語は名詞性を持つ従属節内部にのみ現れることができると指摘されている (井上 1976; Saito 1982; Miyagawa 1993, 2011; Ochi 2001; Maki & Uchibori 2008 他)。例えば、(5a) は名詞「知らせ」に埋め込まれた文であるため主格属格交替が許されるが、(5b) の従属節は補文標識「と」に埋め込まれているため主格属格交替は不可能である。

(5) a. [昨日 パリに 日本代表 {が/の} 到着した] 知らせ b. [[昨日 パリに 日本代表 {が/*の} 到着した] と] 知らされた。

従って、本発表でも名詞性が属格付与に密接に関与していると想定する。また、Watanabe (1996) や Miyagawa (2011)、越智 (2016)、西岡 (2022) 等が主張するように、(6) の対比が示すように属格主語は vP 内部に留まらなければならないと想定する。

(6) a. [$_{TP}$ 生徒たち {が/??の}$_i$ 愚かにも 昨日 [$_{vP}$ t_i 暴れた]] こと (が報道された)。
b. [$_{TP}$ 愚かにも 昨日 [$_{vP}$ 生徒たち {が/の} 暴れた]] こと (が報道された)。 (越智 2016: 160)

しかし、属格主語が vP 内部に留まらなければならない理由は十分に分析されていないため、説明すべき事象として残っている。

【提案と分析】上述したように、属格主語が現れる文は名詞性を持つ主要部に埋め込まれていることに鑑み、本発表では分裂文の「の」が verbal な C 主要部だけでなく、Hiraiwa (2005) を援用し、名詞性を持つ C 主要部、より具体的に言えば名詞性を持つ Fin 主要部 (nominal Fin head) としても機能できると提案する。これは、他言語においても同じ Fin 主要部が verbal Fin と nominal Fin の二つに分けられる場合もあることから (Rizzi 2006; Rizzi & Shlonsky 2007)、日本語における分裂文の「の」もそのパラダイムに当てはまる可能性があると主張することは理論的に差し支えない。

さらに、本発表では属格の具現化についても考察する。Marantz (1991) や Baker & Vinokurova (2010)、Baker (2015) が提示する属格は名詞性を持つ節の中でのみ生じる無標の格であるという分析を発展させ、下記 (7) のように提案する。

(7) 日本語における属格は名詞性を伴う節におけるデフォルト格として名詞句に伴って発音される。

また、Moritake (2024) に従い、(i) デフォルト格は統語部門において名詞句が持つ [*u*Case] が与値されずに Sensorimotor (SM) interface に送られた場合、発音される際に具現化する形態格であり、(ii) 統語部門で移動した名詞句は、それが持つ少なくとも一つの値が未指定の素性 (unvalued feature) に与値されない限り認可されないと想定する。本提案に基づくと、名詞性を伴う主要部を持つ節内部に存在する主語の [*u*Case] が与値されていない場合、SM interface に送られた後で主語が属格を伴って発音されることになる。Moritake (2024) の提案に基づくと、最終的には属格主語として具現化する [*u*Case] を与値されていない名詞句が (8a) のように統語部門で移動した場合は認可されないため、(8b) のように基底生成位置に留まることが予測される。実際 (6) で示したように、属格主語が移動すると非文法性を導くが、本発表では、その理由は属格主語が移動すると名詞句認可されないためであると提案する。

(8) a. *[… 属格主語$_{[uCase]}$ … [$_{vP}$ … ~~属格主語$_{[uCase]}$~~ …]] (取り消し線は移動元のコピーを示す) (名詞句認可✗)
b. [$_{vP}$ …. 属格主語$_{[uCase]}$ …] (名詞句認可✓)

更に (4a) の分裂文において「直哉の」が副詞の前に移動すると非文法的となることから (=(9))、本分析は経験的に支持される。

(9) *昨日は退勤後に 3 軒回ったが、[直哉の$_i$ 最初に t_i 食べた の] は 馬刺しを 居酒屋で だ。

また、(1b) は副詞等を「太郎の」の前に置き、主語が vP 内部に留まっていることを明確にすると容認可能となる (=(10))。

(10) [昨日 学校に 太郎の 行った の] は 花子と一緒に だ。

まとめると、分裂文において属格主語が生起できるのは、(i) 名詞性を持つ C (nominal Fin head) が用いられ、(ii) 属格主語が vP 内部に位置していると解釈しやすい場合のみであることがわかる。

【参考文献】

Baker, Mark (2015) *Case: Its Principles and Its Parameters*, Cambridge University Press, Cambridge.

Baker, Mark and Nadya Vinokurova (2010) "Two Modalities of Case Assignment: Case in Sakha," *Natural Language and Linguistic Theory* 28, 593–642.

Harada, Shinichi (1971) "*Ga-No* Conversion and Idiolectal Variations in Japanese," *Gengo Kenkyu* 60, 25–38.

Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) "Missing Links: Cleft, Sluicing, and *"No da"* Construction in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 35–54.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2012) "Syntactic Metamorphosis: Clefts, Sluicing, and In-Situ Focus in Japanese," *Syntax* 15:2, 142–180.

井上 和子 (1976) 『変形文法と日本語 上–統語構造を中心に–』, 大修館書店, 東京.

Maki, Hideki and Asako Uchibori (2008) "*Ga/No* Conversion," *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 192–216, Oxford University Press, Oxford.

Marantz, Alec (1991) "Case and Licensing," *ESCOL* 91, 234–253.

三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造：ミニマリストプログラムとその応用』, 松柏社, 東京.

Miyagawa, Shigeru (1993) "Case, Agreement, and *Ga/No* Conversion," *Japanese/Korean Linguistics* 3, 221–235.

Miyagawa, Shigeru (2011) "Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase," *Lingua* 121, 1265–1282.

Moritake, Nozomi (2024) "Two Types of Nominal Licensing Conditions," *English Linguistics* 40, 112–152.

Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Nambu, Satoshi (2012) "Japanese Genitive Subject: A Comparison with Uygur," *Online Proceedings of GLOW in Asia Workshop for Young Scholars 2011*, ed. by Koichi Otaki, Hajime Takeyasu, and Shin-ichi Tanigawa, 217–231, Mie University, Mie.

西岡 宣明 (2022) 「日本語の v*P 主語とラベリング」, 『言葉の様相–現在と未来をつなぐ–』, 島越郎 他 (編), 68–81, 開拓社, 東京.

Ochi, Masao (2001) "Move F and *Ga/No* Conversion in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247–286.

越智 正男 (2016) 「名詞句修飾節における格の交替現象」, 『日本語文法ハンドブック』, 村杉恵子 他 (編), 146–188, 開拓社, 東京.

Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects," Wh-*Movement: Moving on*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 97–133, MIT Press, Cambridge, MA.

Rizzi, Luigi and Ur Shlonsky (2007) "Strategies of Subject Extraction," *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 115–160, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.

Saito, Mamoru (1982) "Case Marking in Japanese: A Preliminary Analysis," Ms., MIT.

Watanabe, Akira (1996) "Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.

P-5

聞き手を主語としない日本語命令文についての記述・理論的研究

井川詩織　（藤女子大学）shiori.ikawa@fujijoshi.ac.jp

形態的なφ素性の一致を示さない日本語のような言語において人称をどう位置付けるかは、理論的に重要な問題である（Miyagawa, 2010, 2017 a.o.）。本発表は、日本語における人称素性の位置づけの分析に貢献する目的で、「命令文の主語が聞き手でなければならない」という人称制限を扱う。具体的には、(i) この制限がどのような場面で解除されるかを記述し、(ii) その観察に Miyagawa (2017)のφ素性とδ素性に関する提案の観点から理論的説明を与える。

背景　様々な言語において、命令文では主語が聞き手を指していなければならないという人称制限が存在する（Zanuttini, 2008 a.o.）。日本語でも、例えば(1)のような命令文は、（たとえ「花子」のような形態的には３人称の名詞句が主語であったとしても）主語が聞き手を指しているという解釈のみが可能である（Hasegawa, 2017）。

(1) {∅/お前は/花子は} 部屋を掃除しろ/しなさい/してくれ

しかしイタリア語においては、動詞の形態が命令形ではなく接続法の形をとる命令文においてのみ、この制限が解除されることが指摘されている(Zanuttini, 2008; Zanuttini et al., 2012)。例えば動詞 *sia* が接続法の形をとる(2)の命令文においては、聞き手である子供たちを指す名詞句ではなく tutto “everything”を主語とすることができる。

(2) Ragazzi, che tutto sia in ordine quando torno questa sera!
Kids, that all be in order when return this evening
“Kids, everything be in order by the time I get back this evening!” （Zanuttini et al., 2012: 1250）

そこで本発表では、日本語において聞き手を主語としない命令文がどのような場合に可能であるかを分析する。

聞き手を主語としない命令文の分布　本発表の記述的目標として、日本語では２種類の環境で聞き手を主語としない命令文が可能であると示す。第一に、イタリア語と同様、接続法と分析される「～ように」という形の命令文において聞き手以外を指す主語が可能である((3a))。なお同一の文脈で、非接続法命令文は聞き手以外の主語を許さない((3b))。

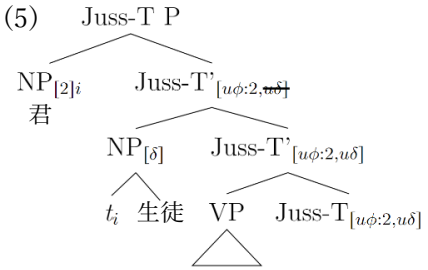
(3) （門番に向かって） a. 中の客が全員 10 時までに帰るように
b. *中の客が全員 10 時までに帰れ/帰りなさい/帰ってくれ

だがそれに加えて日本語では、非接続法命令文においても (i)主語が聞き手を指す所有者を含み、かつ、(ii)主語が主題あるいは焦点といった談話的な役割を担っている場合に、聞き手以外を指す主語が許される。例えば(4)では、主語に「君の」という所有者が含まれており、かつ、主語が「誰が答辞を読むべきか」という問いへの答、つまり焦点となっている。このため、(4)は非接続法命令文であるにもかかわらず、聞き手以外を指す主語が許されている。なおイタリア語においては、これらの条件を満たす場合でも、非接続法命令文では聞き手以外を指す主語は許されない。

(4) （文脈：職員会議にて、誰が今年の答辞を読むかが議論されている。学年主任が鈴木先生に向かって）
（今年は）君の生徒が答辞を読め/読みなさい/読んでくれ

理論的分析　本発表の理論的目標として、なぜ日本語ではイタリア語と異なり、(4)のような例において聞き手以外を指す主語が許されるのかを分析する。Miyagawa (2017)は、φ素性と並んで主題や焦点といった素性（δ素性）がC領域で導入され、日本語では（イタリア語（Jiménez-Fernández & Miyagawa, 2014）とは異なり）φ素性ではなくδ素性が T に継承されると主張する。そこで本発表は、(4)に見られる日本語のふるまいはこの性質に起因すると提案する。

イタリア語を扱う Zanuttini et al. (2012)によると、命令文は一致を要求する２人称のφ素性をもった主要部 Juss を含み、非接続法命令文ではそれが T と融合することで Juss-T となる。彼女らによれば、１つの主要部においてφ素性は１つまでしか許されず、この２人称素性のみが Juss-T から探査を行い構造上最も近い主語と一致するため、主語に２人称制限が課せられる。非接続法命令文に対するこの分析と、T にφ素性ではなくδ素性が継承されるという日本語の性質を踏まえると、日本語の非接続法命令形では Juss-T 上に２人称素性とδ素性の両者が探査子として存在することになる。このため日本語の Juss-T は、まずδ素性を持った名詞句（=主題/焦点）を Juss-T P 指定部に誘引できる。この名詞句が所有者を含む場合、そこから非顕在的に所有者繰り上げが起こる（Kishimoto, 2013）。この結果、Juss-T P の指定部に聞き手を指す所有者が生起し((5))、それと Juss の２人称素性が一致することで(4)が可能になると分析する。

(5)


参考文献

Hasegawa, N. (2017). Modality. In M. Shibatani, S. Miyagawa & H. Noda (eds.), *Handbook of Japanese Syntax*. pp. 371-402. Berlin: Mouton De Gruyter

Jiménez-Fernández, Á. L., & Miyagawa, S. (2014). A feature-inheritance approach to root phenomena and parametric variation. *Lingua*, *145*, 276-302.

Kishimoto, H. (2013). Covert possessor raising in Japanese. *Natural Language & Linguistic Theory*, *31*, 161-205.

Miyagawa, S. (2010). *Why agree? Why move?: Unifying agreement-based and discourse-configurational languages*. MIT Press.

Miyagawa, S. (2017). *Agreement beyond phi*. MIT Press.

Zanuttini, R. (2008). Encoding the addressee in the syntax: Evidence from English imperative subjects. *Natural Language & Linguistic Theory*, *26*, 185-218.

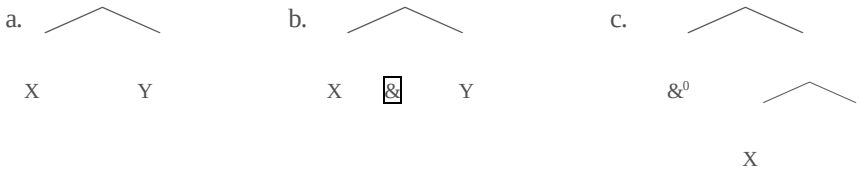
Zanuttini, R., Pak, M., & Portner, P. (2012). A syntactic analysis of interpretive restrictions on imperative, promissive, and exhortative subjects. *Natural Language & Linguistic Theory*, *30*, 1231-1274.

P-6 等位接続詞の音声的具現化の類型論的説明に向けて

塩原佳世乃

本論文は名詞句等位構造の類型について、(i)久保(2017)が仮定する(1)の三段階の進化と、(ii)Mithum (1988), Whaley (2011), Stassen (2010, 2013) などで議論される(2a,b)の comitative strategy から(2c)の coordinating strategy への変化という二種類の通時的変化を、(3)に整理される等位接続詞(&)の音声的具現化という共時的な観点から合わせて分析する。その結果、名詞句の等位構造の類型(3a-c)が言語の音韻的類型により説明が可能であるという方向性を示す。

(1)



（久保 2017:47(344)、一部改変）

(2) a. [John] went to the store [with Mary]. [タロウは]（昨日）[アキコと]その店へ行った。

b. [John with Mary] went to the store. ———

c. [John and Mary] went to the store. [タロウとアキコ]はその店へ行った。

(3) a. asyndeton X Y b. monosyndeton X & Y c. polysyndeton X & Y &

まず(i)について、本論文は久保 (2017)の提案をより精緻化し、(1c)の第三段階にある言語では、等位接続詞が独立した統語的機能範疇として主要部($\&^0$)を占めるのに対し、(1b)の第二段階にある言語では等位接続詞が音韻論的 LINKER&となっているが統語範疇として文法化されておらず、ポーズのような韻律境界と交替し、(1a)のような juxtaposition（並置）の名詞句等位構造、つまり(3a)の asyndeton が可能であると主張する。この主張によると、英語は前者に属し、(1c)の統語構造は例えば FORM SEQUENCE (Chomsky 2021, Shiobara 2023)の操作により‘*X and Y*’と音声化されると分析できる。一方日本語は後者に属し、&は助詞‘*と*’としてもポーズとしても音声化が可能、つまり名詞句等位構造は (3b)の monosyndeton ‘*X と Y*’に加え(3a)の asyndeton ‘*X, Y*’も可能であるという事実が導かれる：

(4) a. [John and Mary] (went to the store.) / *[John, Mary] (went to the store.)
b. [ジョンとメアリ]（はその店に行った。） / [ジョン、メアリ]（はその店にいった。）
(関連するデータと議論について Shiobara 2019, 2022, 2023, 2024 を参照。)

そして(1)の３つの類型について、Zwart (2009)が議論するように、真の等位接続において等位接続詞&は普遍的に“２つめの等位項 Y の左端”をマークするという役割を持つ、そしてその意味において等位接続は普遍的に“非対称的である” (Zwart 2009:1598, citing Haspelmath 2007, sec.2.2)と考える。しかし統語構造(1c)においては主要部&は等位項 Y の左端にはない。またそもそも統語構造は線的順序には言及しないという前提に立つと、この非対称性は本質的には音韻的非対称性ということになる。本論文はさらに、日本語と同様に(simple or complex) tone system を持つアイヌ語やタイ語(Maddieson 2013)が、日本語と同様に(3b)のみならず(3a)の名詞句等位構造を許容することを指摘し(Shibatani 1991:22 for Ainu, Thai informant 2024 for Thai)、これらの言語は日本語と同様(1b)の段階にあり、それはレキシコンで明記された韻律特性が等位構造の非対称性を保証することにより(1c)のような非対称的な等位構造を得る必要がないからであると主張する(Shiobara 2024)。

次に(ii)の変化に関連して Stassen (2013)は、日本語の polysyndeton coordination の例(5b)について、comitative marker である‘*と*’が二重に生起して２つの名詞句が等位となっていることを示している、つまり(5b)が comitative strategy(5a)から coordinating strategy への変化の名残りであることを指摘している。

(5) a. [タロウは] [アキコと]奈良へ行きました。 b. [タロウとアキコと]は奈良へ行きました。

これに対し、本論文は(5b)のような polysyndeton は(ii)の変化とは独立して分析すべきであると主張する。その理由として、日本語には上記(2b)に対応する例がないこと(*[*タロウアキコと*]*は*…)、日本語では‘AND’’WITH’共に‘と’で示されるが(WITH-language)、英語のようにそれらに異なる音声形式をあてる(AND-language)タミル語やベジャ語においても polysyndeton が見られること(Stassen 2013)の二点が挙げられる。これらの言語が(3a)asyndeton を許すかは未調査であるが、これらの(3c) polysyndeton では&が左にある等位項に韻律的に寄りかかるという共通点があり(Stassen2013 の例による)、英語で polysyndeton が許されないのは *and* が proclitic であり、２つめの *and* に後続する韻律語がないから(*‘*X and-Y and*’)と説明できる。

以上、本論文では、名詞句の等位構造の類型(3a-c)が言語の音韻的類型により説明が可能であるという方向性を示した。

参照文献

Chomsky, Noam. 2021. Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go. *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.

Dryer, Matthew S. 2013. Prefixing vs. Suffixing in Inflectional Morphology. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) WALS Online (v2020.3) [Data set]. Zenodo. https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533 (Available online at http://wals.info/chapter/26, Accessed on 2024-08-09.)

Haspelmath, Martin. 2007. Coordination. In: Shopen, Timothy (ed.) Language Typology and Syntactic Description, vol. 2: Complex Constructions (2nd edition), 1-51. Cambridge: Cambridge University Press.

久保善宏. 2017. 「進化言語学から見た多項等位構造」. *九州英文学研究* 23, 41-51.

Maddieson, Ian. 2013. Tone. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) WALS Online (v2020.3) [Data set]. Zenodo. https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533 (Available online at http://wals.info/chapter/13, Accessed on (2024-08-09.)

Mitthum, Marianne. 1988. The Grammaticization of Coordination. In: Haiman, John & Thompson, Sandra A. (eds.) Clause Combining in Grammar and Discourse. Amsterdam: John Benjamins.

Shibatani, Masayoshi. 1990. The Languages of Japan. Cambridge: Cambridge University Press.

Shiobara, Kayono. 2019. Spelling out a Spell-out of an XP-YP Structure: A Case of Coordinate Structure. *JELS* 36, 169-174.

Shiobara, Kayono. 2022. Remarks on Hirose's (2007) Nominal Paths. *Phonological Externalization vol.7*, ed. by Tokizaki, Hisao, 37-50, Sapporo University.

Shiobara, Kayono. 2023. A Phonological Approach to Argument Structure: NPs and PPs. *JELS* 40, 97-102.

Shiobara, Kayono. 2024. Prosodic Asymmetry of Noun Phrase Coordination. *Phonological Externalization vol.9*, ed. by Tokizaki, Hisao, 11-25, Sapporo University.

Stassen, Leon. 2010. AND-languages and WITH-languages. *Linguistic Typology* 4, 1-54.

Stassen, Leon. 2013. Noun Phrase Conjunction. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) WALS Online (v2020.3) [Data set]. Zenodo. https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533 (Available online at http://wals.info/chapter/63, Accessed on 2024-08-08.)

Whaley, Lindsay. 2011. Syntactic Typology. In: Song, Jae Jung (ed.) The Oxford Handbook of Linguistic Typology, 465-486. Oxford: Oxford University Press.

Zwart, Jan-Wouter. 2009. Relevance of Typology to Minimalist Inquiry. *Lingua* 119: 1589-1606.

P-7

終助詞による応答解釈のマニピュレーション

市原 沙弥（津田塾大学 学芸学部）　井原 駿（津田塾大学）

導入 *Yes/no* などの極性助詞 (polarity particles) をはじめとする応答詞 (response particles) は、近年、統語論や意味論、語用論の領域で注目を浴びつつあり (e.g., Krifka 2013, Holmberg 2015, Wiltschko 2018, Maldonado & Culbertson 2023, a.o.)、そのほとんどは、極性疑問文 (polar questions) への応答としての応答詞の使用に焦点を当てている。本研究では、提案 (suggestions) や要求 (requests) に対する応答の方略と解釈に注目する。具体的には、日本語における応答詞「いい」の解釈がそれに付加する終助詞 (sentence-final particles) により制限を受ける現象の説明を試みる。本研究は、共に談話助詞 (discourse particles) である応答詞と終助詞の談話における分業 (division of labor) の解明に貢献する点で、当該分野の発展に寄与する。

観察と問い　応答詞「いい」が提案への応答として使用された際、話し手の命題に対する肯定的評価 (positive evaluation) の解釈（以下「***good* 解釈**」）を持つ場合と、提案の受け入れ (accept) の解釈（以下「***okay* 解釈**」）を持つ場合がある。

(1)　A: この夏休みに京都に行かない？
　　B′: いいね。(≈ *good*) ⇝ *the speaker* ***positively evaluates*** *the content of the suggestion*　[*good* 解釈]
　　B″: いいよ。(≈ *okay*) ⇝ *the speaker* ***accepts*** *the suggestion*　[*okay* 解釈]

特筆すべきは、「いい」に終助詞「ね」が付加された場合は *good* 解釈に、終助詞「よ」が付加された場合は *okay* 解釈に制限される点である。この直感は、それぞれの文に「良い案とは思えないけど」（*good* 解釈と矛盾する）と「断る」（*okay* 解釈と矛盾する）を後続させた際の容認性の差からも確かめられる。

(2)　A: この夏休みに京都に行かない？　B′: いいね。{ # 良い案とは思えないけど | ✓ けど断る }。
　　B″: いいよ。{ ✓ 良い案とは思えないけど | # けど断る }。

さらに状況を複雑にするのは (3) の事実である。すなわち、「いい」が単独で応答詞として用いられた場合は *okay* 解釈は許されず、*good* 解釈のみが可能となる。（紙幅の都合上分析は割愛するが、「しなくてもいい」の解釈も可能である。）

(3)　A: この夏休みに京都に行かない？　B: いい！ (≈ *good*/≉ *okay*)　{ # 良い案とは思えないけど | ✓ けど断る }。

管見の限り、日本語の応答詞と終助詞の相互作用については森山 (2001) など記述的研究を除いては論じられておらず、通言語的にも同様の現象は報告されていない。本研究の目的は、どのようなメカニズムのもと「いい」を用いた発話の解釈が定まるのかを明らかにすることである。

提案と分析 本研究では、「いい」の根源的な意味を "**acceptable**" であるとみなし、**acceptable** は (i) 命題 (propositions) をターゲットとするか (ii) 聞き手が行った発話行為 (speech acts) をターゲットとするかにより異なる語彙記載（lexical entry）を持つ（すなわち意味的に曖昧）と考える。具体的には、以下のような意味を持つと提案する。

(4)　$[\![$ いい $]\!]^c = \lambda\alpha.\textbf{acceptable}_c(\alpha)$, where:

$$\textbf{acceptable}_c(\alpha) = \begin{cases} \text{a. } \textsc{goodness}(\alpha) \geq_c \textsc{stand}(good) \quad \text{if } \alpha \text{ is a contextually salient proposition of type } \langle s,t\rangle. \\ \quad \text{(i.e., } \alpha \text{ is at least as good as some contextual standard to the speaker.) (Mizutani \& Ihara 2021)) } (\approx good) \\ \text{b. } \textbf{confirm}_c(\alpha) \quad \text{if } \alpha \text{ is a speech act (made by the addressee) '}\mathcal{A}(p)\text{' of type } \langle k,k\rangle \text{ (} k \text{ is a context type).} \\ \quad \text{(i.e., the utterance context is updated by confirming the speech act } \mathcal{A}(p) \text{ (Farkas \& Bruce 2010)) } (\approx okay) \\ \text{otherwise undefined.} \end{cases}$$

より直感的には、(4a) は「命題 p は話し手にとって良い (≈ *good*)」ことを表し、(4b) は「話し手は聞き手の行った発話行為 $\mathcal{A}(p)$ による文脈の更新 (update) を受け入れる (≈ *okay*) 」ことを表す。（**confirm**$_c$ の詳細な定義は紙幅の都合上割愛する。）

終助詞「よ」については、近年の研究（Davis 2011, Oshima 2014, Uegaki 2021 など）で採用されている共通認識を採用し、(5) の前提 (presupposition) を仮定する。直感的には、「よ」は発話文 S に付加し、S により解決 (resolve) されるような Question under Discussion (QUD, Roberts 1996) の存在を前提とする。特に、「よ」は聞き手の義務や願望などに関する *teleological* QUD (QUD_{tel}, Rudin 2018) を解決しなければならないと仮定する (Uegaki 2021)。

(5)　$[\![yo(S)]\!]^c$ presupposes that there is an issue $q \in QUD_{tel}$ in c such that q is resolved in an output context c' by virtue of S.

終助詞「ね」についても、近年までの伝統的な見方を採用する。すなわち、主張文 (assertions) における「ね」は、発話文 S の持つ命題 p について聞き手の *discourse commitment* (DC_c^{Ad}, Gunlogson 2001) の一部であることを前提とする (cf. McReady & Davis 2020)。より直感的には、命題 p が聞き手の信念の一部であることが「ね」の基本的な前提となる。

(6)　$[\![ne(S_p)]\!]^c$ presupposes that p is a member of DC_c^{Ad}, i.e. $p \in DC_c^{Ad}$.

本研究では、(1)–(3) のコントラストを QUD の解決 (QUD-resolution) の観点から説明を与える。まず、**[1]「いい」に「よ」が付加する場合**から検討する。(1) の A の発話は提案・勧誘文であり、願望や義務に関わる。よって、ここから生じる QUD は、$QUD_{tel} = \{$ B が京都に行く $\}$ のような teleological QUD である (Rudin 2018)。この発話への応答として、B が *good* の解釈となる「いい」(=(4a)) を利用した場合、発話文は直感的には「B が京都に行くことは良いことである」の評価を主張するに過ぎず、与えられた QUD を解決できないため、「よ」の前提 (=(5)) は満たされ得ない。一方で、B が *okay* の解釈の「いい」(=(4b)) を利用した場合、「いいよ」は A の発話行為による文脈の更新を受け入れ (confirmation) を行うことで QUD を解決でき、ここから「よ」の前提が満たされる。簡潔に言うと、「いい」と「よ」の組み合わせは常に「よ」の前提を満たす必要があり、そのために「いい」の解釈が一方 (=(4b)) に固定されることになる。さらに、(3) において「いい」が単独で用いられる場合に *okay* 解釈の「いい」を利用することができないのは *Maximize Presupposition* (MP, Heim 1991) から説明される。すなわち、(3) における QUD は QUD_{tel} であり、*okay* の「いい」が使われる場合は「よ」の前提が満たされることから、MP の要請により、「よ」は義務的に挿入されなければならず、使われない場合は MP 違反となる。次に、**[2]「いい」に「ね」が付加する場合**、「ね」は *good* 解釈の「いい」が用いられる場合においてのみ前提を満たし得ることがポイントになる。重要なのは、(4a) における「いい」が命題であるのに対して、(4b) における「いい」は文脈をアップデートする発話行為であるという点にある。すなわち、**confirm**$_c(\mathcal{A}p)$（＝発話行為 $\mathcal{A}p$ を受け入れる行為）は非命題的 (non-propositional) な not-at-issue content であり、定義上 DC の一部にはなり得ない。ゆえに、「ね」の前提 (=(6)) を満たすことができる *good* 解釈の「いい」のみが「いい」と「ね」の組み合わせにおいて利用されることになる。さらに、*good* 解釈の「いい」に「ね」が付加されるか否かは単に文脈において「ね」の前提が満たされているか否か（すなわち、聞き手が命題内容について信じているか否か）に依存するため、(3) のような文脈で「ね」の生起は義務的ではない。

参考文献

- Davis, C. 2011. *Constraining Interpretation: Sentence Final Particles in Japanese.* Diss, UMass Amherst.
- Farkas, D. F. and Bruce, K. B. 2010. On reacting to assertions and polar questions. *Journal of semantics* 27(1), 81–118.
- Gunlogson, C. 2001. *True to Form: Rising and Falling Declaratives as Questions in English*. Ph.D. thesis, UCSC.
- Heim, I. 1991. Artikel und Definitheit [Articles and definiteness]. *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung*, 487–535. de Gruyter.
- Holmberg, A. 2015. *The syntax of yes and no*. Oxford: Oxford University Press.
- Krifka, M. 2013. Response particles as propositional anaphors. *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT) 23*, 1–18.
- Maldonado, M. and Culbertson, J., 2023. You say yes, I say no: Investigating the link between meaning and form in response particles, *Glossa: a journal of general linguistics* 8(1).
- Mizutani, K. and S. Ihara. 2021. Decomposing the Japanese deontic modal *hoo-ga ii*. Japanese/Korean Linguistics 28, CSLI Publications.
- Moriyama, T. 2001. Shuujoshi 'ne' no intoneeshon: Shuusei intoneeshon seiyaku no kokoromi [The intonation of the sentence-final particle 'ne': A proposal regarding constraints on correction intonation]. *Bunpoo to onsei* III [Grammar and sound 3], 31–54. Kurosio Publishers.
- Oshima, D. Y. 2014. On the functions of the Japanese discourse particle yo in declaratives. *Formal Approaches to Semantics and Pragmatics: Japanese and Beyond*. 251–271. Springer.
- Roberts, C. 1996. Information structure: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *OSU working papers in linguistics*, 91–136. Ohio State University Department of Linguistics.
- Rudin, D. 2018. *Rising above Commitment*. Ph.D. thesis, University of California Santa Cruz.
- Uegaki, W. 2021. Japanese sentence-final particles, intonation, and the sentential force. handout presented in Japanese and Korean Linguistics 29.
- Wiltschko, M. 2018. Response particles beyond answering. *Order and structure in syntax I: Word order and syntactic structure*, 241–279. Language Science Press.

P-8　モダリティ文：命題表現とモダリティ表現との関係

蒲地賢一郎
志學館大学

様相論理学(Carnap(1947),Lyons (1977),中右(1979))でのモダリティ文は命題部分と心的態度の表現部分とに区別されるが、語用論の観点からみると、両者はモダリティ文の要素として調和していると本研究は議論する。その議論に von Fintel and Gillies(2010)(以下 F&G)の例を引用し、赤塚(1998)の認知スケールで論点に対応する。F&G はモダリティ表現 must を含む文の容認性について次の例を用いている。降る雨を見ている状況で(1a)は適切だが、must を含む(1b)は不自然となる。

(1) [Seeing the pouring rain]

a.　It's raining.　　b.??It must be raining.　　(F&G (2010, p.353))

must を含む文は(2)のような状況だと自然になる。雨具を携えて建物の中に入ってくる人を見たような状況である。

(2) [Seeing wet rain gear and knowing rain is the only possible cause]

a.　It's raining.　　b.　It must be raining.　　(F&G (2010, p.353))

ここで(2a)に注目したい。(2a)はモダリティ表現 must を含む(2b)と全く同じ状況で容認可能である。それならば(2a)もモダリティ文と言えるのではないだろうか。対照的に(1a)は must が使えない状況で容認可能である。ということは、(1a)と(2a)は命題部分が全く同じ形でありながら、語用論的な意味が異なるのではないか。そうであるなら(2b)のモダリティ文は must だけでなく、It be raining の命題そのものにもモダリティの意味が含まれるという可能性が出てくる。

他の言語、たとえば、日本語にも同じような現象があるか見てみよう。次の(3a)は事実を述べる文、(3b)は「のだ」を含むモダリティ文で、ぬれている道路を見て降雨を推量するような状況としてみる。

(3) a.　雨が降った。　　b.　雨が降ったんだ。

(3a),(3b)の命題「雨が降った」は形は同じであるが、言語学的な意味が異なると想定する。別のモダリティ表現を加えたら、両文は異なる振る舞いをするのではないか。法副詞「きっと」を加えてみる。(3a)が事実を述べる文であるなら、推量を表わす「きっと」を加えるのは冗長である。(4a)はいくらか不自然な文である。一方、推量するような状況だと、(3b)に「きっと」を加えても(4b)のように自然な文になる（モダリティの累積効果については中右(1980)参照）。

(4) a. ?きっと雨が降った。　　b.　きっと雨が降ったんだ。

(4)の各文の要素が含むモダリティの意味を仮に記号として示すと、適切な文には要素間の組み合わせに調和が見られる。

(5) a. ?きっと　雨が降った。　　b.　きっと　雨が降ったんだ。
　　modal　non-modal　　modal　modal

この要素間の組み合わせが正しいとするなら、一つの示唆がある。「雨が降ったんだ」という(3b)のようなモダリティ文は、次の(6a)ではなく(6b)が適切かもしれない。と言うのは(6a)の要素間の組み合わせであれば、(5a)と同様に不自然な文になると予測されるからである。一方(6b)は命題そのものにもモダリティの意味が含まれていることを示唆している。

(6) a.　雨が降った　んだ。　　b. 雨が降った　んだ。
　　non-modal　modal　　modal　modal

赤塚(1998)は「発話の場で初めて話し手の意識のなかに入った情報は、たとえ話し手がその場で真と信じても、その瞬間にはまだ非事実である(p.31)」と述べている。以下の(7)では、条件文の前件が、その情報にあたる。この情報は、赤塚(1998)の認知スケール上に表わすと、以下の図(8)の「●」に位置する（図では事実性は 0 から 1 の値をとる）。

(7)　(とても喜んでいる友達を見て)　こんなに喜んでくれるんだったら、もっと早く来ればよかった。　(赤塚 (1998, p.31))

(8)　事実の世界 Realis　　非事実の世界 Irrealis

1 ●　　0

(X であることを知っている)　↑(X だとは、今の今まで知らなかった)　(赤塚 (1998, p.31))

赤塚(1998)を援用してみる。(2b),(3b)の命題が表わす情報は、(8)の「●」の位置と同等ではないのか。命題が事実ではなく、非事実を表わすから、must や「のだ」をさらに加えることができるという説明が成り立つ。

参照文献

赤塚紀子. 1998.「条件文と Desirability の仮説」.『日本語比較選書 3 モダリティと発話行為』.中右実(編).pp.1-97. 研究社.

Carnap, Rudolf. 1947. *Meaning and Necessity*. The University of Chicago Press.

von Fintel, A. and Gillies, A.S. 2010. "*Must*...stay…strong!". *Natural Language Semantics* 18. pp.351-383.

Lyons, John. 1977. *Semantics* 2. Cambridge University Press.

中右実. 1979.「モダリティと命題」.『英語と日本語と：林栄一教授還暦記念論文集』. 林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編).pp.223-250. くろしお出版.

_____. 1980.「文副詞の比較」.『日英語比較講座 第２巻 文法』. 國広哲彌(編). pp.157-219. 大修館書店.

P-9　日本語関係節の派生と島の制約

嘉藤優太（神戸大学大学院生）

［1］**はじめに**：日本語の統語論研究において，関係節は中心的に議論されてきた文法現象の一つである。それは統語論における中心的課題である「移動」が関与していると考えられたためである。英語では，顕在的な関係詞（who 等）の移動が目に見える形で実現する。ここから，日本語関係節においても，そのような移動が存在するとされた。しかしながら，久野（1973）や Murasugi（1991, 2000）に代表されるように，日本語関係節の派生に移動を認めないとする立場が強まって以降，それを前提とした議論が多くなっている（cf. Saito 2004）。特に，久野（1973）の「島の制約」に関するデータは，この仮定を揺るぎないものとしている。しかしながら，そのような先行研究に反して，本研究は，日本語関係節の派生に移動が関与することを示す新たな経験的な証拠を提供する。そして，久野（1973）の島の制約に関するデータにおいても，移動を仮定した上で説明を与えることができる新たな仮説を提案し，その解決を試みる。

［2］**先行研究**：先行研究において，移動の不関与を示す証拠として最も強力なものは島の制約に関するものである。

（1）［［［$\boxed{\text{TP}}$［$_{\text{DP}}$［$\boxed{\text{NP}}$［着ている］$_{\text{N}}$洋服］］が汚れている］］紳士］　（久野 1973，角括弧及びラベル付けは申請者）

複合名詞句「着ている洋服」から「紳士」を抜き出しているにも関わらず「複合名詞句制約」に違反しない。より厳密には，$\boxed{\text{NP}}$と$\boxed{\text{TP}}$の二つの境界接点を同時に跨いで移動しているが，「下接の条件」の違反を引き起こさないのである。

［3］**データと分析**：先行研究において移動を診断するテストは様々存在するが（cf. Miyamoto 2015），関係節における診断もそれらを用いたものが多い。それに対して，本研究は，一見移動操作とは無関係なように思われる焦点化詞「だけ」の焦点化可能性から移動の存否を診断する。岸本（2007）及び Kishimoto（2009）によると，「だけ」の焦点化は統語的な要因によって決まり，「「だけ」の焦点化が可能な要素は付加された要素の最大投射に含まれる構成素（岸本 2007: 30）」である。さらに，「だけ」による焦点化が可能なのは TP 内要素のみである。本研究はまず，この「だけ」の焦点化可能性から，（i）日本語関係節には移動が関与し，（ii）日本語関係節の統語範疇は CP であることを主張する。

（2）a.［［洋服を着ているだけの］紳士］　　b.［［洋服を着ている］紳士だけ］

（2a）では，関係節内の「だけ」は関係節内要素のみを焦点化できる（つまり，それらの要素は関係節 TP 内にある）。しかし，「紳士」は焦点化不可能なので「紳士」は関係節 CP 領域に存在することがわかる。さらに，「だけ」が CP 領域内を焦点化できない事実を基に，（2b）の「だけ」の焦点化可能性からも関係節が CP を有していることが示される。

次に，本研究は（3）に示すデータから，日本語関係節 CP が顕在的（つまり，狭義の統語論で），あるいは非顕在的に（つまり，LF で），関係節の主名詞 DP の指定部まで移動していると提案する（本研究は空演算子 Op を仮定する）。

（3）a.［$_{\text{DP}}$［$_{\text{DP}}$**あの**］［［$_{\text{CP}}$洋服を着ている］［$_{\text{N}}$紳士］］］　　b.［$_{\text{DP}}$［$_{\text{CP}}$洋服を着ている］$_{\text{i}}$［$_{\text{DP}}$［$_{\text{DP}}$**あの**］［t_{i}［$_{\text{N}}$紳士］］］］

ここで，Kishimoto（2020）や三原・平岩（2006）に従い，日本語の決定詞句「あの」は DP 指定部に生起すると仮定する。関係節が主名詞 N に対する付加詞節であるという一般的な仮定も考慮すると，理論的に基底構造は（3a）ということになる。そうすると，（3b）の関係節 CP は NP の付加部から DP 指定部（多重指定部を仮定）まで顕在的に移動した結果ということになる。これを基に，本研究は，顕在的な移動が起こっていない（3a）においても，関係節 CP の非顕在的な移動（つまり，LF 移動）が起こっていると提案する。そうすると，日本語では関係節化には義務的な関係節 CP の DP 指定部までの移動が存在することになる。これを仮定すると，（1）の問題が解決する。紙幅の関係で図示できないが，関係節 CP が NP 節点（（1）の$\boxed{\text{NP}}$）を越えて DP 指定部まで丸ごと移動し，移動要素（（1）の「紳士」）はその関係節内部から移動するため，結果として移動要素は境界節点を一つ（（1）の$\boxed{\text{TP}}$）しか越えないのである。また，この分析は，なぜ英語の関係節化は島の制約の違反を引き起こすのかという問題に対しても「原理的な」説明を与えることができる。日本語と異なり，英語は多重指定部を許さない（Kuroda 1988）。英語の DP 指定部が顕在的または非顕在的な要素によって常に埋まっているとすると，多重指定部を許さない英語では，関係節 CP の移動先が存在しないため，境界節点を同時に二つ以上跨ぐことになってしまう。これにより，英語の関係節化は島の制約の違反を招くのである。

［4］**結論**：本研究の主張及び提案は主に以下の三点である。

（i）日本語における関係節の派生には「移動」が関与している。

（ii）日本語の関係節の統語範疇は CP である。

（iii）日本語の関係節 CP は主名詞の DP 指定部まで義務的に，（顕在的，あるいは非顕在的に）移動している。

参照文献

岸本秀樹（2007）「題目優位言語としての日本語―題目と Wh 疑問詞の階層位置」『日本語の主文現象』，長谷川信子（編）, 26-71, ひつじ書房.

Kishimoto, Hideki. 2009. Topic prominency in Japanese. *The Linguistic Review* 26, 465-513.

Kishimoto, Hideki. 2020. *Analyzing Japanese syntax：A generative perspective*. Tokyo: Hituzi Syobo.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.

Kuroda, Shige- Yuki. 1988. Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. In William Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 103-143. CSLI, Stanford University.

三原健一・平岩健（2006）『新日本語の統語構造』松柏社.

Miyamoto, Yoichi. 2015. Relative clauses. In Shibatani, Masayoshi. Miyagawa, Shigeru. and Noda, Hisashi. (eds.) *Handbook of Japanese syntax*, vol 4. 611-634. Berlin: De Gruyter Mouton.

Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability, and acquisition*. Storrs, CT: University of Connecticut dissertation.

Murasugi, Keiko. 2000. Japanese complex noun phrases and the antisymmetry theory. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 211-234.

Saito, Mamoru. 2004. Genitive subjects in Japanese: Implications for the theory of null objects. In Peri Bhaskararao and K. V. Subbarao. (eds.) *Non-nominative Subjects 2*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 103-118.

P-10　日本語の「文の包摂」と英語の “phrasal compounding” の共通点と相違点

泉大輔（立教大学）daisuke.izumi7@gmail.com　細谷諒太（慶應義塾大学大学院）ryotahosoya@keio.jp

１．問題の所在（目的と背景）

本発表では、「夏までに痩せるぞ！作戦」「早くしろ感」「習うより慣れろタイプ」“less-lecture-more-active-learning approach”“oh-crap-I-forgot-about-that feeling”などの言語現象を「文の包摂／phrasal compounding」と便宜的に名づけ、考察の対象とする。このような用例は、日本語の古典語や他言語でも確認されている（内にも御覧ぜさせよがほ、묻지마살인：尋ねるな殺人＝通り魔、„Kaufe-Ihr-Auto-Kärtchen“：あなたの車買いますカード）。これらは、語の内部に句や文といった語より大きな単位が生起しており、形態的に逸脱した言語現象である。当該の言語現象に関する個別言語の研究には部分的な蓄積があるものの（泉2024、細谷2022、Trips & Kornfilt 2017）、言語間の対照研究は管見の限り見られない。そこで、本発表ではその第一歩として、当該の言語現象の日英比較を行い、その諸特徴を記述する。

２．データ（調査概要と記述的考察）

中核的な資料は、『国語研日本語ウェブコーパス』からの用例（約1.5万件）、および『enTenTen15』からの用例（約6万件）である。補助的な資料は『日本語日常会話コーパス』、YouTube、テレビ番組、ドラマ・映画、TED Talksなどである。日英の用例を比較した結果、以下の特徴が見られた。

観点	特徴
前項	・文法：日本語でも英語でも構造的な制約がない。ただし、個々の後項によって共起しやすい前項の形式および意味的な特徴には傾向が見られる場合もある。 ・表記：日本語でも英語でも、感嘆符、疑問符、引用符の使用が見られ、日本語では鉤括弧、顔文字・絵文字、英語ではハイフン(-)が特徴的に見られる。 ・その他：日本語も英語も、引用表現、諺、成句（格言・名言）、作品名などが出現する。英語では押韻も見られる。
後項	・後項の表す意味に共通性が見られる。例：方策（式、作戦、approach、strategy）、心情（感、feeling、emotion）、類型（タイプ、型、kind）などの意味を表す。 ・英語では固有名詞が現れるが、日本語ではほとんどない。 ・日本語では語種の偏りが見られる。
音韻	・日本語も英語も、後項には比較的短い要素が来る。 ・日本語では、複合語アクセントになり、後項によっては連濁が生じる。 ・英語では前項の一部への強勢付与、前項と後項間のポーズが見られる。
機能	・既存の語では言い表しにくい表現対象を相手にわかりやすいように命名する機能、ユーモア性／リアリティ性／主観表示性／場面喚起性／共感性などの表現効果といった共通点がある。
ジャンル	・ウェブ上のテキストをはじめ、日常会話、広告表現、コメディ、漫才など比較的カジュアルなジャンルに出現しやすいが、シリアス／フォーマルな場面では用いられにくいという共通点がある（英語の場合は新聞にも出現する）。

３．結論（今後の課題・展望）

本研究では日本語と英語の「文の包摂／phrasal compounding」に上記のような共通点と差異があることが明らかとなった。本研究は、伝統的な形態論・統語論では捉えきれない逸脱的な言語現象を考察することで、従来の理論的枠組みに再考を促すという点で意義があると考えられる。今後は記述的・理論的研究を進めると同時に、当該の現象を他言語でも比較・考察していく。

参考文献

泉大輔（2024）『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』，ひつじ書房.
細谷諒太（2022）「あるある的表現としての英語の句複合語」，東京大学言語学論集，*44*，39-59.
Trips, C., & Kornfilt, J. (Eds.). (2017). *Further investigations into the nature of phrasal compounding*. Language Science Press.

P-11

ウクライナ語における「軟らかい」唇子音

渡部直也
w.naoya2821@gmail.com

スラヴ語学では子音の「硬軟」というカテゴリが記述されており、「軟らかい」子音は硬口蓋子音ないし二次的硬口蓋化を伴った子音である（cf. Rubach 2007）。本発表はその中で、ウクライナ語における「硬軟」の体系に焦点を当てる。同言語では歴史的に、「軟らかい」唇子音が「硬化」したと言われ（Shevelov 1979）、系統的に近いロシア語との相違点として記述される。結果として、音節末では非硬口蓋化子音が生じる一方で、音節の先頭では「硬い」子音と[j]の連続として出現する。これは文字表記に反映されており、唇子音の文字の直後に分離記号（アポストロフィ）が付され、それに[j]で始まる母音字（e.g. я [ja]）が後続する。「軟らかい」歯茎子音については分離記号がつかず、硬口蓋化した同子音が出現すると言われている。なお、音節末の「軟らかい」子音には「軟音記号」（ь）が付される。(1)に例を示す。

(1) lʲubo**vja**mi (INST.PL.) lʲubo**v** (NOM.SG.) ‘love’
正書法 любо**в'я**ми любо**в**
ɦostʲ**a**mi (INST.PL.) ɦistʲ (NOM.SG.) ‘guest’
正書法 гос**тя**ми гіс**ть**

このように唇子音は音声的に硬口蓋化しないことから、「軟らかい」同子音はウクライナ語における音素として仮定されていない（Shevelov 1993; Tots’ka 2002）。

本研究ではこのような「硬軟」体系について、音声的実態と理論的解釈の両面から再考する。前者については、母語話者を対象とした録音調査を行った（継続中）。<p+ja> (п’я)の含まれる 5 語および <m+ja> (м’я)の含まれる 6 語の計 11 語を、5 名の母語話者に発話してもらった結果、録音失敗を除くのべ 48 トークンのうち 47 トークンにおいて、唇子音のスペクトログラムに硬口蓋化を示すフォルマントが確認された。すなわち先行研究の記述に反して、唇子音について硬口蓋化ないし「軟らかさ」が音声的に実現される傾向が示された。

音韻理論の観点からまず問題となるのは、母音が後続する環境における[j]の出現の有無について、(2)のように弁別性が認められる点である。(2a)は意味の異なるミニマルペアであるが、より顕著なのは(2b)のような名詞の変化であり、語彙によって変化形で[j]を伴うかどうかの区別がある。

(2) a. **ma**sa ‘mass (NOM.SG.)’ **mja**sa ‘meat (GEN.SG.)’
正書法 **ма**са **м'я**са
b. lʲubo**v** (NOM.SG.) lʲubo**vja**mi (INST.PL.) ‘love’
正書法 любо**в** любо**в'я**ми
cf. le**v** (NOM.SG.) le**va**mi (INST.PL.) ‘lion’
正書法 ле**в** ле**ва**ми

以上の考察から本研究は、ウクライナ語において「軟らかい」唇子音は音韻的に存在していると主張する。音声的には、母音が後続する場合は硬口蓋の調音が拡張することで母音の前に[j]が生じうる一方で、音節末では硬口蓋化子音の出現が制限され「硬い」子音に中和する。音節末での音韻的対立の中和は、有声性をはじめ通言語的に指摘されており、理論的にも自然な現象だと言える。

【参考文献】

Rubach, Jerzy (2007) Feature Geometry from the Perspective of Polish, Russian and Ukrainian. *Linguistic Inquiry* 38: 85–138.

Shevelov, George Y. (1979) *Historical Phonology of the Ukrainian Language*. Heidelberg: Carl Winter. Translated by Serhiy Vakulenko and Andriy Danilenko (2002), Kharkiv: Akta.

Shevelov, George. Y. (1993) Ukrainian. In: Bernard Comrie and Greville G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages*, 947–998. London: Routledge.

Tots'ka, Nina I. (2002) Fonetyka i fonolohija [Phonetics and Phonology]. In: Arnol'd P. Hrishchenko (ed.) *Suchasna ukrains'ka literaturna mova [Contemporary Ukrainian standard language]*, 16–76. Kyiv: Vyshcha shkola.

P-12

肯定極性項目としての日本語のイディオム表現

長谷部　郁子（筑波大学非常勤講師）

本発表では、(1a)に例示する日本語のイディオム表現が(1b)のように否定辞と共起した場合にイディオム解釈が許されない事実に着目し、これらのイディオム表現が、Spector (2014)で議論されている局所的（local）な肯定極性項目（Positive Polarity Item, 以下 PPI）であると主張する。(1b)はたとえば「薄い氷を踏まなかった」のように文字通りに解釈される場合は問題なく、(1c)のように否定辞が節の外側に現れる場合は許容度が改善する。さらに、否定文脈を含意する条件節（van der Wouden (1997), 吉村 (2000)）に PPI が現れることができる事実を Hoeksema (2018; 363)）は指摘しているが、(1d)に示すように、「九死に一生を得る」のような表現は条件節に出現することが可能である。

(1) a. 九死（万死）に一生を得る / 針の穴から天を覗く / 針の穴を通す / 薄氷を踏む / 糠の中で米粒探す

b. *残念ながら九死（万死）に一生を得なかった。（cf. 万死に値する）/ #賢明な彼は {針の穴から天を覗か / 薄氷を踏ま / 糠の中で米粒探さ} なかった。/ *薄氷を踏まない思い / *針の穴を通さないような不正確な制球

c. 残念ながら [九死に一生を得ること] はできなかった。/ 賢明な彼は [[針の穴から天を覗く/ 薄氷を踏む / 糠の中で米粒探す] ようなこと] はしなかった。/ 針の穴を通すような正確なコントロールができない。

d. もし、この過酷な状況で九死に一生を得るならば、私は何でもするだろう。

(1a)の表現に共通して含まれているのは、「九死や万死のうちの一生」や「非常に小さな針の穴」、「すぐに割れそうな薄氷」や「糠の中の米粒」のように、なんらかの「最小値」を表す語句（minimizer）であり、これらの語句は全て、事象の成立の困難さを意味している。Hoeksema (2018; 372)には、minimizer を含む英語の PPI の例として、“can hear a pin drop”（ピン１本が落ちる音が聞こえるほど静まりかえる）が挙げられている。

(2) a. {I/One} could hear a pin drop.　　b. # {Nobody/Few people} could hear a pin drop.

興味深いことに、minimizer には、“not worth a red cent”や「びた一文払わない」における“a red cent”や「びた一文」のように否定極性項目（Negative Polarity Item）として機能するものも存在する（Horn (2001), 五十嵐 (2011)）。

Spector (2014; 11: 3)では、PPI が認可されない条件は(3)のように定義されている。

(3) Anti-licensing: PPIs cannot be interpreted under the immediate scope of a non-embedded sentential negation.

(4) a. Mary does not speak some foreign languages.　　b. There are some foreign languages [that Mary does not speak].

c. [Mary doesn’t speak any foreign languages].　　d. I don’t think [Mary knows someone here].　（(4)の[　]は筆者）

たとえば、PPI である some を含む(4a)は、(4c)ではなく(4b)のように解釈される場合のみ、否定辞 not と同じ節内に生起が可能である。また、局所的な PPI である some は、(4d)のように not が節外にある場合、その影響を受けず原位置で解釈される。(1a)の表現は、(1b)のように否定辞と共起する場合、PPI であるイディオム表現としては解釈されず、極性項目（Polarity Item, 以下 PI）の性質を持たない文字通りの解釈のみが与えられることは(3)から説明され、(1c)のように否定辞が節の外側に現れると許容度が改善する事実は、(1a)のイディオム表現が some と同様、局所的な PPI であると仮定すれば正しく予測される。

ところで、(5)の「水を打ったように」は(2)の“can hear a pin drop”と似た意味を表す日本語のイディオム表現であり、この表現も否定辞と共起した場合はイディオム表現として解釈されないことから PPI であると考えられるが、(1a)の表現と異なり、明示的な minimizer を含まない。「静まりかえる」という意味で用いられる「水を打つ」は、「打ち水により湿った地面から砂埃が舞わなくなる」という意味に由来するが、否定的な結果状態を含意するこの表現は、Hoeksema (2018; 378-381)が「本質的に否定的な（inherently negative）述語」に分類している PPI であると考えられる（(6)を参照）。

(5) 場内は {水を打ったように（静かに）　/*水を打たなかったように（うるさく）　} なった。

（cf. 今日は家の外の地面に {水を打った / 水を打たなかった}。）

(6) 本質的に否定的な（inherently negative）述語（英語）: can whistle for, forget about

本論では、影山 (1993)において V1＋V2 型の統語的複合動詞に分類される「～損なう」もこのタイプの PPI に属すると議論する。V1 が表す事象の不成立を意味するアスペクト表現（影山 (2012, 2013)）である「損なう」は、本質的に否定的な PPI であり（由本 (2005) も参照）、(7)の否定文が許されるのは、「話者がメイン料理を食べられないと思っていること」が予め前提とされた上で、この否定的な前提が実際には命題として成立しないことが明らかになった場合である。

(7) バイキングのメイン料理を [$_{Asp\text{-}P}$ [$_{VP}$ 食べ] 損なわ] なかった。

最後に、本発表では、このような日本語の PPI の事例に関する分析は、PPI のみならず、NPI も含めた PI 研究の発展そのものに繋がると主張する。

参照文献

Hoeksema, J. (2018). “Positive polarity predicates,” *Linguistics*, 56(2), 361-400. https://doi.org/10.1515/ling-2017-0039.

Horn, Laurence R. (2001) *A Natural History of Negation*, 2nd ed., CSLI Publications, Stanford.

五十嵐祐太 (2011)「極性項目の認可条件に関する一考察」,『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』第 20 号, 39-49.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房, 東京.

影山太郎 (2012) 「複合動詞の形態構造と自他交替」国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」における講演（於国立国語研究所）.

影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』, pp. 3-46. ひつじ書房, 東京.

Spector, B. (2014) “Global positive polarity items and obligatory exhaustivity,” *Semantics & Pragmatics*. Vol. 7, Article 11: 1–61. http://dx.doi.org/10.3765/sp.7.11.

van der Wouden, T. (1997) *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation.* Routledge, London.

吉村あき子 (2000) 「日本語の否定環境」,『藤井治彦先生退官記念論文集』, 961-972. 英宝社, 東京.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味統語』ひつじ書房, 東京.

P-13

英語の NP V V-*ing* における動名詞補文の意味上の主語はどのようにして決定されるのか—心理動詞を中心に—

酒井　啓史 (Hirofumi SAKAI)
鶴岡工業高等専門学校 (National Institute of Technology, Tsuruoka College)
Email: hirofumi.sakai@tsuruoka.kosen-ac.jp

英語の動名詞補文の意味上の主語は主節主語と同一指示になる場合もあれば、非同一指示になる場合もある (例: *She*$_i$ *tried* $_{i/*j}$*hitting the escape key.* vs. *The psychiatrist*$_i$ *recommended* $_{*i/j}$*getting away for a week.*)。この同一指示性を決定するメカニズムについて長年言語学で議論されてきたが、(1b) のような**デフォルトから逸脱する同一指示性 (以下、非典型的同一指示性) については、必ずしも体系的に解明されてきたわけではない**。

(1) a. Sir Hubert$_i$ prefers $_{i/*j}$hunting elephants. (Thompson (1973: 381))
b. Traditional economists$_i$ prefer $_j$increasing supply to address energy needs whereas conservation through efficiency is proposed by others. (Duffley (2014: 63))

(1) の主動詞である動詞 *prefer* は通常、(1a) のように同一指示しか容認されない (Thompson (1973), Quirk et al. (1985), Rudanko (1989), Huddleston and Pullum (2002)) が、このパターンから逸脱し、(1b) のように非同一指示が容認されることがある。こうした振る舞いは他には、*like* や *consider*, *regret* などの心理動詞で観察される (酒井 (2021))。

この種の現象に対し、以下 2 つのアプローチがあるが、いずれも包括的な一般化とその動機づけには至っていない。

① 生成統語論的アプローチ

a. 非同一指示は語用論の問題とみなすので、非典型的非同一指示にもあまり関心を払っていない (Landau (2013), cf. Rosenbaum (1967), Chomsky (1981), Manzini (1983)) 。
b. 非同一指示を扱っている場合であっても (Landau (2021)) 、非典型的同一指示性が得られるときの文脈や条件に関する一般化まではされていない。

② 意味論的アプローチ

a. 主動詞の語彙的意味と強制 (coercion) により説明される (Sag and Pollard (1991), Culicover and Jackendoff (2005), Sakai (2022)) が、強制の定義上、強制される場合とされない場合の間にある制約については必ずしも関心が強くはない (cf. Iwata (2008)) 。
b. 主動詞と非定形補文、文脈の意味的合成により説明される (Duffley (2014)) が、出てきた実例に合わせるような形で説明をしているため、どういった文脈や条件で非典型的同一指示性が生じるのかといった一般化までは至っているとは言い難い。

以上を踏まえ、**本発表では心理動詞を中心に、当該同一指示性に対して、認知的構文文法 (Goldberg (1995, 2006)) (以下、構文文法) の観点から、一般化とその動機づけを明らかにする**。当該現象は階層性 (Landau (2013), cf. Chomsky (1981)) や意味的合成性 (Duffley (2014)) を前提としてきた一方、構文文法は階層性ではなく、線形語順によるチャンク化を重視し、意味的非合成性も想定し、あらゆる現象を説明できる文法理論とされる (Bybee (2002), Goldberg (2006), cf. 谷口 (2022))。したがって、**当該現象を原理的に説明できるか否かは、構文文法にとって問うべきことであり、理論的意義のある試み**と言える。確かに一見すると、構文文法は当該現象を説明する枠組みとしては適切でないように思える。しかしながら、主動詞 (クラス) と同一指示性にはデフォルトでは一定の関係があり (Thompson (1973), Rudanko (1989), Hamawand (2002), Huddleston and Pullum (2002), Duffley (2014) など)、これはまさしく慣習的な形式と意味の対である構文 (Goldberg (2006: 5)) とみなすことができる。以上から、構文文法という枠組みで当該現象を説明するのは一定の意義がある試みになり得る、ということになる。また、構文文法的アプローチは Sag and Pollard (1991) や Culicover and Jackendoff (2005) の強制分析の焼き直しに思えるという人もいるかもしれない。しかしながら、本分析では主動詞と同一指示性の慣習的な結びつきを捉えるためには動詞 (クラス) 特化構文が必要であることを示した上で、**その構文によって非典型的同一指示性の容認される例だけではなく、容認されない例に対しても説明を与えることができるという点で**、強制分析とは本質的に異なる。なお、本稿における構文とは、Goldberg (2006: 5) の定義に従い、個々の構成要素を超えた形式と意味の対とともに、合成的ではあっても慣習化された形式と意味の対を指す。

以下、具体的な分析の概要に移る (なお、ここで示す動詞クラスは分析の概要に必要なものだけにする)。Thompson (1973) によれば、私的動詞 (private verb)、つまり心理動詞 (mental verb) (Wierzbicka (1988)) は通常、同一指示のみ容認される。一方、Huddleston and Pullum (2002) によれば、*advocate* や *support* のような動詞クラス (以下、verb of supporting) は非同一指示のみが容認される。この関係性を捉えるために動詞クラス特化構文 (Croft (2003), Iwata (2008)) を導入すると、以下のように構文表示ができる (表示の仕方は Lagancker (1987) にしたがっている)。

(2) a. [[NP_X V_1 V_2-ing] / [X_i EXPERIENCE$_{<MENTAL>}$ $_i$$V_2$-ing]] (The *mental verb*-class-specific construction)
b. [[NP_X V_1 V_2-ing] / [X_i SUPPORT $_j$$V_2$-ing]] (The *verb of supporting*-class-specific construction)

The *verb of supporting*-class-specific construction は V-*ing* 補文の表す事態が主節主語の指示対象以外によって実行されるので、当該事態は主節主語以外の指示対象である複数の参与者によって実行されることが含意される。ここで (1b) を見てみよう。この文ではエネルギー需要に関することが述べられている。つまり、社会・公共の問題について述べられているということになる。社会・公共の問題というのは任意の参与者、もっと言えば、複数の参与者が関わることである。したがって、(1b) において動詞 *prefer* は the *verb of supporting*-class-specific construction と意味的に整合し、結果として (1b) は認可され、非同一指示となる。証拠として、(1b) の主動詞 *prefer* は 'advocate' のような意味解釈となり、the *verb of supporting*-class-specific construction における主動詞の意味が透けて見えるようになっている。

(3) Traditional economists$_i$ prefer $_j$increasing supply to address energy needs; {in fact, they advocate / ?? but they don't advocate}.

以上より、**非典型的非同一指示となる文脈は社会・公共の事態等、複数の参与者が関わるものであると一般化でき、それは当該構文により動機づけられていると言える**。つまり、**NP V V-*ing* における同一指示性は背後の構文によって決定されていると考えられる**。

参考文献

Bybee, Joan (2002) “Sequentiality as the Basis of Constituent Structure,” *The Evolution of Language out of Pre-language*, ed. by T. Giv6n and Bertram F. Malle, 109-134, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Chomsky, Norm (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publication, Dordrecht.

Croft, William (2003) “Lexical Rules vs. Constructions: A False Dichotomy,” *Motivation in Language: Studies in Honor of Günter Radden*, ed. by Hubert Cuyckens, Thomas Berg, Rene Dirven, and Klaus-Uwe Panther, 49-68, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.

Duffley, Patrick J. (2014) *Reclaiming Control as a Semantic and Pragmatic Phenomenon*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, the University of Chicago Press, Chicago.

Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Landau, Idan (2013) *Control in Generative Grammar. A Research Companion*, Cambridge University Press, Cambridge.

Landau, Idan (2021) “Duality of Control in Gerundive Complements of P,” *Journal of Linguistics* 57(4), 783-813.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites,* Stanford University Press, Stanford.

Manzini, Maria R. (1983) “On Control and Control Theory,” *Linguistic Inquiry* 14(3), 421-446.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Rosenbaum, Peter S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press, Cambridge.

Rudanko, Juhani M. (1989) *Complementation and Case Grammar: A Syntactic and Semantic Study of Selected Patterns of Complementation in Present-Day English*, States University of New York Press, Albany.

Sag, Ivan A. and Carl Pollard (1991) “An Integrated Theory of Complement Control,” *Language* 67(1), 63-113.

酒井啓史 (2021)「英語における V-*ing* 補文の主語の構文文法的分析」『英語語法文法学会第 29 回大会予稿集』.

Sakai, Hirofumi (2022) “A Construction Grammar Approach to *to*-Infinitive Complements in English: With Special Reference to the String NP_1 *V NP to* VP_2,” *Tsukuba English Studies* 41, 73-97.

谷口一美 (2022) 「言語理論における「階層性」」菅井三実・八木橋宏勇 (編) 『認知言語学の未来に向けて―辻幸夫教授退職記念論文集―』312-323，開拓社，東京.

Thompson, Sandra A. (1973) “On Subjectless Gerunds in English,” *Foundations of Language* 9, 374-383.

Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

P-14

「X を Y に」構文における格付与とコントロール

武藤佑輔（上智大学言語科学研究科言語学専攻）

村木（1983）や寺村（1992）で報告されているように、日本語には、「地図をたよりに」に代表される、「X を Y に」の形で表される構文が存在する。

(1)　地図をたよりに、タカシが目的地に辿り着く。　（西垣内 2019a:63）

(2)　ケンはキセルを口に立ち上がった。　（Dubinsky and Hamano 2010:183）

この構文を統辞論の観点から集中的に取り扱った先行研究として、Dubinsky and Hamano（2003, 2010）、西垣内（2019a, b）が挙げられる。これらの先行研究において、この構文の派生が「X を Y にして」の「して」の削除による派生では説明できないこと、また、「主節主語が Y の Possessor である」といった関係が成り立ち、それが Hornstein（1999）に代表されるコントロールの移動理論によって説明されることが議論されている。

「X を Y に」が「X を Y にして」の動詞削除によるものではないことを示唆する事実の 1 つが、以下(3)のような例である。「X を Y に」の構文において、「して」を挿入できない場合があることが、ここで示されている。

(3)　花を両手に（*して）やって来た。　（Dubinsky and Hamano 2010:184）

しかし、動詞「する」を仮定しない中でどのように Y へのヲ格付与を説明するのかは残る問題である。主節の動詞が(3)のようにヲ格を付与しないものである場合はこれが特に問題となる。

本研究では、「X を」におけるヲ格の付与について、Marantz（1991）が提案し、日本語においては青柳（2006）や Shimamura and Akimoto（2023）が検討を行っている、依存格の付与メカニズムによって説明を加える。このメカニズムは概略、ヲ格はその名詞を c-command している他の名詞に依存して与えられる、というものである。ここで仮定される構造は(4)のようなものである。

(4)　$[_{VP}$ ケン $[_{VP}$ $[_{CopP}$ $[_{NP}$ [キセル][口]] に] $[_{VP}$ 立ち上がる]]]

ここで、Y に相当する名詞「キセル」は、それを c-command する名詞「ケン」を参照しヲ格を得る。

また、この構文における Y と主節主語の関係は、コントロールの移動理論で容易に説明できないであろう性質を示す。例えば、一部の日本語話者は、(5)のような文を許容する。

(5)　（文脈：太郎は幼い娘から離れ、落ち着いて食事を取るのにひと工夫した。）
　　太郎は猫を娘の相手に、ゆっくりと食事をした。

ここで、Y の所有者として、主節主語とは異なる明示的要素「娘」が現れている。このことから、主節主語位置と Y の possessor の位置には、移動関係を産むことなくそれぞれ独立に名詞が生起することができると言える。このようにコントロール関係にあると言われる位置にそれぞれ独立の名詞が生起する類例は Uchibori（2000）において報告されており、日本語における特徴の 1 つと考えられる。なお、このような場合に被コントロール位置に許容される名詞句はコントロールする名詞との関連性に縛られており、例えば、(5)において「二郎」は認められない。

このことを踏まえて、possessor の位置に空代名詞 pro を merge する場合を考えてみる。

(6)　太郎は猫を *e* 相手に、ゆっくりと食事をした。

(6)の解釈は、(5)と同じものにはなり得ない。したがって、移動の有無と独立に、この位置にある空の名詞的要素はコントロールの意味制約を受けると考えられる。本研究では、空の名詞的要素はコントロールを受ける構造上の条件においていわゆる PRO、それ以外の場合は pro として解釈されることを提案し、両者の相補分布を説明する。

また、「X を Y に」構文の X と Y は、復元可能性に関わらず空項を受け付けないようである。

(7)　東條英機は、日本の軍人であり政治家である。*（彼を）総理大臣に、日本は戦争を開始した。

関連して、村木（1983）では、「X を Y に」における名詞句は「は」による主題化や取り立て、「も」や「こそ」による特徴づけができないことが報告されている。また、「X を Y に」からのかき混ぜによる名詞句の抜き出しも不可能なようである。このことは、この構文が文の主題と深く関わっていることを示唆する。

参照文献

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房.

西垣内泰介（2019a）「「地図をたよりに」統語論・意味論の接点を探る」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇』22: 59-74.

西垣内泰介（2019b）「「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19: 37-53.

寺村秀夫（1992）「付帯状況」表現の成立条件:「X ヲ Y ニ…スル」という文型をめぐって」『寺村秀夫論文集 1 日本語文法編』113-126. 東京:くろしお出版.

村木新次郎（1983）「「地図をたよりに、人をたずねる」という言い方」渡辺実（編）『副用語の研究』267-290. 東京：明治書院.

Dubinsky, Stanley and Shoko Hamano (2003) Control into Adverbial Predicate PPs. In William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, 12: 231-242. Stanford, CA: CSLI Publications.

Dubinsky, Stanley and Shoko Hamano (2010) Framing the Syntax of Control in Japanese (and English). In Norbert Hornstein and Maria Polinsky (eds.) *Movement Theory of Control*, 183-210. Philadelphia: J. Benjamins Pub. Co.

Hornstein, Norbert (1999) Movement and Control. *Linguistic Inquiry*. 30: 69-96.

Marantz, Alec (1991) Case and Licensing. In Germán F. Westphal et al. (eds.) *ESCOL '91: Proceedings of the Eighth Eastern States Conference on Linguistics*. 234-253. Ithaca, NY: CLC Publications.

Shimamura, Koji and Takayuki Akimoto (2023) Accusative Case without Agree. In Sara Williamson et al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, 30: 547-556. Stanford, CA: CSLI Publications.

Uchibori, Asako (2000) *The Syntax of Subjunctive Complements: Evidence from Japanese.* Doctoral dissertation, University of Connecticut.

P-15　日本語母語話者および中国語母語話者における日本語発話時の鼻音化率

濱岡　佑帆　(大東文化大学大学院　s22233102@st.daito.ac.jp)

本研究は日本語母語話者における鼻音化率の男女差と第 2 言語として日本語を学習した中国語母語話者の日本語発話時の鼻音化率の男女差を比較することを目的に実験を実施した。鼻音化率(Nasalance Score)とは、ナゾメータ(Nasometer)によって計測される値であり、緒方他(2003)では「口腔からの音圧に対する鼻腔からの音響エネルギーの比」と説明されている。従来は口唇口蓋裂などの構音障害を持つ患者の治療前後の経過観察等に用いられている(平田他 2002, 緒方他 2003, 鈴木他 2022)。

鼻音化率における男女差は、明らかになっていない点が多く、日本語では ITO et al. (2007)、宮本・武内 (2007)、MISHIMA et al. (2008)、五味 (2011)、濱岡(2023)が分析資料のいずれかにおいて女性被験者の鼻音化率は男性被験者よりも高いことを報告している。このことから鼻音化率が高いことが女性らしさや聞こえの優しさ、やわらかさの要因の 1 つになると考えることができる。

濱岡(2023)では、健常者の日本語母語話者における鼻音化率の男女差を検討している。先行研究では鼻音を含まないいわゆる「キツツキ文」のみが使用されてきたが、それでは鼻音が含まれている発話における鼻音化率の変化を観察できないため、Rochet et al. (1998)を参考に、「キツツキ文」のほかに鼻音とその他の子音のバランスが取れている文 「バランス文」(鼻音の割合, 拍：17.6％・音素：9.7%)と鼻音の割合が高い文 「鼻音文」(鼻音の割合, 拍：41.1％・音素：22.6%)を新たに作成し、実験を試みた。その結果「キツツキ文」において女性被験者の鼻音化率は男性被験者よりも有意に高いことが確認された。

本研究の被験者は中国語を母語とする日本語学習者男女各 10 名である。日本語のレベルは上級以上である。分析資料は濱岡(2023)にて用いられているキツツキ文・バランス文・鼻音文の 3 つである。各被験者に 3 つの文を 3 回ずつ読み上げてもらい、それぞれの文の平均鼻音化率を計測し、3 回分の平均鼻音化率の平均値を求めた。

実験の結果を次の表 1 に示す。表中の表 1 の数値を用いて Welch の T 検定を行ったところ、中国語母語話者ではキツツキ文・バランス文・鼻音文すべてにおいて鼻音化率が女性被験者＞男性被験者だった(キ：$t(11)= 3.57$ ** ($p<.01$), バ：$t(17)= 3.77$ ** ($p<.01$), 鼻：$t(17)= 3.09$ ** ($p<.01$)。これはキツツキ文でのみ女性被験者＞男性被験者であった濱岡(2023)の日本語母語話者の結果とは異なっている。

表 1 本研究の結果 (%) ()内の数字は標準偏差を示す。CF・CM は中国語母語話者の女性被験者と男性被験者を、JF・JM は日本語母語話者の女性被験者と男性被験者を指す。

			濱岡(2023)	
	CF	CM	JF	JM
キツツキ文	18.9 (9.4)	9.0 (3.0)	16.9 (7.7)	12.9 (3.6)
バランス文	36.9 (5.1)	29.0 (5.1)	34.6 (8.3)	31.6 (5.7)
鼻音文	47.3 (5.9)	38.2 (7.2)	41.6 (8.4)	39.9 (7.4)

多くの日本語学習者は日本語発話時に声が高くなったり、優しくまたはやわらかく聞こえるようになったりすることを挙げる。これらの原因が日本語の言語そのものとしての特徴なのか、日本語における性別に与えられた言語規範なのかは研究の余地があり、特に優しくまたはやわらかく聞こえる原因には鼻音化率が関連しているのではないかと推測した。本研究では、中国語母語話者における 3 文の鼻音化率は女性被験者＞男性被験者であり、濱岡(2023)ではキツツキ文のみ女性被験者＞男性被験者である。このことから鼻音化率の高さは女性らしさにも関連があることを示唆し、優しくまたはやわらかく聞こえる要因となると考えることができる。

本研究を行うことで鼻音化率が話者の心的態度を示すプロソディの一要素となる可能性や鼻声が通言語的に女性らしさに関する可能性など、鼻音化率という本来臨床的なものが、人文科学への応用が可能であることを検討することができるだろう。

参考文献

五味暁憲 (2011)「鼻咽喉閉鎖不全の診断の根拠となる客観的開鼻声検査基準値の設定」『科学研究費補助金成果報告書』.

濱岡佑帆(2023)「健常者の鼻音化率における男女差」『日本実験言語学会第 16 回大会』予稿.

平田創一郎・和田健・舘村卓・原久永・野原幹司・佐藤耕一(2002)「関西方言話者におけるナゾメータ検査での日本語被検文と鼻咽腔閉鎖機能不全の評価」『日本口蓋裂学会雑誌』27: 14-23.

Ito, Michie, Yukiko Takei, Miru Takami, Michiko Shimooka, Chisako Inoue, Tomoko Tominaga, Toko Hayakawa, Chisato Nagura, Nagato Natsume & Tatsushi Kawai (2007) Nasalance scores of Japanese adults and children with non cleft palate. *Aichi-Gakuin dental science*. 20: 11-18.

宮本靖子・武内和弘 (2007)「ナゾメータを用いた鼻音性評価の試作」『電子情報通信学会技術研究報告 SP106』614：37-42.

Mishima,Katsuaki, Asuka Sugii, Tomohiro Yamada, Hideto Imura & Toshio Sugihara (2008) Dialectual and gender differencesin nasalance scores in a Japanese population. *Journal of Cranio-Maxillofacial Surgery*. 36: 8-10.

緒方祐子・中村典史・窪田泰孝・笹栗正明・菊田るみこ・白砂兼光・大石正道(2003)「ナゾメータ検査による口蓋裂患者の鼻咽腔閉鎖機能評価：鼻咽腔閉鎖機能の客観的評価基準の検討」『日本口蓋裂学会雑誌』28(1): 9-19.

Rochet, Anne Putnam, Bernard L. Rochet, Elizabeth A. Sovis & Dallyce L. Mielke (1998) Characteristics of nasalance in speakers of western Canadian English and French. *Journal of speech-language pathology and audiology*. 22: 94-103.

Suzuki, Keiko, Yoko Mizuto, Takemi Mochida, Takayuki Sugimoto ＆Yasuharu Yamazaki (2022) Nasalance scores in normal adult Japanese speakers of the Tokyo dialect. *The Kitasato medical journal*. 52 (2) : 90-97.

P-16

日本語人魚構文の統語的多様性

佐々木冠（立命館大学）

人魚構文は、(1)に例示するように「［節］（文末）名詞　コピュラ」で構成される構文であり、文末名詞文（新屋 1989）や体言締め文（角田 1996）などとも呼ばれる。本発表の目的は、Tsunoda (2020)提唱の複合述語分析が当てはまらないタイプの人魚構文の存在を明らかにすることを通して人魚構文の統語的多様性を示すことである。

(1) ［太郎は名古屋に<u>行く</u>］$_{節}$ <u>予定</u>$_{名詞}$ <u>だ</u>$_{コピュラ}$。

Tsunoda (2020)は、ガノ交替が生じないことや［節］の主語が主題助詞でマークされることや複合名詞句制約（Ross 1967）に違反する構造が許されることから人魚構文は［節］の述語と文末名詞が複合述語（(1)下線部）を形成する単一節的構造を持つ構文であるとする分析（複合述語分析）を提案した。一方、川島（2019）は、「しか」と否定形態素の分布などから、人魚構文の統語構造は単一ではなく、(i)連体修飾節に修飾された名詞句が主語と叙述関係を結ぶ措定文に近いものと(ii)文の後に文末名詞とコピュラが助動詞のように後接するものがあるとする分析を提案している。(i)は、複合名詞句が述部にある二重節的構造である。

人魚構文における名詞句の統語的振る舞いについては［節］の主語に対応する要素が主な分析対象となってきた。この発表では、［節］の主語と目的語の両方の統語的な振る舞いを検証する。検証するのは、人魚構文を含む分裂文と［節］の目的語の主題化である。ともに、修飾名詞を伴う連体修飾節（＝複合名詞句）内部の要素の複合名詞句外部への「抜き出し」を禁じる制約である複合名詞句制約に関与的な文法構造である。

複合述語分析では［節］と文末名詞が複合名詞句を構成しないため、［節］の主語以外の要素も［節］からの「抜き出し」ができることが期待される。(2)と(3)は「あの人は北海道大学を受験する予定だ」に対応する分裂文で［節］の主語と目的語が空所になっている。(4)は目的語を主題化した構造である。このような人魚構文には複合述語分析が当てはまる。

(2) [e_i 北海道大学を<u>受験する</u>]$_{節}$ <u>予定な</u>の｛は／が｝あの人$_i$だ。（空所＝主語）

(3) [あの人が e_i <u>受験する</u>]$_{節}$ <u>予定な</u>の｛は／が｝北海道大学$_i$だ。（空所＝目的語）

(4) 北海道大学$_i$は、[あの人が e_i <u>受験する</u>]$_{節}$ <u>予定だ</u>。（空所＝目的語）

一方、文末名詞が「性格」などの場合、主語の「抜き出し」は可能だが、(6)-(7)に示すように、目的語の抜き出しは許容されない。このような人魚構文は、川島（2019）の(i)と同様の［節］の主語以外の要素が複合名詞句内部に存在する二重節的構造になっているため、［節］の目的語の「抜き出し」が許されないものと考えられる。

(5) [e_i [[e_i 権威を信用しない]$_{節}$ 性格]$_{NP}$ なの｛は／が｝あの人$_i$だ。（空所＝主語）

(6) *[あの人$_i$が [[e_i e_j 信用しない]$_{節}$ 性格]$_{NP}$ なの｛は／が｝権威$_j$だ。（空所＝目的語）

(7) *権威$_i$は、あの人$_j$が [[e_j e_i 信用しない]$_{節}$ 性格]$_{NP}$ だ。（空所＝目的語）

(3)-(4)と(6)-(7)の非対称性は人魚構文に複数の統語構造が対応する川島（2019）の分析を支持するものと考えられる。

参照文献

新屋映子. 1989.「“文末名詞”について」『国語学』159. 75–88.

川島拓馬. 2019.「歴史的観点から見た『文末名詞文』の研究」筑波大学博士論文.

角田太作. 1996.「体言締め文」鈴木泰・角田太作編.『日本語文法の諸問題：高橋太郎古稀記念論文集』139–161. ひつじ書房.

角田太作. 2011.「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1. 53–75.

Ross, John R. 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.

Tsunoda, Tasaku. 2020. Modern Standard Japanese. In: Tasaku Tsunoda (ed.), *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance*. 65–123. Berlin: De Gruyter Mouton.

P-17

アミ語談話における態の頻度分析の問題点

今西一太

言語を類型的に分類する際、態（能動態と受動態・逆受動態など）の形態的有標性だけでなく頻度も分析し、頻度が高い態の無標の名詞句が動作主であるか被動者であるかで言語を「対格型」「能格型」と分類する方法がある。例えば英語では能動態：受動態の頻度は 91:9 であり、能動態（無標の名詞句が動作主）が無標、つまり対格型であると考えることができ、逆にワロゴ語、カルカトゥング語、ジルバル語などは能動態（無標の名詞句が被動者）：逆受動態が 85:15～80:20 程度であり、能格型と言える（Tsunoda (1988: 31)）。

アミ語（オーストロネシア語族、台湾原住民語）のような「フィリピン型言語」では、能動態（形態的に無標）vs.受動態/逆受動態（形態的に有標）の対立ではなく、全ての態が形態的に有標であるという特徴がある。

(1) **Mi**-pacok=to　ko-ra　tamdaw　to=fafoy.　【動作主態 AV の例：形態的に有標】
AV-屠殺=完了　主格-あれ　人　対格=豚　「あの人が豚を屠殺した。」
(2) **Ma**-tefad=to=ako　ko-ra　kopo.　【被動者態 PV の例：形態的に有標】
PV-落下=完了=1 単属　主格-あれ　コップ　「私はあのコップを落とした（あのコップは私に落とされた）」

そのため形態的な基準で態の有標性を判断できず、談話内での態の頻度をもってどちらの態が無標であるかを決めるという手法が取られることがある（Shibatani (1988) Huang (1994) など）。ただ、アミ語でこの手法を採用して態の頻度を数え対格・能格型に分類しようとすると、以下のように非常に多くの問題が生じる。

1. 態の制限が生じる環境の動詞を数えるのかどうかの問題：「食べ始める」のような動詞連続の例では「始める」の態は自由だが「食べる」の方の態はほぼすべて AV に限られ、このような例も全て数えるとアミ語は対格型に近くなり、数えないと能格型に近くなる。態の選択が不可能な場合も数えるべきか。
2. 名詞句が省略されているかどうか判断しづらい例がある：アミ語は「折れる（自動詞的）」「折られる（受動態的）」など形態的対立がなく、名詞句の省略があるかどうか判断しづらい例がある。これを二項節として態の対立に含めるかの問題がある。例えば (3) の例では歯を折った動作主が直前の文に言及されているために省略されているのか、そもそも「歯が折れた」のような自動詞的表現なのかが判断しづらい。

(3) ma-li-wadis　ko='oles, ta　mi-laliw　cira.　（Sing 'Olam2006: 22）
PV-分離-歯　主格=歯　そして　AV-逃げる　3 単主　「歯が折れて（歯を～に折られて）、彼は逃げた」

3. 態接辞の形態と意味（項構造）の不一致：アミ語は (1) (2) のように mi- が AV、ma-などが PV とされるが、ma- の中に ma-fana' 「A が B を知っている」のように AV の項構造（主格＋対格）を取るものが多く存在する。これを AV と数えるか、「ma-という形態は PV である」のように形態を中心に数えるかで、AV の比率が 2 割以上も変化する（後者の数え方だと AV の頻度が減り能格型に近づく）。
4. =sa/=han（引用・様態を表す）およびその変種を数に入れるのか別で考えるのかで数が大きく変わる：(4) の =saan のように様態/引用を表す =sa/=han の変種が頻出し、=sa が AV、=han が PV である。談話の中で sa : han = 約 3:1 と =sa が他の AV より圧倒的に多く、この両者を数に含めるか別扱いするかで比率が大きく変わる。

(4) "Hayna,"=saan　ko=sowal　nira　「『はい』と彼は言った」（直訳：「はい」と彼の言葉は言った）
はい　と（言う）　主=言葉　3 単属

5. 引用表現において引用の部分は項として考えるのかどうかで数が変わる：4 とも関連するが、=sa が「～と言った」という意味で引用を従える例が非常に多く、これを 2 項節として数えると対格型にかなり近づく。
6. 文体によって差が出る：文章として出版されているアミ語では AV の比率が高く（日本語や中国語から翻訳したことの影響の可能性）、口頭で話した談話では AV の頻度が低い。特に文章では 4. 5. で言及した =sa の比率がかなり高くなり、全体の数字に大きな影響を与える。
7. 態の使用基準が時制・相・法によってきまることが多く、どの態が中心ということがない：進行相では AV を使う傾向、完了相や命令法では PV を使う傾向があり、どれかの態を中心としているというより、色々な態を時制・相・法によって使い分けている。それでも頻度を数えて「この態が無標である」と決めてよいのか。
8. その他：AV/PV の両方が含まれる例、命令形などで現れる異形態を数えるかどうかなどの問題もある。

以上の問題の結果、6. の文体の問題を除いて 1 つのテキストに絞って分析を行ったとしても数え方により AV の比率が 2 割～6 割程度とかなりの幅で変化する。すなわち、アミ語において態の頻度を分析して能格型・対格型への分類を行うことはかなりの困難と恣意性（どの基準を採用するかの判断）が伴う。無理やりこの手法を適用すれば「能格型よりの中間タイプ」と言えなくはないが、そもそもこの方法論を適用すること自体に問題が多く、万人が同意できる分析結果を出すのが難しい。「態の頻度によって対格型・能格型に類型的に分類する」という手法をアミ語に適用することは難しく、この手法が適用できない言語もあると考えるべきだ。

参考文献

Huang, Lillian Mei-jin (1994) "Ergativity in Atayal." *Oceanic Linguistics* 33, 129-143.

Shibatani, Masayoshi (1988) "Voice in Philippine languages." In: M. Shibatani (ed.), *Passive and voice*, 85-142. Amsterdam: John Benjamins.

Sing ’Olam (2006) 『O Ni Isop a Sapatinako 阿美語譯伊索寓言』台北: Totoy 城鄉部落語文工作室.

Tsunoda, Tasaku (1988) “Ergativity, accusativity, and topicality” 『名古屋大学文学研究論集』 34, 1-71.

P-18　日本語を母語とする英語学習者における枝分かれ構造の種類による複合名詞の容認度の違いについて

團迫雅彦[1]・木戸康人[2]・一瀬陽子[3]（北九州市立大学[1]・九州国際大学[2]・福岡大学[3]）

本研究では、團迫・木戸・一瀬(2023)で用いられている画像の精度を高めたとしても同じ帰結になることを示す。具体的には、日本語を母語とする英語学習者が左枝分かれ構造の複合名詞は右枝分かれ構造に比べて容認しにくいことを示す。この傾向は各構造における主要部の位置の違いに起因すると主張する。

(1), (2)のように英語も日本語も 3 つの名詞から成る複合名詞が可能であり、構造の種類により解釈が異なる。

(1) child book club (Roeper and Snyder (2005))
　a. 右枝分かれ構造：[$_N$ child [$_N$ book club]]　　'book club for children'
　b. 左枝分かれ構造：[$_N$ [$_N$ child book] club]]　　'club for (collectors of) children's books

(2) 九州大学組合
　a. 右枝分かれ構造：[$_N$ 九州 [$_N$ 大学 組合]]　　'九州にある大学組合'
　b. 左枝分かれ構造：[$_N$ [$_N$ 九州 大学] 組合]　　'九州大学（九大）の組合'

團迫・木戸・一瀬(2023)は、日本語を母語とする英語学習者が画面上に提示された名詞 3 語で構成される複合名詞と絵が合致しているかどうかについて Microsoft Forms を使用した容認性判断課題を大学生 105 名に実施した。その結果、右枝分かれ構造は容認されるものの、左枝分かれ構造については容認されない傾向があることが示された。

しかし、團迫・木戸・一瀬(2023)が実験で使用した絵には以下のような問題が挙げられる。例えば 'paper rabbit chair' という語に対して、右枝分かれ構造 ([$_N$ paper [$_N$ rabbit chair]])を反映させた絵として図 1 を、左枝分かれ構造 ([$_N$ [$_N$ paper rabbit] chair])については図 2 を提示している。図 1 では「うさぎの身体的特徴を持った紙製の椅子」の絵になっており、うさぎと椅子が一体化しているが、図 2 では「紙製のうさぎが椅子に乗っている」絵になっており、うさぎと椅子は別々の個体として描かれている。複合名詞と解釈されるためには図 1 のように一体化している絵を提示する必要があり、その意味で図 2 は複合名詞として解釈されにくく、その点で被験者が左枝分かれ構造を容認しなかった可能性がある。

図 1.

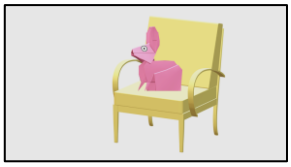


図 2.

そこで、本研究では構造の違いに関係なく、絵に描かれるものが一つの個体となるように、画像生成 AI の Microsoft Image Creator (https://copilot.microsoft.com/images/create)を用いて作成した。例えば 'paper rabbit chair' は、右枝分かれ構造（うさぎの身体的特徴を持った紙製の椅子）として図 3 を、左枝分かれ構造（紙製のうさぎがプリントされている椅子）として図 4 を使用した。調査項目・調査手法は團迫・木戸・一瀬(2023)と同様に設定し、大学生 139 名を対象に容認性判断課題を Microsoft Forms を用いて実施した。この調査では、複合名詞と絵が合致するかどうかを-2, -1, 0, 1, 2 の範囲で 5 段階で判断させた。また、試行数の合計は 12 であった（複合名詞 6 タイプ×絵 2 種類）。学習者の英語習熟度は MET (Minimal English Test, 牧(2018))を用いて算出し、上位グループ 68 名と下位グループ 71 名に分けた。5 段階評価のうち、1 や 2 と評価した場合は「容認」、-1 や-2 と評価した場合は「非容認」とした。習熟度別の枝分かれ構造に対する容認度の結果を表 1 に示す。習熟度に関係なく左枝分かれ構造は容認が非容認を上回った点は團迫・木戸・一瀬(2023)とは異なるが、右枝分かれ構造と同じほどは容認されなかった。左枝分かれ構造は右枝分かれ構造と比べて学習者が積極的に容認と評価しないことが示唆される。

図 3.

図 4.

表 1.　習熟度別の枝分かれ構造に対する容認度

	右枝分かれ構造		左枝分かれ構造	
	容認	非容認	容認	非容認
上位グループ(68 名)	77.9% (318/408)	13.5% (55/408)	56.1% (229/408)	31.6% (129/408)
下位グループ(71 名)	78.2% (333/426)	13.4% (57/426)	59.4% (253/426)	27.7% (118/426)

また、右枝分かれ構造を 6 問中 4 問以上で 1 または 2 の評価をした、つまり容認した被験者は 117 人で全体の 84.2%を占めたのに対し、左枝分かれ構造をそのように評価した被験者は 67 人で全体の 48.2%だった。このように被験者別の評価を見ても、左枝分かれ構造は右枝分かれ構造に比べて容認になりにくいことが明らかになった。

左枝分かれ構造で容認しにくい要因としては、複合名詞の文字列と絵を照合する際の主要部の重複が起因していると考える。左枝分かれ構造 [[AB]C] では、[AB]の主要部は右側主要部規則 (Williams (1981)) により B になるが、C が加わると複合名詞全体の主要部が C になる。3 つの名詞の中でどの要素を組み合わせていくかで解釈が異なるが、左枝分かれ構造では主要部そのものが大きく変わりうる。一方で、右枝分かれ構造 [A[BC]] では、[BC]の主要部は C になり、A を組み込んでも複合名詞全体の主要部は [BC]であり、その中に C が含まれるため、主要部は[BC]と[A[BC]]では一部重複している。このように主要部の重複の有無が容認度の違いを反映していると考えられる。

参照文献

Roeper, Thomas and Snyder, Willliam (2005) “Language Learnability and the Forms of Recursion,” *UG and External Systems: Language, Brain and Computation*, ed. by Anna Maria Di Sciullo, 155-169, John Benjamins, Amsterdam.

Williams, Edwin (1981) “On the Notion “Lexically Related” and “Head of a Word”,” *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.

團迫雅彦・木戸康人・一瀬陽子(2023)「日本人英語学習者における併合操作の回帰性について：3 つの名詞で構成される複合名詞を用いた容認性判断課題から」第二言語習得学会(J-SLA)第 73 回国際年次大会配布資料.

牧秀樹(2018)『The Minimal English Test（最小英語テスト）研究』開拓社：東京.

P-19 Presupposition accommodation の観点から見たテオクとテシマウの非対称性

中谷 健太郎（甲南大学）

本研究は、先行研究で十分な説明が与えられていないテオクとテシマウの非対称性に説明を与える試みである。日本語補助動詞表現のテオクは、しばしば準備性を表すとされ、テシマウは完結的意味を表すと言われる。先行研究ではこれらの意味は本動詞のオクとシマウの設置着点の対比を継承しているとの主張がある([1][2][3][4][5][6])。すなわち、本動詞のオクは対象物の＜平面＞への設置を表し、本動詞シマウは長期保存を前提とした＜閉鎖空間＞への設置を意味するため、補助動詞テオク、テシマウも、「事態の帰結」をアクセス容易（⇒準備）または困難（⇒完結）にするという対比を持つ([2][5][6])。

しかしテオクとテシマウには事態設置の着点の対比だけでは説明できない、以下に挙げるような非対称性が見られる。まず、テオクは明示的な着点を項として認可できる場合があるが、テシマウはできない。

(1) 宿題を（机の上に）やっておいた。 ⇔ 宿題を（*カバンの中に）やってしまった。

また、テオクには意図性が要求されるが、テシマウにはそのような制約はない([2])。

(2) 書類を（*不注意で）捨てておいた。 ⇔ 書類を（不注意で）捨ててしまった。

関連して、非対格動詞はテオクと相性が悪い。

(3) a. 旗を倒しておいた。 / *旗が倒れておいた。
b. 旗を倒してしまった。 / 旗が倒れてしまった。

これらの非対称性は、記述レベルでは、以下のような分析([5][6])[1]を採用すれば説明できる。

(4) a. $[\![\textbf{VP-te ok}_{\textbf{aux}}]\!] = \lambda x\, \lambda e_2\, \exists e_1, e_2', z\, [\, e_1 < e_2 \;\&\; [\![\textbf{VP}]\!](x, e_1) \;\&\; \underline{\text{Agent}(e_2) = x} \;\&\; \text{INIT}(e_2') = e_2$
$\&\; \text{Theme}(e_2') = \text{stretch}(e_1) \;\&\; \underline{\text{on}(e_2', z) \;\&\; \text{SURFACE}^*(z)}\,]$
b. $[\![\textbf{VP-te simaw}_{\textbf{aux}}]\!] = \lambda x\, \lambda e_2\, \exists z\, \exists e_2'[\, e_1 < e_2 \;\&\; [\![\textbf{VP}]\!](x, e_1) \;\&\; \text{INIT}(e_2') = e_2$
$\&\; \text{Theme}(e_2') = \text{stretch}(e_1) \;\&\; \underline{\text{in}(e_2', z) \;\&\; \text{BOX}^*(z)}\,]$

これら論理形式においては、下線部で示した着点の相違の他に、波線部 Agent(e_2) = x の有無という相違点がある。すなわち、テオクには「VP 事象 e_1 の主語」と「到達事象 e_2 の Agent」が同一の x であるという指定があるため、意思性・行為性が生じ、また非対格動詞(3)の対比は論理形式から直接導かれる（旗は設置事象 e_2 の Agent になりえない）。しかしそもそもなぜテオクとテシマウにはこのような Agentivity の違いがあるのか。

まず、テオクとテシマウの意味が本動詞オクとシマウの意味から派生しているとの仮定に基づくと、そもそもオクもシマウも Agentivity があるわけなので、説明すべきはテオクの Agentivity 制約ではなく、テシマウにおける Agentivity 制約の欠如である。本稿の提案は以下の通りである。まず、テオク・テシマウは、外延的な追加情報をもたらさないが、事態設置の着点の違いによりおおよそ以下のような内包的な意味を示唆する。

(5) a. $[\![\textbf{VP}]\!](x, e_1) < [\![\textbf{ok}]\!](x, e_2) \;\rightsquigarrow\; \forall y\, \exists w\, [y \text{ has access to stretch}(e_1) \text{ in } w] \;\vDash\; \exists w\, [x \text{ has access to stretch}(e_1) \text{ in } w]$
b. $[\![\textbf{VP}]\!](x, e_1) < [\![\textbf{simaw}]\!](e_2) \rightsquigarrow \forall y\, \neg\exists w\, [y \text{ has access to stretch}(e_1) \text{ in } w] \vDash \neg\exists w\, [x \text{ has access to stretch}(e_1) \text{ in } w]$

これらのアクセス可能性についての示唆は、聞き手に、前提となる背景の想定(presupposition accommodation [7][8])を強いる。たとえば「宿題をやっておいた」と発話した場合、宿題をやるという事象以外のなんらかの背景を前提として想定することを聞き手に強要する。聞き手はアクセス可能性と整合的な前提を見出せば文の解釈に成功し、そうでなければ解釈が破綻する。テオクについては、VP Agent の x 自身が設置事象 e_2 の Agent となり、その結果、自分を含めあらゆる人が VP 事態の帰結にアクセスできる可能性を生む。

(6) VP: **Agent x** < 設置: **Agent x** ⇝ ◇[アクセス: **Agent x**]：preparatory 解釈

ここでは、外延文脈における VP Agent x と内包文脈のアクセス主体 x の一貫性があるため、それを媒介する設置事象の Agent x を削除する動機がない。一方で、事態の帰結が自身も含め誰にもアクセスできないように設置されるならば、外延事象と内包事象の Agentivity に断絶が生まれる(7)。この断絶が、媒介となる設置事象の Agent 削除操作の必要条件となると本稿では考える。

(7) a. VP: **Agent x** < 設置: **Agent x** ⇝ □¬[アクセス: Agent x]：self destruction 解釈
b. VP: **Agent x** < 設置 ⇝ □¬[アクセス: Agent x]：accidental 解釈

(7)b のように設置事象に Agent が無いと考えた場合、外延と内包を断絶する設置事象に「意図」を想定する必要がなくなる（＝accidental 解釈）。整合的な前提・背景の想定のしやすさによってテシマウにおける設置事象の Agent 削除が駆動され、accidental 解釈が積極的に採用されると本稿では主張する。

---

[1] $e_1 < e_2$ は 2 事象の時間的先行関係を表す。INIT(e)は状態事象 e をその最初の最小の瞬間の到達事象に写像する。stretch(e)は e を e の発展的ステージ、典型的には e の帰結に写像する([4])。

参照文献

[1] 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版, 東京..

[2] Ono, Tsuyoshi (1991) “The grammaticization of the Japanese verbs *oku* and *shimau*,” Cognitive Linguistics 3, 367–390.

[3] 梁井久江 (2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5, 15–29.

[4] Nakatani, Kentaro (2013) Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese, Kurosio Publishers, Tokyo.

[5] 中谷健太郎 (to appear)「テシマウは本当に完了のアスペクト形式なのか」岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也（編）『レキシコン研究の新視点』開拓社, 東京.

[6] 中谷健太郎 (to appear)「語用論的な意味はどこまで語彙項目の意味か ～補助動詞テオクから考える～」于一楽・江口清子・小薬哲哉・眞野美穂（編）『由本陽子先生退職記念論文集　レキシコン研究の広がりと深まり』大阪大学出版会.

[7] Beaver, David Ian (1997) “Presupposition,” *Handbook of Logic and Language,* ed. by Johan van Benthem and Alice ter Meulen, 939-1008, MIT Press, Cambridge, MA.

[8] Potts, Christopher (2005) *Logic of Conventional Implicatures*, Oxford University Press, Oxford.

P-20 「VP+補助動詞」型複合動詞の意味と語形成―「VP+きる」を手掛かりに―

張　栩（大阪大学人文学研究科）u628900e@ecs.osaka-u.ac.jp

【研究目的】本研究は、終了アスペクトを表す代表的な補助動詞「きる」（以下「きる」と称する）の 2 通りの意味解釈をテストで検証する。そして、2 つの意味解釈が同一の語義として「きる」の語彙エントリーに記載され、補部事象との共合成(cocomposition) (Pustejovsky1995,小野 2005)によって 2 つに分化したという立場のもとで、「VP+きる」型複合動詞の語形成プロセスを提案し、それを項構造・特質構造・語彙概念構造を併用したモデルで記述する。

【問題の所在】共合成とは、動詞の不完全指定された意味が補語名詞の語彙情報から補完される動的な意味生成のことを指す(小野 2005:49)。当初は He began the book の began が個体名詞のみを取った場合でも began reading the book という事象の意味を含意するという現象の説明に用いられてきた。reading は元々begin の意味情報にあるのではなく、begin と book の意味合成を通じて、book の特質構造から begin に読み込まれる情報だとして分析される。本研究は、従来このように動詞-名詞間に成立すると認められてきた共合成が「きる」とその補部事象 VP の間にも成立することを論証し、共合成が品詞によらず存在する普遍的な意味生成の仕組みであることを示す。**【中心となるデータ】**「きる」には「**行為の完遂**」を表すもの「食べきる」タイプ（=1a）と「**状態が極限に達する**」ことを表すもの「疲れきる」タイプ（=1b）がある。いずれも補部事象が境界(endpoint)に到達することを示すが、前者のV（食べ）は、非有界事象を示し、それに境界を付加され、有界事象(telic VP)へと転化させられている一方で、後者では、「疲れている」状態が極限になっていることを表す。この二つの用法を区別する必要性は下記の言語テストから支持される。前者では動作主が必須であり、(1a)のように、動作主の能力の限界を示す可能否定形「～きれない」が共起できる一方、後者では動作主が存在せず自然に起こる事象を表すため、(1b)のように、可能否定形が共起できない。

(1) a.太朗はお弁当が食べきれない。/太朗は資料が読みきれない。b.*太朗が疲れきれない。/*夜が明けきれない。

【先行研究】国語学・語彙意味論の分野では、補助動詞「きる」の意味についての研究が進んでいるが(姫野 1999、杉村 2008、日髙 2022)、「きる」の複数の意味解釈を、ただ異なる語彙エントリーとして捉えるだけで、なぜそのような多義性が存在するのかは不透明なままである。例外的に、一つの語彙エントリーとして捉えることを目指した研究に日髙(2024)がある。「きる」が、状態変化動詞を補部に取る際、容認性が低くなり(*冷えきる/*澄みきる)、テイルやタ連体修飾になると容認度が改善させるという点(冷えきている/澄みきっている)を説明するため、V1 は先に「テイル」または「タ連体修飾」と結合し、その後に「きる」と結合するという語形成プロセスを提案している。ただし、日髙が出発点とした一般化には疑義も存在する。例えば、「今朝は暑いからきっと社内は<u>冷えきる</u>だろうと予感しひざ掛け持参」というように「きる」がテイル形やタ連体修飾を伴わずに使われる実例も少なくない。

【本研究の主張】そこで本研究は、「きる」の語彙エントリーは単一であるという視点を共有しつつ、「きる」の語彙エントリーの中で指定されている情報は、「漸進的消滅物の完全な消滅」という情報のみで、第一に、「補部事象が境界に到達することを示す」という意味機能はこの「きる」の意味情報から帰結するのに対し、第二に、行為の完遂と状態が極限に達するといった二つの用法の差は、共合成という動的な語形成プロセスによって、補部事象の意味機能が継承されて前景化されているに過ぎないという主張を展開する。すなわち、有界事象の項の指示対象は、事象の進展に伴い、だんだんなくなっていく「漸進的消滅物」というものが存在し、この「漸進的消滅物」が「きる」の補部事象の真の項(true argument)として存在する場合もあれば、デフォルト項(default argument)(Pustejovsky1995,小野 2005)として存在することもあり、「きる」が付くことによって、漸進的消滅物が完全になくなり、補部事象が境界に到達するという主張を行う。なお、前述の二つの用法のいずれにおいても、その補部事象が境界に到達することを示す意味機能を有することは、(2a-b)において「きる」をつけた場合とつけなかった場合で容認度に明確な差が存在することから確認できる。非有界事象につけてそれを有界事象に転化する機能は、(2c)における継続時間を表す時間副詞「一日/10 分間」との相性の差から確認できる。

(2) a.太朗は手元のドルを{使った/ *使いきった}が、まだ手元にドルが残っている。
　b.会場は{静まった/ *静まりきった}が、まだざわめきが残っている。
　c.太朗は一日論文を{書いた/ *書ききった}。/ 湯たんぽが 10 分間{冷めた/*冷めきった}。

【分析】デフォルト項とは、論理的に単語の語彙情報に含まれるが、統語的には表現しなくても良い要素である。(2b)では、「会場が静まる」の「静まる」という語彙に「ざわめき」という要素が必然的に喚起され、これがデフォルト項となる。これは「ざわめきがなかった会場が静まった。」という文が言えないことから確認できる。「きる」が表す極限性とは、このデフォルト項（「ざわめき」）が、そのスケール上もっとも極端な状態に達することを指すと考えられる。(2c)では「書きたいこと」がデフォルト項であり、何が極限の状態になるのかは、動詞のデフォルト項が何になるのかで、そのたびごとに変化し、これは、「きる」の意味が、併合相手のデフォルト項の情報を読み込んで完成するということを意味し、共合成のプロセスが動詞と補助動詞の間に成立することを意味する。(1a-b)に示す「～きれない」と共起するかどうかの差異は、「きる」から予測できるものではなく、動作主がいるかどうかという補部事象の意味情報から予測できるものであることからも、「きる」の意味の決定に補部事象が影響を与えていると分かる。

【参考文献】

Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge: MIT press.

小野尚之(2005)『生成語彙意味論』くろしお出版.

日高俊夫(2022)「統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味構造と統語: 文法化における比較に向けて」『トークス= Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin:神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇』25, 37-50.

日高俊夫(2024)「統語的複合動詞 V-kir における意味の修復」KLP 研究会発表.

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』研究社.

杉村泰(2008)「複合動詞「-切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7:pp.63-79.

P-21　「孤立型言語」の内的関連特徴 ―Grambank を活用して―

風間伸次郎
（東京外国語大学）kazamas@tufs.ac.jp

本発表では Grambank を活用して客観的基準から「孤立型言語」を選び出し、さらに Grambank 上での分布データの掛け合わせ（submit）により、「孤立型言語」と内的関連があると考えられる諸特徴を検証する。検証の結果、本発表における「孤立型言語」は (1) テンスを持たない、(2) 動詞の重複を持つ、という点において強い傾向を示すことを明らかにする。

1. 先行研究

形態論に基づく古典類型論の屈折／膠着／孤立の各類型では、中間的な状況を示す言語もあるため、諸言語を客観的に分類することが難しい。しかし依然として便利な指標として利用され続けてきている。これに対し Nichols (1986) による標示の類型論では、客観的な分類が可能である。WALS 23A の Locus of Marking in the clause（Nichols and Bickel 2005）では実際に 236 の言語を、名詞における格標示（flagging）と動詞における人称表示（indexing）の有無によって、主要部標示型（71 言語）／従属部標示型（63）／二重標示型（58）／無標示型（42）／その他（2）に分類している。しかし 6,000 を超える世界の言語における類型の分布を十分に把握するには 236 言語では少な過ぎる。これに対し Grambank は 195 の言語特徴について 2,467 言語（215 の語族と 101 の系統的に孤立した言語に亘っている）をカバーするデータの集積体であり、包括的で精密な分析が可能である。ただし各特徴の分類基準は全て二値的であり、このデータを活用するには何らかの観点による分析を必要とする。Grambank 上では 4 つまでのデータの掛け合わせが可能である。

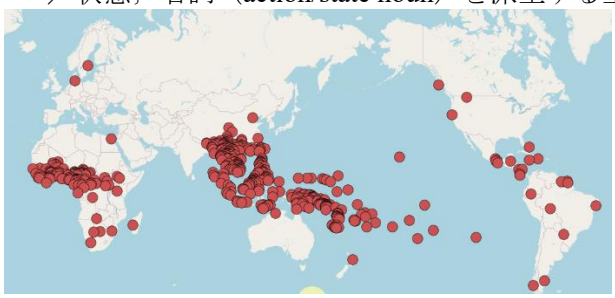
2. 研究方法

まず Grambank にある 195 の言語特徴を全部検討した。その結果、次の 3 つの特徴（以下では〈〉により示す）の掛け合わせにより無標示型の言語を抽出した：〈70. 代名詞でない中核項（S/A/P）に形態的な格があるか？〉・〈89. 動詞に接尾辞／後接語による主語項の標示があるか？〉・〈90. 動詞に接頭辞／前接語による主語項の標示があるか？〉。なお情報が不明となっている言語データは除いた。こうして抽出した言語群（523 言語）を本発表では「孤立型言語」と呼ぶ。ただしこの中には代名詞では格標示のある言語や、動詞に人称変化はないが態／焦点の表示のある言語も含まれていることに注意する必要がある。次に「孤立型」と内的関連があると考えられる特徴を予想した。①孤立型言語は主語と目的語を区別するために SVO/OVS 語順を必要とし、接辞を用いないために②派生接辞も乏しく、③動詞にテンスも標示しない、一方複合や④⑤重複といった形態的手法を用い、節連結には⑥動詞連続を使用する、といった内的に関連する特徴が予想される（もしくは先行研究の予想がある）。そこでこれらの特徴についての Grambank のデータを 4 つ目の特徴として掛け合わせ、その重なり具合を見ることにした。

3. 研究結果

重なり度の大きかった順に示すと次のとおりである。：の後ろは言語数を示す。4 つ目のデータが不明となっている言語があるため「孤立型言語」全体の数からこれを除いた上で全体に対する比率（小数点第 2 位四捨五入）を示した。なお｛ある／なし｝は必要に応じて予想される方に変えてある。

③〈83. 動詞に形態的に明示的な過去時制の標示がないか？〉：418/501(83.4%) ＞ ⑤〈158. 動詞の重複があるか？〉：365/441(82.8%) ＞ ⑥〈118. 動詞連続があるか？〉：278/374(74.3%) ＞ ①〈132. デフォルトの情報構造の他動詞節で V-medial（SVO/OVS）であるか？〉：333/501(66.5%) ＞ ④〈159. 名詞の重複があるか？〉：232/401(57.9%) ＞ ②〈47. ｛動作／状態｝名詞（action/state noun）を派生する生産的形態的手法がないか？〉：146/375(38.9%)



地図 1: 本発表における「孤立型言語」の分布

地図 2: ⑥〈118. 動詞連続があるか？〉との重なり

本発表ではこの結果の背景となる個別の要因についてさらに分析し、説明を加える。

参照文献・調査資料

Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) (2005) *The World Atlas of Language Structures*. Oxford: Oxford University Press.

Nichols, J. and B. Bickel (2005) Locus of marking in the clause. In Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*. Chap. 23, 98‑101. Oxford: Oxford University Press.

Nichols, Johanna (1986) Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* 62: , 56‑119.

Grambank (ed.) The Grambank Consortium (https://grambank.clld.org/)

P-22

とりたて詞の指示対象分割機能について

吉本啓・中村裕昭

1. 本研究の目的　澤田(2007)、沼田(2009)、日本語記述文法研究会(2009)等で記述されてきたように、日本語のとりたて詞は、暗黙の「同類の他の項目」（益岡・田窪 2024）と対比しつつ、文中の明示的要素をとりたて（焦点化すると仮定する)、そのとりたてられる表現および暗黙の同類要素との関係について、肯定や否定、限定や感情などの特別な意味を表す。本研究はとりたて詞の論理的意味（とくに焦点要素を含むドメイン分割）を考察の対象とする。たとえば

(1) 花子：私は太郎だけにチョコをあげるの。次郎：じゃ、僕はもらえないのか。

(1)の花子は、太郎にチョコをあげることに加えて、次郎（やほかのもの）にはあげないことを述べており、次郎の発話が論理的に必然含意されている。本研究は代替意味論(Rooth 2016 他)を理論的枠組みに採用し、「だけ」を中心にとりたて詞の論理的意味について考察する。

２．とりたて詞と疑問語・不定語　とりたて詞はどのような名詞にも後続するのではなく、疑問語や不定語の「だれ」「だれか」には「だけ」やその他のとりたて詞が後続しない。

(2) a.　花子は[誰に*だけ（*さえ/*は/*も等（普遍量化子の意味は除く））]チョコをあげるの?

　　b.　花子は[誰かに*だけ（*さえ/*は/*も等（普遍量化子の意味は除く））]チョコをあげる。

Rooth (2016)の焦点化に関する研究によると、代替意味論はフォーカスの意味を２層でとらえ、例えば(1)の「太郎だけ」の意味は、通常の意味$[[\text{Taro}]]^0$=**taro** と、代替しうる要素の意味$[[\text{Taro}]]^f = \{x_e : x \in \text{human}\}$の２レベルで記述され、後者の代替物の集合が前者を含んでいるように定義される。本研究はそれに反し、「だけ」（やとりたて詞一般）の意味機能は、顕在要素の直接的意味と、文脈的に潜在要素を含む代替物集合全体から直接的意味($[[\text{Taro}]]^o$)を除いた集合（$[[\text{Taro}]]^f$-$[[\text{Taro}]]^o$）（補集合）の両者を分離する関数であると主張し、１レベルで、この両集合を含む一般化限量子として、とりたて詞句の意味は記述されねばならないと主張する。

　我々は、疑問語や不定語（ともに存在限量子句に相当すると仮定）が指示する集合全体は、Rooth (Hamblin)の意味での代替物を包含する(cf. Shimoyama 2006)が、通常の意味を持たない、（つまり[[誰（か）]]^{o}は非定義(undefined、つまり値なし)(Kotek 2018)と考える。この[[・]]^{o}が非定義であることが、全代替物の集合を通常意味とその補集合に分割するという「だけ」（やほかのとりたて詞にも当てはまる）の意味機能と矛盾し、両者の結合を阻止するのである。

３．とりたて詞と選択関数　とりたて詞のドメイン分割機能の仮説は、(3)のように「誰（か)」に「さん」をつけてみると、一層強化される（必ずしも「さん」をつける必要はない)。

(3) a.　誰が/*誰だけが賄賂をもらったの　vs.　誰かさんだけが賄賂をもらったの。

　　b.　誰かが/??誰かだけが賄賂をもらっている。 vs. 誰かさんだけが賄賂をもらってる。

(2)と異なり、「誰かさん」にはほぼすべてのとりたて詞が後続する。「さん」をつけることで文脈から、ある特定の個体を指していることを暗示して、それ以外の個体（「誰かさん」の指示対象の補集合）を返すことが可能になる。本研究では、選択公理を前提とし、「誰かさん」に選択関数（ε ターム を採用する。von Heusinger 2011 参照）のタイプ<<e,t>,e>を割り当てる。不定語「誰か」（<<e,t><<e,t>,t>）と「誰かさん」のタイプを区別する(cf. Reinhart 1997)ことにより、後者は[[・]]^{o}の値を定義でき、代替集合を分割するので、とりたて詞と結合が可能になる。

参考文献

von Heusinger (2011) “Specificity,” in von Heusinger et al. eds., *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning,* De Gruyter Mouton, pp. 1025-1057.

Kotek, H. (2018) *Composing Questions*, The MIT Press.

Reinhart, T. (1997) Quantifier Scope: How labor is divided between QR and Choice Functions, Linguistics and Philosophy 20: 335-397.

Rooth, M. (2016) “Alternative semantics,” in C. Fery and S. Ishihara (eds.), *The Oxford Handbook of Information Structure*,” Oxford University Press, pp. 19-40.

von Stechow, A. (1991) “Focusing and background operators,” in A. Werner, ed. *Discourse Particles,”* John Benjamins, pp. 37-84.

Shimoyama, J. (2006) Indeterminate Phrase Quantification in Japanese, *Natural Language Semantics*, 14:139-173.

澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』。くろしお出版。

日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法５』。くろしお出版。

沼田 善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』。くろしお出版。

益岡隆・田窪行則（1989・2024）『基礎日本語文法』（第３版）。くろしお出版。

P-23　括弧付けパラドックスの構造と意味：プラン B で行こう

時崎久夫（札幌大学）・稲葉治朗（東京大学）・桑名保智（旭川医科大学）

問題の所在　[transformational grammar]-ian のような例では、接辞が句の末尾の語に付く括弧付けのパラドックス（bracketing paradox）が生じる。これは、[the man from Basque]'s (hat) のような群属格（group genitive）、[the man from Basque]'s just arrived のような助動詞縮約（auxiliary reduction）と共通する、音韻形態構造と意味構造のミスマッチである。このミスマッチは[over the fence] gossip のような句を含む複合語（phrasal compound）にも見られる。

先行研究　括弧付けのパラドックスについては、これまで意味解釈部門における接辞移動（Pesetsky 1985）が提案されてきたが、この移動が LF での接辞の下位範疇化の制限によって引き起こされるという動機が群属格や助動詞縮約にも当てはまるとは考えにくい。

また、森田（2024）は、語内の名詞の非飽和性という観点で括弧付けのパラドックスを説明しようとしている。[narrow mind]-ed や[ordinary lens] users では、#mind-ed「気質の」や #lens users「レンズ使用者」だけでは意味が飽和（完結）しないため、句を含む派生語や複合語「(コンタクトでない) 普通のレンズ使用者」が許されるとしている。しかしながら、[transformational grammar]-ian は、grammar-ian「文法家」だけで意味が飽和すると考えられるが可能であり、非飽和性という観点からだけでは説明ができないと思われる。

提案　本発表では、「音韻形態的な構成素構造に従って句を含む派生語や複合語あるいは句・節全体を解釈して意味が成立しない場合に、構成素構造と異なる構造解釈　（プラン B）が許される」という一般化を提案する。transformational grammarian は、構成素構造は[transformational [grammar-ian]]であるが、「変形的な文法家」という解釈は意味を成さない。よって、意図された[transformational grammar]-ian という構造による意味解釈「変形文法学者」が許される。ordinary [lens users]は、「普通の、レンズ使用者」は意味を成さないため、[ordinary lens] users が選ばれる。the man from [Basque's hat]も「バスク帽からの男」で不適格なため、[the man from Basque]'s hat と解釈される。the man from [Basque's] just arrived も同様に解釈不能である。さらに、over the [fence gossip]も全体として妥当な意味を持たない。

逆に、history of scientist は[history of scient]-ist「科学史研究者」としては容認されない（Ackema and Neeleman 2006: 342）。これは、構成素構造に従った（プラン A の）history of [scient-ist] が優先して意図と別の意味「科学者の歴史」で解釈されるため、と説明できる。

この「プラン B（Plan B）での解釈」という考えにより、構造と意味のミスマッチのうち、上記のような容認されるものと容認されないものに加え、判断が微妙な場合も予測できる。Quirk et al. (1985: 1345）によると、節による後置修飾を含む群属格は容認可能性が下がる（?Have you seen that man standing at the corner's hat?/?Somone has stolen a man I know's car.)。プラン B での解釈が可能になるのは、句の構造が比較的シンプルな場合に限られる。

また、句複合語によく見られるハイフン（breach-of-promise lady）や引用符（the 'we-know-best' philosophy）は、意図する併合の順序を明示しているものと考えられる。さらにこの分析は、句を含む複合語や Head Final Filter (Williams 1982), Final-Over-Final Constraint (Biberauer et al. 2014, Sheehan 2017)の例外（VO-C など）にも拡張できると考える。また、ドイツ語など、英語以外の言語にも適用できる（cf. Wiese 1996)。

結論　本研究は、句を含む派生語（および複合語)、群属格、助動詞縮約という広い意味での接辞が構成素構造とミスマッチを起こしながら容認される現象は、接辞とその対象を最初に併合して全体の意味解釈が不適格になる場合に、第 2 の解釈によって許容される、という考えを示した。派生語のパラドックスに限らず、群属格や助動詞縮約も統一的に扱えること、また容認性にゆれがあることを説明できる点で、これまでの分析よりも優れているものと考えられる。

参照文献

Ackema, Peter and Neeleman, Ad. (2004) *Beyond Morphology: Interface conditions on word formation*. Oxford: Oxford University Press.

Ackema, Peter and Neeleman, Ad. (2006) Morphology ≠ Syntax. In Ramchand, Gillian and Charles Reiss (eds.), *The Oxford handbook of linguistic interfaces*, 325-352. Oxford: Oxford University Press.

Biberauer, Theresa, Anders Holmberg and Ian Roberts. (2014) A syntactic universal and its consequences. *Linguistic Inquiry* 45, 169–225.

Harley, Heidi. (2010) Affixation and the mirror principle. In Rafaella Folli and Christiane Ulbrich (eds.), *Interfaces in linguistics: New research perspectives*, 166-186. Oxford: Oxford University Press.

Kaisse, Ellen F. (1983) The syntax of auxiliary reduction in English. *Language* 59, 93-122.

Meibauer, Jörg. (2008) How marginal are phrasal compounds? Generalized insertion, expressivity, and I/Q-interaction. *Morphology* 17, 233–259.

Myler, Neil. (2009) Form, Function and Explanation at the Syntax-Morphology Interface: Agreement, Agglutination and Post-Syntactic Operations (Extended Version) MA thesis, University of Cambridge.

森田順也. (2024) 『分散形態論に基づく語形成の分析』東京：開拓社.

Newell, Heather. (2005). Bracketing paradoxes and particle verbs: a late adjunction analysis. *Proceedings of ConSOLE* Xiii.

Pesetsky, David. (1985) Morphology and logical form. *Linguistic Inquiry* 16,193–246.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

Sheehan, Michelle. (2017) The Final-over-Final Condition and the Head-Final Filter. In Sheehan, Michelle, Theresa Biberauer, Ian Roberts and Anders Holmberg (eds.), *The Final-Over-Final Condition: A syntactic universal*, 121–149. Cambridge, MA: MIT Press.

Spencer, Andrew. (1988) Bracketing paradoxes and the English lexicon. *Language* 64, 663–682.

Sproat, Richard. (1988) Bracketing paradoxes, cliticization, and other topics: The mapping between syntactic and phonological structure. In Everaert et al. (eds), *Morphology and modularity*: *In honour of Henk Schultink*, 339-360. Amsterdam: North-Holland.

Wiese, Richard. (1996) Phrasal compounds and the theory of word syntax. *Linguistic Inquiry* 27, 183-193.

Williams, Edwin. (1981) On the notions 'lexically related' and 'head of a word.' *Linguistic Inquiry* 12, 245–274.

Williams, Edwin. (1982) Another argument that passive is transformational. *Linguistic Inquiry* 13, 160–163.

P-24　英語における形容詞＋動詞-en 型複合形容詞の形成条件―結果構文との関連から―

幸一尋（北海道大学大学院文学院　修士課程）yuki.kazuhiro.g9@elms.hokudai.ac.jp

本発表は、英語の複合語の内、第一要素に形容詞、第二要素に動詞の過去分詞形が現れる複合形容詞（以下、「A+V-en 型複合語」）の形成条件を、結果構文との関連に着目しながら論じる。(1)に示すように A+V-en 型複合語の中には、動詞と形容詞の組み合わせが、結果構文における動詞と結果述語の形容詞の組み合わせと共通するものがある。

(1) a.　hard-boiled eggs　(影山 1996: 119)　/　boil two eggs hard　(COCA)
　　b.　a clean-shaven face　(影山 1996: 119)　/　shave his face clean for the first time in six years　(COCA)

本発表ではこの関連に着目することで、A+V-en 型複合語は、第二要素の動詞が結果状態を含意する場合には形成できるのに対して、含意しない場合には形成できないことと、その生産性は決して低いとは言えない可能性を示す。

Roeper and Siegel (1978: 238)は、A+V-en 型複合語は形成できないとするが、実際は先に(1)で挙げたようにこのタイプと思われる複合語が存在する。大石 (2005)は英語の複合語のうち、主要部である第二要素が動詞-en 形である複合形容詞を「受動複合形容詞」（例：tailor-made, safety-designed）と「完了複合形容詞」（例：well-rested, snow-capped）の二つに分類しており、後者について、主要部が影山 (1996)の言う「完了形容詞」であって結果状態を表すため、非主要部である第一要素にはその結果状態の有様を表す要素を取るとしている。A+V-en 型複合語はこの「完了複合形容詞」に該当すると考えられる。

大石 (2005)の「完了複合形容詞」に関する分析からは、動詞の結果状態に着目する点で、結果構文との関連が示唆される。結果構文の分析として、影山 (1996, 2001)は「本来的」対「派生的」の分類を提案しており、前者は、主動詞そのものが結果状態を含意し、結果述語はその結果状態を具体的に描写するものに限られる一方、後者は主動詞が結果状態を含意しないとされる。結果構文について類似の分類に、Washio (1997)の weak resultative 対 strong resultative、Iwata (2006)の adjunct resultative 対 argument resultative、Dimitrova-Vulchanova (2016)の connected resultative 対 disconnected resultative などがある。

以上の先行研究から、動詞と形容詞の組み合わせが「本来的な結果構文」と共通する場合は、動詞が結果状態を含意し、かつ形容詞がその結果状態について描写するので、「完了複合形容詞」である A+V-en 型複合語を形成できる一方で、「派生的な結果構文」と共通する場合は、動詞が結果状態を含意せず、この複合語を形成できないことが予測される。しかし、結果構文との比較によって A+V-en 複合語の形成可否を包括的に論じた研究はない。結果構文と A+V-en 複合語との関連に言及している研究に Yamada (1987)があるが、結果構文の主動詞が他動詞である場合は A+V-en 型複合語が形成できるのに対して、非能格自動詞である場合には形成できないとして(2)の例を示すに留まり、結果状態の含意については言及していない。

(2) a.　short-cropped hair, a clean-shaven face, thin-sliced cheese　(Randall 1981: 195)
　　b.　*blind-cried eyes, *the thin-run pavement *a sick-laughed lady　(Yamada 1987: 79)

先の予測が正しければ、他動詞でも A+V-en 型複合語を形成できないものが存在することになり、さらにその形成可否の原因は、動詞の結果状態の含意にあると言える。実際、(3, 4)の例は、この予測に合致する。

(3) 「本来的な結果構文」と A+V-en 型複合語
　　a.　He opened the door wide.　/　the wide-opened door
　　b.　She polished the table smooth.　/　the smooth-polished table
　　c.　She'd taken a shower, gotten dressed, and painted her toenails red　(COCA)
　　c'.　wiggled her red-painted toenails　(COCA)

(4) 「派生的な結果構文」と A+V-en 型複合語
　　a.　He kicked the door open.　/　* the open-kicked door
　　b.　She pushed the door shut.　/　* the shut-pushed door
　　c.　I shook him awake.　/　* the awake-shaken man

このことから、結果構文の「本来的」対「派生的」の対立と、A+V-en 型複合語の形成可否とが対応していることがわかる。したがって、その形成条件には動詞が持つ結果状態の含意が関与しており、動詞が結果状態を含意すれば A+V-en 型複合語を形成できるが、動詞が結果状態を含意しない場合には形成できないと結論付ける。さらに、A+V-en 型複合語と「本来的な結果構文」との関連が示されたことで、A+V-en 型複合語の生産性は Roeper and Siegel (1978)が指摘するほど低くはないことが示唆される。

参照文献

Dimitrova-Vulchanova, Mila (2016) On two types of result: Resultatives revisited. In: Zlatka Guentchéva (eds.) *Aspectuality and Temporality*, 563-595. Amsterdam: John Benjamins.

Iwata, Seizi (2006) Argument Resultatives and Adjunct Resultatives with Adjectival Result Phrases. *Language Sciences* 28: 449-496.

影山太郎（1996）『動詞意味論』東京：くろしお出版.

影山太郎（2001）「結果構文」影山太郎（編）『日英対照　動詞の意味と構文』154-181．東京：大修館書店.

大石強（2005）「複合 V-en 形容詞と編入可能要素」大石強・西原哲雄・豊島庸二（編）『現代形態論の潮流』21-33．東京：くろしお出版.

Randall, Janet (1981) A Lexical Approach to Causatives. *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 7: 184-211.

Roeper, Thomas and Muffy E. A. Siegel (1978) A Lexical Transformation for Verbal Compounds. *Linguistic Inquiry* 9: 199-260.

Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.

Yamada, Yoshihiro (1987) Two Types of Resultative Construction. *English Linguistics* 4: 73-90.

コーパス

Davies, Mark (2008-) The Corpus of Contemporary American English (COCA). Available online at https://www.english-corpora.org/coca/.

P-25

日本語丁寧語構文の交替における L1/2 学習者の相違点について

山田 彬尭（大阪大学）

【1 背景】丁寧語に関する研究は、国語学／日本語 (菊地 1994 ; 宮地 1980、他) を記述的な基盤としながら、歴史／機能主義／認知言語学の分野で、言語変化（文法化／間主観化）の研究事例として脚光を浴び (Traugott and Dasher 2002)、また、allocutivity 表現として (Yamada 2019, Miyagawa 2022)、韓国語 (Portner et al. 2019)、琉球諸語 (アントノフ 2016) 、バスク語 (Alok and Haddican 2022)、パンジャーブ語 (Kaur and Yamada 2022)、タミル語 (McFadden 2020)、マガヒ語 (Alok 2020)、バッジカ語 (Kashyap 2012) といった言語との比較から、その通言語的・類型論的対照研究が進展しつつある。

【2 問い】しかし、通時／共時的なバリエーション研究の中心は “第一言語（L1）学習者”の文法で、その社会言語的機能についての研究（井出 2006 他）こそあるものの、第二言語（L2）学習者における丁寧語の文法研究は管見の限り存在しない。そこで、本研究では、(1)の二つの構文交替を対象に、L2 学習における丁寧語選択は、日本語の L1 学習者の文法や世界の丁寧語の現象と、どのように異なるのか、という問いを立て、コーパス分析から(2)の一般化を主張する。

(1) 否定過去構文： a. 走らなかったです。（新規形式） b. 走りませんでした。（規範形式）

(2) L1 話者の文法の(1)a には、形態素の意味のみからは予測できない特殊な発話行為が結びついており、この部分的合成性が獲得できていない L2 話者がおり、結果、L2 文法においては、(1)a が、L1 文法と比べた際、過剰に産出されている。

【3 主要先行研究】(1)の構文の選択には、下記の傾向が見られることが先行研究から明らかになっている：(i) (1)a が近年になってから人口に膾炙するようになったということ、(ii) 終助詞、認識的モーダル（-yoo）の存在が(1)a の選択確率を高めること、(iii) 保守的なレジスターでは(1)b が好まれること、である（川口 2014; Yamada 2019, 2023; 小川他 2020）。

【4 データ】このような変異の特徴が L2 にも見いだされるのかを検証するため、絵描写課題コーパス（I-JAS の SW 課題、および、JASWRIC）のデータを分析する（迫田 2020; 石川他 2023）。二つの四コマ漫画の出来事を記述した作文のコーパスで、L1/2 学習者ともに同じ課題に取り組んでいることから、統制下での対照研究が可能である。

【5 結果】第一に、L1 学習者（小学校 1 年～大学 1 年）の中で、 (1)a の「なかったです」という表現が用いられたのは、(3)に示す 1 例（用例の 0.3%）のみであり、それ以外は支配的に「ませんでした」が用いられていた。(3)は、先述の指摘にも合致し「でしょう」という形での使用となっている（物語を描写する課題であるため、(3)のように漫画に描かれていないことまで（ややおどけて）推量表現-yoo や終助詞で語るということ自体が少なく、結果「なかったです」の使用も低頻度となっているものと考えられる）。第二に、L2 学習者は、L1 学習者と比べ「なかったです」形の使用率が圧倒的に高い（用例の 2.23%）。(4)はその例であるが、登場人物（マリ）が熟睡をしていて家の外の物音に気が付いていない、という出来事をただ淡々と描写する際に、L1 学習者ではすべて「（聞こえ）ませんでした」というなっている。実際、この文脈における(4)の構文の容認度は、L1 学習者（ネイティブスピーカー）にとって「ませんでした」よりも低く感じられる。

(3) まさか二人の離婚のきっかけがピクニックだとは、誰も思わなかったでしょう。

(4) でも、マリは良く寝ていたので何も聞こえなかったです。（cf. 何も聞こえませんでした）

【6 考察】だが、確かに、丁寧体での過去否定文を表すことが目的なのであれば、(4)の形式も理にかなった形式であるように見える。にもかかわらず、L1 学習者がこの形を使わないということは、L1 学習者が、この「なかったです」という構文に単純な「丁寧＋過去＋否定」以上の、何らかの“追加の意味／使用制約”を見出しており、その追加制約を獲得し損ねている L2 学習者がこの「なかったです」という構文を、その使用域を超えて、過剰使用してしまっていると考えられよう。このように構文全体の意味がそれを構成する構成その意味のみからは計算できないことを、認知言語学では**部分的合成性**（Langacker 1999）と呼ぶが、それでは、この“追加の使用制約”とはいったい何なのであろうか。この点を考える上で次の二点が参考になる。第一に、「ませんでした」と「なかったです」では、丁寧語がマークされている統語的位置が異なるという点である。形態素ごとに分かち書きをした(5)を見られたい。「ませんでした」では過去形態素-*ta* が生起する層（Tensed Layer）よりも内側で丁寧語が発現しているのに対し、「なかったです」では、その外側に「です」が生起している。この最外層（Outermost Layer）は、終助詞に代表されるような談話指向性の高い意味機能がエンコードされる場所として知られている。

(5) a. [$_{\text{Outermost Layer}}$ [$_{\text{Tensed Layer}}$ *kiko-e-**mas**-en* ***desi**-ta*] *(-yo-ne)*] b. [$_{\text{Outermost Layer}}$ [$_{\text{Tensed Layer}}$ *kiko-e-nakat-ta*] ***-desu** (-yo-ne)*]

第二は、ビルマ語の丁寧語-pà/-bà の生起である。この言語でも丁寧語に二つの生起位置が知られている。(5)a の Tensed Layer に相当する Realis Marker の層の内側に生起するものが無標である一方で、Outermost Layer に生起する用法もあり、その場合「聞き手の誤解を正し Tensed Layer で表された命題が正しいという強調を添える」という発話行為を持つとされる（Romeo 2008; Yamada 2019）。第一の点を踏まえると、これは Outermost Layer に生起することで、丁寧語がその形態素の意味に加え、談話指向的な意味を獲得するという事例として分析できる。「3 主要先行研究」で概観したように、「なかったです」では、終助詞との共起等の談話指向的な Outermost Layer の要素が共起するときに容認度や使用量が上昇することが指摘されている。そこで、L1 学習者の文法でも、ビルマ語同様、(5)b の高い位置に生起する「です」に特殊な談話指向的意味が焼き付けられているのではないかと考えられる。それはビルマ語の「誤解の訂正」とは異なる発話行為であるとは考えられるが、その意味機能の詳細は一部今後の研究にも委ねたい。ただし本稿では、事実の物語描写文に生起しづらいというデータを踏まえ、暫定的な仮説として「ませんでした」が中立的に場面の描写に使えるのに対し、「なかったです」の「です」には、物語（モノローグ）の進行を妨げてしまう機能、すなわち、それが発話された際に、そこで一つの大事な話の区切りが認められ、それゆえターン・テイキング（Turn-taking）の可能性を高めてしまう機能が備わっているという見方を提案する。この点を未獲得の L2 話者は物語文でも「なかったです」を過剰生成し、L1 話者との相違が前景化している、ということである。

4. 参考文献

Alok, D. (2020) *Speaker and addressee in natural language: honorificity, indexicality and their interaction in Magahi*, Ph.D. dissertation, Rutgers University.

Alok, D. and B. Haddican (2022) The formal heterogeneity of allocutivity, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–41.

アントノフ・アントン (2016)「琉球諸語のアロキュティビティー」田窪行則・ホイットマン・ジョン・平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語:日琉祖語の再建にむけて』，235–257 くろしお出版，東京.

石川慎一郎・友永達也・大西遼平・岡本利昭・勝部尚樹・川嶋久予・岸本達也・村中礼子（2023）「『小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス』（JASWRIC）の構築：L1/L2 日本語研究の新しい資料として」『言語資源ワークショップ発表論文集』7, 393-416.

井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店.

Kashyap, A. K. (2012). The pragmatic principles of agreement in Bajjika verbs, *Journal of Pragmatics* 44, 1868–1887.

Kaur, G. and A. Yamada (2022) Honorific (mis)matches in allocutive languages with a focus on Japanese, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–38.

川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版，東京.

菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店.

Langacker, R. W. (1999). *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.

McFadden, T. (2020) The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil, in Smith, Peter W., Johannes Mursell, and Katharina Hartmann eds. *Agree to agree: agreement in the minimalist programme*, 391–424, Berlin: Language Science Press.

Miyagawa, S. (2022). *Syntax in the treetops*, Cambridge, MA: MIT Press.

宮地幸一 (1980) 『ます源流考』桜楓社，東京.

小川芳樹・石崎保明・青木博史 (2020) 『文法化・語彙化・構文化』開拓社，東京.

Portner, P., M. Pak, and R. Zanuttini (2019) The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface, *Language* 95(1), 1–36.

Romeo, N. (2008). *Aspect in Burmese: meaning and function*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

迫田久美子（2020）「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』（pp.2-13）くろしお出版

Traugott, E. C. and R. B. Dasher (2002). *Regularity in semantic change,* Cambridge: Cambridge University Press.

Yamada, A. (2019). *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*, Ph.D. dissertation, Georgetown University, Washington DC.

Yamada, A. (2023). Looking for default vocabulary insertion rules: Diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system, *Glossa: a journal of general linguistics* 8(1), 1–47.

P-26　分析的受動文の類型に関する試論：東南アジアの言語を中心に

野元　裕樹（東京外国語大学）

概要　受動文には本動詞の形が変化する統合的（synthetic）受動文(1a)と補助的要素（Aux）が用いられる分析的（analytical）受動文(1b)がある（Siewierska 2013）。

(1) Ali {a. **di-**tipu / b. **kena** tipu} (oleh Siti).　標準マレー語
Ali PASS-cheat KENA cheat by Siti
「アリは（シティによって）騙された。」

本研究では東南アジアの言語を主な対象とし、分析的受動文の示す様々な形態統語的・意味的特徴が Aux の①統語範疇、②形態的自立性、③モダリティ的意味の 3 つの要因により類型化できることを示す。

前提　Collins (2005)および Nomoto (2015)に従い、三層の動詞句構造(2)を想定する。(2)の v は Kratzer (1996)の Voice に相当し、項構造を決定する。対格付与能力を持つ能動化辞 v_{act} と持たない受動化辞 v_{pass}（ともに外項あり）など、複数の種類がある。v は基本的に音形を持たず、どの種類の v が用いられたかは態標識 Voice や(1)の oleh 句のような動作主句の存在により判明する(cf. Bruening 2013; Legate 2014)。

(2) $[_{VoiceP}$ Voice $[_{vP}$ DP $_{外項}$ v $[_{VP}$ V DP $_{内項}$]]]

三要因の選択肢とその帰結　①統語範疇には V と Voice の 2 通りがある。いずれも能動・受動どちらの補部も取り得る。V の場合、(2)の VoiceP を補部に取る（準）複文構造が生じる：$[_{VP}$ Aux $[_{VoiceP}$ …]]。そのため、繰り上げ・コントロール構文のようになる。また、統合的受動文で用いられる受動標識(Voice)と共起し得る。Voice の場合、全体は単文となり、受動標識と共起しない。②形態的自立性には自由形態素、接語、接辞の 3 通りがあり、語順の決定に関与する。接辞の場合、本動詞がそのホストとして要求され、Aux まで主要部移動する。特に Aux の統語範疇が Voice の場合には、外項が本動詞の直後に来ることになる：$[_{VoiceP}$ Aux-v-V $[_{vP}$ DP $_{外項}$ …]]。③モダリティ的意味は迷惑（adversity）等の意味に関与し、義務的、随意的、なしの 3 通りがある。

実例（の一部）　下に行くほど Aux と本動詞の一体性が高まり、統合的受動文に近づく。

[A] 標準マレー語 kena（V、自由形態素、義務的）：統合的受動文の受動標識 di-と共起可能で（$[_{VP}$ **kena** $[_{VoiceP}$ **di-**v_{pass}-V $[_{vP}$ DP …]]]）、その場合には交差コントロールの解釈も生じる(Nomoto & Kartini 2012)。能動の vP（を含む VoiceP）を取る時は「～しなければならない」という解釈になる。

[B] キマラガン・ドゥスン語 maan（V、自由形態素、なし）：迷惑の意味がない点、能動の vP（を含む VoiceP）を取らない点で A と異なる。maan は時制で屈折するが、本動詞はしない（Kroeger 2005）。

[C] パタニ・マレー語 kenor（Voice、自由形態素、随意的）：受動標識 di-を欠き、迷惑の意味なしでも使え、交差コントロール解釈も生じない点で A と異なる。外項は kenor の後、本動詞の前に生起する（$[_{VoiceP}$ **kenor** $[_{vP}$ DP $_{外項}$ v_{pass} $[_{VP}$ V …]]]）。kenor が di-に取って代わったと考えられる。

[D] ベトナム語 bị、được (Voice、自由形態素、義務的)：迷惑等の意味が義務的である点で C と異なる。

[E] カヤン語 an（Voice、接語、なし）：外項は常に an の後に生起し、an と 1・2 人称の人称代名詞が融合した形もある（Smith et al. 2024）。gaʔ を使った迷惑受動文が別に存在する。

[F] クニャ語 ən（Voice、接語・接辞、なし）：外項が本動詞の前だけでなく、後にも生起し得る点で E と異なる（Erlewine & Smith 2024）。ən は前者では接語（$[_{VoiceP}$ **ən=** $[_{vP}$ DP $_{外項}$ v $[_{VP}$ V …]]]）、後者では接辞（$[_{VoiceP}$ **ən-**v-V $[_{vP}$ DP $_{外項}$ …]]）であると考えられる。後者は厳密には統合的受動文であり、C とともに分析的受動文と統合的受動文の連続性を示唆する。

参考文献

Bruening, Benjamin. 2013. *By* phrases in passives and nominals. *Syntax* 16: 1–41.

Collins, Chris. 2005. A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8: 81–120.

Erlewine, Michael Yoshitaka & Alexander D. Smith. 2024. On the syntax of the analytic passive in Kenyah. Paper presented at the First International Symposium on Bornean Linguistics.

Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In Johan Rooryck & Laurie Zaring (eds.) *Phrase Structure and the Lexicon*, 109–137. Kluwer: Dordrecht.

Kroeger, Paul. 2005. Kimaragang. In Alexander Adelaar & Nikolaus Himmelmann (eds.) *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 397–428. London: Routledge.

Legate, Julie Anne. 2014. *Voice and* v*: Lessons from Acehnese*. Cambridge, MA: MIT Press.

Nomoto, Hiroki. 2015. Person restriction on passive agents in Malay and givenness. In *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, 83–101.

Nomoto, Hiroki & Kartini Abd. Wahab. 2012. *Kena* adversative passives in Malay, funny control, and covert voice alternation. *Oceanic Linguistics* 51: 360–386.

Siewierska, Anna. 2013. Passive constructions. In Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online (v2020.3) [Data set]*. Zenodo. https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533

Smith, Alexander D., Michael Yoshitaka Erlewine & Carly J. Sommerlot. 2024. Voice and pronominal forms in Kayan (Uma Nyaving). *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 17: 81–104. https://doi.org/10524/52527.

P-27

オリヤ語における数と助数詞の相互作用

山部順治（熊本大学）

キーワード： 1. オリヤ語（印欧語インド語派、インド東部）；2. 統語論、類型論；3. 助数詞

オリヤ語においては、原則として、名詞の指示物の個数を表すのに助数詞が必要である。(1)のように、助数詞がないと容認されない。（同系・近隣のベンガル語やアッサム語でも、同様の観察がある。）

(1) a. *mu~ dui *(Taa) bahi aaN-ich-i.*
I.NOM two CLA book bring-PERF-1SG 私は本を２冊持ってきた。

b. *kaali caari *(jaNa) chaatra aama ghara-ku aas-th-il-e.*
yesterday four CLA student our house-OBJ come-PERF-PAST-3PL 昨日学生が４人我が家に来た。

本発表は、数詞の表す数によって助数詞の出現のしかたが相違することを報告する。概略的傾向としては、数が大きくなるほど、助数詞の使用は随意的になり、さらには不可能になる。話者間で変異があるが、1 名の話者についての事実観察を一覧にすると、(2)の表のとおりである。○は可能、×は不可能。

(2)

	数詞の表す数 ＼ 助数詞		(A) *Taa* 非情	(B) *Taa* 人	(C) *jaNa*	(D) *khaNDa*	(E) CLA 無
①	1		!	!	!	!	×
②	2～19		○	○	○	○	×
③	20, 30, 40, …	十の倍数で 20 以上	○	○	○	○	○
④	21, 22, 23, 24, …	③以外の、２桁の数	○	○	○	○	×
⑤	101＜	100 を超過	○	×	○	○	na
⑥	100,000, .., 20,000,000,..	lakhya 十万、koTi 千万	×	×	×	○	○

助数詞-Taa は、非情物・人いずれにも使われる。(A) 非情物の場合には、数が十万に満たない場合（①～⑤）に現れることができる。その数とは、3,000,200 のような複合的構成の数については、末尾に読まれる数 200 を指す。(B) 人の場合には、数が百までは現れるが、百を超えると現れない。これは、230 のような複合的数については、末尾に読まれる数 30 でなく、名詞の指示対象の個数 230 によって決まる。(C) -jaNa は、人にのみ適用される。これは(A)と同じパターンを示す。(D) khaNDa は、一部の（しかし多様な）種類の非情物に適用される。これは数の大小に関わらず現れうる。(E) 助数詞の省略は、末尾に読まれる数が、百の倍数であるか、または十の倍数で 20 以上であるか、なら可能だ。

語順は「数—助数詞」だ。ただし、数が 1 である場合（①）に限り、個数 1 の標示は助数詞の接尾辞-e として具現する（表(2)では！）。例文(1b)を基にして人数を 1 にすると(3)になる。

(3) *kaali {jaN-e | *ek jaNa} chaatra aama ghara-ku aas-ith-il-aa.*
yesterday CLA-one one CLA student our house-OBJ come-PERF-PAST-3SG

数が十の倍数の場合に助数詞が省略できる事実（表(2)の(E)③、⑥）を生じさせる仕組の説明として、百・千など位取りを表す語が助数詞の一種であるとの想定のみによって説明しつくす（Greenberg1972[1990:172]などでビルマ語について提示されている説明）ことはできない。確かに、この想定に好都合な事実として、オリヤ語の位取り表す語（ただし十を除く）は、形態面で助数詞的な特徴を示す—これらの語(4a)は、助数詞(3)と同じくそして名詞一般(4b)とは異なり、個数 1 であることを接尾辞-e によって標示させる（表(2)で！）。

(4) a. *{hajaar-e | dui hajaara | tini hajaara} chaatra aas-ith-il-e.*
thousand-one two thousand three thousand students came-3PL

b. ** bahi-e | * jhia-e*
book-one girl-one

しかし、オリヤ語では（他のインド諸言語でと同じく）、20 から 90 の十の倍数は（das「10」という語を含まないだけでなく）共通の形態を含まない（例、koDie「20」、tiris 「30」）。それでも助数詞を省略できる（(E)③）。また、数詞に接尾辞-e が付いて助数詞然としていても、さらにそれに“本物の”助数詞が付いてよい(5)。

(5) a. *{hajaar-e | hajaar-e jaNa} chaatra*
thousand-one thousand-one CLA student

b. *{sah-e | sah-e Taa} bahi*
hundred-one hundred-one CLA book

略号 CLA = classifier, NOM = nominative, OBJ = objective, PERF = perfect, PAST = past, PL = plural, SG = singular, 1/2/3 = 1st/2nd/3rd person.

参照文献

Greenberg, J.H. (1972) Numeral classifiers and substantival number: problems in the genesis of a language type. Reprinted: Keith Denning & Suzanne Kemmer, eds., [1990] *On language: selected writings of Joseph H. Greenberg*, pp.166-193. Stanford, California: Stanford University Press.

P-28

A Pragmatic Analysis of the Discourse Marker "geme" in the Shanghai Dialect

Zian Huang
Kyushu University

This study examines the discourse marker "搿么" (/geme/) in the Shanghainese dialect, focusing on its syntactic positioning and pragmatic functions within conversational contexts. Discourse markers, despite lacking propositional content, are essential for organizing discourse, managing turn-taking, and ensuring conversational coherence. By analyzing a corpus of 58 instances from natural dialogues and media sources, this paper sheds light on the marker's role and utility in everyday communication among native Shanghainese speakers.
Syntactic analysis of geme reveals its primary position at the beginning of conversational turns (60.3%), followed by occurrences in the middle (27.6%) and at the end (12.1%). This distribution highlights geme's function in initiating new discourse segments, managing topic shifts, and facilitating inferential reasoning. For example, when geme is used at the beginning of a turn, it often serves as a signal for the speaker to introduce new information or shift the focus of the conversation. In contrast, when appearing in the middle or at the end, geme helps in concluding or transitioning between topics, similar to how "so" or "then" functions in English.
The frequent occurrence of geme at the beginning of turns aligns with Turn-Taking Theory (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974), which suggests that discourse markers play a crucial role in managing the dynamics of conversation, including marking the boundaries between speaker turns and ensuring smooth transitions. Geme's role in managing conversational flow is particularly evident in its use to signal shifts in topics or introduce new elements into the discussion, thus maintaining coherence and continuity.
From a semantic-pragmatic perspective, geme predominantly establishes causal relationships (60.87%), connecting antecedent statements with their consequences. This is followed by its role in signaling conditional relationships (17.39%), where geme introduces hypothetical or contingent scenarios. Other functions include explanatory (8.70%), concessive (8.70%), and sequential (4.35%) relationships, reflecting the marker's versatility in various pragmatic contexts. These findings support Discourse Marker Theory (Schiffrin, 1987; Fraser, 1990), which categorizes markers based on their contribution to discourse coherence and their role in managing conversational flow.
By integrating Turn-Taking Theory and Discourse Marker Theory, this study provides a comprehensive understanding of geme's role in Shanghainese conversations. The findings highlight the marker's importance in managing conversational flow and maintaining coherence, offering valuable insights for pragmatic research in Chinese dialects and broader linguistic studies.

References:

Fraser, B. (1990). An approach to discourse markers. *Journal of Pragmatics, 14*(3), 383-398.
Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers.* Cambridge University Press.
Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language, 50*(4), 696-735.
Li, Y. (2003). Pragmatic functions of discourse markers in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics*, 31(2), 234-256.

P-29 The expression of deictic riverine motion events in Upper Negidal

Laurène Barbier

Laboratoire Dynamique Du Language, CNRS / Université Lumière Lyon 2, France

Spatial *Deixis* refers to the point of view adopted in space, and to the direction of motion relative to this deictic centre, as often illustrated by the verbs 'to go' (centrifugal motion) and 'to come' (centripetal motion) in English. *Deixis* has been the subject of much debate in the literature, with some scholars considering it to be part of the *Path* domain (Bohnemeyer 2003), while others consider it to be a domain on its own (Matsumoto & al. 2017). In some languages, the expression of *Deixis* is constrained, which can affect the way motion is expressed (order of the constituents, combination of morphosyntactic markers, characterisation of verbs of motion) (Wilkins & Hills 1995).

Upper Negidal is one of the two varieties of Negidal, a moribund North Tungusic language (Whaley & Oskolskaya, 2020) spoken along the Amgun River in the Russian Far East by 4 speakers with variable language practices (Pakendorf & Aralova 2018). Despite its critical linguistic situation, it remains underdescribed and its spatial system has not yet been the subject of in-depth and systematic research. Therefore, the aim of this study is to highlight the strategies used in Upper Negidal to express *Deixis*, in particular riverine deictic motion events. To what extent do the structures of Upper Negidal distinguish *Deixis* from *Path*? Are there asymmetries in the expression of centripetal and centrifugal motion? How do deictic elements combine with each other? To what extent does riverine vocabulary play a particular role in the expression of *Deixis* in Negidal? To conduct this study, I examined a corpus of narratives in Upper Negidal told by 9 speakers (Pakendorf & Aralova 2017). From this corpus, I extracted 3745 utterances expressing spontaneous translational motion (i.e. not caused by an event or a person).

Results reveal that Upper Negidal resorts to various verbs of motion and adverbs to express *Deixis*. The verbs *əmə-* 'to come' and *ŋənə-* 'to go' are attested, but also semantically more specific verbs, such as *solo-* 'to go upriver', as in (1), or *ojaːn-* 'to go downriver', which are directly related to Upper Negidal's proximity to rivers, as described in other Asian languages (Sims & Genetti, 2017). Two riverine adverbs also carry a deictic meaning, *ojaːki* 'downriver' and *solaːki* 'upriver', as in (2). For the riverine deictic motion verbs, the deictic centre seem to be linked to the river's orientation in space, whereas for the other general deictic verbs the anchoring of the deictic centre seems less constrained and linked to the context of narration or to the narrator himself.

1)	*mugdin*	*həd-gidaː-li-n*	*sola-ja-βun*
	riverbank	bottom-SIDE-PROL-3SG	go.upriver-NFUT-1PL.EX
	'Near the bank we go upriver.'		

2)	*ojaːki*	*ŋənə-ʁa*	*sotʁa-ʁa*
	downriver	go-PST	run.away-PST
	'He went downriver and ran away.'		

To conclude, the encoding devices that can express *Deixis* in Upper Negidal are diverse and seem to behave differently, depending on the context of narration and the type of motion expressed, on land or water. Indeed, it appears that deictic encoding devices are anchored in the environment in which Upper Negidal is spoken. This research will provide new insights into the role of rivers in social practices of the Upper Negidal's community, and more generally it will contribute to broaden our understanding of this endangered language spatial system.

References

Bohnemeyer, Jürgen. 2003. The Unique Vector Constraint: The Impact of Direction Changes on the Linguistic Segmentation of Motion Events. In Emile Van der Zee & Jon Slack (eds.), *Representing Direction in Language and Space*, 86–110.

Matsumoto, Yo, Kimi Akita & Kiyoko Takahashi. 2017. The functional nature of deictic verbs and the coding patterns of Deixis. In Iraide Ibarretxe-Antuñano (ed.), *Motion and Space across Languages*, 95–122. John Benjamins.

Pakendorf, Brigitte & Natalia Aralova. 2017. Documentation of Negidal, a nearly extinct Northern Tungusic language of the Lower Amur. Available at: http://hdl.handle.net/2196/b644db81-725c-4031-935c-f33c763df152. (last access 17/09/2024).

Pakendorf, Brigitte & Natalia Aralova. 2018. The endangered state of Negidal: A field report. *Language Documentation & Conservation*. University of Hawaii Press 12. 1–14.

Sims, Nathaniel & Carol Genetti. 2017. The Grammatical Encoding of Space in Yonghe Qiang. *Himalayan Linguistics* 16. 99–140.

Wilkins, David P. & Deborah Hill. 1995. When ″go″ means ″come″: Questioning the basicness of basic motion verbs. *Cognitive Linguistics* 6(2–3). 209–260.

Whaley, Lindsay & Sofia Oskolskaya. 2020. The classification of the Tungusic languages. In *The Oxford Guide to the Transeurasian Languages*, 80–91. Oxford University Press.

P-30　スポーツ実況における「痛んでいる」
―語彙選択の動機づけと使用の制約に関して―

東北学院大学　外国語教育センター　特任助教
阪口　慧（Kei SAKAGUCHI）[keisakaguchi24@gmail.com]

言語現象―「痛んでいる」の使用背景と実態―

本研究はスポーツ実況時などにおける「痛んでいる」という表現が使用される動機づけについて考察する。この語彙選択が興味深い点は助動詞「－そうだ」「－がる」が使用できる状況であっても「痛んでいる」が選択される点である。西尾（1972）や村上（2015）などでも指摘されているように、感情・感覚形容詞の場合には他者の感情や感覚を指し、話し手がそれを言語化する場合には「－がる」「－そうだ」が付加されるが、スポーツの実況中継ではそれらの付加がかえって選手の意図的な行為として伝達される可能性があるため、「痛んでいる」という言葉が使用されているものと考えられる。次の例をみよう。

(1)　ゴール前で、選手が｛a 痛んでいます/ b *痛そうです/c？ 痛がっています｝。

上記の例（1a）はスポーツ、特にサッカーやラグビーなど複数名で行い、選手間の身体的コンタクトがあるスポーツの実況で用いられる。多くの場合、一つのプレーの接触において怪我または相当の痛みを得てプレーの継続が困難でうずくまる、横になって動けないでいる場面の実況で使用される。（1b）の様にいうことも可能であるがやや不自然である。ただし、（1c）の様に言う事は可能であるが、ファールをもらいフリーキックなどを獲得するための戦術的な負傷のふりであるような印象を与えてしまう。なお、（1a）における「痛む」は食品などに使われる「痛む」という語の意味・使用とは異なっている。通常の「痛む」は（2a）のように食品などの鮮度が落ちている状態を指す。この時、（2b）及び（2c）の様に「痛い＋そうだ」「痛がる」の使用は不自然である。

(2)　昨日買ったばかりのレタスがもう｛a 痛んでいる/ b *痛そうだ/c *痛がっている｝。

上記の事からも、（1a）で使用される「痛む」は「痛い＋そうだ」に近い意味で使用され、食品などに使われる「痛む」とは異なる使用域を持つと考えられる。西尾（1972）などでは他人の感覚や感情に対しては「－がる」が使用されることが指摘されているが、上記の対照はスポーツ実況という場面では「－がる」が選択されないことを示唆する。

先行研究

形容詞の意味研究において西尾（1972）、八亀（2008）、村上（2015）において形容詞とソウダの共起、主観・客観性に関わる議論は行われてきたが、本研究で扱うような新奇性の高い「痛んでいる」と他の表現との比較は行われていない。なお、「心が痛んでいる」という表現に関しては山岡（2014）が触れており状態描写としての意味・機能があることを指摘している。確かに、本研究で扱う「痛んでいる」も状態描写としての側面はあるが、問題は他の語彙形式の選択も可能な中で「痛んでいる」が選好される点であり、テイル形に状態描写としての意味機能があるというだけではこの選好を十分に説明できない。学術研究ではないが、テレビ局の関係者である本多（2012）では「少々大げさに痛みをアピールしているのかを瞬時に断定できない時に発する第一声としては、確かに端的で便利な表現」（本多, 2012: 69）という指摘がある。この点は他者の意図性を排除するという動機づけが働いている可能性を示唆するものである。

考察と結語

上記の通り、痛みの原因・意図性が判然としない状況を描写する場合に「痛んでいる」という表現が選好される可能性が示唆された。ここでは言語事実に基づいて考察を深め「痛んでいる」の使用の制約を考える。

(3)　ゴール前で、選手が痛んでいます。脚のあたりを抑えており、随分と｛a 痛そうです/b *痛んでいます。｝
(4)　あの選手は膝が｛a 痛そうだ / b *痛んでいる｝
(5)　膝が｛a 痛そうだ/ b.？ 痛んでいる｝（自己の痛みに関して客観的に描写する場合のみ（5b）は自然）

（3）で見るように、選手の負傷の状況が把握され、どの身体部位に痛みが生じているのかが明確になると「痛んでいます」は使用できない。そのため、「［身体部位］＋痛んでいます」という表現は不自然となる。また、一文で「痛んでいる」を使用し主語に［経験主］及び［身体部位］を伴ったものも（4a）「痛そう」であれば自然だが、（4b）のように「痛んでいる」は不自然な文となる。最後に（5a）で見るように、身体部位のみを主語にとり他者の痛みに対して「痛そう」と言及することは可能だが、他者の特定の身体部位の痛みを（5b）のように「痛んでいる」と述べることは出来ない。以上の点から使用制約を確認すると、スポーツ実況という特定の場面において、「自己（実況者）以外の他者（選手）の痛みに対して、その痛みがどの身体部位に生じているかが判然としていないものの、身体のどこかに痛みが発生している、かつ意図的なものであることを伝達しない」という制約があると言える。紙面に制約があるため、より詳細な議論はポスターセッションにて行うこととする。

主要参考文献

本多　葵 (2012) 「いたんでいます！」―ことば　言葉　コトバ―『放送研究と調査 』, 12. 東京：NHK 出版
村上佳恵 (2015)『現代日本語の感情形容詞の研究』学習院大学, 博士学位論文
西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究:国立国語研究所報告:44』東京：秀英出版.
阪口　慧 (2023) 「フレーム意味論・構文彙に基づいた日本語形容詞・構文の意味研究」東京大学, 博士学位論文
高井　一 (2011)「痛んでいる」『空言舌語』東海テレビ, 209.
[https://www.tokai-tv.com/kuugenzetsugo/20110613_takai02_8404.php] (2024/08/20 アクセス)
八亀裕美 (2008)『日本語形容詞の記述的研究一類型論的視点から』東京: ひつじ書房
山岡政紀 (2014)「文機能とアスペクトの相関をめぐる一考察: 動詞テイル形の解釈を中心に (第 I 部 文法研究)」『日本語コミュニケーション研究論集』, (3), 1-8.

* 本研究は阪口（2023）で行った議論を修正し、特に「痛んでいる」という表現にのみ焦点を当て、考察を深め修正を施したものである。

P-31　日本語のコントロール文における空主語の処理: 脳磁図による検討

山口 航輝 [1], 山田 絵美 [2], 太田 真理 [2]
[1] 九州大学大学院人文科学府, [2] 九州大学大学院人文科学研究院
koki.yamaguchi.linguist@gmail.com

【背景】生成文法をはじめとする理論言語学では、発音されないが統語機能を担う空範疇が提案されてきた。空範疇には空代名詞 pro や移動の痕跡 trace などがある。その中でもコントロール文の主語位置の空範疇の位置付けは長年論争が続いている。Chomsky (1981) や Landau (2004) は空範疇に照応形の素性をもつ PRO を提案し、Hornstein (1999) は、移動の痕跡 trace により分析する理論を提案した。しかし、PRO や移動による分析が妥当か判断するには、理論的検討に加え実験に基づく検討も必要である。本研究では脳磁計を用いて、日本語のコントロール文と、空範疇に移動の痕跡をもつ繰り上げ文の脳活動を比較した。PRO 分析では、コントロール文と繰り上げ文に異なる空範疇を仮定するため、空範疇の処理に関わる脳活動の違いが生じることが予想される。一方で、コントロール文と繰り上げ文で同じ移動操作を仮定する移動分析では、両者に脳活動の差が生じないことが予測される。

【方法】 正常な視力をもつ右利きの日本語母語話者 11 名が実験に参加した (男性 7 名、平均年齢 21.6 ± 1.5 歳)。日本語では (1a)、(1b) のような統語的複合動詞が、それぞれコントロール文・繰り上げ文に相当する (影山 1993)。また、空範疇を含まない語彙的複合動詞を基準文条件 (1c) として用いた (各条件 30 文とフィラー文 (1d) 90 文を加えた 180 文をランダム提示)。本研究で用いた統語的複合動詞は、全て 3 形態素であった。刺激文を 6 文節に分け、文節ごとに視覚提示した。参加者が刺激文を読んでいるか確認するために、プローブ語が文中に含まれるか否かを判断するプローブ語認識課題を実施した。脳磁図は、306-channel whole-head MEG system (Neuromag, Elekta Ltd., Helsinki, Finland) で計測した（サンプリング周波数：1000Hz、オンラインフィルター：0.03–330 Hz）。脳磁図データは MNE-Python で解析し、dSPM (dynamic statistical parametric mapping) を用いた信号源推定を行った。先行研究を参考に PALS-B12 を利用して (Van Essen 2005)、左下前頭回を関心領域 (regions of interests, ROI) に設定し、複合動詞の提示後 600–900 ms を対象に一要因の分散分析を実施し、有意な活動を示す時空間クラスターを特定した。さらに、有意な時空間クラスター内で、anovakun (ver. 4.8.9) を利用したシェイファー法による多重比較の補正を用いた条件間の比較を行った (R version 4.2.1)。

【結果と考察】分散分析の結果、左下前頭回で有意なクラスターが見つかった (corrected $p = 0.034$) (図 1)。このクラスターでは複合動詞の提示後 635－900 ms に条件間で脳活動の有意差が生じていた。多重比較の結果、コントロール文は繰り上げ文よりも左下前頭回の活動が有意に上昇することが分かった (corrected $p = 0.01$, $t = 3.12$)。また、コントロール文と基準文でも、左下前頭回でコントロール文に有意に高い活動が見られた (corrected $p = 0.007$, $t = 3.34$)。しかし、繰り上げ文と基準文では有意差は見られなかった (corrected $p = 0.06$, $t = 2.04$)。

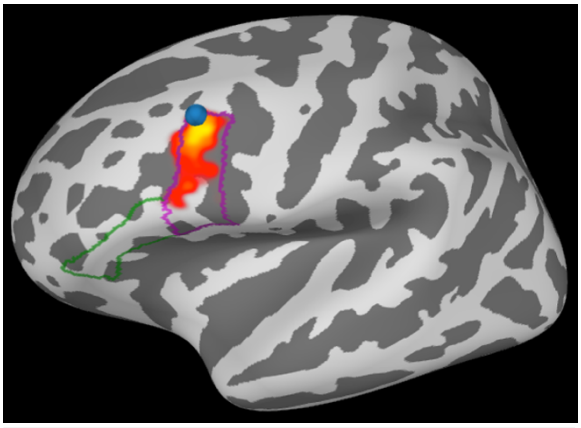


図 1 赤色の部分は繰り上げ文よりコントロール文の活動が有意に高い箇所を示す。緑と紫の枠は左下前頭回、紫の枠はその中でも弁蓋部を示す。

本研究の結果は、コントロール文と繰り上げ文では異なる空範疇の処理が行われることを示しており、移動分析ではなく PRO 分析の妥当性を示唆している。左下前頭回は移動との関連が多くの先行研究で明らかにされているが (Zaccarella et al. 2017 など)、移動分析が妥当であるなら、左下前頭回ではコントロール文と繰り上げ文の差は生じないと予測されるため、本研究の結果と矛盾する。Matchin et al. (2014) は、左下前頭回は長距離の依存関係を処理する際に、照応の方が移動よりも活動が上昇することを報告している。本研究でのコントロール文と繰り上げ文の差は、照応要素をもつ PRO と移動の痕跡の違いが反映されたものと考えられるため、本研究ではコントロール文の空範疇を PRO により分析する理論の方が妥当であることが明らかとなった。

(1)	a.	中村が	会社で、	先週	火曜日に	高橋を	叱りそびれた。	（コントロール文）
	b.	中村が	会社で、	先週	火曜日に	高橋を	叱り過ぎた。	（繰り上げ文）
	c.	中村が	会社で、	先週	火曜日に	高橋を	叱りつけた。	（基準文）
	d.	中村が	会社で、	先週	火曜日に	高橋を	叱った。	（フィラー文）

参照文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Chomsky N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Hornstein, N. (1999) Movement and control. *Linguistic Inquiry* 30. 69–96.

Landau, I. (2004) The scale of finiteness and the calculus of control. *Natural Language & Linguistic Theory* 22. 811-877.

Matchin, W., Sprouse, J., and Hickok, G. (2014) A structural distance effect for backward anaphora in Broca's area: An fMRI study. *Brain and language* 138. 1–11.

R Core Team. (2022) R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL https://www.R-project.org/.

Van, Essen. D.C. (2005) A Population-Average, Landmark- and Surface-based (PALS) atlas of human cerebral cortex. *NeuroImage*. 28(3). 635-662

Zaccarella, E., Meyer, L., Makuuchi, M., and Friederici, A. D. (2017) Building by syntax: The neural basis of minimal linguistic structures. *Cerebral Cortex* 27(1). 411–421.

P-32

日本語の(非)定形節における長距離 A 移動に関する考察

臼井　悠香（九州大学大学院）

1. 導入: 日本語の節内かき混ぜは、A 移動の特性と A'移動の特性を示すことが観察されてきた。Otsuka (2023)は、この伝統的観察を原理的に説明している。Otsuka の提案では、節内かき混ぜは句の対併合により派生し、移動先のコピーが発音される一方、その解釈が移動先で行われると A 特性が、元位置で行われると A'特性が得られる。対併合は、集合併合が行われる primary plane とは異なる separate plane への併合であり、対併合を受けた要素は、転送時に SIMPL という操作により primary plane へ組み込まれる(Chomsky (2004))。従って Otsuka は、句の対併合は単一の転送領域内で適用されると論じている。

本研究では、Otsuka (2023)による対併合分析を用いて、日本語の(非)定形節で観察される長距離 A 移動の可否に関する事実を、フェイズ理論(Chomsky (2000, 2008))に基づき説明する。

2. 提案: 本研究では、次の提案を行う。日本語の CP はフェイズを成すが、T の C への外的対併合が行われると、C のフェイズ性が取り消される(cf. Sugimoto (2021))。顕在的な主語を伴う定形補部節(=(1))では、フェイズ主要部 C から素性(F)を継承した T と主語との間で一致が生じた後、C の補部がインターフェイスへ転送される(Chomsky (2008))。他方、非顕在的な主語(PRO)を伴う非定形補部節(=(2))では、T の C への外的対併合により、フェイズ主要部 C が非可視的となり、一致及び転送は生じない。

(1)　{Subj$_2$ {{{Subj$_1$[F] {~~Subj$_1$~~ {Obj V} *v**} T[F]} C[~~F~~]} V} *v**}　(Subj$_1$ は補部節主語、Subj$_2$ は主節主語)

(2)　{Subj {{{PRO {Obj V} *v**} <T, C>} V} *v**}

句の対併合は単一の転送領域内で適用されるとする Otsuka (2023)の議論と上記の派生に基づき、日本語の長距離 A 移動は対併合であり、その可否は補部節での転送の有無により決定されることを示す。

3. 分析: 節内かき混ぜの例(3b)では、数量詞「3 つ以上の大学」が文頭へ移動し、変項である「そこ」を束縛できる。(4a)に示すように、定形節を越える長距離 A 移動は許されない。これは、(4b)のように、移動要素の元位置のコピーが補部節で転送され、主節への対併合が不可能なためである。(従って、(4a)は A'特性のみを示し、「そこ」が文脈上の場所を指す解釈のみが得られる。)

(3)　a.　*そこ$_i$の　卒業生が　3 つ以上の　大学$_i$に　出願した。

　　b.　[3 つ以上の　大学$_i$に]$_1$　そこ$_i$の　卒業生が　t$_1$　出願した。　(Takano (2010: 84))

(4)　a.　*[3 つ以上の　大学$_i$に]$_1$　アヤが　そこ$_i$の　卒業生に　ケンが　t$_1$　出願した　と　言った。　(Takano (2010: 85-86))

　　b.　* <Mittu-izyoo-no daigaku$_1$…{Aya {soko-no sotugyoosei {{Ken[F] {~~Ken~~ {~~t$_1$~~V} *v**} T[F]} C[~~F~~]} V} *v**}…>

他方、(5a)に示す非定形節(主語コントロール)はこれを越える長距離 A 移動を許す。この場合、(5b)のように、補部節のフェイズが取り消され、転送は生じず、補部節内の要素が主節へ対併合できる。

(5)　a.　[3 つ以上の　大学$_i$に]$_1$　そこ$_i$の　卒業生が　t$_1$　出願しよう　と　した。　(Takano (2010: 86))

　　b.　<Mittu-izyoo-no daigaku$_1$ …{soko-no sotugyoosei {{{PRO {t$_1$V} *v**} <T, C>} V} *v**}…>

4. 議論の拡張: 本研究における提案は、(6)に示す *te hosi* 構文(Kobayashi (2008), Nakatani (2013))にも拡張可能である。この構文では、補部節が主格主語、あるいは与格主語を伴う。

(6)　私は　ケンが/に　それを　食べて　ほしかった。　(Kishimoto (2023: 75-76))

Kishimoto (2023)が指摘するように、主語が、同一節内での否定による認可を要求する「しか」を伴う場合、(7a)と対照的に、(7b)の与格主語では、「しか」が補部節内の否定によって認可されない。このことから、Kishimoto (2023)は、主格主語を補部節の要素、与格主語を主節の要素として分析している。

(7)　a.　私は　[ケンしか　それを　食べないで]　ほしかった。

　　b.　*私は　ケンにしか　[PRO　それを　食べないで]　ほしかった。　(Kishimoto (2023: 76))

これに基づき、*te hosi* 構文では、補部節主語が主格の場合、(1)の定形補部節の構造と同様、フェイズ主要部 C が機能することにより、補部節で一致・転送が生じる一方、補部節主語が与格の場合、(2)の非定形補部節の構造と同様、フェイズの取り消しにより補部節で一致・転送が生じないと提案する。

ここで、(8)に示すように、Yoshimoto (2012)によると、非定形節を越えるかき混ぜでは、主節付加詞内への変項束縛が可能である。これを踏まえ、本分析の元で、*te hosi* 構文における長距離 A 移動は、(9b)の与格主語の場合は可能だが、(9a)の主格主語の場合は不可能となるという対比が説明できる。

(8)　[3 つ以上の　会社$_i$に]$_1$　学生が　そこ$_i$の　社長の　前で　t$_1$　電話しよう　と　した。　(Yoshimoto (2012: 185))

(9)　a. ?*[3 つ以上の会社$_i$に]$_1$　ケンが　そこ$_i$の　社長の　前で　アヤが　t$_1$　電話して　ほしかった。

　　b. ?[3 つ以上の会社$_i$に]$_1$　ケンが　そこ$_i$の　社長の　前で　アヤに　t$_1$　電話して　ほしかった。

参照文献

Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures* 3, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.

Chomsky, Noam. (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory. Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

Kishimoto (2023) “Negative Polarity and Clause Structure in Japanese,” *Polarity-sensitive Expressions*, ed. by Hideki Kishimoto, Osamu Sawada and Ikumi Imani, De Gruyter, Berlin/Boston.

Kobayashi, Akiko (2008) “Constraints on Nominative-case Marking in *Te Hosi* Constructions: A PIC Account,” *Journal of Japanese Linguistics*, 24, 45-68.

Nakatani, Kentaro (2013) *Predicate Concatenation: A Study of the V-te-V Predicate in Japanese*, Kuroshio, Tokyo.

Otsuka, Tomonori (2023) “On Internal Pair-Merge and Ambiguous Chains,” *English Linguistics* 39, 157-190.

Sugimoto, Yushi (2021) “Labeling Defective T,” *Studia Linguistica* 75, 150-164.

Takano, Yuji (2010) “Scrambling and Control,” *Linguistic Inquiry* 41, 83–110.

Yoshimoto, Keisuke (2012) “Dissociating Japanese Scrambling from Controller Movement,” *IBERIA: An International Journal of Theoretical Linguistics* 4, 170-200.

P-33

属性構文とされる「～をしている」について

日高俊夫

本発表の分析対象は，「属性描写」とされることの多い次のような文である。

(1) a. その人形は青い目をしている。　d. この紅茶はさわやかな味をしている。
b. 彼女は長い髪をしている。　e. このワインは金木犀の香りをしている。
c. この車は赤い色をしている。　f. この楽器はおもしろい音をしている。

佐藤 (2003) が意味的成立条件を議論し，影山 (2003) が，「身体属性文」（(1a,b) に相当）の分析を示して以来，構文文法 (森山 2015) や認知意味論 (大神 2020, 2024, 澤田 2012, 板垣 2022, 2024, 岩男 2022, 2024)，統語論 (岸本 2023), 生成語彙論等の分析 (小野 2014, 小薬 2023) がある。本発表は，Pustejovsky (1995) の特質構造（Qualia Structure; QL）内の形式役割（FORMAL; F）と構成役割（CONST; C）を命題的意味部門（TS），主体役割（AGENTIVE; A）と目的役割（TELIC; T）を非命題的意味部門（NTS）とする Arai and Hidaka (2016) 等の表示を用い，生成語彙論の立場から意味的構成性についてより精密に分析する。具体的には (2) を主張し，例として「（その象は）長い鼻をしてい（る）」の意味合成過程 (3) を示す。

(2) a. 当該表現は，補部名詞句，ス（ル），テイ（ル）の構成的意味合成によって説明可能である。
b. 当該表現は，主語と「青い目」などの名詞句の間の不可分所有（inalienability）関係を基本として成り立ち (影山 1990, 角田 1991)，ス（ル）はそのことをマークする役割をもつ。
c. 「認知主体が能動的に環境に働きかける探索（活動）」(澤田 2012) は，観察に基づく証拠性の提示というテイ（ル）の語彙的意味 (大江 1975, 定延 2006, 飯田 2019, 宮下 2019) に帰せられる。それを踏まえ，当該表現を，話し手が観察に基づいて観察対象の状態を客観的事実として提示する（(3d) 参照）ものと位置づける. また，容認性判断に大きく影響するのは証拠性階層 (Faller 2002, 70)（ex. この桃は { 白い色/?*すっぱい匂い } をしている）および「不可分所有性」（ex. あの力士は軽い {?*体重/体 } をしている）であることを示す。

(3)

a. $\begin{bmatrix} \textbf{\textit{nagai hana}} \\ \text{QL} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{F: } \mathit{part_of}\ (\llbracket \mathit{hana} \rrbracket, y : \mathit{animal}) \\ \text{C: } \boxed{0}\ \left[\text{BE}\ (\llbracket \mathit{hana} \rrbracket, \mathit{LONG})\right] \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

b. $\begin{bmatrix} \textbf{\textit{s(uru)}} \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1} = \boxed{1}\ \text{DP/NP} \\ \text{ARG2} = \boxed{2} \end{bmatrix} \\ \text{QL} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{F: } s = f = r \\ \text{C: } \boxed{3}\,\text{HAVE}\ (\boxed{1},\ \boxed{2}\left[\text{BE}\ (x, [\quad]_{state})\right]) \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \left[\text{A: InPoss}\ (\boxed{1}, x)\right] \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

c. $\begin{bmatrix} \textbf{\textit{-tei}} \\ \text{ARG} = \left[\text{ARG1} = \boxed{4}\,v\text{P}\right] \\ \text{QL} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{F: VIEW}\ (\boxed{3}) = \mathit{spk} \\ \quad \text{POINT}\ (\boxed{3}) \\ \quad = p \in \boxed{3'}_{state} \in \boxed{3} \\ \text{C: } \phi \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

d. $\begin{bmatrix} \textbf{\textit{nagai hana o si-tei}} \\ \text{ARG} = \left[\text{ARG1} = \boxed{1}\ \text{NP/DP}\right] \\ \text{QL} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{F: VIEW}\ (\boxed{3}) = \mathit{spk} \\ \quad \text{POINT}\ (\boxed{3}) = p \in \boxed{3'}_{state} \in \boxed{3} \\ \text{C: } \boxed{3}\,\text{HAVE}\ (\boxed{1},\ \boxed{2}\,\text{BE}\left[\llbracket \mathit{hana} \rrbracket, \mathit{LONG}\right] \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \left[\text{A: InPoss}\ (\boxed{1}, \llbracket \mathit{hana} \rrbracket)\right] \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

(4) a. (3a) では，「鼻」が動物 (y) の身体部位で（F），それが長いこと（C）が表されている。
b. (3b) では，主体（$\boxed{1}$）と x の不可分所有関係が NTS の A の値として指定されている。これにより，一定程度容認性は下がるが厳密な不可分所有でなくともある程度容認可能な例があること（ex. ?その車は四角いヘッドライトをしている。）が保証される。F の値としては，時間的特性（郡司 (2004) に基づく）や，指定されていれば視点の情報が入る。「$s = f = r$」は，変化がないこと，つまり状態を示す。C の値としては，「その不可分所有物がある状態にあること」を主体（$\boxed{1}$）が所有すること，A では主体と対象物の不可分所有関係が指定されている。
c. (3c) のテイ（ル）では「話者が補部イベント（状態）の１点を観察する」ことが指定されている。

本発表の最も大きな問題点は，ス（ル）を「所有」として分析していることかもしれない。しかしながら，本分析は，いわゆる第四種動詞 (金田一 1950) や「ちょうどよい焼け具合をしている」構文 (藤巻 2023) 等にも応用できると考えられる。また，「属性」の解釈を「構文の意味」に帰さない本分析は，「そびえる」を属性述語，「そびえている」を事象叙述とする影山 (2012) や，三原 (2021) の「ている」の分析をさらに精密化する可能性を持つと考える。岸本 (2023, p.13) は，単純形の「する」は「行為」や「出来事の変化」を表すので，コントロールできない属性（状態）の意味を表すには「ている」形にしなければならないとしているが，その具体的理由は明確でないように思われる。本分析では，ス（ル）に状態性を担う語彙登録が存在し，行為・変化の場合は動作性の，状態の場合は状態性のス（ル）が単一化されるということになる。

参考文献

Arai, Fumihito and Toshio Hidaka (2016) A Formal Analysis of Japanese V-*yuku* and its Grammaticalization. *Japanese Korean Linguistics* 23: 167-181.

Faller, Martina Theretia (2002) *Semantics and Pragmatics of Evidentials in Cuzco Quechua.* Ph.D. Thesis, Stanford University.

藤巻一真 (2023)「「動詞の連用形 + 具合をしている」構文について」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽（編）『構文形式と語彙情報』52–75

郡司隆男 (2004)「日本語のアスペクトと反実仮想」*TALKS: Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 7: 21–34.

飯田隆 (2019)「ムーアのパラドックス，思考動詞，主観性」澤田治美・仁田義雄・山梨正明（編）『場面と主体性・主観性』251–270. 東京：ひつじ書房.

板垣浩正 (2022)「知覚表現としてのガスル構文とヲシテイル構文 —-主に知覚主体の存在をめぐって—-」*KLS Selected Papers* 4: 29–42.

板垣浩正 (2024)「感覚が関与するヲシテイル表現」関西言語学会第 49 回大会ワークショップ「感覚・状態の「する」をめぐって」ハンドアウト.

岩男考哲 (2022)「知覚表現における属性叙述—「ガスル」型の文と「ヲシテイル」型の文の主題—」『第 164 回日本言語学会大会予稿集』 327–332.

岩男考哲 (2024)「感覚が関与するヲシテイル表現」関西言語学会第 49 回大会ワークショップ「感覚・状態の「する」をめぐって」ハンドアウト.

影山太郎 (1990)「日本語と英語の語彙の対照」『講座　日本語と日本語教育 7 日本語の語彙・意味』（下）1–26. 東京：明治書院.

影山太郎 (2003) 「身体属性を表す軽動詞構文と意味編入」『人文論究』53-1: 74–87.

影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」影山太郎（編）『属性叙述の世界』3–35. 東京：くろしお出版.

金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15［ 金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』7–26. 東京：むぎ書房（再録）］

岸本秀樹 (2023)「「青い目をしている」構文はどのように形成されるのか？」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽（編）『構文形式と語彙情報』2–26.

小薬哲哉 (2023)「「N をする」構文の多様性と語彙情報の役割 –動詞派生名詞を中心に–」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽（編）『構文形式と語彙情報』27–51.

三原健一 (2021)「「ている」–いま・ここのカプセル化–」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』51: 67-78.

宮下博幸 (2019)「日本語の証拠性と言語類型論」澤田治美・仁田義雄・山梨正明（編）『場面と主体性・主観性』425–448，東京：ひつじ書房.

森山卓郎・梅原大輔・冨永英夫 (2004) 「「属性シテイル構文」の構文文法論的考察」『認知言語学研究』1: 156–175.

小野尚之 (2014)「「N をする」構文における項選択と強制」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』17–40，東京：ひつじ書房。

大江三郎 (1975)『日英語の比較研究: 主観性をめぐって』東京：南雲堂.

大神雄一郎 (2020) 「状態・性質の 「する」 構文の適格性に関する調査報告」『言語文化共同研究プロジェクト 2019』11–20.

大神雄一郎 (2024)「対象の状態・性質を表す「をしている」構文における動詞「する」の役割」関西言語学会第 49 回大会ワークショップ「感覚・状態の「する」をめぐって」ハンドアウト.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon.* Mass: MIT Press.

定延利之 (2006)「心内情報の帰属と管理–現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』167 – 192, 東京：くろしお出版.

佐藤琢三 (2003)「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3 (1): 19-34.

澤田浩子 (2012)「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」影山太郎（編）『属性叙述の世界』203–219，東京：くろしお出版。

角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

P-34　広東語における副詞的後置成分のアスペクトへの文法化について
―北京語・日本語との対照的アプローチ―

許　文傑（関西外国語大学大学院博士前期課程）
i923104@kansaigaidai.jp

広東語及び北京語で副詞を用いた表現について考察した代表的な先行研究としては，次のものを挙げることができる。邓思颖（2006a, b）は，広東語の枠構造の冗長性という統語論上の観点から，広東語における副詞的後置成分について考察しており，また刘丹青（2000, 2001）は，語順類型論の観点から，広東語の副詞生起位置の特殊性について述べているが，いずれも北京語の「补语」との対照には言及していない。さらに，劉丹青（2013）では，文法化の観点から，北京語における副詞の介詞化について論じているが，広東語における副詞的後置成分のアスペクト化には触れられていない。

そこで，本発表は，広東語における副詞的後置成分について，特にそこで生ずるアスペクトへの文法化に着目して北京語及び日本語と対照することによって考察し，その様態を明らかにすることを目的とする。

広東語では，邓思颖（2022）なども指摘しているように，副詞を用いた表現形式として（A）「副詞＋動詞」型，（B）「動詞＋副詞的後置成分」型，（C）「副詞＋動詞＋副詞的後置成分」型，の 3 種類が見出される。ところが，北京語と日本語は，広東語と同様に（A）「副詞＋動詞」型を用いて表現することができるものの，（B）「動詞＋副詞的後置成分」型と（C）「副詞＋動詞＋副詞的後置成分」型を用いての表現が認められないことについては広東語と異なる。

（A）「副詞＋動詞」型
　（例）〔広東語〕　佢　<u>又</u>　　食　　医　　頭痛　嘅　药　了。
　　彼　再び　　食べる　治す　頭痛　の　薬　テンス
　　〔北京語〕　他又吃头痛药了。
　　〔日本語〕　彼は再び頭痛薬を飲んだ。
（B）「動詞＋副詞的後置成分」型
　（例）〔広東語〕　佢　　食　　<u>翻</u>　　医　　頭痛　嘅　药　了。
　　彼　食べる　再び　治す　頭痛　の　薬　テンス
　　（北京語と日本語ではこの型による表現は不可能）
（C）「副詞＋動詞＋副詞的後置成分」型
　（例）〔広東語〕　佢　<u>又</u>　　食　　<u>翻</u>　　医　　頭痛　嘅　药　了。
　　彼　再び　　食べる　再び　治す　頭痛　の　薬　テンス
　　（北京語と日本語ではこの型による表現は不可能）

（C）「副詞＋動詞＋副詞的後置成分」型において一般的副詞「又（再び）」を省くと，（B）「動詞＋副詞的後置成分」型になるが，伝えようとしている意味は両者間で違いがない。また，（C）の型において一般的副詞「又（再び）」をそのままにして副詞的後置成分「翻」を省くと，（A）「副詞＋動詞」型になるが，元の「～し始める」というアスペクトの意味が表されなくなる。広東語における副詞的後置成分「翻」は本来，一般的副詞の「又（再び）」と「～し始める」というアスペクトの意味の両方を有するが，（C）の型では，動詞の前に同義の一般的副詞「又（再び）」が現れ，意味的過剰を避けるため，「翻」の副詞的機能が弱くなり，アスペクト的機能が強くなったと考えられる。

また，「～し始める」というアスペクトの意味を北京語で表現するには，時的副詞の「开始」を用いなければならないのに対して，広東語では，副詞的後置成分「翻」を用いるだけで十分に表現でき，従って副詞的後置成分「翻」のアスペクトへの文法化が進んでいる。このようにアスペクトへの文法化が進んでいる広東語の副詞的後置成分は，「翻」以外に「開」「落」「定」「生晒」「过」「親」「横晒」「先」「住」「添」「咁滞」「實」「起」などがある。これらはすべて時的副詞と共起でき，（C）の型を成立させることができる。一方，「吓」「過头」「硬」「梗」「得滞」「法」などのように，原義がかなり残され，アスペクトとは捉えられないものも存在する。これらは，様態副詞や結果副詞として機能し，時的副詞と共起できるものも少数ながらあるが，（C）の型を成立させるのは困難である。

本発表における以上の考察から，次の結論が得られる。広東語における，北京語と日本語には見られない（C）「副詞＋動詞＋副詞的後置成分」の型は，副詞的後置成分のアスペクトへの文法化が進んでいることに起因しており，広東語は日本語に比べると，アスペクト表現が少ないという空白を埋める結果となっているのである。

参照文献

中国語文献

邓思颖（2006a）后置成分和汉语方言语法的比较，《第三届汉语方言语法国际研讨会》，暨南大学.

邓思颖（2006b）粤语框式虚词结构的句法分析，《汉语学报》第 2 期: 16-23.

邓思颖（2006c）粤语“得滞、乜滞、咁滞”是否属于同一个家族？，《中国語文研究》第一期: 1-11.

邓思颖（2009a）粤语句末“住”和框式虚词结构，《中国语文》第三期: 234-240.

邓思颖（2009b）粤语句末助词“罢啦”及其框式结构，钱志安等编，《粤语跨学科研究：第十三届国际粤方言研讨会论文集》: 415-427，香港城市大学语言资讯科学研究中心.

邓思颖（2012）言域的句法分析——以粤语“先”为例，《言语科学》第一期: 9-14.

邓思颖（2022）《粤语语法讲义》，香港商务印书馆.

龚千炎（1995）《汉语的时相时制时态》，商务印书馆.

黎美凤（2003）粤语“添”的一些语言特点，香港理工大学修士学位論文.

林慧莎（2005）粤语句末“住”的一些特点，硕士论文，香港理工大学.

刘丹青（2000）粤语句法的类型学特点，《亚太语文教育学报/Aisia Pacific Journal of Language in Education》3(2): 1-30.

刘丹青（2001）汉语方言的语序类型比较，史有为编《从语义信息到类型比较》: 222-244，北京语言文化大学出版社.

刘丹青（2013）粤语“先”“添”虚实两用的跨域投射解释，曹广顺等编《综古述今钩深取极：语言暨语言学专刊系列之五十》下册，中央研究院语言研究所（中国台北）: 951-970.

吕军伟，俞健（2021）语言接触视野下东南汉语方言副词后置词序及功能演变，《民族語文》第 1 期 : 11-22.

彭小川（2002）广州话的动态助词“開”，《方言》第二期: 127-132.

钱志安，李宝伦（2014）全称量化词的“前世”与“今生”：粤语方言动词后置成分“晒”，“齐”，“了”的语法化，《第十四届粤语讨论会》，香港城市大学.

田禾（2019）副词在使动句中的位置，《お茶の水女子大学中国文学会報》15: 29-39.

張洪年（1972）《香港粤语语法的研究》，中文大学出版社.

张旭，季薇（2017）汉语副词研究平议，《神奈川大学言語研究》40: 13-22.

詹伯慧（1958）粤方言中的虚词“亲、住、翻、埋、添”，《中国语文》第 3 期: 119-122.

郑兆邦（2015）香港粤语动词前后置成分的句法语义关系，博士論文, 香港中文大学.

日本語文献

郡司隆男（2011）「日本語はどんな言語か？―類型論的観点からの日本語―」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin : トークス』14: 1-14. 神戸：神戸松蔭女子学院大学言語科学研究所.

飛田良文・浅田秀子 (2018)『現代副詞用法辞典　新装版』東京：東京堂出版.

堀江薫・秋田喜美・北野浩章（2021）『言語類型論』東京：開拓社.

飯田真紀（2019）『広東語文末助詞の言語横断的研究』東京：ひつじ書房.

日中対照言語学会（編）（2016）『中国語の補語』東京：白帝社.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.

劉丹青（著），杉村博文他（訳）（2013）『語順類型論と介詞理論』大阪：日中言語文化出版社.

P-35　日本語と中国語における一次元的な助数詞／量詞の認知意味論的対照研究

汪洋（関西外国語大学大学院・博士前期課程）
wy525802151@gmail.com

本発表にかかわる，日本語の助数詞と中国語の量詞について考察した代表的な先行研究としては，次のものを挙げることができる。飯田（1999，2004）は日本語の助数詞について，邵敬敏（1993）は中国語の量詞について意味論的な記述を行っている。また，濱野（2006,2011,2017）は日本語の助数詞について，宗守云（2011，2012）は中国語の量詞について認知意味論の立場で考察している。さらに，橋本（2014）は，日本語の助数詞と中国語の量詞について対照言語学の観点からの研究を行っている。しかしながら，これらの先行研究は，日本語の個々の助数詞と中国語の個々の量詞について詳しい考察がなされているものの，両言語の助数詞／量詞を意味カテゴリーから捉えた場合の考察がまだ不十分であると言える。

そこで，本発表は，形状的に細長いことを示す一次元的な日本語の助数詞と中国語の量詞に着目し，認知意味論的な考察を，対照言語学からのアプローチで行うことを目的とする。それに該当する現代日本語の助数詞には「本」「筋」「条」「竿・棹」「線」「茎」「枝（し）」が，現代中国語の量詞には「条tiáo」「根gēn」「道dào」「支zhī」「枝zhī」「缕lǚ」「线xiàn」「丝sī」「绺liǔ」「带dài」「段duàn」「股gǔ」「茎jīng」「杆gǎn」「竿gān」「株zhū」「柱zhù」「列liè」がそれぞれ挙げられる。その中でも，日本語の助数詞「本」「筋」「条」と，中国語の量詞「条tiáo」「根gēn」「道dào」「支zhī」は，文法化の程度が高く，意味拡張の程度も高い項目であると見なされており，本発表ではこれらを考察の対象とする。

本発表における考察は，次の手順で行う。まず，日本語の助数詞と中国語の量詞の意味論に関する先行研究，およびコーパスに基づき，プロトタイプ理論の観点から，考察対象の助数詞／量詞の意味分布を再検討する。助数詞「本」を 11 グループに，助数詞「筋」を 4 グループに，助数詞「条」を 4 グループに，また量詞「条tiáo」を 11 グループに，量詞「根gēn」を 6 グループに，量詞「道dào」を 5 グループに，量詞「支zhī」を 5 グループにそれぞれ分けることができる。次に，その意味分布および使用時の認知プロセスに基づき，各グループにおける助数詞と量詞の対応関係について考察する。両言語の助数詞／量詞を[A]慣用，[B]動物用，[C]機能焦点，[D]形状焦点，[E]抽象物用という 5 グループに分けることができ，また[D]群を，[D1]一次元的な物（細長い物），[D2] 二次元的な物（平面的な物），[D3]三次元的な物（立体的な物），[D4]他の形状の物に区分することができる。さらに，各類別における両言語の助数詞／量詞の使用率を統計的に処理すると，次のようになる。

表 1．各類別における日本語の助数詞と中国語の量詞の使用率

		[A]	[B]	[C]	[D1+D2+D3+D4]	[E]
[I] 一次元的な助数詞の用例	用いる助数詞	3.51%	1.75%	16.37%	50.88%+3.51%+0.58%+10.53%	12.87%
	対応の量詞	0.94%	1.89%	19.81%	47.17%+0.00%+5.66%+10.38%	14.15%
[II] 一次元的な量詞の用例	用いる量詞	1.09%	3.83%	*4.37%*	*60.11%*+4.37%+10.38%+4.37%	*11.48%*
	対応の助数詞	2.82%	5.08%	*16.95%*	*36.72%*+6.78%+3.39%+2.82%	*25.42%*

本発表における以上の考察から，次の結論が得られる。

（1）[I] の[C]群において実際に用いられる日本語の助数詞の比率は，[II] の[C]群において実際に用いられる中国語の量詞の比率よりかなり高い。この事実は，形状的特徴を有する助数詞として，飯田（1999）などが提唱した「機能的特徴＞形状的特徴」という認知プロセスの証拠となる。また，**日本語の助数詞は中国語の量詞より機能的特徴を重視し，中国語の量詞は日本語の助数詞より形状的特徴を重視する**と言える。

（2）[I] において実際に用いられる日本語の助数詞と，それに対応する中国語の量詞の比率はほぼ同じであるが，[II] において実際に用いられる中国語の量詞と，それに対応する日本語の助数詞の，[C]群・[D1]・[E]群における比率には大きな差がある。したがって，**中国語における量詞の一次元的なカテゴリーは，日本語における助数詞の一次元的なカテゴリーより範囲が広い**と考えられる。

（3）[D]群の[D2][D3]における使用率から判断すると，**日本語の助数詞がかかわる一次元的なカテゴリーは二次元なカテゴリーに拡張しており，中国語の量詞がかかわる一次元的なカテゴリーは三次元的なカテゴリーに拡張している**傾向がある。

参照文献

日本語文献

買買提力提甫（2004）「中国語の量詞の分類について：日本語の助数詞と比較して」『北海学園大学学園論集』119: 113−131.

戴紅（2018）「細長いものに用いる類別詞『本』と“条”の考察――日本語と中国語によるものの捉え方の相違を探る――」『日本アジア研究』15: 23−46.

橋本永貢子（2014）「中国語の量詞“条”と日本語の助数詞『本』の多義的ネットワーク」『日中語彙研究』4: 1−31.

濱野寛子（2006）「助数詞『本』の多義的に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』12: 77−93.

濱野寛子（2011）「言語のカテゴリー化に関する認知言語学的分析――助数詞の考察を中心に――」博士論文，京都大学.

濱野寛子（2017）「言語の多義性と助数詞の選択に関する一考察――『電話』を例に――」『名古屋学院大学論集言語・文化篇』28 (2): 101−114.

濱野寛子・佐野香織（2008）「日本語学習者の助数詞の習得に関する調査」『言語文化と日本語教育』35: 49−52.

深田嘉昭（2000）「日本語分類辞『本』に関する一考察――なぜはずれた宝くじは『本』で数えられないのか――」『早稲田大学文学研究科紀要』40: 69−80.

飯田朝子（1999）「日本語主要助数詞の意味と用法」博士論文，東京大学.

飯田朝子（2004）『数え方の辞典』東京：小学館.

小出慶一（2003）「助数詞『本』の用法と拡張について――なぜ『仕事』は『本』で数えられるか――」『群馬県立女子大学紀要』24: 1−13.

小松原哲太（2014）「助数詞選択と数量詞のレトリック」『言語科学論集』20: 15−30.

Lakoff, G（著），池上嘉彦・河上誓作他（訳）（1993）『認知意味論――言語から見た人間の心――』東京：紀伊國屋書店.

松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系――原型意味論による分析――」『言語研究』99: 82−106.

西光義弘・水口志乃扶（編）（2004）『類別詞の対照』，言語対照第 3 巻．東京：くろしお出版.

李在鎬他（著），山梨正明他（編）（2013）『認知音韻・形態論』，認知日本語学講座第 2 巻．東京：くろしお出版.

劉驫（2020）「現代中国語の形状類別詞『条』『根』『道』に関する研究」米倉よう子・山本修・浅井良策（編）『ことばから心へ――認知の深淵――』154−164．東京：開拓社.

屈莉（2008）「日本語と中国語における数量類別詞の認知研究」『人間社会環境研究』16: 27−34.

山梨正明（2012）『認知意味論研究』東京：研究社.

中国語文献

缑瑞隆，2010，“条形”量词的句法认知基础探析――对外汉语量词教学个案研究系列之五，《郑州大学学报：哲学社会科学版》（第 43 卷第 6 期）: 126−128。

姜倩，2020，汉语条状量词特点及教学策略研究，硕士论文，吉林大学。

金任顺，2019，汉语形状量词与名词选择关系研究，博士论文，上海师范大学。

惠红军，2009，汉语量词研究，博士论文，四川大学。

惠红军，2024，《汉语量词的认知类型学研究》，北京：中国社会科学出版社。

邵敬敏，1993，量词的语义分析及其与名词的双向选择，《中国语文》(3): 181−188。

石毓智，2001，表物体形状的量词的认知基础，《语言教学与研究》(1): 34−41。

伍和忠，1998，“线状”量词语义辨析及语用功能，《广西教育学院学报》(3): 50−55。

颜郁澎，2020，基于语料库的示形量词“条”研究，《现代语文》(5): 31−36。

周芍，2007，名词量词组合的双向选择研究及其认知解释，博士论文，暨南大学。

周芍，邵敬敏，2014，近义量词“条、根、道”的三维解释与组合机制，《语言教学与研究》(1): 81−88。

宗守云，2011，认知范畴的原则共相与细节殊相――以汉语量词“条”与日语量词“本”的异同为例，《修辞学习》(2): 50−56。

宗守云，2012，《汉语量词的认知研究》，北京：世界图书出版公司北京公司。

宗守云，赵东阳，2015，量词“道”的基本语义特征及其与“条、根”的差异，《广西师范大学学报：哲学社会科学版》（第 51 卷第 2 期）: 77−82。

朱庆明，1994，析“支”、“条”、“根”，《世界汉语教学》(3): 22−23。

P-36　日英語の前・後置詞の叙述性と統語的分布の違いについて

松岡幹就、梅村航平、金澤拓海、嵯峨井萌（三重大学）

導入　英語では、(1a,b)に見るように、移動様態を表す自動詞が経路や場所を表す前置詞句 (PP) と共起することによって、移動の着点を表すことができる（以下、「有方向移動様態構文」）。[H&M]は、対応するオランダ語やイタリア語の文の完了の助動詞選択などの事実に基づき、(1a,b)では、PP が主語 NP と叙述関係 (predication) を結ぶ小節 (small clause (SC)) が形成され、主語が内項として生成されると主張している (図(1c))。

(1)　a.　John ran to his house.　　b.　Mary jumped in the water.　　c.　V [$_{SC}$ NP PP]

(1a,b)において PP が主語と叙述関係を持つという考えは広く支持され、問題の動詞が当該の PP と共起する場合に限って使役化できるという事実(例(2))も、(1c)の（またはそれに近い）構造に基づいて説明されている[F&H, R]。

(2)　a.　John walked Matilda *(to his new flat).　　b.　John waltzed Matilda *(into the bedroom).　[F&H:124-125]

一方、日本語では、移動様態自動詞が「へ」や「に」を主要部とする経路や場所を表す後置詞句（PP）と共起するのは不自然であり、少なくとも着点の解釈はできない(例(3))。また、それらの動詞が使役化されることもない(例(4))。

(3)　a. *　太郎が　公園へ/に　走った。[T:341]　　b. *　彼女は　スタジオの中に　歩いた。　[K&Y:137]

(4)　a. *　花子が　太郎を　公園へ/に　走った。　b. *　ディレクターが　彼女を　スタジオの中に　歩いた。

問題と論旨　なぜ日英語の間に上記の違いが存在するかという問題が先行研究で論じられて来た([T], [I]など)。主要研究の１つである[K&Y]では、語彙概念構造における「移動」と「到達」の合成が可能か否かというパラメターを仮定して説明しようとしている。本論では、そのような特別なパラメターを設けず、日英語の間に独立して認められる PP の叙述性の違いに基づいて上記の問題が説明されると主張する。特に、英語の PP が述部として現れる典型的な 3 つの構文で、問題の日本語の PP が述部の機能を果たさないという事実を示し、その違いの要因について分析する。

主要データ　日本語の「へ」や「に」を伴う PP は、以下(A)〜(C)において英語の PP と分布が異なる。

<u>(A)コピュラ文</u>　英語では *in*, *at*, *out of* などの場所を表す P を主要部とする PP がコピュラ文の述部として現れるが、問題の日本語の PP はそれができない(例(5)vs.(6))。多くの言語の PP は、日本語の PP と同様、存在や姿勢など何らか実質的意味を持つ動詞（日本語の「いる」、「ある」など）と共起しなければ、単独では述部になれないと言われる[Ba]。

(5)　a.　Mary is **in the office**.　　b.　John is **out of the room**.

(6)　a. *　花子はオフィスにだ。　　b. *　太郎は部屋の外に/へだ。

<u>(B)小節</u>　英語では PP (または P) が小節の述部として現れる(例(7))。日本語の小節の代表的な研究として[K&T]があるが、後置詞(P)を述部とする小節の例は挙げられていない。それと符合するように、(7)の英語の文の小節を日本語で言い換える場合、P を述部とする形で表現することはできない(例(8))。

(7)　a.　I expect [$_{SC}$ that man **off my ship**].　　b.　The captain allowed [$_{SC}$ him **into the control room**].　[S:297]

(8)　a. *　私はその男を船の外に期待している。　b. *　船長は彼を制御室の中に許可した。

また、[Br]によれば、英語の *want* の補部に場所を表す P を述部とする小節が現れる(例(9))。[EK&Y]は、意味的に近い日本語の「欲しい」や「必要だ」も場所（または所有者）句を含む小節を選択することを指摘しているが(例(10))、その場所句は小節の述部ではなく主語と見なされている。これを裏付ける独自の証拠として、場所句内の NP は「自分」を束縛できるのに対し、場所に位置する事物を表す NP はそれができないということを挙げる(例(11))。

(9)　I want [$_{SC}$ the soldiers **on the parade ground** fully dressed]　[Br:549]

(10)　僕が　[$_{SC}$ 息子に/オフィスに　コンピューターが]　欲しい（こと）　[EK&Y:85]

(11) a.　監督は　[$_{SC}$ その選手$_i$に　自分$_i$に対する厳しさが]　欲しかった。

b. *　監督は　[$_{SC}$ その選手$_i$が　自分$_i$に向いたポジションに]　欲しかった。

<u>(C)結果述語</u>　英語では PP が結果の二次述語としても現れることが知られている(例(12))。それらの PP を日本語で言い換える時、「名詞+に」という形で表されることが多いが、その場合の「に」は「へ」に置き換えられない(例(13))。この点において、状態変化動詞（「変える」など）の間接目的語と明確に異なることから、(13)の結果述語に伴う「に」は後置詞ではなく、[O]で言われるコピュラの「に」であると主張する。それらの結果述語はコントロール構造を持つ従属節を形成し、結果の意味を持つ主動詞によって認可されると論じる。

(12) a.　John broke the vase **in pieces**. [R:128]　　b.　The butter melted **to a liquid**.　[H:119]

(13) a.　太郎が花瓶を粉々に/*へ割った。　　b.　バターが液状に/*へ溶けた。

結論　日本語の(3)や(4)が認められないのは、「へ」や「に」を伴う PP が述部として機能しないためであると結論する。その要因として、それらの日本語の P は、英語の P と違って語彙的意味が乏しいため、主語となるべき要素に意味役割を付与することができないと主張する。管見の限り、有方向移動様態構文の日英比較研究において、上記(A)〜(C)のデータに関する両言語間の違いは考察されておらず、長年膠着状態にある研究に打開の道を開く可能性がある。

参照文献

[Ba] Baker, Mark (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge University Press.

[Br] Bruening, Benjamin (2018) Depictive secondary predicates and small clause approaches to argument structure. *Linguistic Inquiry* 49: 537-559.

[EK&Y] Endo, Yoshio, Yoshihisa Kitagawa, and Jiyoung Yoon (1999) Smaller clauses. *Proceedings of the Nanzan GLOW*, 73-95.

[F&H] Folli, Raffaella, and Heidi Harley (2006) On the licensing of causatives of directed motion: Waltzing Matilda all over. *Studia Linguistica* 60: 121-155.

[H] Hoekstra, Teun (1988) Small clause results. *Lingua* 74: 101-139.

[H&M] Hoekstra, Teun, and René Mulder (1990) Unergatives as copular verbs: locational and existential predication. *The Linguistic Review* 7: 1-79.

[I] Inagaki, Shunji (2002) Motion verbs with locational/directional PPs in English and Japanese. *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique* 47: 187-234.

[K&T] Kikuchi, Akira and Daiko Takahashi (1991) Agreement and small clauses. *Topics in Small Clauses: Proceedings of Tokyo Small Clause Festival*, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 75-105, Kurosio Publishers, Tokyo.

[K&Y] 影山太郎、由本陽子 (1997)『語形成と概念構造』研究社出版、東京.

[O] 奥津敬一郎 (1978)『「ボクハウナギダ」の文法：ダとノ』くろしお出版、東京.

[R] Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First-Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

[S] Stowell, Tim (1983) Subjects across categories. *The Linguistic Review* 2: 285-312.

[T] Tsujimura, Natsuko (1994) Unaccusative mismatches and resultatives in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 24: 335-354.

P-37　中国語における文末助詞「ba（吧）」の韻律的特徴

譚坤明（京都大学大学院・博士後期課程）
tan.kunming.55w@st.kyoto-u.ac.jp

現代中国語標準語（以下「中国語」）の文末助詞「ba（吧）」は、平叙文、疑問文、命令文の文末で用いられ、それぞれ推定、確認要求、命令などの機能を果たすことができる（Paul & Pan 2017; Tantucci 2017; Pan 2019）。これまでの研究では、文末助詞 *ba* の韻律的特徴が文のタイプによって異なるかどうかを調べてきた。例えば、邵（1993）は音声実験を行い、文末に *ba* を持つ疑問文のピッチと *ba* を持つ平叙文のピッチに有意差があり、前者が後者より高いことを示した。しかし、母語話者にとって疑問文と平叙文の *ba* の韻律上の差異を知覚することは難しいと指摘する先行研究がある（cf. 江 2008）。*ba* の韻律的特徴については、音声実験と知覚実験の結果にズレがあるため、更なる考察が必要である。

そこで本研究では、音声実験を通じて異なる用法の *ba* のピッチに有意差があるかを調べる。2 つの実験を設計した。実験 1 では、(1) に示すように、*ba* で終わる平叙文と疑問文を比較した。文末助詞「ma（吗）」で終わる一般疑問文は対照群として用いている。実験 2 では、(2) に示すように、命令文の *ba* と他の用法の *ba* を比較した。文末助詞のピッチは先行する音節の声調に影響されるため、各実験では中国語の 4 つの声調を含む 4 組の文を用いた。

(1)　*ZhāngFēng*　*jīntiān*　*yào*　*kāi*　*chē*　***ba.***　/　***ba?***　/　***ma?***
　　張峰　今日　助動詞　運転する　車　ba　ba　ma
　　「張峰は今日運転するだろう。/張峰は今日運転するよね？/張峰は今日運転するの？」

(2) a. *Tā*　*zài*　*kāi*　*chē*　***ba.***　　b. *Tā*　*méi*　*kāi*　*chē*　***ba?***
　　彼　進行　運転する　車　ba　　彼　否定. 完結　運転する　車　ba
　　c. *Kuài*　*lái*　*kāi*　*chē*　***ba!***
　　早く　来る　運転する　車　ba
　　「a.彼は運転しているんだろう。/ b.彼は運転しなかったよね？ / c.運転をしましょう。」

本研究では各文に文脈を提示するための会話を設計し、中国語の母語話者 6 名に会話を読んでもらった。次に、調査対象となる文を会話から切り出し、文末助詞のピッチを Praat で測定した。分散分析（ANOVA）を用いて各種の文に現れる文末助詞のピッチを比較したところ、以下のような結果が得られた。平叙文、疑問文、命令文のいずれであっても、文末の *ba* のピッチは下降傾向を示す。また、実験 1 では、平叙文の *ba* と疑問文の *ba* のピッチに有意差が見られない一方、*ma* のピッチは *ba* より有意に高い（$p<0.05$）ことが明らかになった。次に、実験 2 から、3 つの用法の *ba* のピッチに有意差があることがわかった。始点ピッチの場合、命令文では疑問文より有意に高いが、平叙文と疑問文、及び平叙文と命令文の間には有意差が見られない。終点ピッチの場合、命令文では平叙文や疑問文より有意に高いが、平叙文と疑問文の間には有意差がない。平叙文と疑問文の *ba* では推測や不確実性を表すという点で意味的に共通しており、この意味的類似は韻律的特徴の類似とも相関しうる。一方、命令文の *ba* では意味や語用論的機能の違いによってピッチの違いも生じていると考えられる。

参照文献：

Pan, Victor Junnan (2019) *Architecture of the periphery in Chinese: Cartography and minimalism*. Abingdon & New York: Routledge.

Paul, Waltraud & Victor Junnan Pan (2017) What you see is what you get: Chinese sentence-final particles as head-final complementizers. In Josef Bayer & Volker Struckmeier (eds.) *Discourse particles: Formal approaches to their syntax and semantics*, 49–77. Berlin: De Gruyter Mouton.

Tantucci, Vittorio (2017) An evolutionary approach to semasiological change: Overt influence attempts through the development of the Mandarin 吧-ba particle. *Journal of Pragmatics* 120: 35–53.

江海燕（2008）「语气词“吧”和疑问语气的传达（語気詞「吧」と疑問語気の伝達）」『语言文字应用』2008(4): 62–68.

邵敬敏（1993）「“吧”字疑问句及其相关句式比较（「吧」疑問文及びその関連文型の比較）」世界漢語教学学会（編）『第四届国际汉语教学讨论会论文选（第 4 回国際中国語教育シンポジウム論文集）』217–225．北京：北京語言学院出版社.

P-38 とりたて表現の語順類型論

小林剛士 (東京外国語大学 博士後期課程) la.fulfom@gmail.com

[**問題の所在**] 野田 (2019: 13), 井戸 (2021: 101) の主張を統合するに, とりたて表現がとりたてる対象の前後どちらに現れるかは基本語順と相関しており, VO 語順なら前に, OV 語順なら後ろにとりたて表現が現れる傾向にあるという．しかし言語によってはこの傾向から逸脱するものもある．ペルシア語は OV 言語だが限定表現（*faqat*「だけ」）を対象の前に置く (1).

(1) ***faqat*** ***u*** *sare vaqt* *umad.*
only.PREP he/she on time come.IND.PST.3SG
「あの人だけ，時間通りに来た．」 (吉枝 2017: 88; PREP: preposition)

本研究の研究課題は①この逸脱を類型化し，とりたて表現の語順と関連する特徴の一覧を作成すること，②とりたての意味領域（限定，極端，類似）や基本語順（VO，OV）の別によって逸脱の通言語的頻度がどの程度異なるのかを明らかにすることである．

[**調査**] 東京外国語大学『語学研究所論集』の特集「情報標示の諸要素」所収の 55 言語 3 例文 ((3) 限定「だけ」, (8) 極端「さえ」, (9) 類似「も」）のデータを用いて調査・分析を行った．

まず課題①に関して，5 つの逸脱の類型が観察された．1) とりたて表現が形容詞や数詞由来であり，かつ形容詞や数詞と名詞の語順がとりたて表現の語順傾向と逆である（e.g. エジプトアラビア語: VO だが NA）．2) 借用形式であり，借用元言語の語順を保持している（e.g. ペルシア語）．3) 前後どちらにも現れる二重標示である（e.g. マレーシア語）．4) OV 言語で [限定表現 名詞 焦点標識] の構造を取る（e.g. ベンガル語）．5) とりたてる対象の位置によらず，述部の直前や文末など決まった位置に現れる（e.g. 中国語）．

次に課題②に関する調査結果を示す (表 1). なお調査例文の中にはとりたて表現を用いない例文があり，それらは除外した．調査対象言語数が一貫しないのはそのためである．

表 1: とりたての意味・基本語順の別によるとりたて表現の語順逸脱の通言語的頻度
（逸脱の割合 % 逸脱した言語の数/調査対象言語数）

	限定	極端	類似
VO (26 言語)	27% 7/26	26% 5/19	**81% 21/26**
OV (29 言語)	**48% 14/29**	37% 10/27	**0% 0/29**
計 (55 言語)	38% 21/55	33% 15/46	38% 21/55

表 1 に示す通り, 逸脱はとりたての意味領域と基本語順によって通言語的頻度に違いがあった．**OV 言語における限定表現は約半数が逸脱していた**．類似表現は VO 言語では逸脱が多く 21 言語中 17 言語で対象の後ろや文末に現れていた一方，OV 言語では逸脱が全く観察されなかった．すなわち**類似表現は基本語順によらず対象より後部に現れる傾向が見られた**．

なお逸脱の類型 1–2) は類似より限定で多く見られた．つまり限定表現は類似に比べてより語彙的な形式や借用形式を用いる傾向にある．したがって限定表現は類似表現に比べて語彙的安定性が低く文法化が進みにくいと考えられ，このことが逸脱の頻度差を作り出す一つの要因であると思われる．

参考文献

井戸美里 (2021)「日本語のとりたて表現と言語類型論」窪薗晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』98–124. 東京: 開拓社.

野田尚史 (2019)「とりたて表現の対照研究の方法」野田尚史（編）『日本語と世界の言語のとりたて表現』3–20. 東京: くろしお出版.

吉枝聡子 (2017)「情報標示の諸要素：ペルシア語」『語学研究所論集』22: 87–91.

P-39

状態変化と位置変化を統合した分離事象の語彙カテゴリー化に関する実験的研究
—類型論的視点から—

王　鈺（大阪大学［院］/日本学術振興会特別研究員）

本研究は、「切る」、「抜く」などのような、対象に力を加えることでその一部を分離させるという動詞類に注目する。以下のような例文が挙げられる。

(1)　野菜を細かく小さく薄く切った。/ お野菜をクッキーの型でかわいく抜いて(…)

(2)　a.　木から邪魔な枝を切った。/ 木の邪魔な枝を切った。

　　b.　栓をボトルから抜いた。/ ボトルの栓を抜いた。

これらの動詞は、(1)のように、結果補語を伴うことで対象の状態変化を表すのに対し、(2)のように、カラ格またはノ格によって移動の起点を表すことで、「Z(動作主)が X(分離元)から Y(分離物)を引き離す」という位置変化を表している。また、(2)の分離事象は、X の状態変化と Y の位置変化という 2 つの下位事象を統合した複合事象である。先行研究(Majid et al. 2008, 洪 2020 など)は、状態変化事象が各言語においてどのようにカテゴリー化されるかを分析したが、状態変化と位置変化を統合した分離事象を注目していない。

本研究は、Talmy(1985)の語彙化類型論を踏まえ、日本語(経路が動詞に語彙化)、中国語(様態が動詞に語彙化)、中国手話(焦点が動詞に語彙化)という 3 つの言語を対象とし、統一的実験枠組み(ビデオ発話実験)で、各言語の母語話者はどのように分離事象を認識しカテゴリー化しているかについて、その相違点と類似点を考察する。

具体的な実験方法と分析方法に関して、王(2024)の分離動詞・事象に関する意味論的分析の結果を踏まえ、「分離物の特徴」、「空間的関係」、「事象の時間的関係」、「道具」、「結果」という 5 つの要素を考慮し、日常生活の中でよく見かける出来事を実験材料である動画(54 個)として作成し、各言語の母語話者(日本語話者 20 名、中国語話者 23 名、中国手話話者 18 名)に動画内容を説明してもらった。収集したデータに基づき、分離動詞の語彙カテゴリー化のあり様を分析するため、各言語ごとに「異なるビデオに対して同じ動詞を使用した人数」を指標とし、ビデオ間の類似度を測定した。なお、手話は文字と音が存在しない言語であり、動詞は場面によって違う形に変わるため、音声言語のように完全に同じ動詞として認めるのは不可能である。このため、手話音韻論で主張される「位置」、「手形」、「動き」、「手のひらの向き」という 4 つのパラメータ(倪 2015, 松岡 2015)を踏まえ、中国手話の分離動詞の特徴を文字化し記述した上で、「異なるビデオに対して動詞における同じパラメータを使用した人数」を指標に類似度を計算した（例えば、手話被験者 A は、ビデオ 1 とビデオ 2 を説明する際に使用した動詞には、1 つのパラメータの一致が見られた場合、類似度 0.25 として計算し、4 つのパラメーター全部一致した場合、1 として計算した。その上で、全ての被験者の類似度の合計を求めた）。また、階層型クラスター分析により、各言語におけるクラスターとクラスター内の動詞の特徴を分析した。3 言語のデータを併用したことで、カテゴリー化の共通点を可視化し、分離事象の類型を描いた。

主に以下の 3 つの結果が得られた。(i)日本語では単純動詞で分離事象を表すことができ、空間的関係、密着のあり方と目的の機能性などで分離事象が語彙カテゴリー化されるのに対し、中国語では、このような複合事象を表す際に、複合動詞“V 掉”を多く使用し、空間的関係、道具の種類、分離物の特徴などで語彙カテゴリー化される。(ii)音声言語と比較したことで、中国手話に類像性が強く反映されており、使役移動の方向性と事象間の時間的関係という 2 点は、語彙カテゴリー化への影響が際立つ。(iii)分離動詞の数とカテゴリー化のあり方等に関して 3 言語に違いが見られる一方、語彙カテゴリーを区別する基準に関して、音声言語と手話言語は、分離元と分離物の空間関係(一体性の程度・種類)という基準で共通し、物理的一体性が強い＜状態変化型＞と主観的一体性が強い＜位置変化型＞、およびその背景にある「力的関係」という人間共通の認知的要因を抽出できた。

本研究は、先行研究であまり考察がなされていない分離事象表現を考察し、従来の移動表現の類型論に対して、「状態変化を内在する移動表現」という新たな類型を提案することができる。また、音声言語の類型に限らず、手話との対照を加えることで、更に人間言語の普遍性と個別性およびその背後にある認知的要因の解明に迫ることが期待できる。

主要な参考文献

洪春子（2020）「日韓中の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158: 63-89.

Majid, Asifa, James S. Boster, & Melissa Bowerman (2008) The cross-linguistic categorization of everyday events: A study of cutting and breaking. *Cognition* 109(2): 235-250.

松岡和美（2015）『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版.

倪兰（2015）『中国手语动词研究』上海大学出版社.

Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. Language typology and syntactic description, Volume3: Grammatical categories and the lexicon, ed. By Timothy Shopen, 57-149. Cambridge University Press.

王鈺（2024）「現代日本語における 2 種類の分離動詞に関する仮説」『KLS Selected Papers』6, 61-78.

P-40　北海道方言「ラサル」の非意図用法における生産性の制約について

村山　友里枝
（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院研究員）
yurie.murayama@gmail.com

北海道方言の助動詞ラサルには、非意図(自発)、可能、結果状態(逆使役)の 3 つの用法があることが指摘されている(山崎(1994), Sasaki & Yamazaki(2006), 円山(2007)等)。ラサルは比較的自由に様々な動詞に付くことが可能であり、その生産性が高いことについては、様々な研究で指摘されてきた(山崎(1994), 円山(2007, 2016), 氏家(2016), 関根(2019)等)。一方で、ラサルが付加できない事例についても報告されている。例えば、動作主の意図性を含意する「わざと」等の副詞や、「〜てみる、〜ておく」等の補助動詞等との共起が不可能であり(山崎(1994), 円山(2007))、意図や目的を表す副詞(節/句)との共起もできない(高橋(2015))という指摘である。しかし、これ以外にもラサルの生産性が制限される場合があり、「謀る」、「暗殺する」、「叩き割る」、「ジョギングする」等の動詞は、動作主の意図性を表す副詞や補助動詞がない場合にも非文となる。

本発表の目的は、ラサルの非意図を表す用法を対象とし、上で述べたラサルが付加できない動詞について、どのような制約によって容認されないのかを説明することである。本発表では、Ritter & Rosen (1996)の「意味指定の強弱」という概念を用いて、意味指定が極めて強い場合にはラサルの非意図用法が実現されにくいということを主張する。Ritter & Rosen (1996: 43)の意味指定の強さの連続体のうち、意味指定が最も強い「文イディオム」は、固定した解釈と統語構造を持っているため、ラサル文は容認されず(*「鴨が葱を背負って来らさった」)、次に強い位置にある「VP イディオム」のラサル文は容認されにくい(*「道草が食わさった」、*「足が運ばさった」)。さらに、Ritter & Rosen (1996)は、語彙的動詞の中にも強い動詞(walk, murder, assassinate, xerox)と弱い動詞(run, kill, copy)があり、強い動詞の方がより多くのリストされた情報を持つことを指摘している。Ritter & Rosen (1996: 46)によると、意味指定の強い動詞は弱い動詞よりも意味の選択により多くの制約を課しており、例えば、murder と assassinate は人間の主語と人間の目的語を必要とし、それに加えて assassinate の目的語は有名人/政治家でなければならないが、意味指定の弱い kill にはそのような制約はないと説明している。また、Ritter & Rosen (1996)が動詞の意味の強弱と相関する性質として挙げている“semantic selection”, “action/state denoted”の観点から、強い動詞の murder や assassinate は必然的に動作主の意図性を含んでいることが示唆される。意味指定の強い日本語の動詞の中には、動作主の意図性が指定されているものがあり、その場合にはラサルを付加することによって元々指定されていた意図性を削除することができないことを主張する。最後に、二字漢語動詞について、ラサルが付加されにくいと指摘されることがある(関根(2019))が、本発表の分析がこの観察事実についてどのような理論的含意を持つか論じる。

主要参考文献

円山拓子（2007）「自発と可能の対照研究―日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語 cita―」『日本語文法』7(1): 52-68.

円山拓子（2016）『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京: ひつじ書房.

Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen (1996) Strong and weak predicates: Reducing the lexical burden. *Linguistic Analysis*, 26(1-2): 29-62.

Sasaki, Kan and Akie Yamazaki (2006) Two types of detransitive constructions in the Hokkaido dialect of Japanese. In: Werner Abraham and Larisa Leisio (eds.) *Passivization and Typology: Form and Function*, 352-372. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

関根雅晴（2019）「北海道方言における“V-(r)asar-”構文の意味に関する記述的研究―認知文法からのアプローチ―」『言語科学論集』25: 15-46.

高橋英也（2015）「東北・北海道方言におけるラサル形式の形態統語論について」南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻主催 言語学講演会. 2015 年 6 月 12 日, https://www.researchgate.net/publication/302596601_dongbeibeihaidaofangyannioker urasaruxingshinoxingtaitongyulunnitsuite [2024 年 8 月アクセス].

氏家啓吾（2016）「北海道方言-rasar 構文の表す捉え方―認知文法の視点から―」『東京大学言語学論集』37: 261–279.

山崎哲永（1994）「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」小野米一(編)『ことばの世界：北海道方言研究会 20 周年記念論文集（北海道方言研究会叢書第 5 巻)』227-237. 札幌: 北海道方言研究会.

P-41 Phonological phrasing in Miyakonojo and Miyazaki-shi Japanese

Kunihiko Kuroki (Kobe Shoin Women's University)
Seunghun J. Lee (International Christian University)

This paper presents phonological phrasing patterns in Miyakonojo and Miyazaki-shi Japanese, both of which are dialects spoken in the Miyazaki prefecture. We varied word sizes and syntactic structures to examine similarities and differences in phrasing in the two dialects. Both dialects do not have contrastive pitch accents, unlike Kanto or Kansai Japanese, and the final syllable of a phonological phrase ends with a rising pitch. In the Japanese tradition, these dialects are classified as the *1-type accent* (一型アクセント) system (Hirayama 1951, Shibata 1955, Uwano 1989, Igarashi 2012).

Our data shows that the Miyazaki-shi dialect groups large syntactic constituents such as a noun with a modifier into a single phonological phrase by showing a final accent on the last syllable. In the Miyakonojo dialect, however, each prosodic word shows prominence, suggesting that the dialect resists creating larger phonological phrases.

The transitive sentence in (1a) displays identical phrasing between the two dialects. When the subject is modified by an adjective as in (1b), Miyazaki-shi phrases the entire noun phrase into a single phonological phrase, but Miyakonojo creates separate phrases. The same pattern is found when the object noun is modified by an adjective as in (1c).

(1) Examples (verbal forms are shown in the Miyazaki-shi dialect)

a. *kodomo=ga* *koma=o* *mawas-i-ta.*
child=NOM/GEN spinning_top=ACC turn-THEMATIC-PST
'A child turned a spinning top.'
(kodomoga) **(komao)** **(mawasita)** *Miyakonojo & Miyazaki-shi*

b. *tiisa-i* *kodomo=ga* *warat-tyo-u.*
small-NPST child=NOM/GEN laugh-CONTINUOUS-NPST
'A small child is laughing.'
(tiisai) **(kodomoga)** **(warattyou)** *Miyakonojo*
(tiisai kodomoga) **(warattyou)** *Miyazaki-shi*

c. *aso-ko=de* *tiisa-i* *kodomo=ga* *net-tyo-u.*
DISTAL-place=INST/LOC small-NPST child-NOM/GEN sleep-CONT-NPST
'A small child is sleeping over there'
(asokode) **(tiisai)** **(kodomoga)** **(nettyou)** *Miyakonojo*
(asokode) **((tiisai kodomoga)** **nettyou)** *Miyzaki-shi*

Miyakonojo dialect also allows phrasing of two words when the modifier of a noun has less than four morae and it is a pronominal element such as *oi=ga* 'my (1st=NOM/GEN)'. Simply being short is not a condition for creating larger phrases because the short adjective *yo-ka* 'is good (good-NPST)' is phrases separately from the head noun: (*yo-ka) (sitirin)* 'a good small charcoal grill'. The nature of the head noun also matters. Separate phrasing is often observed when the head noun is a thing or a tool.

Comparing phrasing patterns in two close but not identical dialects suggests that prosodic microvariation be present in these two varieties of Japanese. This variation offers a ground to further explore issues concerning prosody-syntax interface since the phrasing matches the syntactic constituents in Miyazaki-shi, but prosody does not always match syntax in Miyakonojo.

References

Hirayama, T. (1951) *Kyushu Hogen Oncho no Kenkyu*. Tokyo, Japan: Gakkai no Shishinsha.

Igarashi, Yosuke (2012) Prosodic typology in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective. *Lingua* 122(13): 1441-1453.

Shibata, T. (1955) Nihongo no akusento taikei. *Kokugogaku* 21, 44-70.

Uwano, Z. (1989) Nihongo no akusento, Sugito, M. (ed.) *Koza Nihongo to Nihongo Kyoiku 2: Nihongo no Onsei On'in*, vol. 1. Tokyo, Japan: Meiji Shoin. pp. 178-205.

P-42　誠実性の伝達における音声エンコーディングと聞き手の知覚の間に生じる不均衡

首藤佐智子 [1](早稲田大学)・小西隆之 [2](神戸大学)
[1]shudo@waseda.jp, [2]tkonishi@port.kobe-u.ac.jp

発話行為である感謝や謝罪における誠実性条件（Searle 1969）は、準備条件など他の適切性条件とは異なり、充足されなくても当該発話行為が成立するとされてきた。しかしながら、音声言語における感謝や謝罪が誠実に聞こえない場合には当該発話行為の成立を危うくすることは経験的に知られるところであり、「誠意があるように聞こえなかった」というような表現の存在は誠実性と音声が何らかの関りをもっていることを示している。この論点は学術的に調査されてこなかったが、筆者らは日本語の発話行為における誠実性の伝達を実験音声学的手法を用いて分析してきた。

まず発話実験において 44 名の被験者に対し、80 種類の様々な誠実性の度合い（誠実度）が想定される謝罪のシナリオを呈示して、それぞれの文脈における謝罪発話を行ってもらい、その音声を録音した。同時に、発話に組み込んだ誠実度を 100 段階のスライダーを用いて回答してもらった。次に録音した音声から任意に抽出した 1,070 の音声を用いて、41 名の評価者に対して知覚実験を行った。発話実験と同様に 100 段階評価で各々の音声を聴いた際に感じた誠実度を回答してもらった。

先行研究（Shudo & Konishi 2023）においては、誠実度の伝達は不完全であるものの統計的に有意な精度をもって行われること、そしてその伝達における音声特性の影響を明らかにした。当該研究では全ての話者と評価者を一様に扱った分析を行ったが、筆者らが実際に録音音声を聴いたところ、誠実度を音声に組み込むエンコーディングの技量に話者間で個人差がある可能性が想定された。

そこで、全ての話者と評価者の組合せについて、80 種類の発話各々に込められた誠実度と評価者に知覚された誠実度の相関係数を計算し、フィッシャーの Z 変換を行った後に話者ごとの分散を算出したところ、話者ごとの平均値の全体平均は 0.10（最大値 0.33/最小値 −0.30）、標準偏差は 0.13 だった（図 1）。同様の相関を評価者ごとに集計したところ、全体平均は 0.10（最大値 0.20/最小値 0.01）、標準偏差は 0.05 だった（図 2）。両者の全体平均の分散を F 検定で比較したところ、話者ごとの分散の方が有意に大きいことが示された（$F(43, 38) = 7.38$, $p < .001$）。

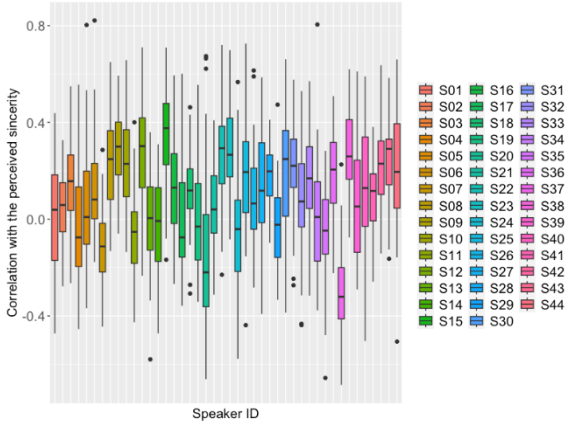


図 1 話者による音声エンコーディングと聞き手の知覚の相関（話者ごとの値）
X 軸: 話者 ID　　Y 軸: 相関係数

先行研究と本研究の結果から、1）誠実性の伝達は不完全であるものの一定の精度で行われることと、2）各話者による誠実性の音声エンコーディングの技量には個人差がある一方で聞き手による誠実度の知覚の個人差は小さいことが明らかになった。誠実性の「音声エンコーディング」とその「知覚」という作業自体には本来的に内在する意図性と非意図性という対立が存在し、それを分離することはできないが、少なくとも音声エンコーディングにおいては個人差が大きく、知覚における個人差は小さいという不均衡があることが示された。

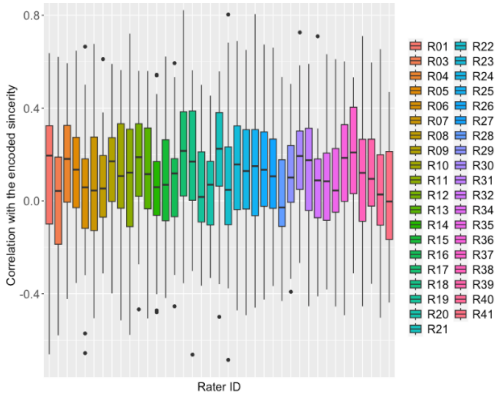


図 2 話者による音声エンコーディングと聞き手の知覚の相関（評価者ごとの値）
X 軸: 評価者 ID　　Y 軸: 相関係数

参考文献

Searle, J. 1969. *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Shudo, S. & Konishi, T. 2023. International Pragmatics Conference.

P-43 Deriving Japanese Causative Morphemes from a Single Phonological Form

Taika Nagano
Osaka University

Introduction: This study aims to propose that the varieties of causative morphemes in Japanese can be unified into a single vocabulary item *as*. Following the idea that some restrictions on Linearization are syntactic-oriented (Embick 2007), I assume that the morphophonological varieties are attributed to where the terminal node Voice is positioned in a hierarchical structure.

Data: It is widely known that while, as shown in (1), productive (syntactic) causative *(s)ase* is substitutable for *(s)as*, non-productive (lexical) causative morphemes like as cannot be replaced with *(s)ase,* which is illustrated in (2). As to lexical causative morphemes, there are allomorphs for as such as Ø in (3a), *e* in (3b), *s* in (4b), and *os* in (4c). Also, the examples in (4) signify that lexical causative morphemes are allomorphic; the choice of the morphemes is root-determined.

(1) a. John-ga Mary-ni { hon-o yom-**asi** / ringo-o tabe-**sasi** }-ta.
John-NOM Mary-DAT { book-ACC read-CAUS / apple-ACC eat-CAUS }-PST
'John made/let Mary { read a book. / eat an apple. }'

b. John-ga Mary-ni { hon-o yom-**ase** / ringo-o tabe-**sase** }-ta.
John-NOM Mary-DAT { book-ACC read-CAUS / apple-ACC eat-CAUS }-PST
'John made/let Mary { read a book. / eat an apple. }'

(2) a. John-ga otya-o { wak-**asi** / nigo-**si** }-ta.
John-NOM tea-ACC { boil-CAUS / muddy-CAUS }-PST
'John boiled tea. / Lit.: John muddied tea (=gave an evasive answer).'

b. *John-ga otya-o { wak-**ase** / nigo-**sase** }-ta.
John-NOM tea-ACC { boil-CAUS / muddy-CAUS }-PST

(3) a. Sara-{o/ga} war-{**Ø/e**}-{u/ru}.
plate-{ACC/NOM} break-{tr./intr.}-PRS
'Somebody broke the plate.'

b. Kankookyaku-{o/ga} atum-{**e/ar**}-{ru/u}.
tourists-{ACC/NOM} gather-{tr./intr.}-PRS
'Somebody/Something gathers tourists.'

(4) a. Otya-o wak-{ **asi** / ***si** / ***osi** / ***e** }-ta.
tea-ACC boil-CAUS-PST
'Somebody boiled the tea.'

b. Terebi-o kowa-{ ***asi** / **si** / ***osi** / ***e** }-ta.
TV-ACC break-CAUS-PST
'Somebody broke the TV.'

c. Mati-o horob-{ ***asi** / ***si** / **osi** / ***e** }-ta.
city-ACC destroy-CAUS-PST
'Somebody destroyed the city.'

d. Doa-o ak-{ ***asi** / ***si** / ***osi** / **e** }-ta.
door-ACC open-CAUS-PST
'Somebody opened the door.'

Problems: To grasp the distribution of these causative morphemes in the framework of Distributed Morphology (Halle & Marantz 1993), Miyagawa (1998) has attempted to list the correspondences between the phonological realizations and the environments in which they appear, as shown in (5). However, this line of approaches fails to take account of the morphophonological similarity: any transitivity morpheme with *s*-sound functions as a transitive marker (Jacobsen 1992) and is inept at giving a valid explanation for why they share the *s* and has no choice but to regard each of them as separate items.

(5) a. $\text{Voice}_{[+D]} \leftrightarrow$ as / $\{\sqrt{\text{WAK}}, \ldots\}$____
b. $\text{Voice}_{[+D]} \leftrightarrow$ s / $\{\sqrt{\text{KOWA}}, \ldots\}$____
c. $\text{Voice}_{[+D]} \leftrightarrow$ os / $\{\sqrt{\text{HOROB}}, \ldots\}$____
d. $\text{Voice}_{[+D]} \leftrightarrow$ sase / elsewhere

Proposal: I assume both *sase* and transitivity markers containing *s* are derived from *as*, and the syntactic/lexical difference depends on Embick's (2007) M-Word/Subword distinction (M-Words are potentially complex heads not dominated by further head-projection, and Subwords are terminal nodes within an M-Word). In so doing, these two undergo distinct (morpho-)phonological procedures. All the phonological realizations in (5) are simplified down to (6). In case concatenated with a verbal root ending in a vowel, M-Word Voice (Voice^M) is subject to the *s*-support in (7). When it comes to lexical causatives, as is realized without any morpho-phonological procedure. However, when Subword-concatenated with certain kinds of roots, it should undergo Readjustment in (8). (8a) and (8b) are equivalent to (5b) and (5c), respectively.

(6) $\text{Voice}_{[+D]} \leftrightarrow$ as **NB.** $_{[+D]}$ guarantees VoiceP introduces an external argument (Wood 2015).

(7) ***s*-support:** $(\alpha^M, /\ldots \text{V}_\alpha/)^\frown(\text{Voice}^M_{[+D]}, \text{as}) \longrightarrow /\ldots \text{V}_\alpha\text{-s-as}/$ **NB.** $^\frown$: M-Words concatenation

(8) a. as $\rightarrow$ s / $\{\sqrt{\text{KOWA}}, \ldots\}\oplus$____ b. as $\rightarrow$ os / $\{\sqrt{\text{HOROB}}, \ldots\}\oplus$____ **NB.**$\oplus$: Subwords concatenation

Discussion: If my analysis is on the right track, it enables us to support that Head Movement (henceforth, HM) should be parametric. I would like to give tense morphemes in Japanese and English as examples. While the former shows no allomorphic property, as in (9), the latter in (11) seems to be an allomorphic environment. The node T does not show contextual allomorphy in Japanese, but, as in (9a), non-past *u* becomes *ru* when left adjacent to a vowel. Parallel to *sas*, the phonological exponent for Voice^M, I propose *r*-support, defined in (10) for T^M . On the other hand, as T in English is a matrix of various morphemes, partially illustrated in (11b), it should be T^{Sub}, forming the *v*+Voice+T amalgam as in (12).

(9) a. John-ga ringo-o { tab**e-ru**. / tab**e-ta**. }
John-NOM apple-ACC { eat-PRS / eat-PST }
'John { eats / ate } an apple.'

b. John-ga { hasi**r-u**. / hasi**t-ta**.}
John-NOM { run-PRS / run-PST }
'John { runs / ran }'

(10) a. ***r*-support:** $(\alpha^M, /\ldots \text{V}_\alpha/)^\frown(\text{T}^M_{[-\text{past}]}, \text{u}) \longrightarrow /\ldots \text{V}_\alpha\text{-r-u}/$

(11) a. John **walk-ed** his dog. b. John **cut-Ø** himself with a knife.

(12) Jpn. $[_{\text{TP}} \ldots [_{\text{VoiceP}}\ v\text{+Voice} \ldots]]\ \text{T}\ ]$ Eng. $[_{\text{TP}}\ \cancel{\text{T}}_t \ldots [_{\text{VoiceP}}\ v\text{+Voice+T} \ldots]]]$

Since it is agglutinative, Japanese is unclear about whether its T is subject to head movement, but the contrastive tense morphology shown above naturally predicts that whereas in the former language, HM does not apply to T, T in English can undergo Lowering. Thus, we can conclude that HM should be recognized as having cross-linguistic variation.

References

Embick, David. 2007. Linearization and Local Dislocation: Derivational mechanics and interactions. *Linguistic Analysis* 33. 303 – 336.

Halle, Morris & Marantz, Alec. 1993. Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. In Hale, K. & Keyser, S. J. (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, MIT Press.

Jacobsen, Wesley. 1992. *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publisher.

Miyagawa, Shigeru. 1998. (S)ase as an Elsewhere Causative and the Syntactic Nature of Words. *Journal of Japanese Linguistics* 16. 67 – 110.

Wood, Jim. 2015. *Icelandic morphosyntax and argument structure*. New York: Springer.

P-44

母音延伸のコミュニケーション的特徴の把握を目指して：話者の属性および語類と母音の延伸率に関する統計的分析

韓旼池

現実の自然会話では、アナウンサーがニュース原稿を読み上げるような「標準的」な発話音声から逸脱した形で母音が延伸する現象が多くの言語で観察される。現代日本語の場合、例えば国立国語研究所の『日本語日常会話コーパス（以下、CEJC)』では、「すーごーい」「いやーだ」「多いーかもしれない」などの母音の延伸が観察される。以下、これらを「母音の非語彙的な延伸」と呼ぶ。母音の非語彙的な延伸は、「強調」「考えながら話す」「ためらう」「身体の動きによる」「会話相手と発話タイミングを合わせる」といった多様な事情で現れ、話者の内的状態、対話者との権力関係、身体など多岐に渡る要因による影響が確認されており、また、その位置や頻度も様々である（韓 2021、2022、2023)。そのような多様さが織り成す母音の延伸のコミュニケーション的特徴も多様であるが、それらの多様さの中に秩序を見出すことは不可能ではない。

この発表は、日常会話における母音延伸の出現の現状を報告する研究であり、同時に、話者の属性及び語類と母音の延伸率の相関から、母音延伸のコミュニケーション的特徴の手がかりを見出そうとする予備的研究に値する。

日本語コーパスを用いた母音延伸の統計調査として、モノローグが中心である『日本語話し言葉コーパス』を用いたDen（2003）が挙げられる。性別、語類（機能語・内容語)、統語的位置などによる母音の延伸率を計っている。本研究は、日常会話コーパスという母音の延伸のより根本的な発話場面のコーパスを用いて、性別、年齢、品詞というより具体的な要素との相関を調べ、先行研究の至らなかった領域に拡張を試みる。具体的な手順は次の通りである。使用するデータは、200時間分の日常会話を収めている『CEJC』の話者862名による2,464,493件の短単位データである。母音の延伸の数と母音のモーラ数を集計し、母音の延伸率を算出するために、データのうち、語の延伸前のモーラ数が測りにくいもの、語の非語彙的な延伸が数えにくいものを除き、844名による2,042,998件を対象に集計を行った。母音のモーラの集計には《発音形出現形》(《》はCEJCの提供するアノテーション）を、延伸の集計には《タグ付き書字形》における「非語彙的な母音の引き伸ばし」タグを用いた（撥音に後続する場合を除く)。

結果、集団平均による**話者の母音の平均延伸率は3.07%**、個別平均による平均は、3.47%、標準偏差3.21%であった。後者で延伸率が上がるのは、発話量が少なすぎると少しの延伸で延伸率が高くなるためだと考えられ、発話量が少ない10%の話者による異例を除くと、3.24%で標準偏差は1.56%である。25%の話者を除くと、平均の延伸率は3.23%で標準偏差1.34%であるため、全話者から10%を除く場合ほど大きさ差ではなかった。発話量の少ない10%の話者を除外したデータによると、話者数は平均延伸率を中心に、遠くなるほど両側が下がる形をしているが、正規分布ではない。ANOVA分析によると発話量（母音のモーラ）と母音の延伸率に比例関係はなかった。

年齢の老若と母音の延伸率も直線状の比例関係はない。ただし、0-4歳（4.81%）と5-9歳（2.90%）の順で母音の延伸率が他の年齢階層（2.00%以下）より有意に高かった。母音の延伸は、他の年齢階層より子供（0-9歳）に多く見られるコミュニケーション・言語運用と深い関わりがあり、他方で、特定の年齢によらない普遍的なコミュニケーション・言語運用で用いられる手法でもあることが予想される。性別による有意な差は見られなかった。母音の平均延伸率に限っては、有意な性差がなかったが、韓（2023）によると強調の延伸では延伸の語内位置に性差がやや見られた。性別による母音の延伸の違いに関しては、大まかな延伸の頻度ではなく、母音の延伸のより具体的な下位分類の方（延伸の状況、延伸の位置、特定の語類における現れ）で精査すべきであることが分かった。

品詞においては、助詞（下位品詞が1, 2, 5, 6, 7位）と接続詞（3位）の延伸率が品詞の中でも高いことが目立っていた。ただし、準体助詞は、助詞の下位分類だが相当低い延伸率（27位、0.76%）であった。大まかに、助詞（終助詞・接続助詞）-接続詞（係助詞・格助詞・副助詞）-助数詞-助動詞-連体詞・代名詞・形容詞・副詞-名詞-動詞-形状詞の順である。接尾辞は下位分類により延伸率が高くも低くもある。接尾辞の下位分類は、まず名詞的、形状詞的、動詞的に分けられる順に低くなる。中でも0回延伸の接尾辞-動詞的に関しては、動詞は発話量が多いが、母音の延伸率は発話量に比べて相当低い（33, 35位）ことと同じ流れで捉えられることが予想される。一方、形状詞と名詞の下位分類としての助動詞語幹は、延伸率の高い助動詞に比べて極端と言えるほど延伸率が低い。あくまで、上位分類の階層に従っている。機能語の延伸率が内容語より高いが、Den(2003)にもあるように機能語の平均モーラ数が短いことからモーラで計った延伸率が高めになったことも一因として予想される。

発表では、短単位の語による延伸率（延伸を伴う語の出現率）を用いたデータを追加して、モーラ数による偏向を減らす予定であり、品詞の延伸率の傾向に関する考察のほか、話者別データと品詞別データの交差により全体のデータで捉えきれなかった部分があるのか検討する。

＜謝辞＞

本研究はJSPS科研費24K22522の助成を受けたものです。

＜参考文献＞

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香(2023)「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24 : 153-168.

国立国語研究所 「日本語日常会話コーパス | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html [2023 年 6 月アクセス].

韓旼池（2021）「現代日本語の母音の非語彙的な延伸が生起する状況について—実例における身体の動きに注目した考察—」修士論文，京都大学.

———（2022）「強調と対人関係の関わり—母音の延伸を中心に—」日本認知科学会（編）『日本認知科学会第 39 回大会発表論文集』386-392.

———（2023）「逸脱した発話音声のパターンとその要因について —現代日本語における強調の母音の延伸を中心に—」日本認知科学会（編）『日本認知科学会第 40 回大会発表論文集』. 127-130. 北海道 : 日本認知科学会.

Den, Yasuharu（2003）Some strategies in prolonging speech segments in spontaneous Japanese, Robert Eklund (ed.), *Gothenburg Papers in Theoretical Linguistics 90*, ISSN 0349–1021, pp. 87–90.

次回大会のお知らせ（2025年春季大会：第170回大会）

場所：　明海大学　浦安キャンパス

日程：　6月28日(土)　　口頭発表，ポスター発表，参加者交流会
　　6月29日(日)　　ワークショップ，公開シンポジウム
＊プログラムの内容は変更されることがあります。

研究発表募集：
・応募要領は学会ホームページをご覧ください。
（応募は学会ホームページからとなります）
・応募締め切り　2025年3月20日（木）
・採否通知　　2025年4月中旬

問い合わせ：
日本言語学会事務支局　〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入
Tel: (075)415-3661，Fax: (075)415-3662，E-mail: lsj@nacos.com

【重要】
◆応募の際には，必ず学会ホームページで最新の規程と要項をご確認ください。
◆同一の応募者が同一の大会で筆頭発表者として応募できる件数の上限は，口頭発表・ポスター発表のいずれか１件とワークショップにおける発表１件の合計２件です。

＜第169回大会企画運営関係者＞

大会運営委員
小町 将之（委員長），小野 智香子，甲斐 ますみ，田川 拓海，矢野 雅貴
吉田 健二，淺尾 仁彦，北田 伸一，久保薗 愛，中野 陽子，平山 真奈美
李 林静

大会実行委員
奥 聡（委員長），野村 益寛，加藤 重広，原 由理枝，宮内 拓也

日本言語学会第169回大会　要旨集

期　日	2024年11月9日・10日
会　場	北海道大学
発行日	2024年11月9日
編集・発行	日本言語学会
連絡先	〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷　学会フォーラム内 電話: 075-415-3661　FAX: 075-415-3662 E-mail: lsj@nacos.com